福島県文化財調査報告書第523集

一般国道115号相馬福島道路遺跡発掘調査報告６

沼ヶ入遺跡（２次調査）
上ノ台館跡（１次調査）
川原田遺跡
馬 場 遺 跡
新 宿 遺 跡

２０１８年

福 島 県 教 育 委 員 会
公益財団法人 福 島 県 文 化 振 興 財 団
国土交通省東北地方整備局福島河川国道事務所

一般国道115号相馬福島道路遺跡発掘調査報告６

沼ヶ入（ぬまがいり）遺跡（２次調査）
上ノ台館跡（かみのだいたてあと）（１次調査）
川原田（かわはらだ）遺跡
馬場（ばば）遺跡
新宿（しんじゅく）遺跡

序　　文

福島県教育委員会では、開発事業による埋蔵文化財の消失を避けるため、関係機関と協議を行い埋蔵文化財の保護と記録に努めております。

一般国道115号相馬福島道路は、常磐自動車道と東北縦貫自動車道を結ぶ約45㎞の高規格幹線道路(自動車専用道路)であり、東日本大震災から被災地の早期復興を図るリーディングプロジェクトとして位置づけられています。震災前に国道115号バイパスとして整備されていた霊山道路と阿武隈東道路を含む福島市から相馬市までの全線が、緊急整備されることになりました。

一般国道115号相馬福島道路建設用地内には、周知の埋蔵文化財包蔵地や新たに発見された埋蔵文化財包蔵地が数多く確認されており、先人が残した貴重な文化遺産が所在しております。

埋蔵文化財は、それぞれの地域の歴史と文化に根ざした歴史的遺産であると同時に、我が国の歴史・文化等の正しい理解と、将来の文化の向上発展の基礎をなすものです。

福島県教育委員会では、相馬福島道路建設予定地内で確認されたこれらの埋蔵文化財の保護・保存について、関係機関と協議を重ね、平成19年度以降、埋蔵文化財の範囲や性格を確かめるための分布調査を行い、その結果をもとに平成25年度から現状保存の困難な遺跡については記録として保存することとし、本発掘調査を実施してきました。

本報告書は、一般国道115号相馬福島道路(霊山道路、霊山～福島)の建設に伴い、平成28年度に行った伊達市霊山町下小国地区に所在する沼ヶ入遺跡(２次調査)、上ノ台館跡(１次調査)、桑折町松原地区に所在する川原田遺跡、同町成田地区に所在する馬場遺跡、新宿遺跡の本発掘調査成果をまとめたものです。この報告書を県民の皆様が文化財に対する理解を深め、地域を解明するための基礎資料として、さらには生涯学習などの資料として広く活用していただければ幸いです。

最後に、発掘調査から報告書の作成にあたり、御協力・御尽力いただいた国土交通省東北地方整備局福島河川国道事務所、伊達市教育委員会、桑折町教育委員会、公益財団法人福島県文化振興財団をはじめとする関係機関及び関係各位に対し、感謝の意を表します。

平成30年２月

福島県教育委員会

教育長　　鈴　木　淳　一

あ い さ つ

公益財団法人福島県文化振興財団では、福島県教育委員会からの委託により、県内の大規模な開発に先立ち、開発対象地内にある埋蔵文化財の調査を実施しています。

本報告書は、一般国道115号相馬福島道路(霊山道路、霊山～福島)の建設に伴い、平成28年度に発掘調査を行った伊達市霊山町下小国地区に所在する沼ヶ入遺跡(２次調査)、上ノ台館跡(１次調査)、桑折町松原地区に所在する川原田遺跡、成田地区に所在する馬場遺跡、新宿遺跡の調査成果をまとめたものです。

沼ヶ入遺跡(２次調査)では、昨年度の１次調査で発見された中世屋敷跡のほぼ全体像が判明しました。また、交通の要衝に位置し、中世城館跡やその関連遺跡の分布が顕著な当地域にとって、貴重な新事例の追加になったと言えます。上ノ台館跡では尾根を分断する堀切と平場の一部が検出され、文献記録の無いこの城館跡の解明に具体的な手掛かりを得ることができました。

川原田遺跡では、平安時代の建物跡や井戸跡が確認されたほか、縄文時代の土器や石器、弥生土器、平安時代の土師器・須恵器などが出土しました。馬場遺跡では中近世頃と思われる陶磁器や柱の跡が見つかりました。また、新宿遺跡では、中世の堀や福島県内では調査事例の少なかった道路の跡が見つかるなど、重要な成果を得ることができました。

今後、この報告書を郷土の歴史研究の基礎資料として、広く活用していただければ幸いに存じます。

おわりに、この調査にご協力いただきました国土交通省東北地方整備局福島河川国道事務所、伊達市、桑折町ならびに地域住民の皆様に深く感謝申し上げますと共に、当財団の事業の推進につきまして、今後とも一層の御理解と御協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成30年２月

公益財団法人　福島県文化振興財団
理事長　　杉　　昭　重

緒　　言

1　本書は、平成28年度に実施した一般国道115号相馬福島道路(霊山道路、霊山～福島)遺跡発掘調査報告書である。

2　本書には以下に記す遺跡の調査成果を収録した。

沼ヶ入遺跡	福島県伊達市霊山町下小国字沼ヶ入・御渡	埋蔵文化財番号　0721300656
上ノ台館跡	福島県伊達市霊山町下小国字上ノ台	埋蔵文化財番号　0721300654
川原田遺跡	福島県伊達郡桑折町大字松原字川原田	埋蔵文化財番号　0730100103
馬 場 遺 跡	福島県伊達郡桑折町大字成田字馬場・稲山	埋蔵文化財番号　0730100105
新 宿 遺 跡	福島県伊達郡桑折町大字成田字新宿・稲山	埋蔵文化財番号　0730100104

3　本事業は、福島県教育委員会が国土交通省東北地方整備局福島河川国道事務所の委託を受けて実施し、調査にかかる費用は国土交通省東北地方整備局福島河川国道事務所が負担した。

4　福島県教育委員会は、本発掘調査を公益財団法人福島県文化振興財団に委託して実施した。

5　公益財団法人福島県文化振興財団では、遺跡調査部の下記の職員を配置して調査にあたった。

専門文化財主査　菅原祥夫　　文化財主査　渡邉春喜
文 化 財 主 査　植松暁彦(公益財団法人山形県埋蔵文化財センターより出向)
文 化 財 主 査　廣川紀子　　主　　事　枝松雄一郎　　文化財主事　由井文菜
臨時的に、専門文化財主査　谷中　隆(公益財団法人とちぎ未来づくり財団より出向)、
文化財主事　山田和史(公益財団法人東京都スポーツ文化事業団より出向)が参加した。

6　本書の執筆は、担当職員が分担して行い、各文末に文責を記した。

7　本書に使用した地図は、国土交通省国土地理院発行の1/25,000・50,000の地形図を複製したものである。

8　本書に掲載した自然科学分析は、次の機関に委託し、その結果を掲載している。

出土加工材・炭化材の樹種同定・放射性炭素年代測定　　株式会社　加速器分析研究所

9　本書に収録した調査記録及び出土資料は、福島県教育委員会が保管している。

10　発掘調査及び報告書の作成に際して、次の機関等から協力・助言を頂いた。

伊達市教育委員会　　桑折町教育委員会　　桑折町まちづくり推進課　　室野秀文

用　　例

1　本書における遺構図版の用例は、以下のとおりである。

(1) 方　　位　　図中の方位は真北を示す。方位記号がないものは、図の真上を真北とする。

(2) 縮　　尺　　各挿図中に縮小率を示した。

(3) ケ　　バ　　遺構内の傾斜部は「 ╥ 」、相対的に緩傾斜の部分には「 ╤ 」、後世の撹乱部や人為的な削土部は「 ╦ 」の記号で表現した。

(4) 土　　層　　遺構外堆積土は大文字のＬとローマ数字で、遺構内堆積土は小文字のℓと算用数字で表記した。

（例）遺構外堆積土…ＬⅠ・ＬⅡ　　遺構内堆積土…ℓ１・ℓ２

(5) 標　　高　　挿図中に示した標高は、海抜高度を示す。

(6) 遺 構 番 号　　当該遺構は正式名称、その他の遺構は記号化した略称で記載した。

(7) 土　　色　　土層注記に使用した土色は、小山正忠・竹原秀雄編著、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』を用いた。

2　本書における遺物図版の用例は、以下のとおりである。

(1) 縮　　尺　　各挿図中に縮小率を示した。

(2) 土 器 断 面　　須恵器の断面は黒塗り、灰釉陶器はグレーとした。粘土積み上げ痕を一点鎖線で示した。

(3) 網　　点　　▭は黒色処理を示す。それ以外は各挿図中に用例を示した。

(4) 遺 物 番 号　　挿図ごとに通し番号を付し、本文中では下記のように省略した。

（例）図１の２番の遺物…図１－２

遺物写真中で遺物に付した番号は、挿図中の遺物番号と一致する。

（例）１－２…図１－２

(5) 遺物計測値　　（　）内の数値は推定値、［　］内の数値は遺存値を示す。

3　本書で使用した略号は、以下のとおりである。

伊 達 市……ＤＴ	桑 折 町……ＱＲ	沼ヶ入遺跡…ＮＧＩ	上ノ台館跡…ＫＮＴ
川原田遺跡…ＫＨＤ	馬場遺跡……ＢＢＡ	新宿遺跡……ＳＮＺ	竪穴住居跡……ＳＩ
掘立柱建物跡…ＳＢ	柱 列 跡……ＳＡ	井 戸 跡……ＳＥ	木炭窯跡……ＳＣ
土　　坑……ＳＫ	溝・堀跡……ＳＤ	道　　跡……ＳＦ	性格不明遺構…ＳＸ
遺物包含層……ＳＨ	柱穴・小穴…Ｐ	グリッド……Ｇ	
遺構外堆積土…Ｌ	遺構内堆積土…ℓ		

4　引用・参考文献は執筆者の敬称を略し、各編末に掲載した。

目　　次

序章　遺跡の環境と調査経過

第１節　調査に至る経緯……1
第２節　地理的環境……5
第３節　歴史的環境……8
第４節　調 査 方 法……14

第１編　沼ヶ入遺跡（２次調査）

第１章　遺跡の位置と調査経過

第１節　遺跡の位置と現況……17
第２節　調 査 経 過……17

第２章　発見された遺構と遺物

第１節　調査成果の概要と基本土層……19
調査成果の概要(19)　基本土層(19)
第２節　掘立柱建物跡……21
３号建物跡(21)
第３節　土　　坑……23
10号土坑(23)　11号土坑(23)　12号土坑(23)　13号土坑(25)　14号土坑(25)
15号土坑(25)　16号土坑(25)　17号土坑(27)
第４節　溝　　跡……27
１号溝跡(27)
第５節　小　　穴……27

第３章　総　　括

第１節　屋敷跡について……30
第２節　周辺遺跡との関係……31

第２編　上ノ台館跡（１次調査）

第１章　遺跡の位置と調査経過

第１節　遺跡の位置と現況……35
第２節　調 査 経 過……35

第２章　発見された遺構と遺物

第１節　調査成果の概要と基本土層……37

調査成果の概要(37)　　基本土層(37)
第２節　木 炭 窯 跡……37
１号木炭窯跡(39)
第３節　土　　坑……40
１号土坑(40)　２号土坑(41)　３号土坑(41)
第４節　溝跡・平場……41
１号溝跡(41)　２号溝跡・１号平場(43)
第５節　１号遺物包含層……44
概　　要(44)　　遺　　物(44)
第３章　総　　括 ……47

第３編　川原田遺跡

第１章　遺跡の位置と調査経過
第１節　遺跡の位置と現況……51
第２節　調 査 経 過……51
第２章　発見された遺構と遺物
第１節　調査成果の概要と基本土層……53
調査成果の概要(53)　　基本土層(53)
第２節　掘立柱建物跡……55
１号建物跡(55)　２号建物跡(59)
第３節　柱　列　跡……60
１号柱列跡(60)
第４節　井　戸　跡……62
１号井戸跡(62)
第５節　土　　坑……68
１号土坑(68)　２号土坑(68)　３号土坑(69)　４号土坑(69)　５号土坑(70)
６号土坑(70)　７号土坑(70)　８号土坑(72)　９号土坑(72)　10号土坑(72)
11号土坑(74)　12号土坑(74)　13号土坑(74)　14号土坑(75)　15号土坑(75)
16号土坑(77)　17号土坑(78)
第６節　溝　　跡……78
１号溝跡(78)　２号溝跡(78)
第７節　その他の遺構……80
１号性格不明遺構(80)　　小 穴 群(81)
第８節　遺構外出土遺物……85

縄文土器(85)　弥生土器(86)　土 師 器(86)　須 恵 器(91)　灰釉陶器(91)
土 製 品(91)　石 製 品(93)
第３章　総　　括 ……96

第４編　馬場遺跡
第１章　遺跡の位置と調査経過
第１節　遺跡の位置と現況……99
第２節　調 査 経 過……99
第２章　発見された遺構と遺物
第１節　調査成果の概要と基本土層…… 100
調査成果の概要(100)　基本土層(100)
第２節　土　　坑…… 102
１号土坑(102)　２号土坑(102)　３号土坑(102)
第３節　溝　　跡…… 103
１号溝跡(103)　２号溝跡(104)
第４節　小　穴　群…… 105
第５節　遺構外出土遺物…… 107
遺　　物(107)
第３章　総　　括 …… 108

第５編　新宿遺跡
第１章　遺跡の位置と調査経過
第１節　遺跡の位置と現況…… 111
第２節　調 査 経 過…… 111
第２章　発見された遺構と遺物
第１節　調査成果の概要と基本土層…… 113
調査成果の概要(113)　基本土層(113)
第２節　竪穴住居跡…… 115
１号住居跡(115)　２号住居跡(116)
第３節　土　　坑…… 119
１号土坑(119)　２号土坑(120)　３号土坑(120)　４号土坑(120)
５号土坑(122)　６号土坑(123)
第４節　道　　跡…… 123
１号道跡(123)　２・３号道跡(126)

第５節　堀　　跡…… 127
１号堀跡(128)
第６節　溝　　跡…… 130
２号溝跡(130)　　３号溝跡(132)
第７節　小　穴　群…… 132
第８節　遺構外出土遺物…… 139
第３章　総　　括 …… 140

付　編　自然科学分析

第１章　沼ヶ入遺跡出土炭化材の自然科学分析
第１節　樹 種 同 定…… 143
第２節　放射性炭素年代測定…… 145
第２章　上ノ台館跡出土炭化材の自然科学分析
第１節　樹 種 同 定…… 148
第２節　放射性炭素年代測定…… 154
第３章　川原田遺跡出土加工材と炭化材の自然科学分析
第１節　樹 種 同 定…… 160
第２節　放射性炭素年代測定…… 166

挿図・表目次

序章　遺跡の環境と調査経過

［挿図］

図１　一般国道115号相馬福島道路位置図 …… 1
図２　道路工事計画図…… 2
図３　沼ヶ入遺跡・上ノ台館跡周辺地形分類図… 6
図４　川原田・馬場・新宿遺跡周辺地形分類図… 7
図５　沼ヶ入遺跡・上ノ台館跡周辺の遺跡位置図…… 9
図６　川原田・馬場・新宿遺跡周辺の遺跡位置図……12

［ 表 ］

表１　沼ヶ入遺跡・上ノ台館跡周辺の遺跡一覧…10
表２　川原田・馬場・新宿遺跡周辺の遺跡一覧…13

第１編　沼ヶ入遺跡（２次調査）

［挿図］

図１　調査区位置図……18
図２　遺構配置図・基本土層……20
図３　３号建物跡……22
図４　10～14号土坑・出土遺物……24
図５　15～17号土坑……26
図６　１号溝跡・出土遺物……28

図７　小穴……29
図８　屋敷跡模式図……30
図９　沼ヶ入遺跡と福田遺跡……32

第２編　上ノ台館跡（１次調査）

［挿図］

図１　調査区位置図……36
図２　遺構配置図・基本土層……38
図３　１号木炭窯跡・出土遺物……39
図４　１～３号土坑……40
図５　１号溝跡……42
図６　２号溝跡・１号平場……43
図７　１号遺物包含層出土遺物（１）……45
図８　１号遺物包含層出土遺物（２）……46
図９　上ノ台館跡縄張り図……48

第３編　川原田遺跡

［挿図］

図１　調査区位置図……52
図２　遺構配置図……54
図３　基本土層……55
図４　１号建物跡（１）……56
図５　１号建物跡（２）・出土遺物……57
図６　２号建物跡（１）……58
図７　２号建物跡（２）・出土遺物……59
図８　１号柱列跡……61
図９　１号井戸跡（１）……64
図10　１号井戸跡（２）・出土遺物（１）……65
図11　１号井戸跡出土遺物（２）……66
図12　１号井戸跡出土遺物（３）……67
図13　１～６号土坑……71
図14　７～11号土坑……73
図15　12～17号土坑……76
図16　土坑出土遺物……77
図17　１・２号溝跡・出土遺物……79
図18　１号性格不明遺構・出土遺物……81
図19　小穴群（１）……82
図20　小穴群（２）……83
図21　小穴群（３）・出土遺物……84
図22　遺構外出土遺物（１）……87
図23　遺構外出土遺物（２）……88
図24　遺構外出土遺物（３）……89
図25　遺構外出土遺物（４）……90
図26　遺構外出土遺物（５）……92
図27　遺構外出土遺物（６）……93
図28　遺構外出土遺物（７）……94
図29　遺構外出土遺物（８）……95

［ 表 ］

表１　小穴群一覧……84・85

第４編　馬場遺跡

［挿図］

図１　調査区位置図……99
図２　遺構配置図・基本土層……101
図３　１～３号土坑・出土遺物……103
図４　１号溝跡……104
図５　２号溝跡……105
図６　小穴群……106
図７　遺構外出土遺物……107

［ 表 ］

表１　小穴堆積土…… 106

第５編　新宿遺跡

［挿図］

図１　調査区位置図…… 112
図２　遺構配置図・基本土層…… 114
図３　１号住居跡…… 115
図４　２号住居跡（１）…… 117
図５　２号住居跡（２）・出土遺物…… 118
図６　１～４号土坑…… 121
図７　５・６号土坑・出土遺物…… 122
図８　１号道跡…… 124
図９　１号道跡出土遺物…… 125
図10　２・３号道跡・出土遺物…… 127
図11　１号堀跡…… 129
図12　１号堀跡出土遺物…… 130
図13　２・３号溝跡・出土遺物…… 131
図14　小穴群（１）…… 133
図15　小穴群（２）…… 134
図16　小穴群（３）…… 135
図17　小穴群出土遺物…… 138
図18　遺構外出土遺物…… 139

［ 表 ］

表１　小穴群一覧……136・137
表２　小穴堆積土…… 138

付　編　自然科学分析

［挿図］

図１　出土炭化材の顕微鏡写真（１）…… 144
図２　出土炭化材の顕微鏡写真（２）…… 145
図３　暦年較正年代グラフ…… 147
図４　マルチプロット図…… 147
図５　出土炭化材の顕微鏡写真（１）…… 149
図６　出土炭化材の顕微鏡写真（２）…… 150
図７　出土炭化材の顕微鏡写真（３）…… 151
図８　出土炭化材の顕微鏡写真（４）…… 152
図９　出土炭化材の顕微鏡写真（５）…… 153
図10　出土炭化材の顕微鏡写真（６）…… 154
図11　暦年較正年代グラフ（１）…… 157
図12　暦年較正年代グラフ（２）…… 158
図13　マルチプロット図…… 159
図14　出土加工材の顕微鏡写真（１）…… 161
図15　出土加工材の顕微鏡写真（２）…… 162
図16　出土加工材の顕微鏡写真（３）…… 163
図17　出土加工材の顕微鏡写真（４）…… 164
図18　出土加工材と炭化材の顕微鏡写真…… 165
図19　出土炭化材の顕微鏡写真…… 166
図20　暦年較正年代グラフ（１）…… 169
図21　暦年較正年代グラフ（２）…… 170
図22　暦年較正年代グラフ（３）…… 171
図23　マルチプロット図…… 171

［ 表 ］

表１　出土炭化材の樹種…… 143
表２　放射性炭素年代測定結果…… 147
表３　放射性炭素年代測定結果及び
暦年較正年代…… 147
表４　出土炭化材の樹種…… 149
表５　放射性炭素年代測定結果…… 156
表６　放射性炭素年代測定結果及び
暦年較正年代……156・157
表７　出土加工材と炭化材の樹種…… 161
表８　放射性炭素年代測定結果…… 168

表９　放射性炭素年代測定結果及び
暦年較正年代……168・169

写真目次

第１編　沼ヶ入遺跡（２次調査）

1　調査区遠景…… 175
2　調査区全景…… 175
3　３号建物跡全景…… 176
4　３号建物跡全景…… 176
5　３号建物跡検出…… 177
6　３号建物跡…… 177
7　10～13号土坑…… 178
8　14～17号土坑…… 179
9　17号土坑全景…… 180
10　17号土坑断面…… 180
11　17号土坑断面…… 181
12　１号溝跡全景…… 181
13　１号溝跡…… 182
14　基本土層、作業風景…… 182

第２編　上ノ台館跡（１次調査）

1　調査前状況…… 185
2　表土剥ぎ…… 185
3　調査区全景…… 186
4　調査区遠景…… 187
5　調査区遠景…… 187
6　１号木炭窯跡全景…… 188
7　１号木炭窯跡断ち割り全景…… 188
8　１号木炭窯跡検出状況…… 189
9　１号木炭窯跡…… 189
10　１～３号土坑…… 190
11　１号溝跡検出状況…… 191
12　１号溝跡全景…… 191
13　１号溝跡尾根頂部…… 192
14　１号溝跡…… 192
15　１号溝跡西部検出状況…… 193
16　１号溝跡西部…… 193
17　１号溝跡作業風景…… 194
18　１号溝跡…… 194
19　２号溝跡全景…… 195
20　２号溝跡…… 195
21　２号溝跡全景…… 196
22　１号遺物包含層…… 196
23　１号遺物包含層出土遺物…… 197

第３編　川原田遺跡

1　調査区遠景…… 201
2　調査区遠景…… 201
3　調査区全景…… 202
4　基本土層…… 202
5　１号建物跡検出…… 203
6　１号建物跡全景…… 203
7　１号建物跡　柱穴（１）…… 204
8　１号建物跡　柱穴（２）…… 205
9　１号建物跡　柱穴（３）…… 206
10　２号建物跡検出…… 207
11　２号建物跡全景…… 207
12　２号建物跡　柱穴（１）…… 208
13　２号建物跡　柱穴（２）…… 209
14　１号柱列跡…… 210

15　１号井戸跡全景…… 211
16　１号井戸跡全景…… 211
17　１号井戸跡…… 212
18　１～５・７号土坑…… 213
19　６・８～11号土坑…… 214
20　12～17号土坑…… 215
21　２号溝跡…… 216
22　遺構外遺物出土状況…… 216
23　１号性格不明遺構…… 217
24　小穴群検出状況…… 218
25　小穴群全景…… 218
26　遺構内出土遺物（１）…… 219
27　遺構内出土遺物（２）…… 220
28　１号井戸跡出土遺物（１）…… 221
29　１号井戸跡出土遺物（２）…… 222
30　１号井戸跡出土遺物（３）…… 223
31　１号井戸跡出土遺物（４）…… 224
32　遺構外出土遺物（１）…… 225
33　遺構外出土遺物（２）…… 226
34　遺構外出土遺物（３）…… 227
35　遺構外出土遺物（４）…… 228
36　遺構外出土遺物（５）…… 229
37　遺構外出土遺物（６）…… 230

第４編　馬場遺跡

1　調査区全景…… 233
2　調査区全景…… 233
3　基本土層…… 234
4　１～３号土坑…… 234
5　小穴群…… 235
6　調査前風景…… 235
7　出土遺物…… 236

第５編　新宿遺跡

1　調査区遠景…… 239
2　調査区遠景…… 239
3　調査区遠景…… 240
4　調査区遠景…… 240
5　調査区全景…… 241
6　基本土層…… 241
7　１号住居跡…… 242
8　２号住居跡（１）…… 243
9　２号住居跡（２）…… 244
10　１～６号土坑…… 245
11　１号道跡（１）…… 246
12　１号道跡（２）…… 247
13　２・３号道跡…… 248
14　１号堀跡（１）…… 249
15　１号堀跡（２）…… 250
16　１号堀跡（３）…… 251
17　２号溝跡…… 252
18　小穴群（１）…… 253
19　小穴群（２）…… 254
20　２号住居跡出土遺物…… 255
21　６号土坑・１号道跡出土遺物…… 256
22　小穴群出土遺物（１）…… 257
23　小穴群出土遺物（２）…… 258

序章　遺跡の環境と調査経過

第１節　調査に至る経緯

一般国道115号相馬福島道路は、常磐自動車道と東北縦貫自動車道を結ぶ約45㎞の高規格道路であり、東日本大震災からの早期復興を図るリーディングプロジェクトとして、国土交通省東北地方整備局により、緊急整備されている。全５区間のうち、相馬西道路と阿武隈東道路の２区間は国土交通省東北地方整備局磐城国道事務所が、阿武隈東～阿武隈と霊山道路と霊山～福島の３区間は同省同局福島河川国道事務所が事業を進めている。

その建設予定地に関わる遺跡発掘調査は、福島県教育委員会との委託契約に基づき、震災前の平成16年度から公益財団法人（平成24年10月以前は財団法人）福島県文化振興財団遺跡調査部が実施している。平成28年度は伊達市霊山町下小国地区、桑折町松原地区及び成田地区に所在する以下の５遺跡の本発掘調査を実施した。

◎伊達市霊山町下小国地区　霊山道路……沼ヶ入遺跡（２次調査）
　　霊山～福島…上ノ台館跡（１次調査）
◎桑折町松原地区　　霊山～福島…川原田遺跡
　　成田地区　　霊山～福島…馬場遺跡・新宿遺跡

公益財団法人福島県文化振興財団では、平成28年４月１日付の福島県教育委員会との委託契約を受けて、遺跡調査部の職員６名を配置して発掘調査を実施した。４月当初は沼ヶ入遺跡、上ノ台館跡、川原田遺跡の発掘調査が確定していたものの、その調査面積は、川原田遺跡の3,700㎡を除いて確定していなかった。したがって、以後の展開は、平成28年度の試掘・確認調査で要保存面積

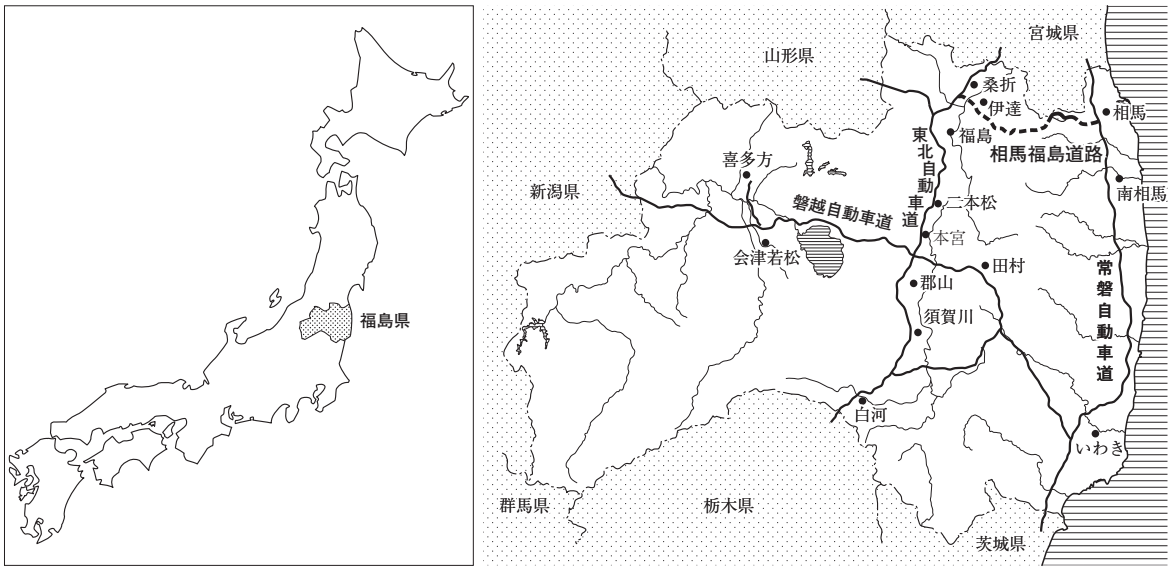


図１　一般国道115号相馬福島道路位置図

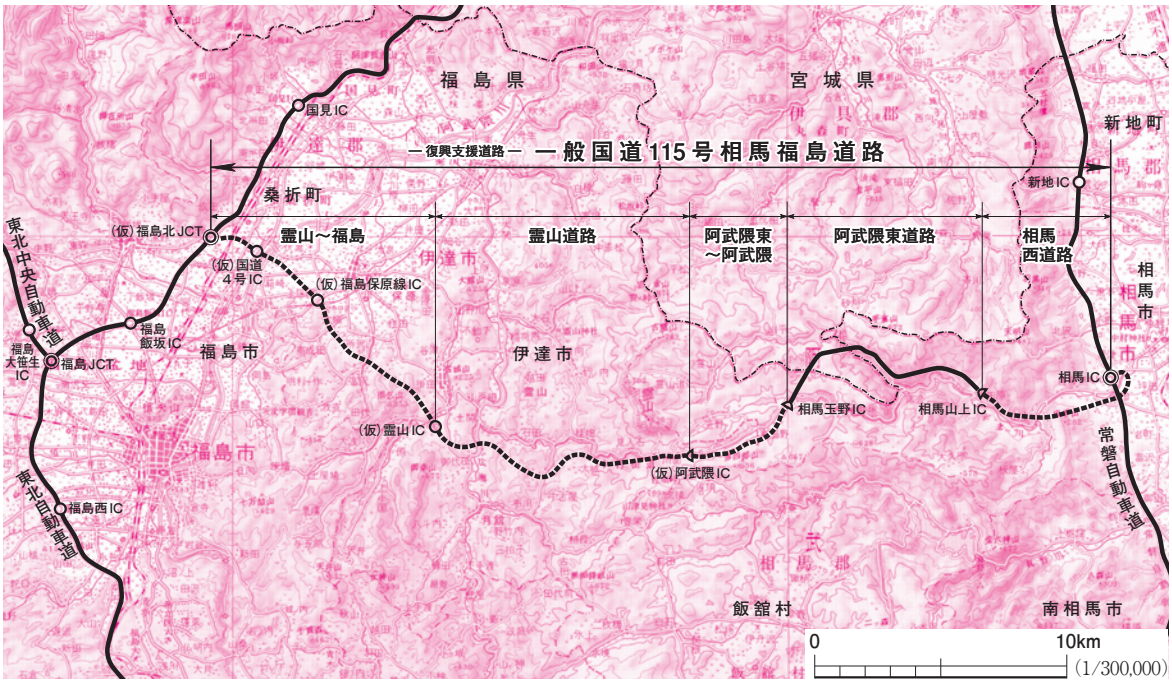


図２　道路工事計画図

が確定次第、順次追加していくこととなった。

以下では、伊達市と桑折町における調査について、別個に調査経過を記述する。また、以降の地理的環境・歴史的環境についても、両市町を別個に記述する。

伊達市霊山町下小国地区

４月19日に第１回連絡調整会議が開催され、調査の優先順位は沼ヶ入遺跡が高く、上ノ台館跡も条件整備が整い次第、沼ヶ入遺跡と同時進行で調査を進めることが決まった。また、今後の試掘・確認調査によって沼ヶ入遺跡の市道部分の要保存面積が出た場合は、本発掘調査が次年度以降になること、上ノ台館跡の伐採道造成に伴う立会を福島県教育委員会が５月上旬に行い、北側要保存範囲の伐採は５月末までに終了することが決まった。

財団では、以上を念頭に準備を進め、上ノ台館跡の伐採と立会に関しては予定通りの工程で終了した。また、４月下旬の試掘・確認調査の結果を受け、５月16日付で県文化財課より沼ヶ入遺跡4,000㎡、上ノ台館跡8,400㎡の発掘指示が出された。

５月24日の第２回連絡調整会議では、沼ヶ入遺跡の調査期間を６月下旬～９月下旬とし、終了のめどが立ってから上ノ台館跡の調査を同時進行させること、プレハブ・駐車場用地は２遺跡の調査で共用することが決まった。

以上の経過を経て、６月27日から沼ヶ入遺跡の表土剥ぎを開始した。移転した家屋の基礎撤去に苦労したものの、７月８日には終了し、土坑、溝跡、小穴群の姿が見え始めた。作業員は７月５日から雇用し、表土剥ぎが済んだ場所から順次遺構検出を進めていった。

しかし、７月上旬は雨模様、中旬以降は蒸し暑い日が続き、作業が思うようにはかどらなかった。

それでも、盆前には、調査区全体の70％の遺構検出を終了させ、残りの作業量が把握できる状態となった。

盆明け後は、１次調査区で発見された２棟の掘立柱建物跡の延長方向に分布する小穴群を検討し、主屋と思われる廂付建物跡を確認することができた。これにより、中世屋敷跡の全体像が判明したことになり、貴重な成果になったと思われる。８月下旬は相次ぐ台風通過で雨水の浸水が危ぶまれたが、水はけのよい斜面地の調査区は大きな被害が無く、９月初旬に基本土層図の作成、遺構底面の最終確認を行った。

こうした経過を経て、９月７日に空中写真撮影を実施、９月９日に実質的作業を終了して、９月12日には現地引き渡しを行った。なお、調査区境界の市道下に範囲が延びる土坑が１基検出され、次年度の道路付け替え工事の際に、県文化財課が立会することとなった。

一方、上ノ台館跡は６月上旬の確認調査の結果を受け、６月27日付で県文化財課より300㎡の追加指示が出された。この場所は、排土置き場の予定地であったため、調査計画は変更を余儀なくされた。こうした経過を受け、表土剥ぎを８月１日から先行開始し、沼ヶ入遺跡の調査終了後の９月15日から東斜面300㎡の調査を開始した。その結果、縄文時代後～晩期主体の遺物包含層が確認され、上ノ台遺跡の遺物包含層と一体的に形成されたものであることが判明した。10月４日には引き渡しを行い、排土置き場を確保した。

以降は、当初指示面積の上ノ台館跡8,400㎡の調査に全力を傾け、北側から南側に向かって遺構検出を展開していった。調査区は起伏が激しい丘陵地のため、作業員の労災防止にはかなり気を配らなければならなかった。天候が安定していた10月中旬には、中世城館跡に伴う溝跡（堀切）、平場の一部、古代の木炭焼成遺構、縄文時代の落し穴の分布状況が見えてきた。その後は、強風に悩まされながらも作業は順調に進捗し、11月下旬にはほぼすべての遺構精査を終えることができた。とくに、溝跡は調査開始前に埋没しきらない窪地として観察されたが、発掘調査によって正確な規模と構造が判明し、重要な成果になったと思われる。

こうした経過を経て、11月29日に空中写真測量を実施、12月９日に一切の現地作業を終了して、12月13日には現地引き渡しを行った。

なお、下小国中組集会場を会場として、10月３日に「相馬福島道路遺跡発掘調査成果報告会」を実施しており、多くの地域住民の参加を得ることができた。　（菅　原）

桑折町松原地区・成田地区

平成28年度に本発掘調査を実施した伊達郡桑折町内に所在する遺跡は、松原地区の川原田遺跡、成田地区の馬場遺跡、新宿遺跡の３遺跡である。川原田遺跡は４月１日付で福島県教育委員会から3,700㎡の本発掘調査指示がなされていたが、その他の遺跡は年度途中に行われた試掘・確認調査等の成果から調査が追加されたものである。

川原田遺跡の調査は、霊山町下小国地区の２遺跡よりも調査の優先順位が高いことが４月19日

の連絡調整会議において示された。そのため、他の遺跡に先行して調査を開始し、終了後は下小国地区の遺跡の調査に移行する計画で準備を進め、５月の連休明けにプレハブ・トイレを設置し、発掘器材を搬入して、16日から作業員の雇用を開始した。

５月末から表土剥ぎの作業に入ると、好天にも恵まれ、作業は順調に進んだ。連日30℃前後まで気温が上がることから、熱中症の予防に努めながらの作業となった。６月後半には表土下の遺物包含層の掘り下げに移り、21日には北東区の遺構検出に臨むことができた。

７月１日より重機による表土剥ぎが開始されると、ようやく調査が本格的に動き出した。しかし、表土剥ぎが進むにつれ遺物包含層が調査区全体に広がることが確認でき、その掘り下げ作業に労力が大きく割かれることが想定された。また、水田に利用されていた土地ということもあり、表土下の堆積土は粘性が強く水分を含むと滑りやすくなる一方で、乾燥して割れやすく、掘り下げ、検出作業などの進展を妨げた。

７月末には重機による表土剥ぎが終わり、８月の盆前までには調査面積の３分の１程度まで終了する見込みとなった。また、調査区の南部には遺存状態の良好な落し穴が散在し、調査区中央には柱穴とみられる小穴群が広がることが確認できた。

８・９月は例年になくゲリラ豪雨と台風の襲来が続いたため、調査区内の排水と復旧作業が繰り返されることとなり、作業効率は一気に低下した。

９月６日の連絡調整会議では新宿遺跡の調査を実施することが具体化した。条件整備が整い次第、川原田遺跡の調査を早めに終了し、新宿遺跡へ移行することが決定したため、その計画に沿って調査を急いだ。調査はなかなか進展しなかったが、数日の晴れ間を縫いながら作業を行い、ようやく９月末には遺物包含層の掘り下げを終えることができた。

10月に入ると天候が安定し、残りの小穴群の遺構精査に取りかかり、そのうちの一部から掘立柱建物跡２棟を確認することができた。また、調査終盤になって建物跡と同時期とみられる井戸跡も確認でき、井戸跡側部材の一部の取り上げを行った。７日には空中写真撮影を行い、18・19日にはプレハブを撤去して、11月２日には引き渡しを行って調査を終了した。

新宿遺跡の調査は、９月８日付けの福島県教育委員会の指示に基づき実施した。調査面積は1,850㎡である。川原田遺跡から器材類や作業員等を円滑に移行できるように準備を進めた。10月13・14日に川原田遺跡から器材類を搬入し、プレハブ・トイレの設置を行い、17日には重機により建物基礎等の撤去に取りかかった。その後、19日から重機による表土剥ぎに着手し、すでに試掘調査で確認されていた道跡に直交して幅約３ｍの堀跡が確認できた。新宿遺跡の調査は、24日からは作業員による遺構の検出作業を進め順調に推移していた。

一方で、新宿遺跡の近接地の工事中の現場から遺跡が不時発見されたことから、工事計画と照らして本発掘調査が必要となった。その結果、10月27日付で福島県教育委員会より馬場遺跡600㎡の本発掘調査の指示があり、急遽、新宿遺跡から調査員、作業員を割いて調査に入ることとなった。馬場遺跡からは土坑、溝跡、小穴群が確認されたが、調査は速やかに終了し、11月８日には引き

渡しを行うことができた。

新宿遺跡の表土剥ぎは予定通り11月８日には終了し、調査区全体の遺構検出作業に取りかかった。17日には連絡所用のプレハブの引越しを行い、調査区に隣接して器材庫を設置し、連絡所に発電機を設置するなど、作業員の職務環境を整えた。調査は大きく分けて堀跡と、道跡の西側に広がる小穴群の精査を中心に進めていた。12月になると一段と気温が下がり、例年より降雨も多く、作業員の稼働率も低下していったことから、10名の作業員を補充し、22日までに小穴群と周囲の住居跡、土坑、溝跡の調査についてはほぼ終了した。

年明け１月10日より作業を開始したが、例年以上の降雪、積雪にみまわれ、除雪と排水を繰り返す中、堀跡の土量が想定よりも多く、調査は難航した。17日の連絡調整会議で１月末の引渡しが決まり、それに向けて26日に空中写真撮影を実施し、27日までに器材類を搬出し、翌週の31日に現地を工事側に引き渡した。

（廣　川）

第2節　地理的環境

福島県は東北地方の南端に位置している。面積は13,782㎡で、北海道、岩手県に次ぐ全国３番目の面積を有する。県土の約８割を山地が占め、南北に並行する越後山脈、奥羽山脈、阿武隈高地によって３地方に分割され、西から順に会津地方、中通り地方、浜通り地方と呼称されている。以下では、伊達市霊山町下小国地区、桑折町松原地区・成田地区の地区毎に記述する。

伊達市霊山町下小国地区

伊達市霊山町は中通り地方の北東部に位置し、大半が阿武隈高地の山中にある。地形は標高825ｍの霊山山塊を最高峰に、標高200ｍ～500ｍクラスの山々が連なっており、その谷間には東北第２位の大河川である阿武隈川に合流する広瀬川と、その支流（大石川、祓川、石田川、小国川など）が開析した狭い平坦地が形成されている。気候は夏が暑く、冬は降雪量が少ないものの寒冷で、年間平均気温は12℃、年間降水量は約1,100㎜である。こうした土地柄を利用して、近世～近代には養蚕業・絹織物業、葉タバコ生産が盛んに行われ、1970～1980年代以降は、牧畜・段々畑・果樹栽培地への転換がなされてきた。

調査対象の２遺跡が所在する下小国地区は、標高532ｍの天井山北西麓から流れ出る小国川流域で、福島市と相馬市を結ぶ国道115号（中村街道）に面し、隣接の掛田地区は国道115号と国道349号が南北に交差する交通の要衝地である。この地理的特性は、周囲の歴史的環境を考えるうえで、重要と思われる。

次に、地質を概観する。下小国地区を含む霊山山塊の南側～西側は、風化が著しい雲母系花崗岩類を基盤層として、新第三紀の火山砕屑堆積物（霊山層、月舘層など）が広く覆う。そして、高地・丘陵地間の谷部には、第四紀の未固結堆積物（岩石化していない礫・砂・泥など）が堆積し、斜面部

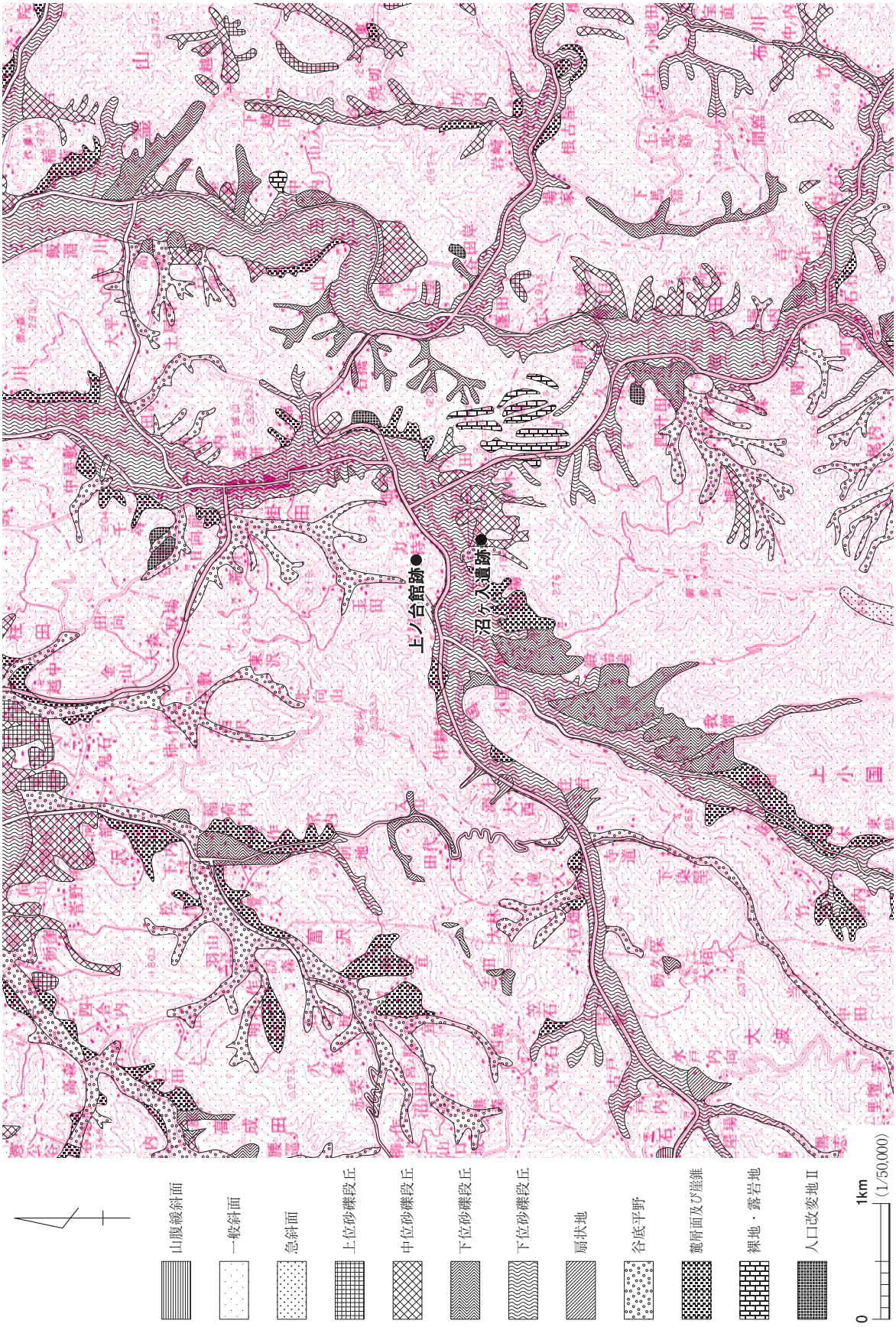


図３　沼ヶ入遺跡・上ノ台館跡周辺地形分類図

図4　川原田・馬場・新宿遺跡周辺地形分類図

などには、西方の吾妻・安達太良火山群からもたらされた更新世後半期の火山灰や風成二次堆積物（火山灰を母材とする黄褐色土壌）層が散在するところもある。（菅　原）

桑折町松原地区・成田地区

桑折町は、北緯37°51′、東経140°31′の中通り地方北部に位置する。面積は42.97㎢で、南から東は伊達市に、北は国見町に、西は福島市に、北西は宮城県白石市に接している。年間平均気温は13℃、年間降水量は1,166㎜である。

地形は、町域西部に奥羽山脈の支脈である山地が連なり、町域南東辺には東北第２位の大河川である阿武隈川が北東に向かって沿うように流れる。また、大字北半田にある丘から国見厚樫山にかけては、丘陵が断続的かつ一列に並び、国見丘陵列と呼称されている。

町域西部の標高が130～180ｍと、他地域より60～80ｍ高く、概ね北西から南東に向かって傾斜している。町域最高点は北西部に位置する標高863.1ｍの半田山であり、最低所は阿武隈川が伊達市梁川町に流れ込む地点である。

町域全域は、全て阿武隈川水系に属する。町域を流れる阿武隈川の主な支流としては、産ヶ沢川、佐久間川、普蔵川、新堀川等があり、山地から土砂を運んで現桑折市街地が形成されている藤田面を堆積させたと考えられる。

藤田面の縁辺部は、阿武隈川等の浸食により急な段丘崖を成している。段丘崖には、小規模な開析谷が数多く発達しており、この段丘崖より下位が低位段丘面である。低位段丘面には、自然堤防が多数形成され、古来より繰り返されてきた阿武隈川の蛇行・氾濫の跡をうかがわせる。

次に、地質を概観する。町域西部の山地は、新生代第三紀の堆積岩を基盤としている。半田山周辺では、中期中新世～後期中新世の非アルカリ珪長質火山岩類が分布している。山地の縁辺部には、第四紀後期更新世の堆積段丘面である田中面、梅津面がある。

町域東部の低地は、山地側に分布している後期更新世の低位段丘堆積物層と阿武隈川沿いの後期更新世～完新世の海成または非海成堆積岩類が堆積する地層に、おおまかに分けられる。（枝　松）

第３節　歴 史 的 環 境

伊達市霊山町下小国地区

伊達市霊山町域及びその周辺では、各時代の遺跡が確認されている。以下では、時代ごとに主要な遺跡を概観する。

旧石器時代　万田川遺跡(52)から、石刃と剥片が出土している。いずれも細石刃の出現以前のものとみられている。

縄文時代　縄文時代では、早期～前期の明確な集落跡はまだ発見されていない。現状では、早期後半の土器が霊山山頂から、前期前葉の土器が川向遺跡（８）から少量出土しているのみである。しか

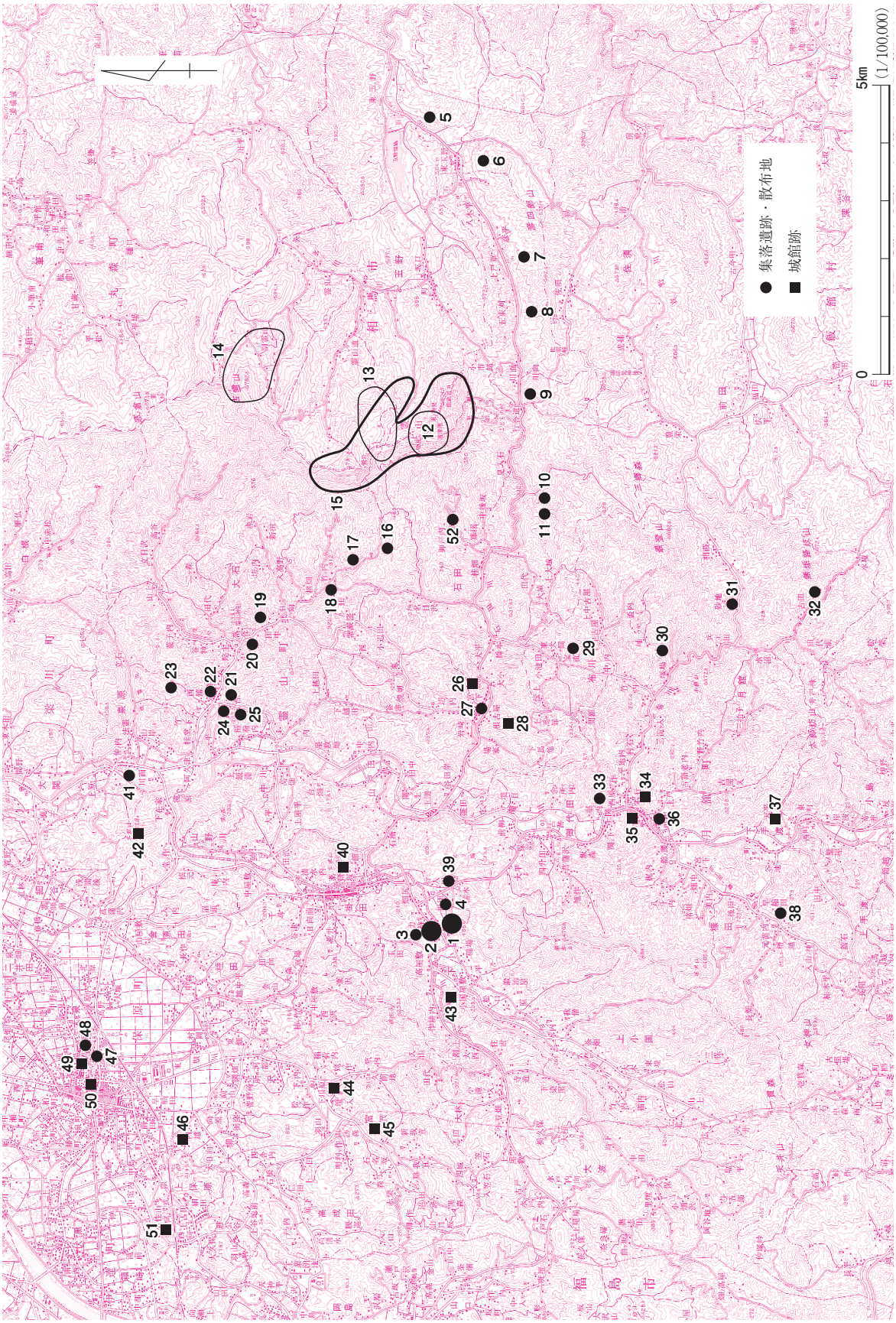


図5　沼ヶ入遺跡・上ノ台館跡周辺の遺跡位置図

表１　沼ヶ入遺跡・上ノ台館跡周辺の遺跡一覧

※№５・６を除き所在地：伊達市

№	遺跡名	所在地	種　別	時　期	№	遺跡名	所在地	種　別	時　期
1	**沼ヶ入遺跡**	霊山町下小国	集落/城館跡	中世	27	根古屋遺跡	霊山町石田	集落跡	縄文(後･晩)、弥生
2	**上ノ台館跡**	霊山町下小国	城館跡	中世	28	小館跡	霊山町石田	城館跡	中世
3	上ノ台遺跡	霊山町下小国	木炭窯、遺物包含層	縄文、中世以降	29	宝直館跡	月舘町布川	塚など	縄文、中～近世
4	福田遺跡	霊山町下小国	集落/城館跡	中世	30	堰場遺跡	月舘町布川	製鉄関連	中世～近世
5	姥ヶ岩遺跡	相馬市東玉野	木炭窯	近世初	31	砂場遺跡	月舘町布川	製鉄関連	中世～近世
6	向山遺跡	相馬市東玉野	集落跡	縄文(早･前)	32	古谷地遺跡	月舘町月舘	散布地	縄文(前･中)
7	庚申向Ａ遺跡	霊山町石田	木炭窯	縄文、近世	33	隻ノ内遺跡	月舘町布川	集落跡	縄文(中)
8	川向遺跡	霊山町石田	集落跡	縄文(後･晩)	34	月見館跡	月舘町月舘	城館跡	中世
9	行合道Ｂ遺跡	霊山町石田	木炭窯	平安、中世末	35	殿上館跡	月舘町月舘	城館跡	中世
10	熊屋敷Ｂ遺跡	霊山町石田	集落跡･木炭窯	縄文(後･晩)･中世	36	久保田遺跡	月舘町月舘	散布地	縄文(中･後)
11	熊屋敷遺跡	霊山町石田	散布地	縄文(後･晩)	37	下手渡藩陣屋跡	月舘町下手渡	陣屋跡	近世後期
12	霊山寺山頂伽藍群	霊山町石田	寺院跡	古代～中世	38	三斗蒔遺跡	月舘町糠田	散布地	縄文(早～晩)
13	霊山寺玉野川上流伽藍群	霊山町石田	寺院跡	古代～中世	39	行人田塚	霊山町下小国	経塚、塚	中世～近世
14	霊山寺古霊山伽藍群	霊山町石田	寺院跡	古代～中世	40	懸田城跡	霊山町掛田	城館跡	中世
15	霊山城跡	霊山町石田	城跡	中世(南北朝期)	41	武ノ内遺跡	霊山町泉原	集落跡	縄文(中･後)、弥生
16	千石平遺跡	霊山町大石	散布地	縄文(後･晩)	42	山野川大館	霊山町山野川	城館跡	中世
17	岩平Ｂ遺跡	霊山町大石	散布地	縄文(後･晩)	43	小国城跡	霊山町下小国	城館跡	中世
18	家ノ入遺跡	霊山町大石	散布地	縄文(後･晩)	44	根子屋館跡	保原町所沢	城館跡	中世
19	小坂遺跡	霊山町大石	散布地	縄文(後･晩)	45	富沢城跡	保原町富沢	城館跡	中世
20	橋本遺跡	霊山町大石	散布地	縄文(中･後)	46	大鳥城跡	保原町上保原	城館跡	中世
21	漆方遺跡	霊山町大石	散布地	縄文(後･晩)	47	大地内Ａ遺跡	保原町大泉	城館関係	中世～近世
22	宮脇廃寺跡	霊山町大石	寺院跡	中世～近世初	48	菖蒲沢Ａ遺跡	保原町大泉	集落/城館関係	古墳～近世
23	倉波入遺跡	霊山町大石	散布地	縄文(中･後)	49	保原城跡	保原町城ノ内	集落/城館跡	古墳～近世
24	松ヶ倉遺跡	霊山町大石	集落跡	縄文(中･後)	50	保原陣屋跡	保原町宮下	陣屋跡	近世
25	大石台遺跡	霊山町大石	散布地	縄文(後･晩)	51	高子館跡(高子岡城跡)	保原町上保原	城館跡	中世
26	大館跡	霊山町石田	城館跡	中世	52	万田川遺跡	霊山町石田	散布地	旧石器

し、中期～後期になると遺跡数が増加し、橋本遺跡(20)、倉波入遺跡(23)、松ヶ倉遺跡(24)、古谷地遺跡(32)、隻ノ内遺跡(33)、久保田遺跡(36)、武ノ内遺跡(41)などの集落跡が知られている。とりわけ、武ノ内遺跡では中期末葉～後期の竪穴住居跡13軒、配石遺構14基、屋外埋設土器74基、土坑113基が発見されており、松ヶ倉遺跡でも縄文時代中期末葉～後期中葉の埋甕３基、土坑５基が検出されている。

続く晩期はさらに遺跡数が増加する反面、遺跡の規模は小さくなっていく。川向遺跡(８)、熊屋敷Ｂ遺跡(10)、熊屋敷遺跡(11)、千石平遺跡(16)、岩平Ｂ遺跡(17)、家ノ入遺跡(18)、小坂遺跡(19)、漆宝遺跡(21)、大石台遺跡(25)、根古屋遺跡(27)、三斗蒔遺跡(38)、武ノ内遺跡(41)などが知られ、根古屋遺跡では、晩期終末の完形土器が多数出土している。

弥生時代　弥生時代になると、集落様相は不明になる。しかし、根古屋遺跡(27)と武ノ内遺跡(41)では再葬墓が認められ、縄文時代晩期と地点をずらして継続したのは間違いない。根古屋遺跡で発見された弥生時代前期後半～中期前半の墓壙25基、土壙墓２基、土坑４基、人骨集積地２箇所、土器棺150個体は、東日本の代表的な再葬墓資料の１つと評価されている。

古墳時代　行合道Ｂ遺跡(９)から、中期後葉～後期前葉の土師器甕が出土しているが、集落跡は発

見されていない。

古代・中世　この時代を代表するのは、急峻な霊山山塊に営まれた霊山寺跡とその関連遺跡群(12～15)である。貞観元年(859年)に、慈覚大師円仁が開基したと伝えられ(「霊山寺縁起」)、南北朝期の建武四年(1337年)に、北畠顕家が一時仙台平野から陸奥国府を移した当該遺跡群では、礎石建物群・溝跡・道路跡などの遺構とともに、土師器杯、須恵器甕、龍泉窯青磁花盆・皿、中世瓦、鉄製錫杖などの多種多様な遺物が発見されている。

また、15世紀前半に創建された国指定史跡宮脇廃寺跡(22)は、伊達氏が再興した霊山寺跡の可能性が指摘されており、軒瓦文様は京都の鹿苑寺や相国寺の影響が確認できる。さらに、広瀬川とその支流域に戦国期の城館跡が多いのもこの地域の特徴と言え、今回調査した上ノ台館跡(２)をはじめ、大館跡(26)、小館跡(28)、懸田城跡(40)、山野川大館跡(42)、小国城跡(43)がみられる。それらは、密接な関係を有していた可能性が考えられる。

集落跡では、行合道Ｂ遺跡(９)から９世紀末～10世紀初頭の竪穴住居跡１軒が発見され、山間部の貴重な古代の遺跡の事例となっている。しかし、中世の集落跡は未発見である。この他、行合道Ｂ遺跡(９)、熊屋敷Ｂ遺跡(10)から中世以降の木炭窯跡が発見されている。　(植　松)

桑折町松原地区・成田地区

桑折町では、各時代の遺跡が確認されている。以下では、時代ごとに主要なものを概観する。

旧石器時代　平林遺跡(34)からは、後期旧石器時代前半期の石器が出土しており、県内最古の旧石器群の一つとされる。

縄文時代　中期の土器・土偶・石器等が出土した林泉寺前遺跡(54)や晩期の土器・土偶・石器が出土し、27基の配石遺構が確認された薩摩遺跡(８)等がある。なお、薩摩遺跡(８)は、隣接する二本木遺跡(11)と本来一体の遺跡と考えられる。

弥生時代　薩摩遺跡(８)や隣接する二本木遺跡(11)から少量の中期の土器が出土している。

古墳時代　町域北東の大字伊達崎から国見町塚野目にかけて、塚野目古墳群(36)が５世紀から７世紀初頭にかけて造営される。また、沖船場遺跡(25)や長者畑遺跡(20)等、阿武隈川の自然堤防上の伊達崎地区を中心に古墳時代の遺跡が分布する。

古　　代　奈良・平安時代に入ると、出土品が県指定重要文化財となっている大樋遺跡(12)をはじめとして、坊ノ内遺跡(60)、松原館跡(26)等で集落の一部が確認されており、集落の中心は山地に近い睦合地区に移っていくとみられる。また、町域南端、伊達市との境には、奈良・平安時代の須恵器窯跡である成田前窯跡(32)などの伊達窯跡群が分布する。

中　　世　中世の遺跡は、城館跡も含め多い。寺院跡と考えられる下万正寺遺跡(23)、中世前期の屋敷跡とみられる土井ノ内遺跡(69)、坊ノ内遺跡(60)が存在する。

桑折西山城跡(６)は、戦国時代の天文元年(1532年)、伊達氏14代稙宗が居城として築城した山城である。平場・堀切・土塁等の遺構がよく残っており、国の史跡に指定されている。また、この

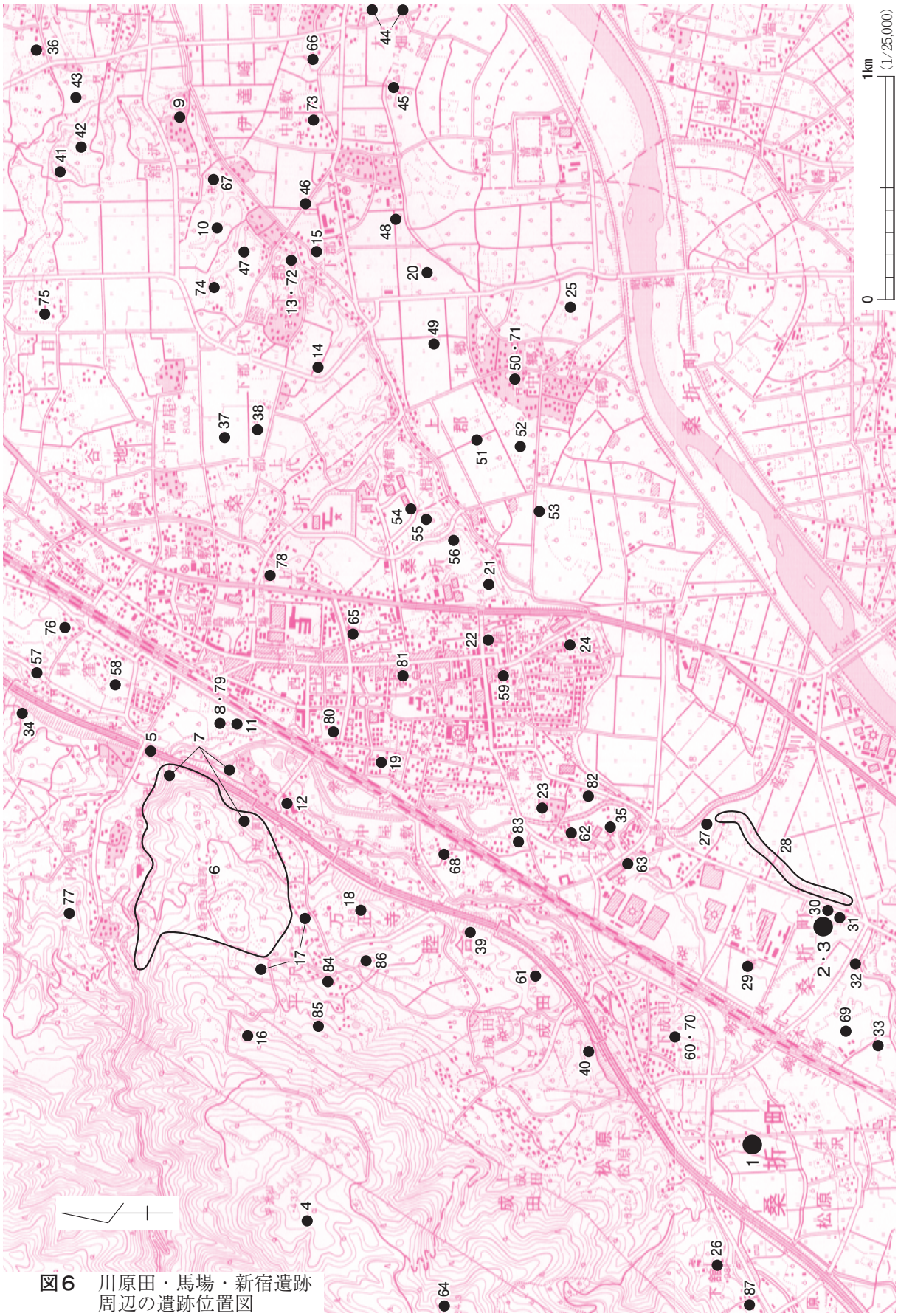


図6　川原田・馬場・新宿遺跡
周辺の遺跡位置図

表2　川原田・馬場・新宿遺跡周辺の遺跡一覧

※所在地：桑折町

No.	遺跡名	所在地	種　別	時　期
1	**川原田遺跡**	松原字川原田	集落・狩場	縄文・弥生・平安
2	**馬場遺跡**	成田字馬場	集落	中世・近世
3	**新宿遺跡**	成田字馬場	集落・狩場・道跡	古代・中世・近世
4	花水寺跡	平沢字花水	社寺跡	平安
5	駿河館跡	南半田字駿河館	城館跡	中世
6	桑折西山城跡	万正寺字本丸・中館・西館・館表	城館跡	中世
7	万正寺遺跡	万正寺字石薬師・七曲・館ノ越	散布地	縄文
8	薩摩遺跡	南半田字薩摩・北薩摩	散布地	縄文
9	伊達崎館跡	伊達崎字西館・東館	城館跡	中世
10	下郡小館跡	下郡字小館	城館跡	中世
11	二本木遺跡	南半田字二本木	散布地	縄文・中世・近世
12	大榧遺跡	万正寺字大榧	散布地	平安・中世
13	館ノ内・下郡館遺跡	下郡字館ノ内	散布地	縄文
14	蝦夷塚遺跡	下郡字蝦夷塚	散布地	弥生・古墳
15	堂ノ前遺跡	下郡字曲松	散布地	奈良・平安
16	平沢寺経塚跡	平沢字一本松	塚	平安・中世
17	平沢遺跡	平沢字山中・山田	散布地	旧石器
18	常陸館跡	万正寺字常陸館・館ノ蔭	城館跡	中世
19	桑島遺跡	字桑島・東桑島・磐石	散布地	平安・中世
20	長者畑遺跡	下郡字長者畑・吉畑	散布地	古墳～平安
21	神十郎館跡	字館	城館跡	中世
22	桑折代官所・本町遺跡	字陣屋	その他	近世
23	下万正寺遺跡	万正寺字下万正寺	社寺跡	中世
24	播摩館跡	字庫場	城館跡	中世・近世
25	沖船場遺跡	上郡字高畑・松木内・五郎内前	散布地	古墳～平安
26	松原館跡	松原字館	城館跡	中世
27	光福寺跡	字興福寺	社寺跡	中世
28	桑折・台遺跡	字台	窯跡	平安・近世
29	三反田遺跡	成田字三反田	散布地	縄文・弥生・平安
30	一里壇遺跡	成田字一里壇	塚	中世・近世
31	赤坂窯跡	字赤坂	窯跡	近世
32	成田前窯跡	松原字成田前	窯跡	平安
33	成田窯跡	成田字割田	窯跡	奈良・平安
34	平林遺跡	南半田字平林・蘭梅	散布地	旧石器
35	大五輪遺跡	万正寺字大五輪	塚	中世・近世
36	塚野目古墳群	伊達崎字錦木塚	古墳	古墳
37	日暮遺跡	下郡字日暮	散布地	縄文
38	下郡遺跡	下郡字段の腰	散布地	縄文
39	寺山遺跡	成田字寺山・寺下	社寺跡	平安・近世
40	成田西館跡	成田字舘ノ腰・西館・松山	城館跡	中世
41	後猪ノ馬場遺跡	伊達崎字後猪ノ馬場	散布地	縄文・古代・奈良
42	猪ノ馬場館跡	伊達崎字前猪ノ馬場・東猪ノ馬場	城館跡	中世
43	台遺跡	伊達崎字台	散布地	縄・古～平
44	大畑遺跡	伊達崎字大畑・百目木	散布地	奈良・平安
45	柳ノ目遺跡	伊達崎字東柳ノ目・西柳ノ目	散布地	古墳～平安
46	榎遺跡	下郡字榎・細町	散布地	古墳～平安
47	下郡古館跡	下郡字古館	城館跡	中世
48	吉沼遺跡	伊達崎字吉沼・上郡字柿ノ口	散布地	古墳～平安
49	沖沢田遺跡	上郡字沖沢田・下沖沢田・石橋	散布地	古墳～平安
50	宮前遺跡	上郡字宮前	散布地	古墳～平安
51	細町・塚田遺跡	上郡字細町・塚田	散布地	古墳～平安
52	中郷遺跡	上郡字西鍛冶町・西畑	散布地	古墳～平安
53	佐野遺跡	上郡字吉内・佐野・下佐野・椚下	散布地	古墳～平安
54	林泉寺前遺跡	上郡字林泉寺前・文吾館	散布地	縄文
55	文吾館跡	上郡字文吾館	城館跡	中世
56	左門衛館跡	上郡字左門衛館	城館跡	中世
57	古矢館跡	南半田字内城・八幡台・台	城館跡	中世
58	桐ヶ窪館跡	南半田字桐ヶ窪	城館跡	中世
59	伝来寺館跡	字下道場前	城館跡	中世
60	坊ノ内遺跡	成田字坊ノ内	散布地	平安・中世
61	成田古館跡	成田字古館	城館跡	中世
62	つつじヶ丘天神古社跡	万正寺字天神森	社寺跡	中世・近世
63	田植地蔵遺跡	成田字中丸・東原前	塚	中世・近世
64	朱淵・大久保遺跡	松原字朱淵・大久保	散布地	縄文
65	町裏遺跡	字町裏	散布地	縄文・弥生
66	熊野塚跡	伊達崎字宮ノ内	塚	古代・中世・近世
67	下西館跡	伊達崎字下西	城館跡	中世
68	万正寺中屋敷跡	万正寺字中屋敷	城館跡	中世
69	土井ノ内遺跡	成田字土井ノ内	城館跡	中世
70	坊ノ内館跡	成田字坊ノ内	城館跡	中世
71	宮前館跡	上郡字宮前	城館跡	中世
72	下郡山館跡	下郡字館ノ内	城館跡	中世
73	中屋敷跡	伊達崎字中屋敷	城館跡	中世
74	中丸館跡	下郡字中丸	城館跡	中世
75	御堂内屋敷跡	谷地字御堂内	城館跡	中世
76	大梅寺館跡	南半田字大梅寺	城館跡	中世
77	輪王寺館跡	南半田字材王寺	城館跡	中世
78	東段館跡	字東段	城館跡	中世
79	薩摩遺跡	字薩摩	城館跡	中世
80	大隅館跡	字西大隅	城館跡	中世
81	法円寺館跡	字北町	城館跡	中世
82	萬勝寺館跡	万正寺字下万正寺	城館跡	中世
83	倉本館跡	万正寺字倉本	城館跡	中世
84	上城館跡	平沢字上城	城館跡	中世
85	中城館跡	平沢字中城	城館跡	中世
86	元屋敷館跡	平沢字元屋敷	城館跡	中世
87	松原下館跡	松原字下館	城館跡	中世

頃新たに、西山城麗の大榧遺跡(12)や二本木遺跡(11)に屋敷遺構が現れ、桑折町市街の元となる本町遺跡(22)に町屋状の建物がつくられるようになる。

近　　世　近世に入ると、本町遺跡(22)の南に隣接する地には、幕領代官所である桑折代官所(22)が置かれた。また、町域北部には、かつては佐渡金山、石見銀山とともに日本三大鉱山といわれた半田銀山がある。半田銀山の採掘は、昭和25年まで行われた。　（枝　松）

第４節　調 査 方 法

沼ヶ入遺跡、上ノ台館跡、川原田遺跡、馬場遺跡、新宿遺跡の発掘調査では、原則的に(公財)福島県文化振興財団で踏襲されてきた調査方法を用いている。そこで、以下に一括して述べる。

遺跡や遺構の位置は、世界測地系に基づく国土座標Ⅸ系の座標を用いた。また、遺構や遺物の大まかな地点を示すために、10ｍ単位のグリッドを設定した。グリッドの呼称は、北から南に１・２・３…と算用数字、西から東にＡ・Ｂ・Ｃ…とアルファベットを用い、これを組み合わせてＡ１・Ｂ２・Ｃ３…とした。

表土と盛土の除去は重機を用い、それ以外の遺構外堆積土及び遺構内堆積土の掘削は、基本的に人力で行っている。遺構の精査は、その特性や規模・遺存状態等に応じて土層観察用畔を残し、土層の堆積状況や遺物の出土状況に留意しながら進めた。具体的には、竪穴住居跡・木炭窯跡・井戸跡・大型土坑の一部(方形竪穴状遺構)は４分割法、その他の遺構は２分割法を採用した。掘立柱建物跡の柱穴では柱痕跡と掘形の識別を行った。

遺構の記録は、実測図作成と写真撮影を行った。実測図作成は、平面図と土層断面図の作成を原則とし、平面図については、測量基準点をもとに光波測距儀を使用し、部分的には簡易遣方測量し、現場で結線した。断面図については、遺跡内に移動した簡易水準点をもとに作図した。各遺構の図化に際しては、1/20の縮尺を原則とし、遺構の規模・性格に合わせて1/40の縮尺も適宜使用した。さらに、調査面積が広く、標高差の大きな上ノ台館跡については、遺跡基底面の等高線の入った遺構配置図及び堀切の平面図をドローンによる空中写真測量で実施した。

遺物は、遺構及びグリッド単位で取り上げを行い、出土層位を記録している。また、上ノ台館跡では、遺物包含層は確認調査のトレンチを延長し、その土層断面の観察をもとに、遺物を層位的に取り上げた。

写真は35㎜判のモノクロームとカラーリバーサルフィルムカメラ、デジタルカメラを使用し、同一被写体の撮影を行った。また、沼ヶ入遺跡・川原田遺跡・新宿遺跡では、ラジコンヘリコプター搭載カメラによる空中写真撮影も行っている。

これらの調査記録及び出土遺物については、報告書刊行後に(公財)福島県文化振興財団の定める基準に従って整理を行い、福島県教育委員会へ移管した後、福島県文化財センター白河館に収蔵される予定である。　（菅　原）

第１編　沼ヶ入（ぬまがいり）遺跡（２次調査）

遺跡記号	ＤＴ－ＮＧＩ
所在地	伊達市霊山町下小国字沼ヶ入・御渡
時代・種類	中世の屋敷跡
調査期間	平成28年６月27日～９月９日
調査員	菅原祥夫・渡邉春喜・植松暁彦 枝松雄一郎

第１章　遺跡の位置と調査経過

第１節　遺跡の位置と現況

沼ヶ入遺跡は、福島県伊達市霊山町下小国字沼ヶ入・御渡に所在する。小国川南岸の河岸段丘上にあたり、伊達市中心部からは南東に約５㎞離れ、浜通り地方の相馬市から中通り地方の福島市へ抜ける国道115号線（中村街道）のルート沿いに位置する。

周囲には、中世城館跡やその関連遺跡が分布しており、東側に隣接して平成27年度調査した福田遺跡、小国川対岸の真正面に上ノ台館跡（本書第２編）が位置している。

調査開始前の現況は、東向き緩斜面の荒地・畑地・旧住宅地である。調査区中央を東西に走る市道の両脇には、移転した家屋のコンクリート基礎がそのまま残っていた。　（菅　原）

第２節　調 査 経 過

調査に係った作業日数は、延べ43日間である。以下に、調査の経過について週ごとに記す。

６月第５週：27日（月）から重機による表土除去、器材の搬入を開始する。

７月第１週：表土除去を継続する。遺構の分布状況が見え始める。

７月第２週：５日（火）から作業員を雇用する。調査連絡所、調査区周辺の環境整備や器材の整理を行う。表土除去は継続する。

７月第３週：11日（月）に遺構検出を開始する。表土除去は継続する。

７月第４週：20日（水）には、表土除去は全て終了した。遺構検出を継続する一方、土坑や溝跡等の遺構精査を開始する。

７月第５週：遺構検出、遺構精査を継続する。28日（木）には、業務委託による測量基準杭打設を行った。

８月第１週：遺構検出、遺構精査を継続する。

８月第２週：遺構検出、遺構精査を継続する。11日（木）から17日（水）までお盆休み。

８月第３週：小穴群を検討した結果、主屋とみられる３号建物跡を確認。

８月第４週：相次ぐ台風接近のため、思うように作業進まず。遺構検出、遺構精査を継続する。

９月第１週：基本土層図の作成、遺構底面の最終確認を行う。

９月第２週：３号建物跡、１号溝跡、土坑８基、小穴19基の精査を完了する。７日（水）には空中写真撮影を行った。

９月第３週：12日（月）に県文化財課及び工事側の立ち合いの下、引き渡しを行った。　（菅　原）

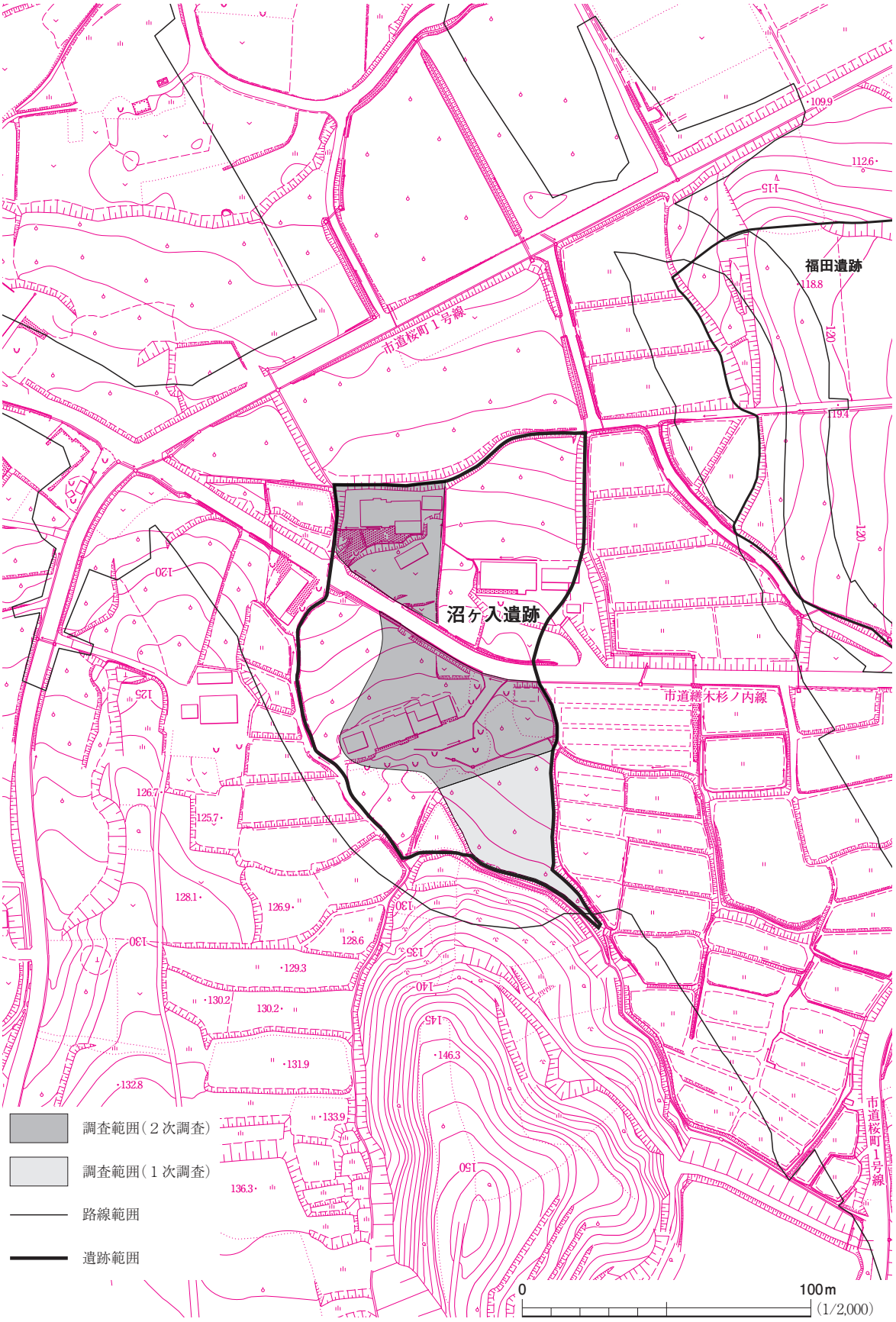

沼ヶ入遺跡
福田遺跡
市道桜町１号線
市道繕木杉ノ内線
調査範囲（２次調査）
調査範囲（１次調査）
路線範囲
遺跡範囲
0
100m
(1/2,000)

図１　調査区位置図

第２章　発見された遺構と遺物

第１節　調査成果の概要と基本土層

調査成果の概要

２次調査区は北向きの緩斜面上に立地し、北西から南東方向に走る市道を挟んで、南北２つに分けられる。そこで、便宜上、南側を南区、北側を北区と呼称した。

南区は、隣接の１次調査区で中世の屋敷跡及び縄文時代の狩猟場が発見されたため、その範囲の広がりの把握を意識して調査を行った。その結果、１次調査区の掘立柱建物跡とほぼ主軸をそろえた廂付建物跡が検出され、屋敷跡の全体像を検出することができた。しかし、縄文時代の落し穴は確認されず、範囲が斜面下位まで広がらないことが判明した。

一方、北区は遺構分布が稀薄で、埋没谷に堆積するＬⅢ中からも遺物は出土しなかった。

検出された遺構は、掘立柱建物跡１棟、土坑８基、溝跡１条、小穴19基を数える。それらは営まれた時代と性格によって、次の３つに区分される。

中　　世…３号建物跡、17号土坑、１号溝跡、小穴

近　　世…10～12号土坑

不　　明…13～16号土坑

基本土層（図２、写真14）

基本土層は、色調・土質の諸特徴からＬⅠ～Ⅵに分層した。以下、各層について説明する。

ＬⅠ　　黄褐色土(10YR5/6)である。農地基盤整備に伴う盛土である。

ＬⅡ　　褐色土(7.5YR4/6)である。調査区の所々に分布する。層厚は15～35cmを測る。

ＬⅢ　　褐色土(10YR4/4)である。北区に分布し、埋没谷では層厚１ｍ以上に達する箇所もある。本層上面が遺構検出面である。

ＬⅣ　　にぶい黄褐色土(10YR4/3)である。ＬⅢとＬⅤの漸移層で、主に南区北東部に分布し、ＬⅢの分布しない箇所の遺構検出面である。層厚は、15～30cmを測る。

ＬⅤ　　黄褐色土(10YR5/6)である。ややしまりのある基盤層で、調査区内で最も標高が高く、ＬⅢ・Ⅳの分布しない南区南部の遺構検出面である。層厚は30cm～１ｍ以上を測る。

ＬⅥ　　黄褐色土(10YR5/6)である。礫を多量に含む基盤層である。　　（菅　原）

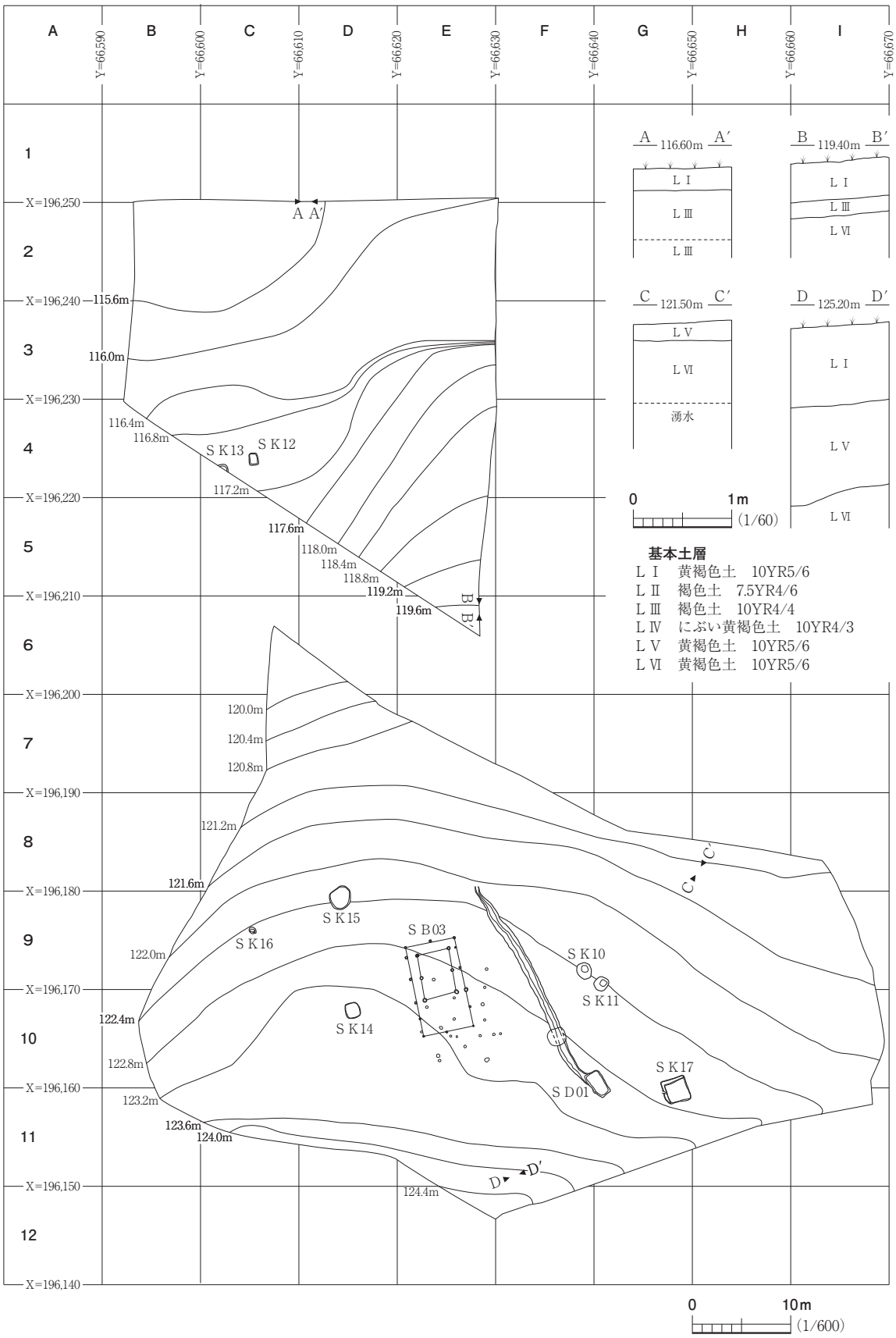


図２　遺構配置図・基本土層

第２節　掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は、１棟確認された。位置関係や柱穴規模・柱間寸法などの特徴から、１次調査の２棟（１・２号建物跡）と関連するものと考えられる。

３号建物跡　ＳＢ03

遺構・遺物（図３、写真３～６）

本建物跡は、Ｅ９・10グリッドのＬＶ上面から検出された。切土壁近くに並ぶ１・２号建物跡の北延長上に位置し、方向はそれらにほぼ平行するＮ12°Ｗを指す。構造は、１間×２間の身舎に２間×５間の廂が付く南北棟であり、身舎の位置は廂内の北側に偏る特徴が認められる。このことから、建物内部は北側が居住空間、南側が作業場空間に区分されていたと考えられる。

周辺には、小穴群が分布する他、東側6.5mに１号溝跡、西側7.0ｍに14号土坑が位置している。芯々間による柱間寸法は、次の通りであった。

◎身舎

【桁　行】

東側柱列（Ｐ20－18）… 2.30ｍ＋2.25ｍ＝4.55ｍ

西側柱列（Ｐ15－17）… 2.40ｍ＋2.35ｍ＝4.75ｍ

【梁　行】

南側柱列（Ｐ15－20）… 3.30m

北側柱列（Ｐ17－18）… 3.25ｍ

◎廂

【桁　行】

東側柱列（Ｐ13－８）…2.00m＋1.80ｍ＋2.30ｍ＋2.10ｍ＋1.00ｍ＝9.20ｍ

西側柱列（Ｐ１－６）…1.80ｍ＋1.70ｍ＋2.45ｍ＋2.20ｍ＋1.00ｍ＝9.15ｍ

【梁　行】

南側柱列（Ｐ１－13）…2.35ｍ＋2.80ｍ＝5.15ｍ

北側柱列（Ｐ６－８）…2.60ｍ＋2.45ｍ＝5.05ｍ

柱穴の平面形は円形基調を呈し、規模は、身舎が廂より大きく、深い。遺存状態は良好である。計測値は、身舎柱穴が開口部の径34～40㎝、検出面からの深さ42～48㎝、柱痕跡の径14～16㎝を測り、廂柱穴は、開口部の径14～26㎝、検出面からの深さ14～35㎝、柱痕跡の径10～12㎝を測る。以上の所見は、柱穴規模が１・２号建物跡に、柱間寸法が１号建物跡に類似しており、密接な関係がうかがえる。なお、Ｐ６・７・９・15では、柱痕跡に炭化物が観察された。樹種同定の結果、Ｐ９出土のものがイネ科で、それ以外はクリであった。遺物は出土していない。

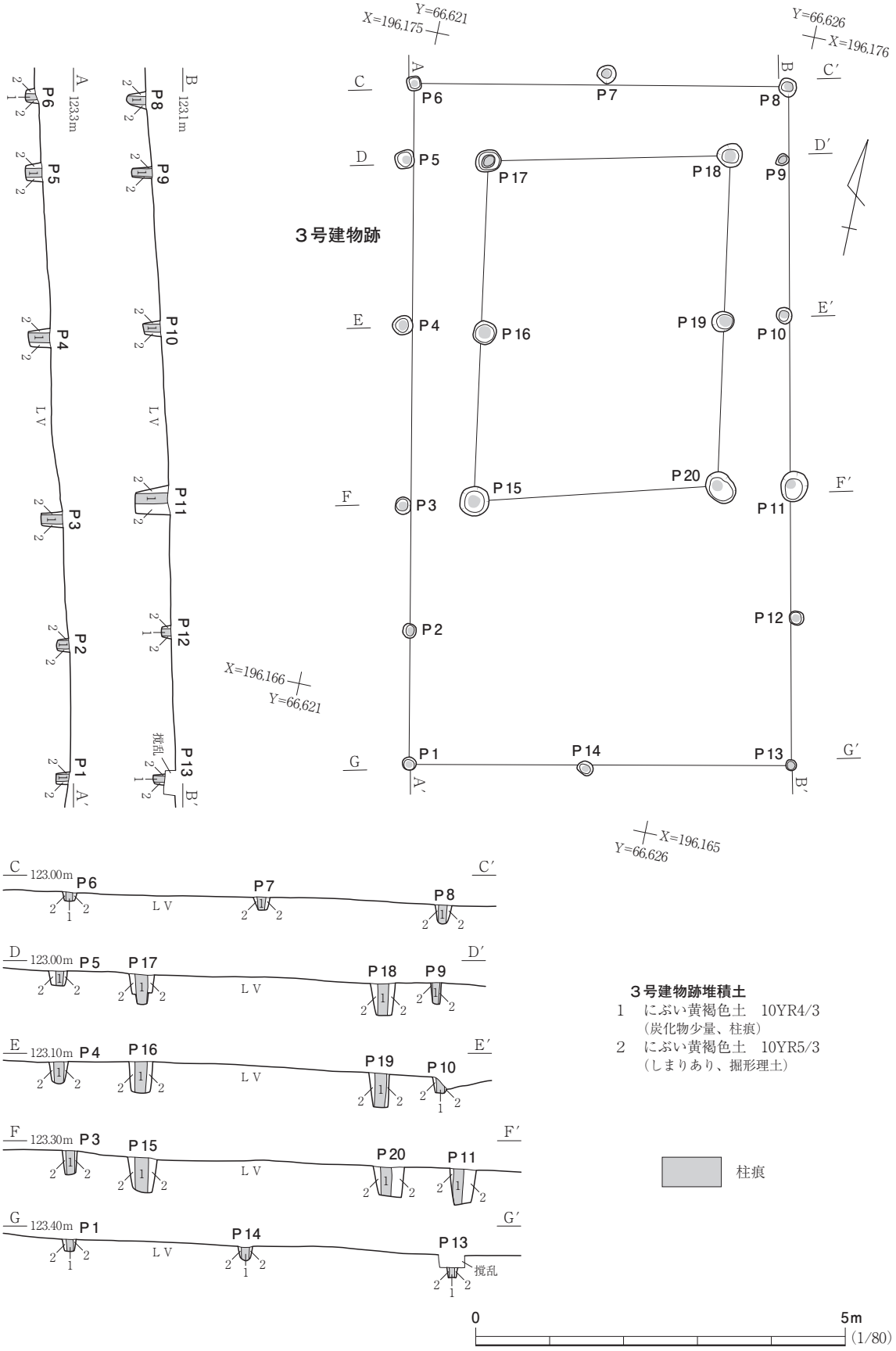

３号建物跡
Y=66,621
X=196,175
Y=66,626
X=196,176
X=196,166
Y=66,621
X=196,165
Y=66,626
A
A′
123.3m
B
B′
123.1m
C
C′
D
D′
E
E′
F
F′
G
G′
P1
P2
P3
P4
P5
P6
P7
P8
P9
P10
P11
P12
P13
P14
P15
P16
P17
P18
P19
P20
LV
撹乱
123.00m
123.10m
123.30m
123.40m
３号建物跡堆積土
1　にぶい黄褐色土　10YR4/3
（炭化物少量、柱痕）
2　にぶい黄褐色土　10YR5/3
（しまりあり、掘形理土）
柱痕
0
5m
(1/80)

図３　３号建物跡

ま と め

本建物跡は、１・２号建物跡と共に中世屋敷跡を構成しており、規模・構造から、主屋に位置づけられる可能性が高い。年代は、Ｐ６・７・９・15から出土した炭化材の放射性炭素年代測定の結果は13～14世紀頃であったが、本建物跡と関連する１号建物跡で出土した龍泉窯青磁及び中国渡来銭の年代観から、15世紀と考えておく。（菅　原）

第３節　　土　　坑

土坑は８基確認された。出土遺物や周辺遺構との関係から、中世、近世、時期不明のものに区分される。以下、番号順に述べる。

10号土坑　ＳＫ10（図４、写真７）

本土坑は、南区のＦ９グリッドのＬⅣ上面で検出された。平面形は楕円形を呈し、規模は長軸1.70ｍ、短軸1.44ｍ、検出面からの深さは27㎝である。重複遺構はなく、南東側70㎝には、ほぼ同規模・同形態の11号土坑が認められる。

底面及び壁面は、鍋底状で、両者の境ははっきりしない。堆積土は２層に分層され、どちらも自然堆積土と考えられる。ℓ１には炭化物が認められた。

遺物は、ℓ２から陶器小片が出土した（図４－１）。色調は濃い赤褐色を呈し、外面には鉄釉が観察される。年代は、中世の可能性があるものの、特定できない。

本土坑は、近接の11号土坑と類似した特徴を備えたもので、営まれたのは11号土坑との関係から近世頃と思われる。（菅　原）

11号土坑　ＳＫ11（図４、写真７）

本土坑は、南区のＧ９・10グリッドのＬⅣ上面で検出された。平面形は不整円形を呈し、規模は長径1.46ｍ、短径1.30ｍ、検出面からの深さは43㎝である。重複遺構はなく、北西側70㎝には、ほぼ同規模・同形態の10号土坑が認められる。

底面はほぼ平坦で、壁は開き気味で直線的に立ち上がる。堆積土は自然堆積土１層で、特徴は10号土坑のℓ１と共通する。このことから、本土坑は10号土坑と同時機能し、同じ状況下で埋没したものと考えられる。

遺物は、磁器碗が１点出土した（図４－２）。胎土・色調の様子から、大堀相馬焼と推定される。

本土坑は10号土坑と同時機能したと考えられ、営まれた時期は、近世頃に求められる。（菅　原）

12号土坑　ＳＫ12（図４、写真７）

本土坑は、北区のＣ４グリッドに位置し、ＬⅢ上面で検出された。平面形は隅丸長方形を呈し、

短軸方向は北壁より南壁が若干長い。規模は長軸1.23ｍ、短軸92㎝、検出面からの深さは27㎝である。重複遺構はなく、南西側2.0ｍに13号土坑が隣接している。

底面はほぼ平坦で、壁は直線的な急角度で立ち上がる。上部の崩れを勘案すると、当時は、ほぼ垂直に掘り込まれていたとみられる。堆積土は２層に分かれ、いずれも人為堆積土と考えられる。

遺物は出土していない。

本土坑は、平面・断面形状及び堆積土の特徴が、１次調査の３・６号土坑と共通する。このことから、状況証拠になるが、それらと同じ近世墓坑と推定される。（菅　原）

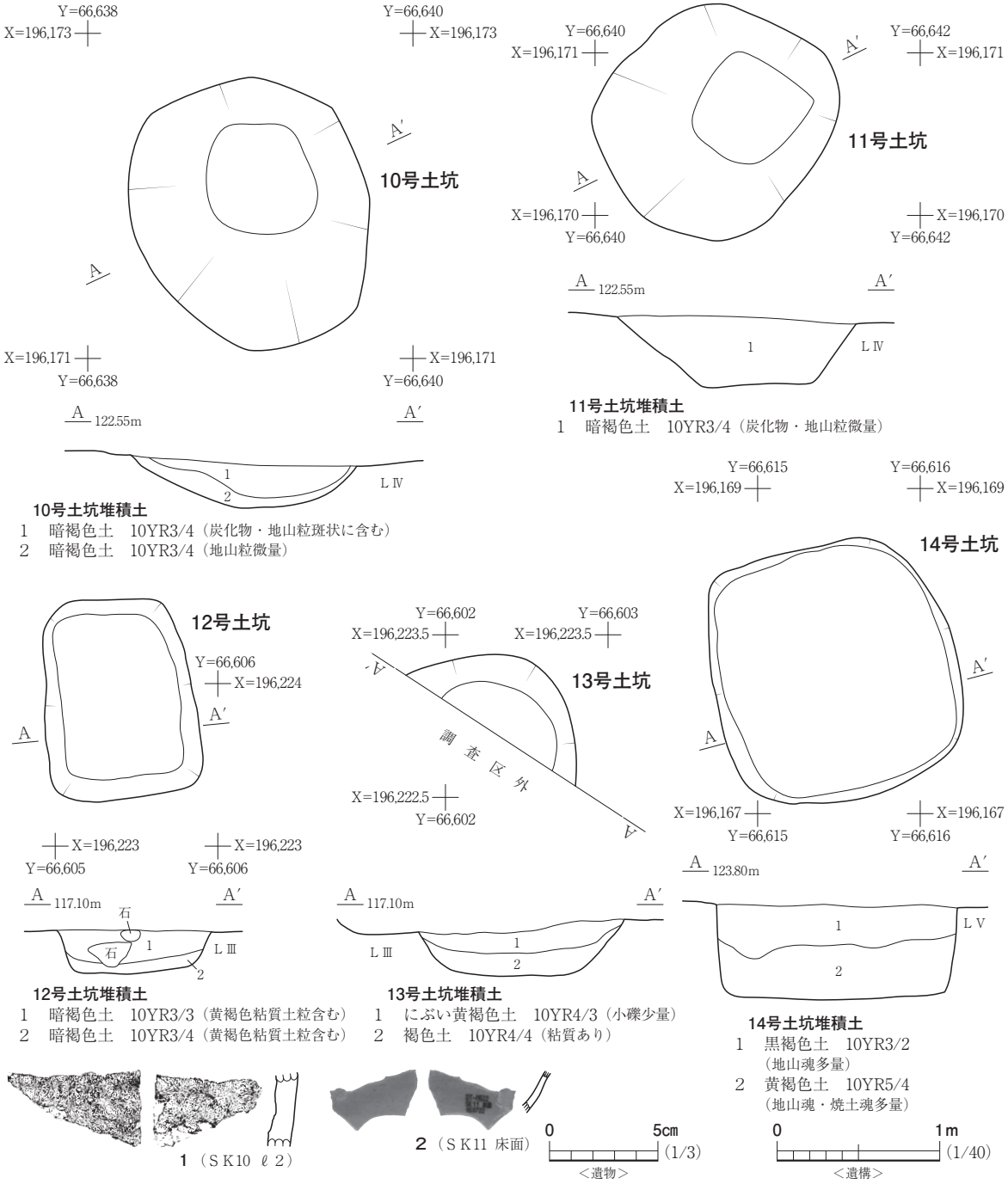


図４　10～14号土坑・出土遺物

13号土坑　ＳＫ13（図４、写真７）

本土坑は、北区のＣ４グリッドに位置し、ＬⅢ上面で検出された。平面形と規模は、南西側が未調査の市道法面下に伸びることから、不明である。検出範囲では、東西1.00ｍ以上、南北82㎝以上、検出面からの深さ32㎝の規模を確認した。重複遺構はなく、北東側2.0ｍに12号土坑が隣接している。

底面はほぼ平坦で、壁は開き気味に立ち上がる。堆積土は２層に分かれ、いずれも人為堆積土と考えられる。遺物は出土していない。

本土坑の時期と性格は不明である。（菅　原）

14号土坑　ＳＫ14（図４、写真８）

本土坑は、南区のＤ10グリッドに位置し、ＬＶ上面で検出された。平面形は隅丸正方形を呈し、規模は長径1.57ｍ、短径1.50ｍ、検出面からの深さは56㎝である。重複遺構はなく、東側7.0ｍに３号建物跡がある。

本土坑は、箱状に掘り込まれており、底面は平坦で、壁は垂直に立ち上がる。堆積土は２層に分かれ、いずれも人為堆積土と考えられる。地山塊、焼土塊を多量に含み、一度に埋められている様子が明瞭にうかがえる。遺物は出土していない。

本土坑の時期と性格は、不明である。（菅　原）

15号土坑　ＳＫ15（図５、写真８）

本土坑は、南区のＤ８・９グリッドに位置し、ＬＶ上面で検出された。平面形は不整円形を呈し、規模は長径2.32ｍ、短径2.10ｍ、検出面からの深さは16㎝である。重複遺構はなく、南西側9.0ｍに16号土坑がある。

底面はほぼ平坦で、壁は開き気味に立ち上がる。堆積土は２層に分かれ、いずれも人為堆積土と考えられる。遺物は出土していない。

本土坑の時期と性格は、不明である。（菅　原）

16号土坑　ＳＫ16（図５、写真８）

本土坑は、南区のＣ９グリッドに位置し、ＬＶ上面で検出された。平面形は不整形を呈し、規模は長径78㎝、短径60㎝、検出面からの深さは30㎝である。重複遺構はなく、北東側9.0ｍに15号土坑がある。

底面及び断面は鍋底状をなし、両者の境ははっきりしない。堆積土は１層で、人為堆積土と考えられる。遺物は出土していない。

本土坑の時期と性格は、不明である。（菅　原）

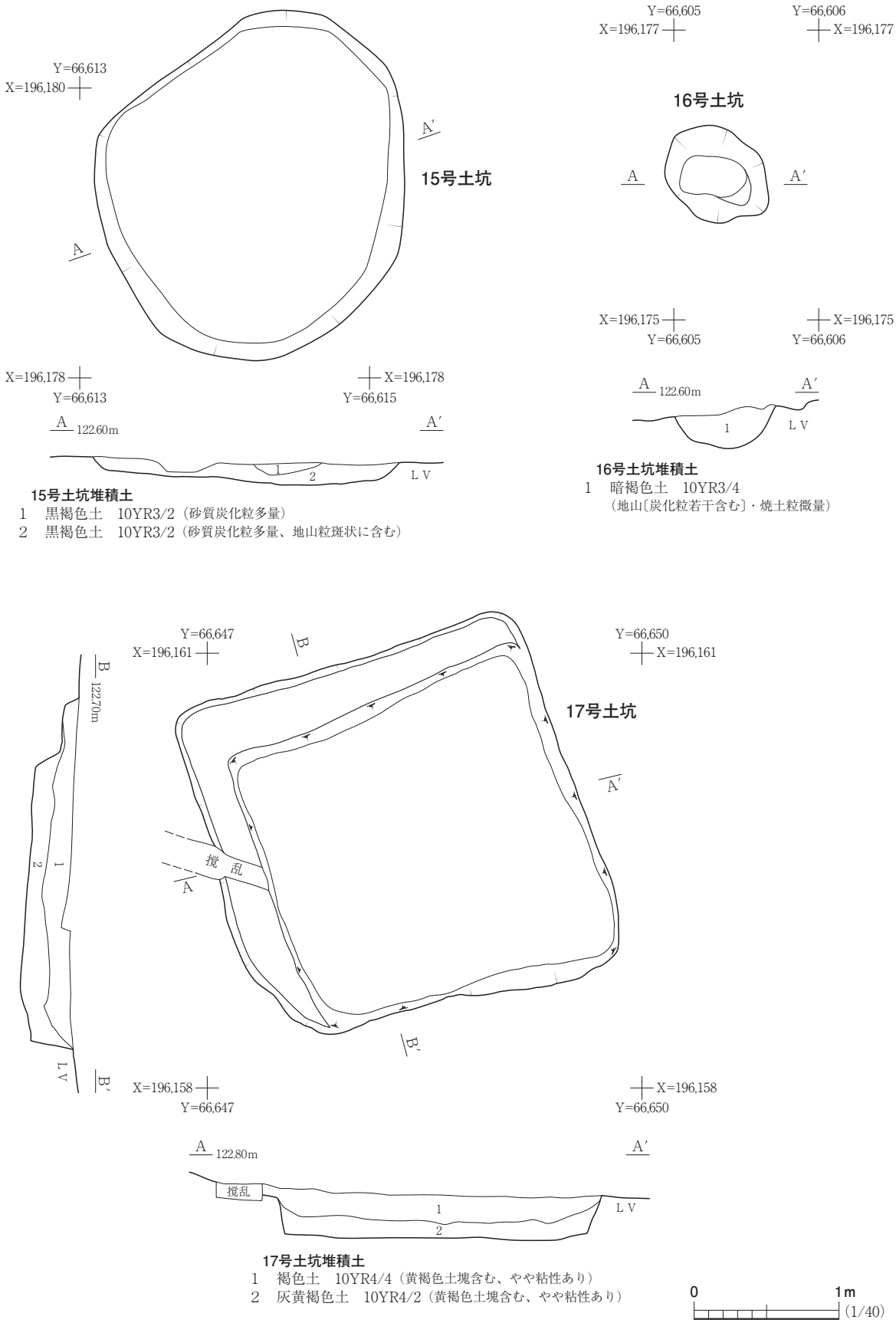

Y=66,613
X=196,180
A′
15号土坑
A
X=196,178
Y=66,613
X=196,178
Y=66,615
A
122.60m
A′
1
2
LV
15号土坑堆積土
1　黒褐色土　10YR3/2（砂質炭化粒多量）
2　黒褐色土　10YR3/2（砂質炭化粒多量、地山粒斑状に含む）
Y=66,605
X=196,177
Y=66,606
X=196,177
16号土坑
A
A′
X=196,175
Y=66,605
X=196,175
Y=66,606
A
122.60m
A′
1
LV
16号土坑堆積土
1　暗褐色土　10YR3/4
（地山〔炭化粒若干含む〕・焼土粒微量）
Y=66,647
X=196,161
B
Y=66,650
X=196,161
B
122.70m
17号土坑
A′
撹乱
A
1
2
LV
B′
B′
X=196,158
Y=66,647
X=196,158
Y=66,650
A
122.80m
A′
撹乱
1
2
LV
17号土坑堆積土
1　褐色土　10YR4/4（黄褐色土塊含む、やや粘性あり）
2　灰黄褐色土　10YR4/2（黄褐色土塊含む、やや粘性あり）
0
1m
(1/40)

図５　15～17号土坑

17号土坑　ＳＫ17（図５、写真８～11）

本土坑は、南区のＧ10・11グリッドに位置し、ＬＶ上面で検出された。平面形は正方形を呈し、北辺と西辺では、壁から約40㎝内側の位置に段差がみられる。規模は長軸2.50ｍ、短軸2.43ｍ、検出面からの深さは50㎝である。重複遺構はなく、西側5.0ｍには、１号溝跡がある。

本土坑は箱状に掘り込まれ、底面は平坦で、壁は垂直に立ち上がる。堆積土は２層に分層され、どちらも人為堆積土と考えられる。遺物は出土していない。

本土坑の平面・断面形及び堆積土の特徴は、１次調査の１号土坑と共通する。このことから、中世の方形竪穴状遺構と考えられる。ただし、１号土坑にみられた廃絶後の窪みに焼石を投棄した痕跡は確認されなかった。（菅　原）

第４節　溝　跡

溝跡は１条のみ確認された。中世屋敷跡を構成した施設で、１号建物跡と密接に関連するものと考えられる。

１号溝跡　ＳＤ01（図６、写真12・13）

本溝跡は、南区のＥ８・９、Ｆ９～11、Ｇ10・11グリッドのＬⅣ上面で検出された。重複遺構はなく、西側6.5ｍに３号建物跡、東側3.5ｍに10号土坑、東側4.5ｍに11号土坑がある。溝跡は南東から北西方向に伸び、南東端は長方形の土坑状をなす。また、底面はその南東端から北西端へ傾斜している。このことから、いったん土坑状の掘り込みに溜めた水を、反対側へ排水する機能が想定できる。

全長は24.80ｍで、各部の計測値は、南東端の土坑状掘り込みが、長軸2.70ｍ、短軸1.50ｍ、検出面からの深さ20㎝、その他が長さ22.10ｍ、幅72～100㎝、検出面からの深さ21～30㎝、底面の比高差85㎝である。堆積土は３層に分かれ、いずれも自然堆積土と考えられる。ただし、ℓ３は局所的な分布に限られる。遺物は、ロクロかわらけの底部片１点（図６－１）が出土した。平成27年度調査した福田遺跡２号溝跡出土のものと胎土・色調が類似している。

本溝跡は、出土遺物及び周辺遺構との関係から、３号建物跡に関連した区画溝兼排水溝と考えられる。（菅　原）

第５節　小　穴

小穴を19基確認した（図７）。南区のＥ９・10、Ｆ10グリッドのＬⅣ上面で検出され、それらの平面分布はまとまりがみられ、３号建物跡と一部重複するものがある。このことから、同建物跡に

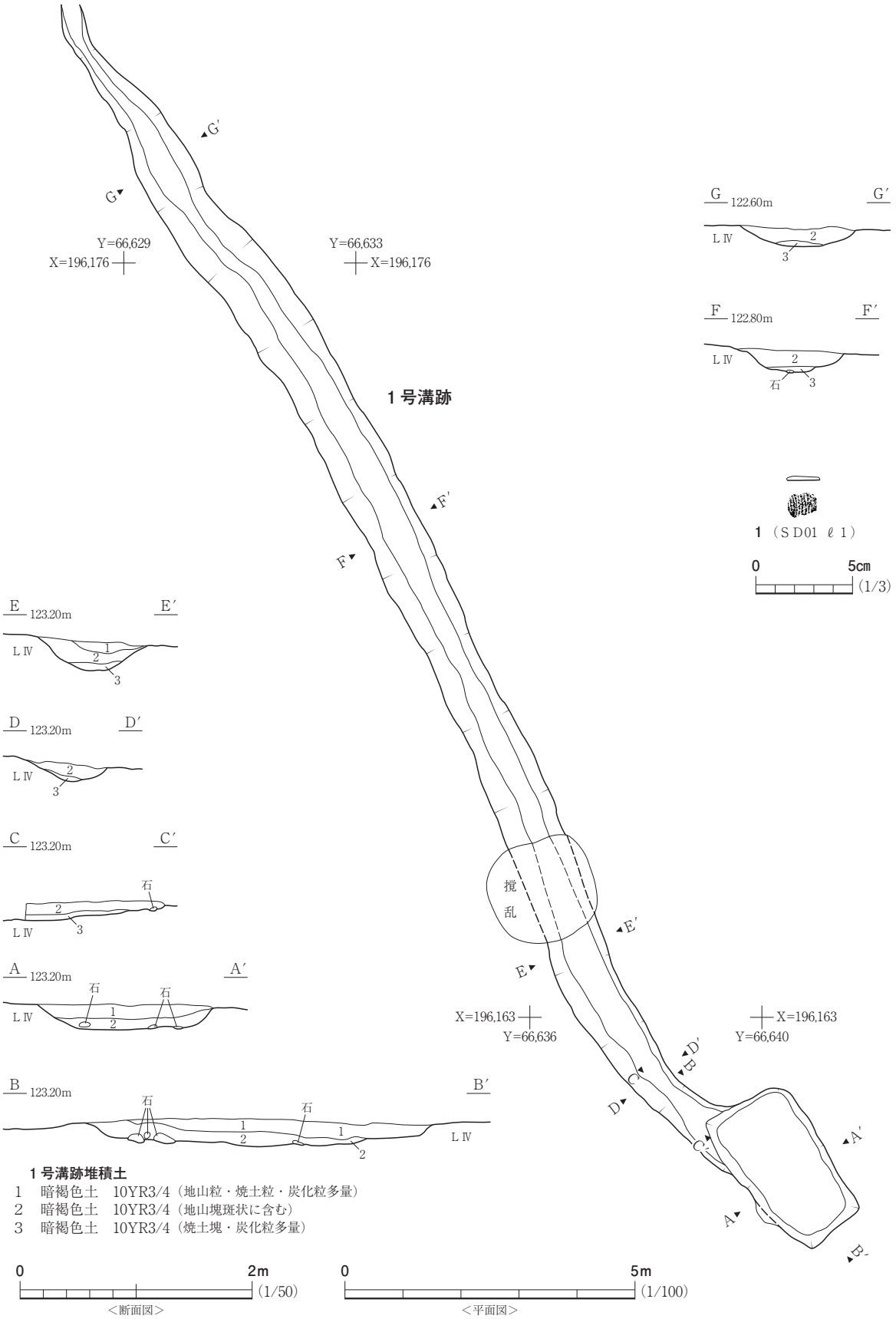

1号溝跡
Y=66,629
X=196,176
Y=66,633
X=196,176
G 122.60m G′
L Ⅳ
F 122.80m F′
石
1（SD01 ℓ1）
0 5cm (1/3)
E 123.20m E′
D 123.20m D′
C 123.20m C′
A 123.20m A′
B 123.20m B′
撹乱
X=196,163
Y=66,636
X=196,163
Y=66,640
1号溝跡堆積土
1 暗褐色土 10YR3/4（地山粒・焼土粒・炭化粒多量）
2 暗褐色土 10YR3/4（地山塊斑状に含む）
3 暗褐色土 10YR3/4（焼土塊・炭化粒多量）
0 2m (1/50)
＜断面図＞
0 5m (1/100)
＜平面図＞

図６　１号溝跡・出土遺物

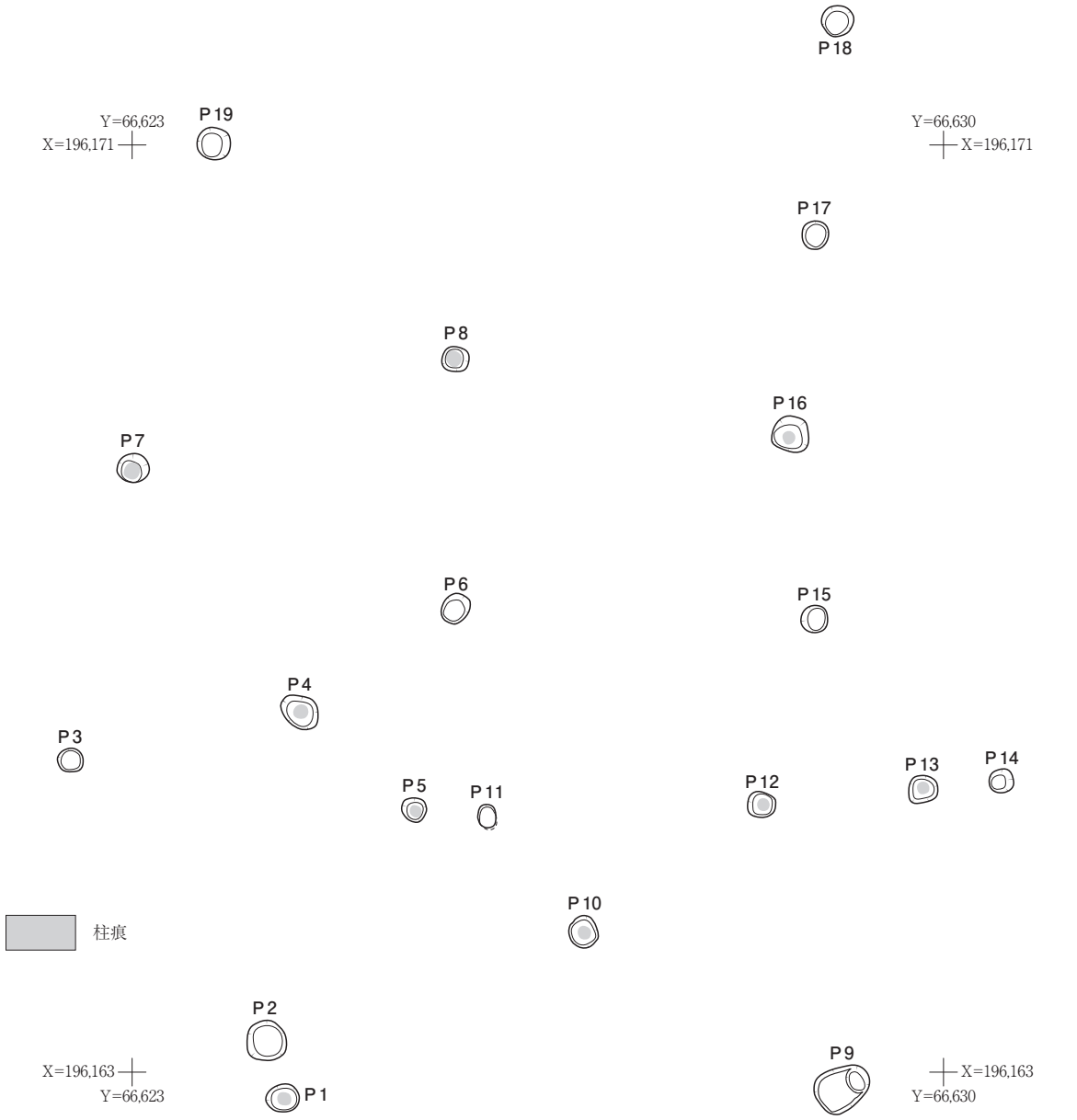
伴う柱穴、あるいは建て替えをした別な建物跡に伴う柱穴の可能性も推測したが、周囲を繰り返し遺構検出しても、他に組み合うものは発見されなかった。

各小穴の特徴をまとめると以下のようになる。

平 面 形：円形基調　　深　　さ：検出面から平均23cm

断 面 形：円筒状　　堆 積 土：にぶい黄褐色土　10YR5/3

大 き さ：平均25cm　　出土遺物：なし　　（植　松）



	P１	P２	P３	P４	P５	P６	P７	P８	P９	P10	P11	P12	P13	P14	P15	P16	P17	P18	P19
径　(cm)	25×22	36×34	22×22	35×28	22×22	26×23	28×26	23×21	50×34	15×14	20×16	25×21	25×24	20×20	24×23	32×29	24×23	29×28	29×29
深さ(cm)	26	18	13	25	28	28	28	23	25	27	34	14	10	29	30	38	11	14	16
柱　痕	○			○	○		○	○		○		○	○			○			

図７　小穴　　0　2m　(1/60)

第３章　　総　　括

今回の２次調査によって、１次調査で発見された中世室町期の屋敷跡の全体像がほぼ判明した。そこで、以下ではこの点に焦点を絞って、調査成果の総括を行う。

第１節　屋敷跡について

【立　地】小国川により形成された谷底平野に向かって、北側へ伸びる舌状丘陵の先端付近に立地する。微視的には東向きの緩斜面上であり、一部の斜面上位を掘削して、東西約60ｍ×南北28ｍの敷地範囲を確保している（図８）。

【正面観と進入路】立地する地形から、正面観は東側に求められ、西側を見上げる景観となる。また、東西方向のほぼ中軸線上に浅い埋没谷があり、屋敷跡外からの進入路はこの自然地形を利用したと推定される。

【施設配置】屋敷跡には、正面観と進入路の基準に基づく計画的な施設配置が読み取れる。

Ａ：正面観の基準（※ここでは東側を手前側と呼称する）

◎奥側……１～３号建物跡（すべての建物）

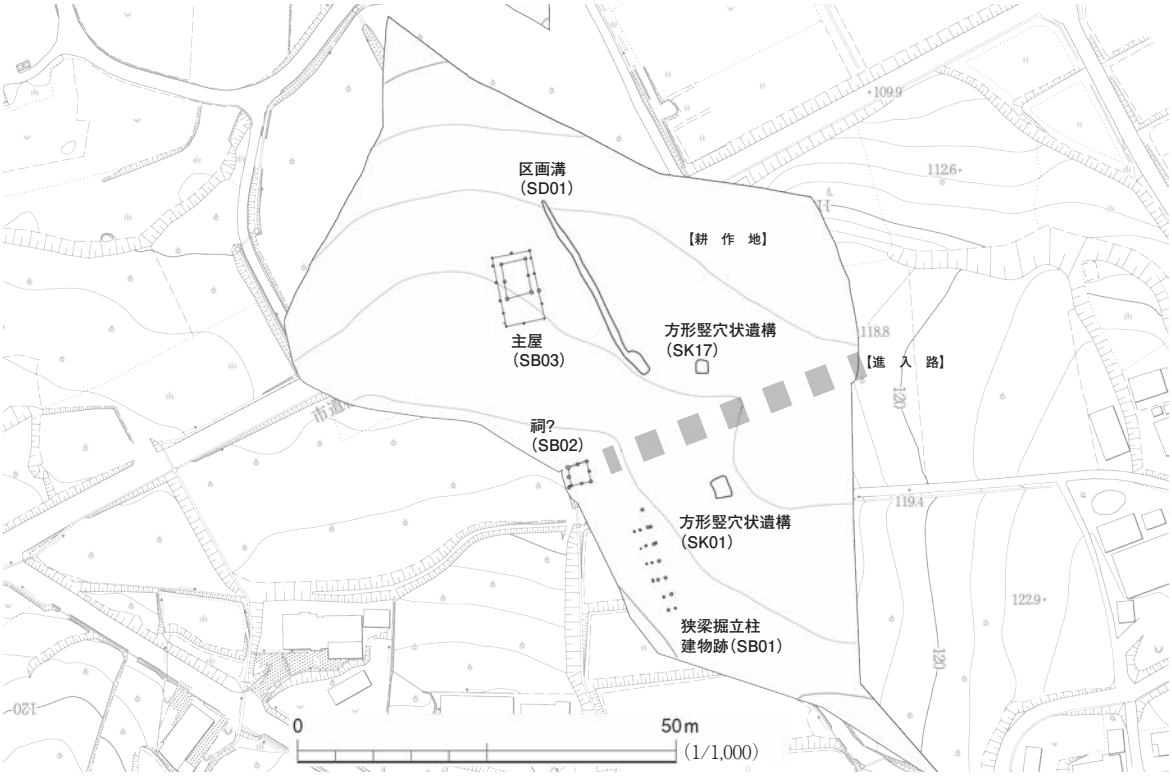


図８　屋敷跡模式図

◎手前側…１・17号土坑、１号溝跡（その他の施設）

Ｂ：進入路の基準

◎突き当り…２号建物跡（小型建物）

◎対称位置①…１・３号建物跡（大型建物）

◎対称位置②…１・17号土坑（方形竪穴状遺構）

【各施設の性格】

以上と構造の特徴をもとに、各施設の性格を推定してみる。

ａ：３号建物跡

大規模で、四面廂付の構造であることから、主屋に比定される。進入路の北側に配置した理由は、中村街道を意識したためであろうか。なお、本建物跡の斜面下位に掘削された１号溝跡は、主屋空間と屋敷地外（耕作地？）を区画するための施設（兼排水路）と考えられる。

ｂ：２号建物跡

小規模で、正方形を呈することから、祠の可能性がある。

ｃ：１号建物跡

長大な規模で、１ｍ前後のきわめて狭い梁行寸法から、いわゆる「狭梁掘立柱建物跡」に該当する（川俣町教育委員会　1996）。具体的性格は不明であるが、進入路を挟んで主屋と対称位置にあり、類例が中世城館やその関連遺跡に限定されるため、上層クラスの屋敷地固有の重要施設とみられる。

ｄ：１・17号土坑

中世の物流拠点にみられる「方形竪穴状遺構」に該当し（鈴木　2006）、土倉の性格が考えられる。進入路を挟んで正面手前側の対称位置にあり、２棟1組の関係が指摘できる。

【地　鎮】

１号建物跡の北東位置の控柱跡から、貿易陶磁（龍泉窯青磁碗）、中国渡来銭（「至大通寶」・「永楽通寶」）を埋納した建物造営に伴う地鎮跡が確認された。北東の方角は、陰陽道の鬼門にあたり、貴重な事例と評価される。

【年　代】

各遺構に重複がなく、分布が希薄なこと、出土遺物の年代観などから、屋敷跡の存続期間は15世紀のごく短期間に求められる。

第２節　周辺遺跡との関係

沼ヶ入遺跡と隣接する福田遺跡（図９）でも、方形竪穴状遺構が検出され、15世紀のロクロかわらけが出土している（福島県教育委員会　2016）。このことから、これらは同時存在だったと推測でき、小国川南岸の舌状丘陵先端にはさらに横並びで類似遺跡の分布が想定される。また、この沼ヶ入・福田遺跡を小国川対岸から見下ろす位置には上ノ台館跡（本書第２編）があるため、周辺地域の

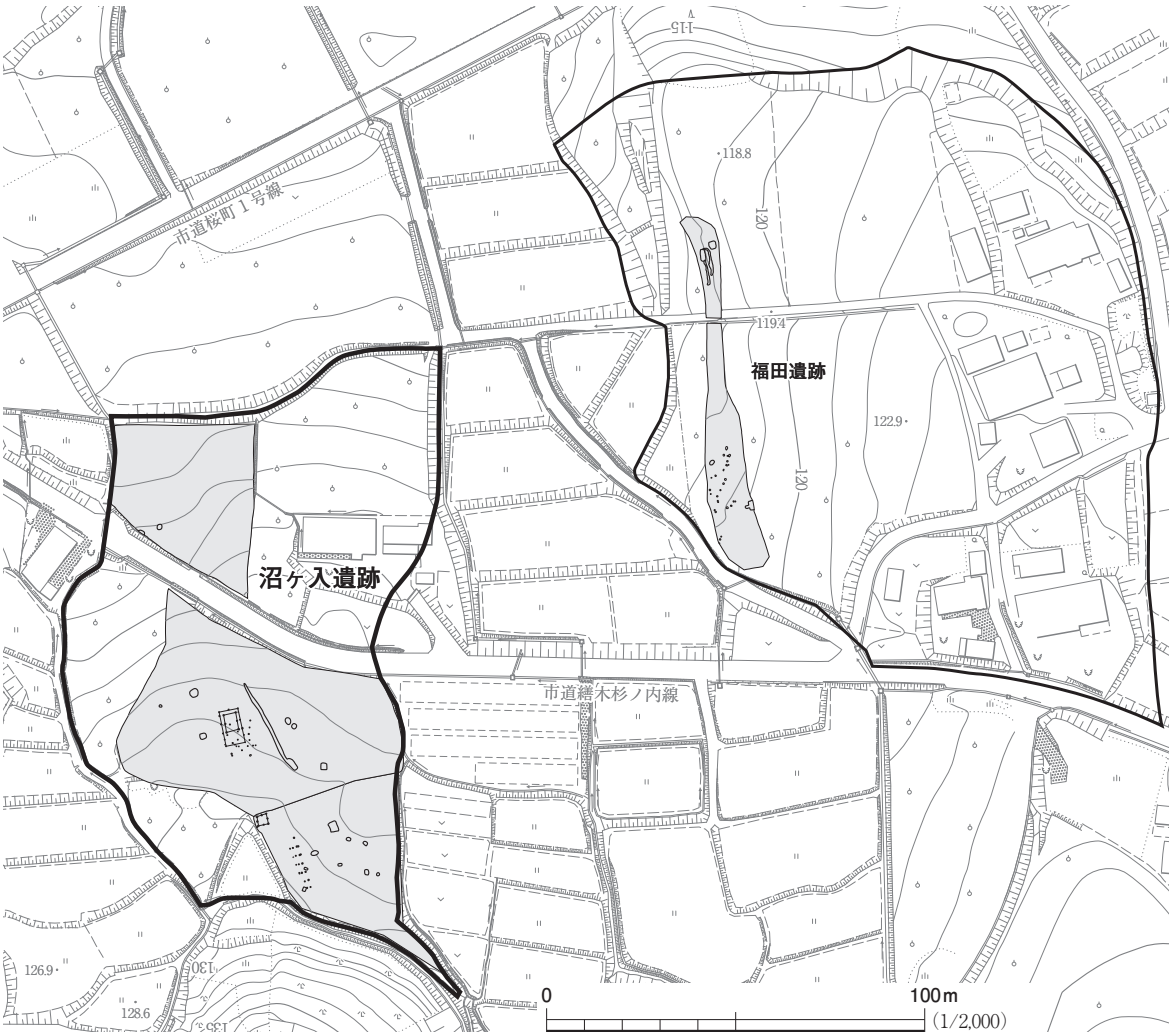


図９　沼ヶ入遺跡と福田遺跡

歴史的景観は、これらの調査成果を加味して行いたい。　（菅　原）

引用・参考文献

川俣町教育委員会　1996 『梅窪遺跡発掘調査報告書Ⅰ』
嶋谷和彦　1997 「中世の地鎮と銭貨」『出土銭貨』７　出土銭貨研究会
鈴木弘太　2006 「中世「竪穴建物」の検討－都市鎌倉を中心として－」『日本考古学』第 21 号　日本考古学協会
福島県考古学会中近世部会　1997 「かわらけ編年の再検討－ 11 世紀～ 19 世紀（その２）」『福島考古』38 号
福島県教育委員会　2015 『福島県内遺跡分布調査報告 22』
福島県教育委員会　2016 『一般国道 115 号相馬福島道路遺跡発掘調査報告５』
霊山町　1992 『霊山町史　第１巻通史』

第２編　上ノ台館跡（１次調査）

かみ　の　だいたてあと

遺跡記号	ＤＴ－ＫＮＴ
所在地	伊達市霊山町下小国字上ノ台
時代・種類	中世の城館跡ほか
調査期間	平成28年８月１日～12月９日
調査員	菅原祥夫・渡邉春喜・植松暁彦 枝松雄一郎

第１章　遺跡の位置と調査経過

第１節　遺跡の位置と現況

上ノ台館跡は、福島県伊達市霊山町下小国字上ノ台に所在する。地形的には、阿武隈高地山間部の小国川北岸にあたり、伊達市中心部からは南東に約５㎞離れ、浜通り地方の相馬市から中通り地方の福島市へ抜ける国道115号線（中村街道）のルート沿いである。

周囲には、中世城館跡やその関連遺跡が分布しており、北側に一部範囲が重複する上ノ台遺跡、南側の小国川対岸に沼ヶ入遺跡（本書第１編）が位置している。

調査開始前の現況は、起伏の激しい山林であり、遺構検出面の比高差は最大22ｍに及ぶ。今回の調査対象は、遺跡範囲の北半部である。（菅　原）

第２節　調 査 経 過

調査に係った作業日数は、延べ72日間である。以下に、調査の経過について記す。

８月第１週　：沼ヶ入遺跡の調査と並行し、１日（月）から重機による表土除去を開始する。

８月第２週～９月第２週　：８月11日（木）から17日（水）までお盆休み。あいつぐ台風接近に伴い、作業は思うように進まず、土砂流失対策等に追われるが表土除去を継続する。

９月第３週　：14日（水）に器材を搬入。15日（木）に作業員による本格的作業に着手。優先する東斜面300㎡の遺物包含層の精査を開始。

９月第４・５週：表土剥ぎ、遺構検出、遺物包含層の掘り下げを継続する。

10月第１週　：３日（月）に遺物包含層の精査を終了。近隣住民向けの成果報告会を実施する。４日（火）に県文化財課及び工事側の立ち会いの下、東斜面300㎡の現地引き渡しを行う。７日（金）に表土除去は終了。遺構検出、遺構精査を継続する。

10月第２週　：斜面部での安全に気を配りながら遺構検出、遺構精査を継続する。

10月第３週　：溝跡、平場の一部、土坑等の遺構の分布状況が見え始める。

10月第４週　：遺構検出を継続する。１・２号土坑の精査を完了。１号溝跡の調査を開始する。

11月第１～３週：遺構検出、遺構精査を継続する。第３週には、１号木炭窯跡、１号溝跡、３号土坑の精査を完了する。２号溝跡の調査を開始する。

11月第４週　：２号溝跡、１号平場の精査を完了する。溝跡の規模と構造が判明した。

11月第５週～12月第２週　：11月29日（火）に空中写真測量を行った。その後、器材の洗浄・整理・撤収作業、調査連絡所の清掃を行う。

12月第３週　：13日（火）に県文化財課及び工事側の立ち合いの下、現地引き渡しを行った。（菅　原）

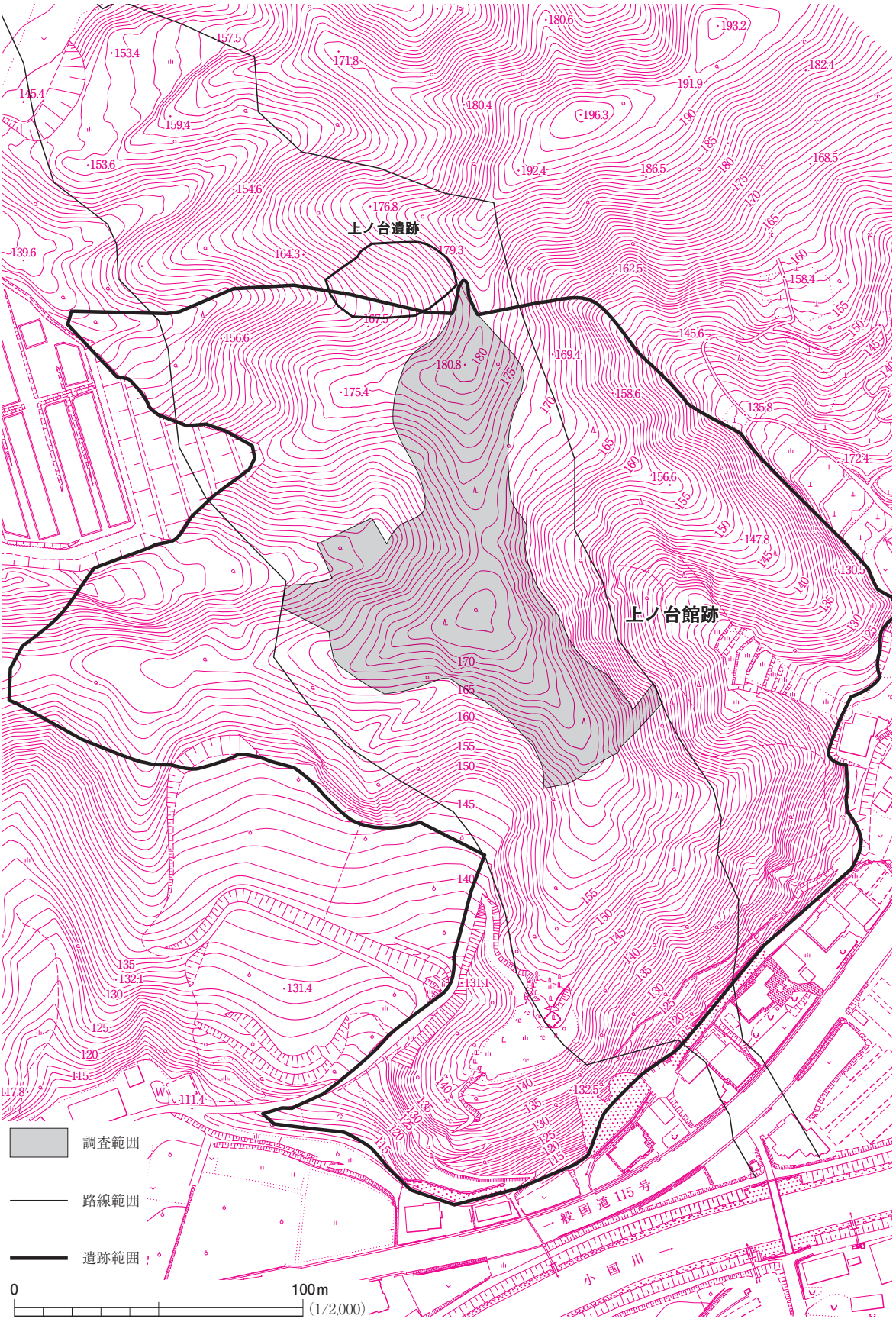


図１　調査区位置図

第２章　発見された遺構と遺物

第１節　調査成果の概要と基本土層

調査成果の概要

今回の調査区は、館跡全体のほぼ北半にあたり、起伏の激しい地形である。調査開始前の地表面では、尾根を分断する埋没しきらない２条の溝跡(堀切)が観察され、確認調査によって東斜面の傾斜変換点に、縄文時代の遺物包含層が確認されていた。そこで、この所見を念頭に調査を進めた結果、平安時代を含む以下の遺構が発見された。

縄文時代…３号土坑、１号遺物包含層
平安時代…１号木炭窯跡、１・２号土坑
中　　世…１・２号溝跡、１号平場

基本土層（図２）

基本土層は、色調・土質の諸特徴からＬⅠ～Ⅴに分層している。以下、各層について説明する。

ＬⅠ　表土及びその下の腐食土層である。調査区全体に分布する。

ＬⅡ　黒褐色土(10YR3/2)である。遺物包含層に相当し、調査区中央東斜面の傾斜変換点に分布する。層厚は15～20cmを測り、遺物を包含する密度は、東に行くに従って濃くなっている。

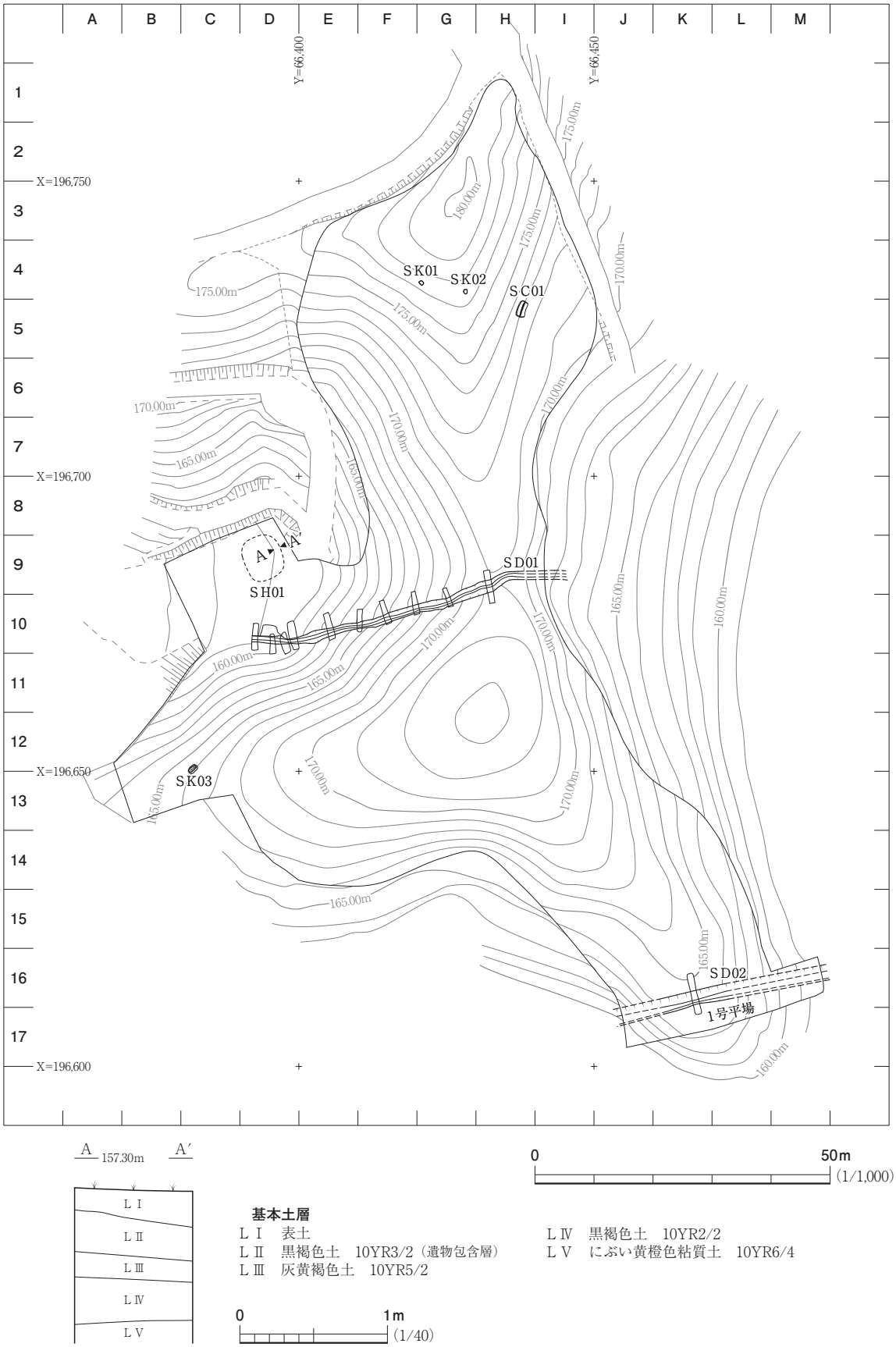
ＬⅢ　灰黄褐色土(10YR5/2)である。ＬⅣの漸移層に相当し、各斜面の下位に分布する。層厚は16～24cmを測る。

ＬⅣ　黒褐色土(10YR2/2)である。本層上面が斜面下位に営まれた遺構の検出面となっている。層厚は８～35cmを測る。

ＬⅤ　にぶい黄橙色粘質土(10YR6/4)である。基盤層に相当し、尾根頂部に営まれた遺構の検出面となっている。調査区全体に分布しており、層厚50cm以上を測る。　（菅　原）

第２節　木 炭 窯 跡

木炭窯跡は、平安時代に営まれた１基がある。底面中軸上に１条の溝を有する大型土坑タイプであり、平成27年度調査した上ノ台遺跡１号木炭窯跡と類似する。



基本土層

ＬⅠ　表土
ＬⅡ　黒褐色土　10YR3/2（遺物包含層）
ＬⅢ　灰黄褐色土　10YR5/2
ＬⅣ　黒褐色土　10YR2/2
ＬⅤ　にぶい黄橙色粘質土　10YR6/4

図２　遺構配置図・基本土層

１号木炭窯跡　ＳＣ01

遺構・遺物（図３、写真６～９）

本木炭窯跡は、Ｈ５グリッドのＬＶ上面から検出された。調査区北部の東斜面上に営まれ、長軸方向は等高線に沿う。周囲には、西側9.0ｍに２号土坑、西側16.5ｍに１号土坑があり、それら尾根頂部の木炭焼成土坑と密接な関係が想定される。

平面形は隅丸長方形を呈し、規模は長軸2.80ｍ、短軸1.40ｍを測る。検出面からの深さは、斜面上位の西壁側で60㎝である。一方、反対側の東壁は検出されず、東側の斜面下には炭化物の分布が広がるのみであった。底面は若干凹凸があり、斜面下位の東側へわずかに傾斜している。また底面中軸上の溝は、周壁直下から10㎝離れた位置で掘り込まれており、幅20～22㎝、底面からの深さ８～15㎝を測る。

堆積土は３層に分かれ、このうち溝内に堆積したℓ３は、底面を覆うℓ１・２と明確に区別される。このことから、溝は少なくとも遺構廃絶時には埋まっていたと考えられる。

遺物は、底面に密着した状態でロクロ土師器杯が出土した（図３－１）。これは、出土遺物に恵まれることが稀な生産遺構の中で、貴重な年代決定資料になると思われる。底部外面に回転糸切り痕が観察され、体部下端は手持ちヘラケズリが施されている。また、底面上の所々に製品残滓の木炭片が認められた。出土炭化材の樹種同定の結果は、クヌギ節、コナラ節、クリであった。

本木炭窯跡は、底面中軸上に１条の溝を有する大型土坑タイプの窯である。出土炭化材の放射性炭素年代測定の結果、13世紀前半の年代が示されたが、遺物の出土状況及びその遺物の特徴から平安時代と考えている。具体的な時期は、９世紀後半～10世紀前半に位置づけられる。　（菅　原）

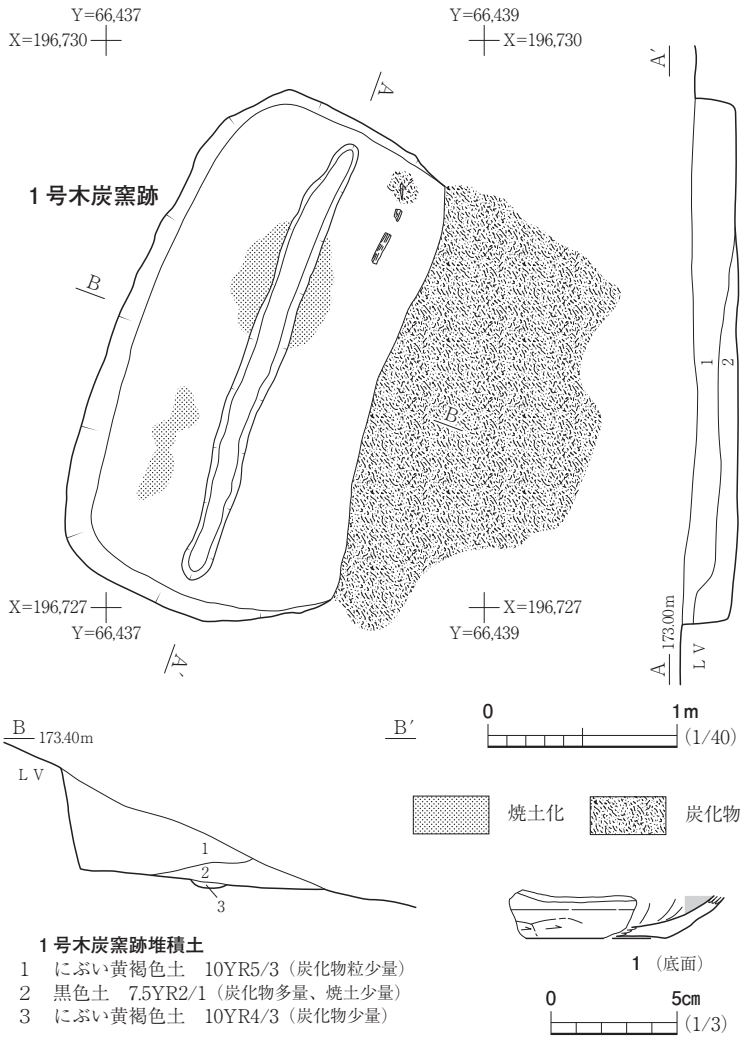


図３　１号木炭窯跡・出土遺物

第３節　　土　　坑

土坑は３基確認したが、縄文時代と平安時代の可能性があるものに区分される。

１号土坑　ＳＫ01（図４、写真10）

本土坑は、Ｇ４グリッドのＬⅣ上面で検出された。調査区北部の尾根頂部に営まれ、東側6.5ｍには２号土坑、西側9.0ｍには１号木炭窯跡がある。平面形は隅丸長方形を呈し、規模は長軸84㎝、短軸62㎝、検出面からの深さは18㎝である。

底面は平坦で、壁は直立気味に立ち上がる。堆積土は２層に分層され、ℓ２は炭化物を多量に含んでいた。これは、壁面の酸化状態と対応し、本土坑が木炭焼成土坑であることを示している。出土炭化材の樹種同定の結果は、マツ属複維管束亜属であった。遺物は出土していない。

本土坑は木炭焼成土坑と考えられる。出土炭化材の放射性炭素年代測定の結果、Modernとの年代が示されたが、堆積土の状況を踏まえた調査時の所見や周辺の１号木炭窯跡や２号土坑との関係から、平安時代など古い時期の可能性もある。　（菅　原）

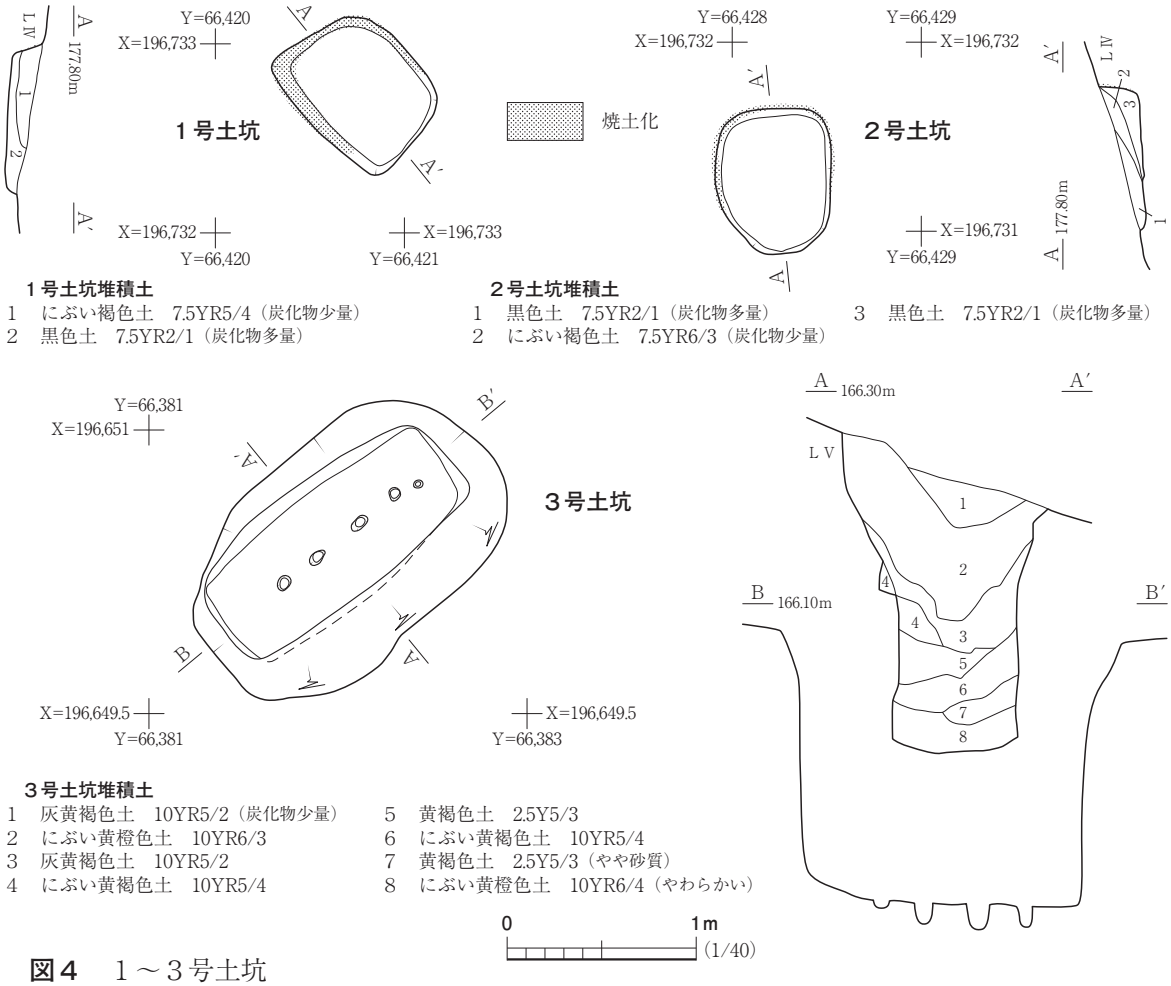


図４　１～３号土坑

２号土坑　ＳＫ02（図４、写真10）

本土坑は、Ｇ４グリッドのＬⅣ上面で検出された。調査区北部の尾根頂部に営まれ、西側6.5ｍには１号土坑、東側9.0ｍには１号木炭窯跡がある。平面形は隅丸長方形を呈するが、南壁は丸みがある。規模は長軸80㎝、短軸61㎝、検出面からの深さは20㎝である。

底面は平坦で、壁は直立気味に立ち上がる。堆積土は３層に分層され、ℓ３は炭化物を多量に含んでいた。これは、壁面の酸化状態と対応し、本土坑が木炭焼成土坑であることを示している。出土炭化材の樹種同定の結果は、クリであった。遺物は出土していない。

本土坑は木炭焼成土坑と考えられる。出土炭化材の放射性炭素年代測定の結果、７～８世紀頃の年代が示されたが、周辺の１号木炭窯跡との関係から、平安時代の可能性も考えられる。（菅　原）

３号土坑　ＳＫ03（図４、写真10）

本土坑は、Ｃ12・13グリッドのＬＶ上面で検出された。調査区西部の南東斜面落ち際に営まれ、北東側30ｍの傾斜変換点には１号遺物包含層がある。平面形は外側が楕円形、その内部に隅丸長方形が重なる状況を呈し、規模は外側が長軸1.8ｍ、短軸1.10ｍ、内部が長軸1.50ｍ、短軸70㎝、検出面からの深さは1.3～1.6ｍである。

底面は平坦で、壁は直立して立ち上がり、底面から90㎝の位置で外側に広がる。また、底面では長軸方向に並ぶ５基の小穴を確認した。小穴の平面の規模は６～10㎝、深さは５～12㎝である。

堆積土は８層に分層され、いずれも自然堆積土と考えられる。このうちℓ１は、基本土層ＬⅡの再堆積層と判断され、縄文土器の砕片を含んでいた。

本土坑は縄文時代の落し穴である。（菅　原）

第４節　溝 跡 ・ 平 場

溝跡は、中世城館跡に伴う２条を確認した。どちらも調査開始前の地表面では、埋没しきらない窪みとして観察されていた。このうち２号溝跡は、地形的に連続する１号平場と一括で説明を加える。

１号溝跡　ＳＤ01（図５、写真11～18）

本溝跡は、Ｄ～Ｇ10、Ｇ～Ｉ９グリッドのＬⅢ～ＬＶ上面で検出された。調査区中央の尾根が括れた箇所を分断するかたちで、東西方向に伸び、西端は傾斜の緩い谷底で消失している。東端は調査区外に伸びるため不明であるが、急斜面の中で消失していると推定される。規模は、東西60ｍ以上、幅0.65～2.56ｍ、検出面からの深さ0.2～1.15ｍを測る。底面の最大比高は11.5ｍである。断面の基本形はＵ字形を呈し、西端付近では逆台形を呈していた。遺構空白地を挟んで南西側80ｍには、２号溝跡がある。

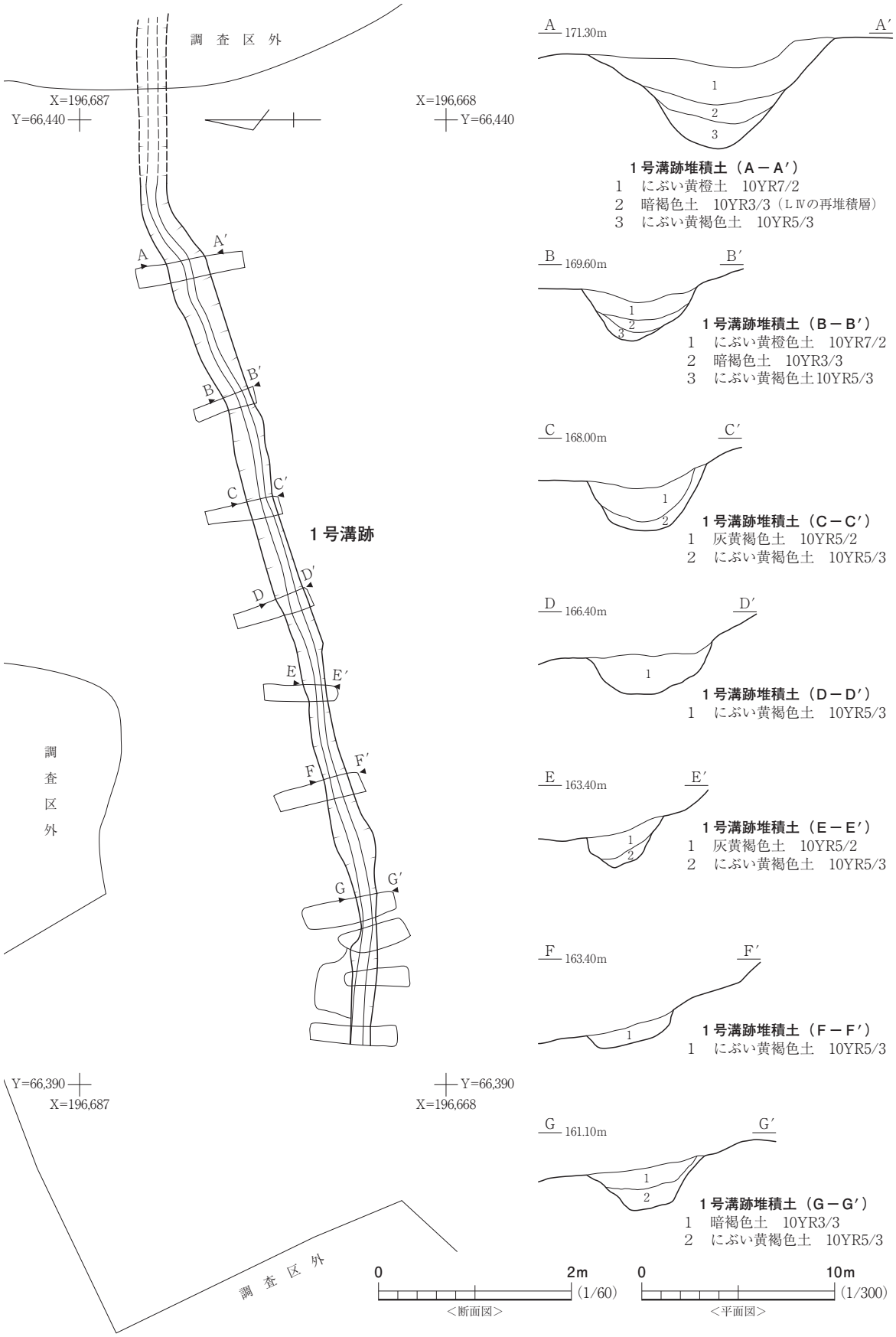

調　査　区　外
X=196,687
Y=66,440
X=196,668
Y=66,440
A
A′
B
B′
C
C′
D
D′
E
E′
F
F′
G
G′
１号溝跡
調
査
区
外
Y=66,390
X=196,687
Y=66,390
X=196,668
調　査　区　外
A 171.30m
A′
1
2
3
１号溝跡堆積土（Ａ－Ａ′）
1　にぶい黄橙土　10YR7/2
2　暗褐色土　10YR3/3（ⅣLの再堆積層）
3　にぶい黄褐色土　10YR5/3
B 169.60m
B′
１号溝跡堆積土（Ｂ－Ｂ′）
1　にぶい黄橙色土　10YR7/2
2　暗褐色土　10YR3/3
3　にぶい黄褐色土10YR5/3
C 168.00m
C′
１号溝跡堆積土（Ｃ－Ｃ′）
1　灰黄褐色土　10YR5/2
2　にぶい黄褐色土　10YR5/3
D 166.40m
D′
１号溝跡堆積土（Ｄ－Ｄ′）
1　にぶい黄褐色土　10YR5/3
E 163.40m
E′
１号溝跡堆積土（Ｅ－Ｅ′）
1　灰黄褐色土　10YR5/2
2　にぶい黄褐色土　10YR5/3
F 163.40m
F′
１号溝跡堆積土（Ｆ－Ｆ′）
1　にぶい黄褐色土　10YR5/3
G 161.10m
G′
１号溝跡堆積土（Ｇ－Ｇ′）
1　暗褐色土　10YR3/3
2　にぶい黄褐色土　10YR5/3
0
2m
(1/60)
＜断面図＞
0
10m
(1/300)
＜平面図＞

図５　１号溝跡

堆積土は最大３層に分かれ、いずれも自然堆積土と考えられる。尾根頂部ではＬⅣの再堆積層が認められ、掘削当時は周囲にＬⅣが分布していたことが分かる。遺物は出土していない。

本溝跡は、中世城館跡に伴う堀切である。尾根の括れた箇所を分断し、２号溝跡と一体で機能したと考えられる。（菅　原）

２号溝跡　ＳＤ02・１号平場（図６、写真19～21）

本溝跡・平場は、調査区南端のＪ～Ｌ16・17、Ｍ16グリッドでＬⅢ・Ｖ上面から検出された。２号溝跡は、尾根が括れた箇所を分断するかたちで東西方向に伸び、１号平場は、これを境に６段ほど造成された平場の最上段に当たる。しかし、１号平場については今回南側の一部を検出したにすぎず、詳細は不明である。

２号溝跡は、東西40ｍ以上、幅2.30～2.55ｍ、検出面からの深さ35㎝～42㎝を測る。検出範囲における底面の最大比高は0.6ｍである。両端は、調査区外に伸びるため不明であるが、急斜面の中で消失していると推定される。断面は逆台形を呈し、１号溝跡に比べ掘り込みは浅いが、整っている。遺構空白地を挟んで北西側80ｍには、１号溝跡がある。

堆積土は２層に分かれ、いずれも自然堆積土と考えられる。尾根頂部ではＬⅣの再堆積層が認められ、掘削当時は周囲にＬⅣが堆積していたことが分かる。遺物は出土していない。

本溝跡・平場は、中世城館跡に伴う施設である。このうち２号溝跡は、尾根の括れた箇所を分断しており、南側に６段ほど造成された平場の北辺境界をなす。また、２号溝跡と一体で機能したと考えられる。（菅　原）

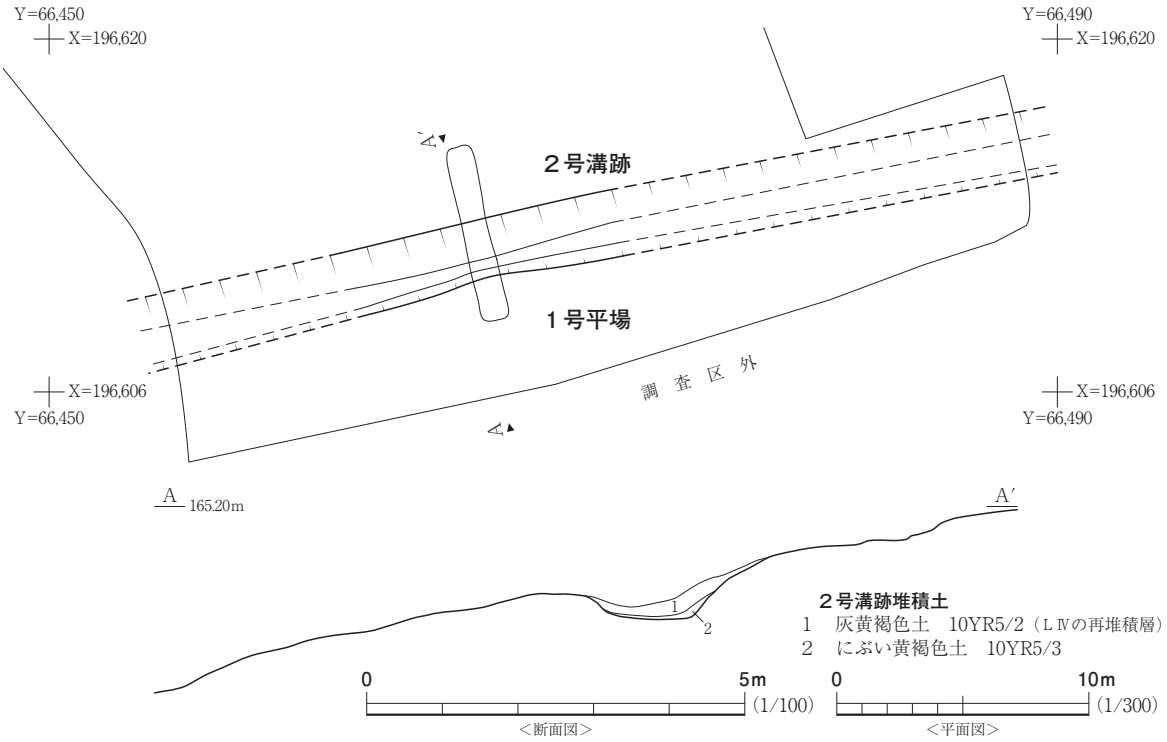


図６　２号溝跡・１号平場

第５節　１号遺物包含層

概　　要

東斜面の傾斜変換点に形成されたＬⅡを、遺物包含層と認識した(図２)。遺物の平面分布はＤ９グリッド内におさまり、出土地点はＤ９グリッドでは東側に偏っている。南西30ｍには、縄文時代の落し穴に比定される３号土坑がある。

調査は、表土・腐食土を重機で取り除いた後、谷底中軸線に設定されていた試掘トレンチの土層断面を活用して、人力で掘り進めていった。出土したのは、縄文土器片212点、石器２点である。

縄文土器は、中期～晩期の資料で、石器は２点とも打製石斧である。出土量は少なく、周囲の状況をみても、縄文時代に該当する遺構は落し穴１基しか認められない。したがって、一定人数の定住生活に伴うものではないと考えられる。

また一方で、打製石斧が出土しており、剥片類がまったく出土しないという特徴は、昨年度調査した隣接する上ノ台遺跡のほぼ同時期の遺物包含層と共通している。両者はやせ尾根を挟んで一体的に形成された可能性が高いと思われる。

遺　　物（図７・８、写真23）

縄文土器片25点、石器２点を図示した。縄文土器は、全体の器形がわかる資料はないが、いずれも深鉢形土器の破片とみられる。

縄文土器

図７－１～３は、中期後葉に比定される。１・２は口縁部片、３は胴部片である。いずれも沈線による区画内に縄文が認められる。地文の縄文は、３が単節縄文ＲＬで、１・２は磨滅のため詳細は不明である。

図７－４～18は、後期に比定される胴部片である。４～16は、細い沈線を多条に施し、菱形状や三角形状の文様を描いている。地文の縄文は、単節縄文ＬＲで、横方向主体に施している。これらの土器については、文様の施文方法、厚さ、胎土に金雲母を含むなどの特徴が共通し、同一個体の可能性も考えられる。

17・18は、無節縄文Ｌを施文した後、２条ないし３条の沈線を施している。

なお、４～16は後期中葉と考えられるが、17・18は細分時期の特定は難しい。

同図19～25は、後期後葉～晩期に比定される。いずれも粗製土器で、19・20が口縁部片、21～25が胴部片である。19～23は、櫛歯状工具による条線文を縦方向主体に施している。24・25は、無節Ｒ原体を軸に密に巻きつけた撚糸文が観察される。文様の施文方向は、24では縦ないし斜め、25では縦方向である。

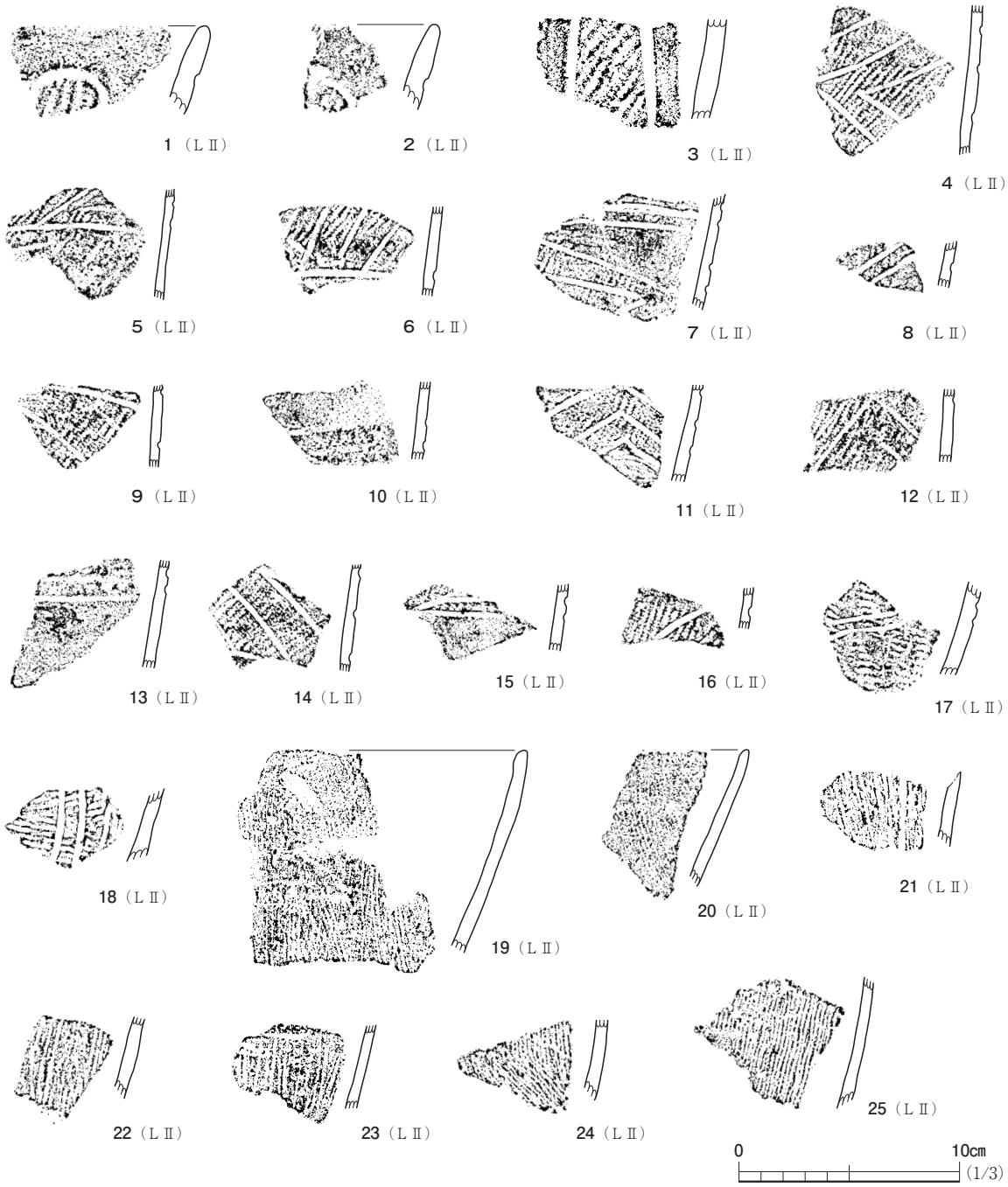


図７　１号遺物包含層出土遺物（１）

石　　器

図８－１･２は打製石斧である。１は結晶片岩製で、両側縁が括れ、分銅形に近い形状を呈する。２は砂岩製で、側縁の片方は弧状、もう片方は直線的に調整が施されている。上部は欠損している。

（菅　原）

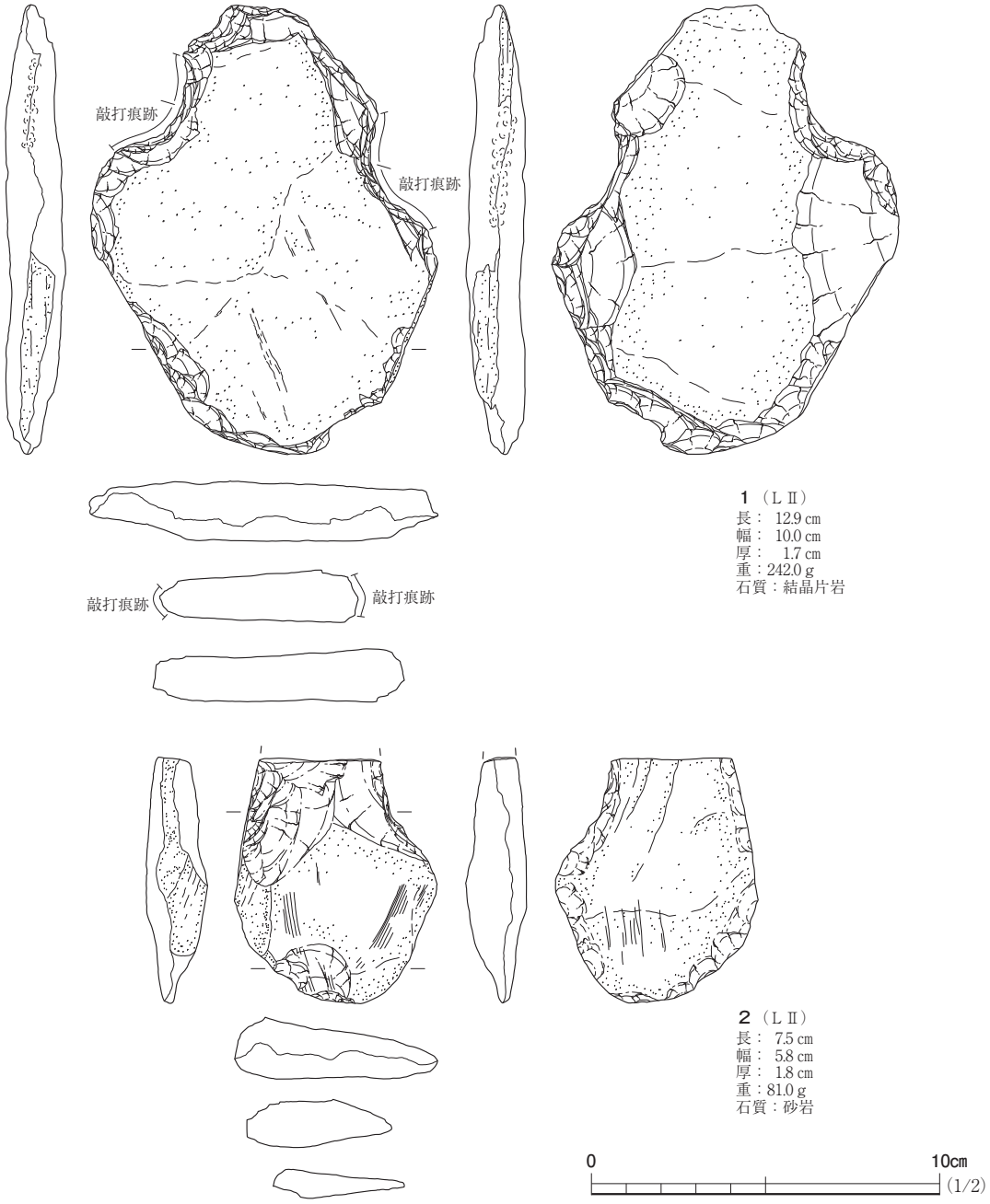


図８　１号遺物包含層出土遺物（２）

第３章　　総　　括

上ノ台館跡は、平成24年度の分布調査(『福島県内遺跡分布調査報告21』)の発見を契機に、周知の遺跡となった中世城館跡である。城主や築造年代を示す史料は残っていないが、周囲には、懸田氏歴代の居城＝懸田城跡を筆頭に、複数の中世城館跡や福田・沼ヶ入遺跡を含む城館関連遺跡の分布が特徴的に認められる。したがって、本城館跡の知見が、今後の地域史解明に果たす役割は大きいと思われる。以下では、まず平成27年度作成の縄張り図を提示したうえで、今回の発掘調査成果と照合し、次年度調査の備えとしたい。

１　縄張り図の所見

縄張り図(図９)は、盛岡市遺跡の学び館の室野秀文氏に依頼して作成した。その際、次のコメントをいただいている。

◎城館内部は尾根筋の屈曲地点を境として、北半域と南半域に区別され、遺構様相が大きく異なる。

◎北半域は、遺構分布が稀薄である。尾根の括れた２箇所に堀切が観察できるものの、間に挟まれた約75ｍの区間にはまったく遺構が観察できない。

◎南半域はほぼ全面に鄙壇状の平場が観察され、中村街道に接した南急斜面には、竪堀が観察される。このことから、城館の中心部は南半域と推測される。

◎南半域の各平場には、多くの建物が継続占地できる面積がなく、上ノ台館跡は恒常的な城館というより、一時的な砦や陣所のような性格が想定される。

◎存続時期は、他地域の類例から15世紀～16世紀の中に求められる。

◎所見は、あくまで地表面観察にもとづいており、今後の発掘調査成果によって補正しなければならない。

２．発掘調査の所見

今回の調査は北半域が対象となった。縄張り図の所見と照合すると、次のように整理できる。

◎１・２号溝跡は尾根の括れた２箇所に観察された堀切、１号平場は２号溝跡に接した最上段の平場にあたる。また、1・2号溝跡の間は遺構空白帯であり、この点も縄張り図の所見と合致した。

◎１号溝跡の北側に想定された通路は、現代の尾根道であることが判明した。

◎城館範囲の北限は、１号溝跡と判断できる。

◎今回は出土遺物が無く、具体的な存続時期を知る手がかりが得られなかった。

次年度は、城館中心部の南半域が調査対象となるため、今回の成果と周囲の歴史的環境を踏まえ、地域史解明に資する検討を行っていく必要がある。　　（菅　原）

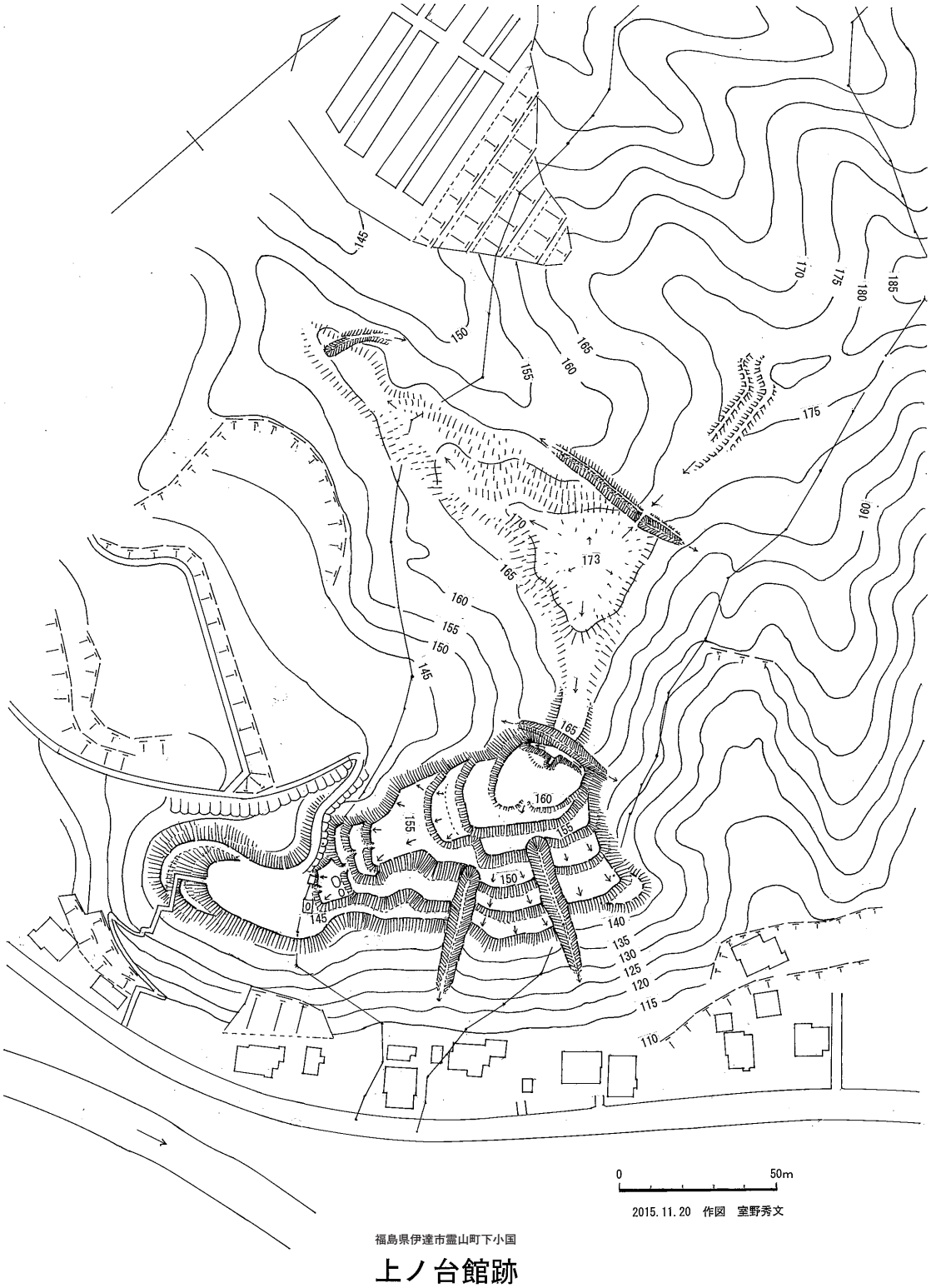


図９　上ノ台館跡縄張り図

第３編　川原田（かわはらだ）遺跡

遺跡記号	ＱＲ－ＫＨＤ
所在地	伊達郡桑折町大字松原字川原田
時代・種類	縄文時代の狩場、古代の集落跡 遺物包含層
調査期間	平成28年５月16日～10月27日
調査員	廣川紀子・由井文菜

第１章　遺跡の位置と調査経過

第１節　遺跡の位置と現況

川原田遺跡は、福島県伊達郡桑折町大字松原字川原田に所在する。桑折町松原地区は、行政区分上では桑折町の南西端部分となり、西方では福島市飯坂湯野地区、南方では旧伊達町と接している。川原田遺跡は、東北本線の伊達駅から北に１㎞ほどのところに位置し、北側の丘陵裾部には飯坂地区から桑折町中心街へ抜ける県道124号線が通る。

遺跡の西側には東北自動車道路、東側には東北新幹線や東北本線といった主要幹線道路が配される。遺跡とその周辺の現況は、江戸時代に開削された西根上堰と下堰とに挟まれた田園地帯である。地形的には標高80ｍほどの低位段丘上に立地し、同じ段丘上には平成29年度に調査が実施された舘ノ前遺跡、日照田遺跡が存在する。（廣　川）

第２節　調 査 経 過

川原田遺跡の調査は、４月６日付で福島県教育委員会より3,700㎡の発掘調査の指示を受けて実施した。調査に係った作業日数は延べ106日である。以下に、調査の経過について記す。

５月第２週　：12日（木）にプレハブ・トイレ、13日（金）に発電機を設置する。

５月第３週　：16日（月）から作業員を雇用する。器材類の搬入、調査区の縄張りを行う。

５月第４週　：調査区北部から表土除去を開始する。

６月第１週　：表土除去を継続する。調査区北東部の表土除去を終えたところから遺物包含層の掘り下げを始める。

６月第２・３週：表土除去、遺物包含層の掘り下げを継続する。遺物包含層から出土する遺物は、土師器や須恵器が多いが、縄文土器や石器も認められる。

６月第４週　：調査区北東部の遺構検出作業を始める。表土除去、遺物包含層の掘り下げの作業は継続する。

７月第１週　：遺構検出、遺物包含層の掘り下げを継続する一方、調査区南部の表土除去を始める。

７月第２週　：遺構検出、遺物包含層の掘り下げを継続する。遺構検出では、落し穴を含む土坑数基、小穴群等を確認する。

７月第３・４週：遺構検出、遺物包含層の掘り下げを継続する。小穴の検出数が増え始める。

７月第５週　：26日（火）に表土除去作業を終える。土坑を中心に順次、遺構精査を行う。

８月第１・２週：遺構精査を継続する。小穴群の平面図作成を行う。

８月第３週　：18日（木）から盆休み明けの作業を開始。遺構検出、遺構精査を継続する。

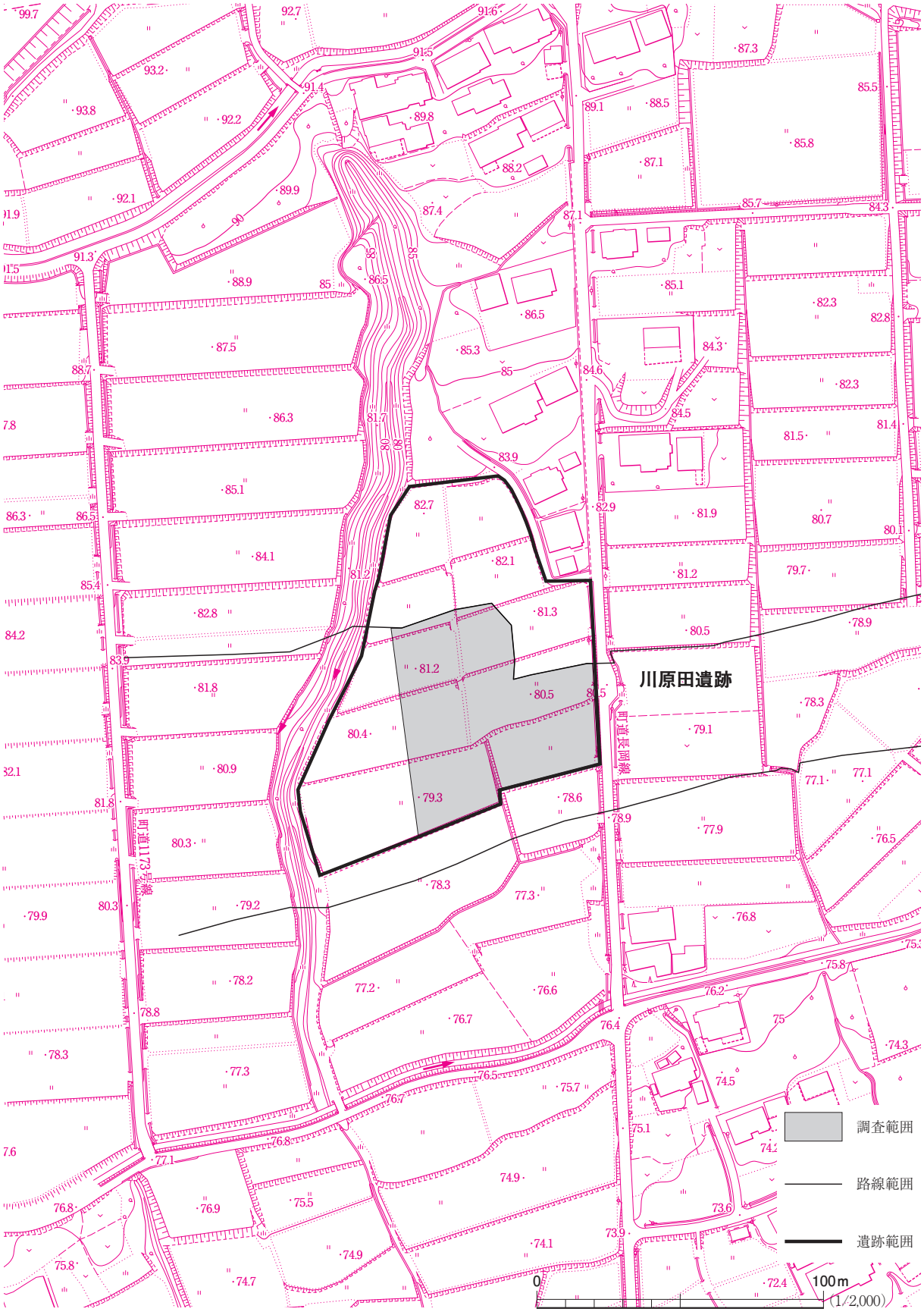


図１　調査区位置図

８月第４週～　：遺構精査、遺構検出を継続するが、９月末まで台風やゲリラ豪雨の襲来、秋雨が
　　９月第３週　長く続き、著しく調査が滞る。
９月第４週　　：遺構検出、遺物包含層の掘り下げを継続する。23日(金)に基本土層図作成。
９月第５週　　：27日(火)から地形測量を行う。28日(水)に遺物包含層の掘り下げを終える。
10月第１週　　：７日(金)に空中写真撮影を実施する。
10月第２週　　：掘立柱建物跡、柱列跡の精査を開始する。柱列跡では、柱材が遺存していることが確認された。
10月第３週　　：20日(木)から１号井戸跡の精査に入る。井戸枠が残っていることが判明。
10月第４週　　：27日(木)に１号井戸跡の井戸枠を取り上げ、全調査を終了した。
11月第１週　　：２日(水)に県文化財課及び工事側の立ち会いの下、引き渡しを行った。（廣　川）

第２章　発見された遺構と遺物

第１節　調査成果の概要と基本土層

調査成果の概要

川原田遺跡の調査前現況は水田で、全体的な地形は北から南へかけて緩やかに傾斜している。なお、戦後直後の航空写真では、調査区内の中央を流れる水路が確認できる。

検出された遺構は、掘立柱建物跡２棟、柱列跡１列、井戸跡１基、落し穴７基を含む土坑17基、溝跡２条、性格不明遺構１基、小穴群である。また、調査区全体に遺物包含層が広がっていた。各遺構の時期は、出土遺物から概ね縄文時代と奈良・平安時代のものとみられる。

基本土層（図３、写真４）

基本土層は、色調・土質の諸特徴からＬＩ～Ⅲに分層した。

川原田遺跡は現況では水田となっており、圃場整備が繰り返されて水稲耕作が行われたものとみられ、それら耕作土を一括してＬＩとした。ＬＩは水田耕作土に適した粘質土で、場所によっては１ｍ以上堆積するところや、新旧耕作土として分層できるところがあり、２次的に混入された土師器・須恵器片が認められる。

ＬⅡは、調査区内全体から確認できた遺物包含層である。ＬⅡは、ＬⅡａ黒褐色土(10YR3/1)とＬⅡｂ褐灰色粘質土(10YR4/1)とに細分した。調査区の北部では、ＬⅡａは含有する遺物量が多く、ＬⅡｂ中からは柱穴とみられる小穴が検出できたものもあった。しかし南部では、明瞭なＬⅡｂは確認されず、調査区内に流れる用水路の西側ではＬⅡからの遺物量も少なかった。全体的に炭化物、酸化鉄、白色凝灰岩を含み、ＬⅡａ中では炭化物や凝灰岩が多く含まれていた。また、付近から産

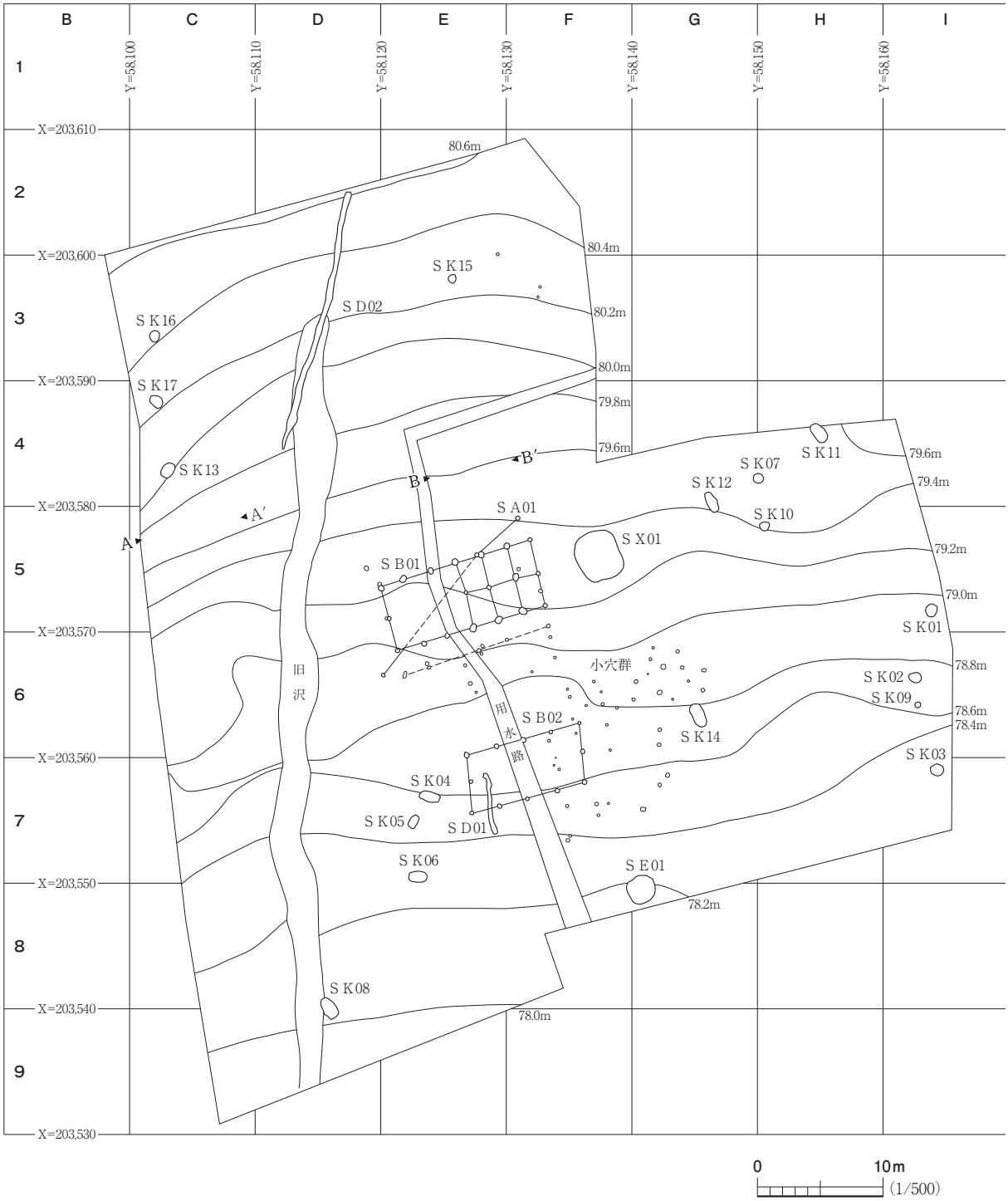
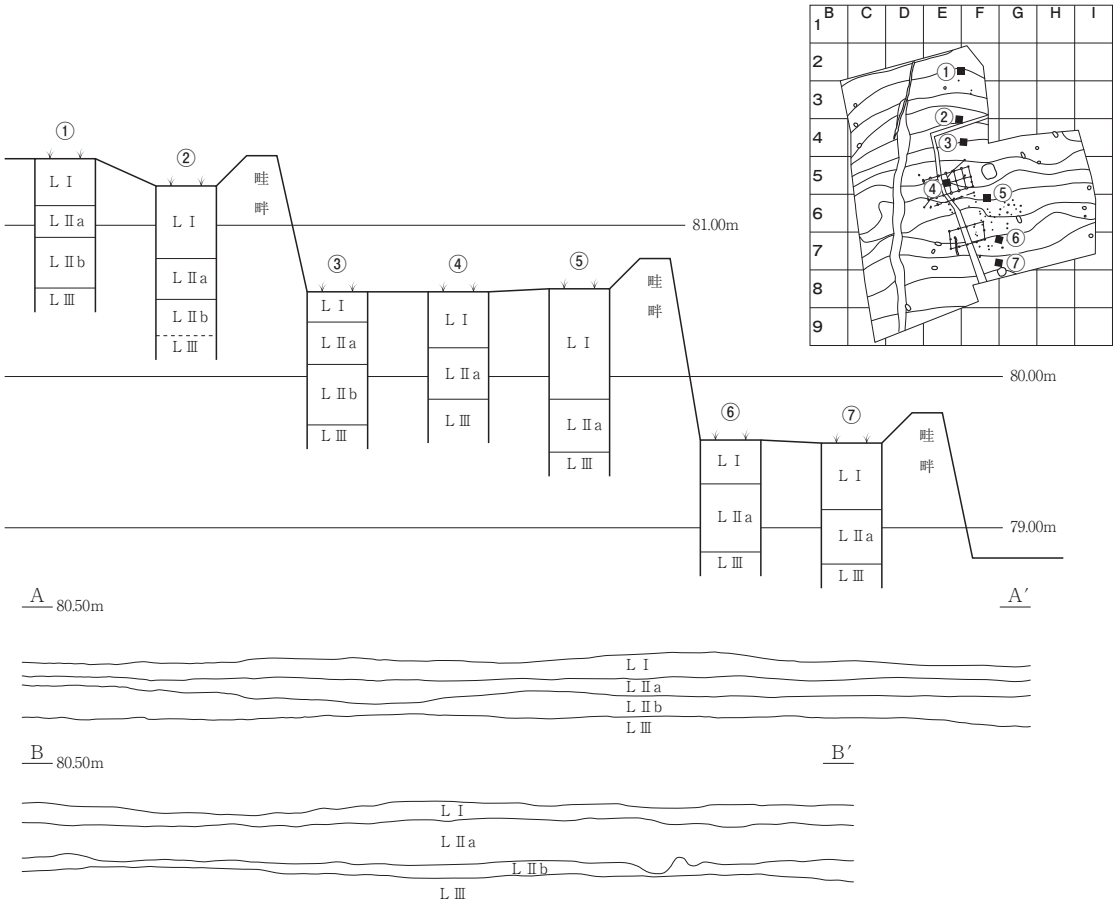

B
C
D
E
F
G
H
I
1
2
3
4
5
6
7
8
9
Y=58,100
Y=58,110
Y=58,120
Y=58,130
Y=58,140
Y=58,150
Y=58,160
X=203,610
X=203,600
X=203,590
X=203,580
X=203,570
X=203,560
X=203,550
X=203,540
X=203,530
80.6m
80.4m
80.2m
80.0m
79.8m
79.6m
79.4m
79.2m
79.0m
78.8m
78.6m
78.4m
78.2m
78.0m
S K15
S D02
S K16
S K17
S K13
A
A′
B
B′
S A01
S X01
S B01
S K11
S K07
S K12
S K10
S K01
小穴群
S K02
S K09
S K14
S B02
S K03
S K04
S K05
S D01
S K06
S E01
S K08
旧沢
用水路
0
10m
(1/500)

図２　遺構配置図



基本土層
ＬⅠ　灰黄褐色粘質土　10YR5/2（酸化鉄塊多量、礫少量）
ＬⅡa 黒褐色土　10YR3/1（酸化鉄塊・炭化物・白色凝灰岩礫少量）
ＬⅡb 褐灰色粘質土　10YR4/1（酸化鉄塊・礫多量）
ＬⅢ　にぶい褐色粘質土　7.5YR5/4（酸化鉄塊・礫少量）

0　2m（1/60）

図３　基本土層

出される石英(玉髄)が一定量含まれていた。

ＬⅢは、ＬⅡ下より調査区全体に確認される基盤層で、にぶい褐色粘質土(7.5YR5/4)を基調とするが、しまりのある砂質土やグライ化が進んだ状態で認められたところもある。　（廣　川）

第２節　掘立柱建物跡

今回の調査で発見された掘立柱建物跡は２棟で、桁行を揃えて配置されており、同時期に営まれたものと考えられる。また、それらの南東方向には、建物跡の柱跡とみられる小穴群が広がっている。また、建物跡の周辺からは古代の遺物が多く出土している。

１号建物跡　ＳＢ01

遺　　構（図４・５、写真５～９）

本遺構は調査区の中央となるＤ５、Ｅ５・６、Ｆ５・６グリッドにかけて位置する。南側に約10m離れて２号建物跡が主軸方向を揃えて並列し、東側に３ｍ離れて竪穴状の窪地である１号性格

不明遺構が隣接する。また、本遺構のＰ５と１号柱列跡のＰ２が重複しており、１号柱列跡が新しい。本遺構の南東側には、同様の柱跡とみられる小穴群が広がっている。

本遺構はＬⅢ上面より検出された。２間×６間の東西に長い建物跡で、主軸方向はＮ70°Ｅである。西側３間と東側３間とでは構造が異なっており、西側３間は土間、東側３間はＰ９～11が床束となる板間とみられる。規模は、東西幅が12.6～12.8ｍ、その柱間が180～230㎝、南北幅が5.2～5.4ｍ、その柱間が250～270㎝を測り、１間の長さは南北がやや長い。

それらを構成する小穴の堆積土はＬⅡに近似しており、褐灰色土から黒褐色土を主体に１～２層

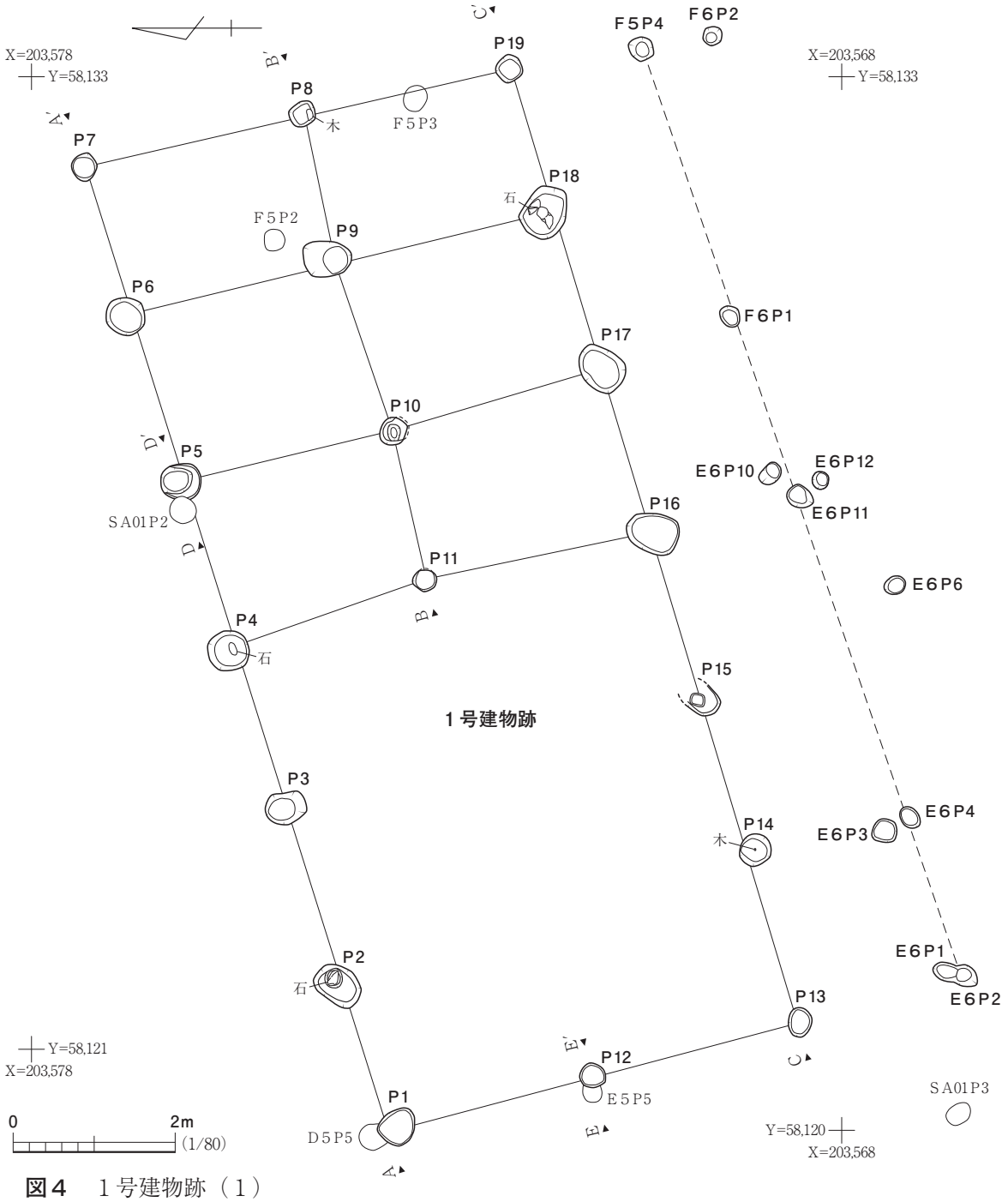
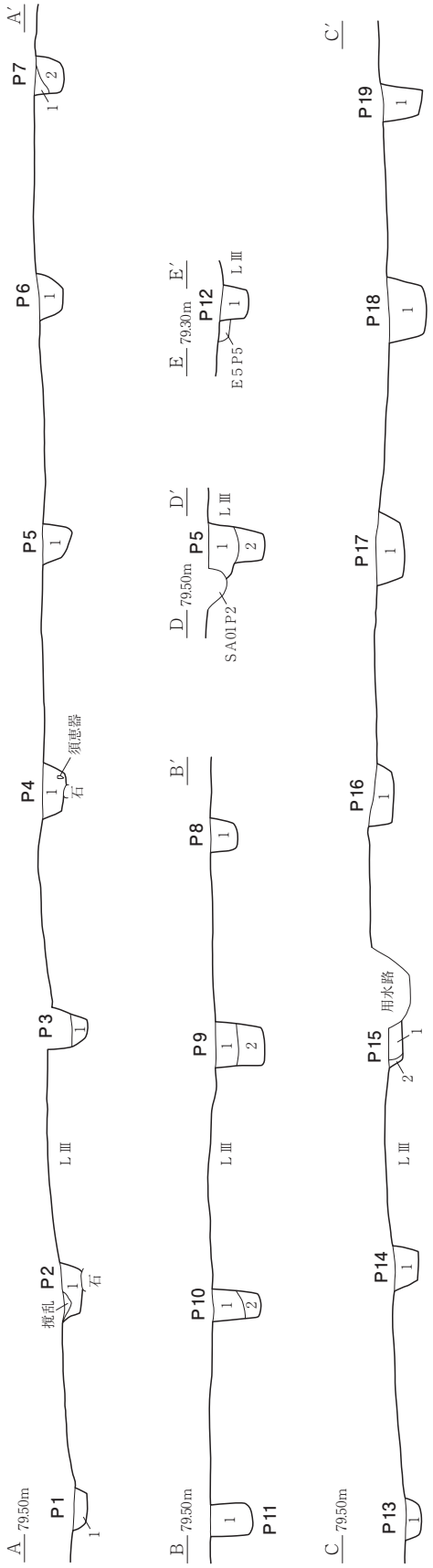


図４　１号建物跡（１）



Ｐ１・２堆積土
1　褐灰色粘質土　10YR6/1
（黒褐色土含む）

Ｐ３堆積土
1　黒褐色土　10YR3/2

Ｐ４・８・18・19堆積土
1　褐灰色土　10YR4/1
（酸化鉄粒・灰白色粘土粒含む）

Ｐ５堆積土
1　褐灰色土　10YR4/1
（酸化鉄粒・灰白色粘土粒含む）
2　黒褐色土　10YR3/1

Ｐ６堆積土
1　褐灰色土　10YR4/1
（酸化鉄粒・灰白色粘土粒多量）

Ｐ７堆積土
1　褐灰色土　10YR4/1
（酸化鉄粒・灰白色粘土粒多量）
2　暗褐色土　10YR3/3
（酸化鉄粒含む）

Ｐ９堆積土
1　褐灰色土　10YR4/1
（酸化鉄粒・灰白色粘土粒含む）
2　褐灰色土　10YR4/1

Ｐ10堆積
1　褐灰色土　10YR4/1
（酸化鉄粒・灰白色粘土粒含む）
2　灰黄褐色土　10YR4/2

Ｐ11堆積土
1　褐灰色土　10YR4/1
（酸化鉄粒多量）

Ｐ12堆積土
1　黒褐色土　10YR3/2
（褐灰色粘質土含む）

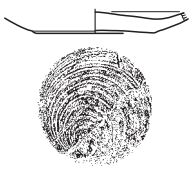
Ｐ13堆積土
1　黒褐色土　10YR3/1
（灰白色粘土塊含む）

Ｐ14堆積土
1　黒褐色土　10YR3/2
（酸化鉄粒・灰白色粘土含む）

Ｐ15堆積土
1　黒褐色土　10YR3/2（石含む）
2　灰黄褐色土　10YR5/2

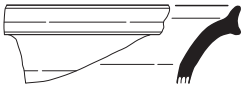
Ｐ16堆積土
1　褐灰色土　10YR4/1
（酸化鉄粒・木材含む）

Ｐ17堆積土
1　黒褐色土　10YR3/1
（酸化鉄粒・灰白色粘土含む）

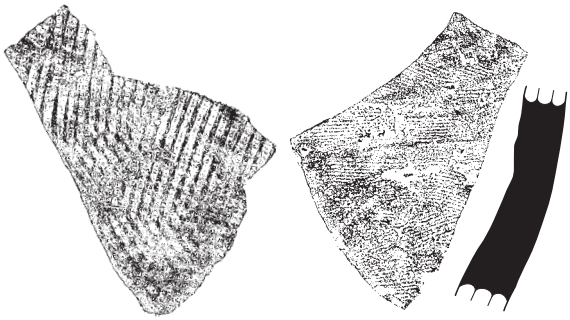


1（Ｐ３ℓ１）
底径：5.0 cm
器高：[0.8]cm

2（Ｐ３ℓ１）



3（Ｐ４ℓ１）



4（Ｐ２ℓ１）

0　2m（1/60）
＜遺構＞

0　5cm（1/3）
＜遺物＞

図５　１号建物跡（２）・出土遺物

に分層した。堆積土中からは円礫や木片が確認できたものもあるが、底面上にあるもののみ図示している。小穴の形態は楕円形状のものと、円形ないし隅丸方形のものとに大別でき、大きさは長軸で50cm以上のものと、30cm前後のものとに分けることができる。深さは10～50cm程度とばらつきがあり、Ｐ２、Ｐ５、Ｐ10、Ｐ15では２段掘りとなっている。柱痕は確認できなかったが、Ｐ１、Ｐ３、Ｐ４、Ｐ８、Ｐ16からは木片が認められた。樹種同定の結果、木片の樹種はいずれもクリと同定され、柱材の一部の可能性が高いと考えている。

今回の調査では判断できなかったが、本遺構の南側には長軸30cm前後の小ぶりの小穴が直線的に並んでいることから、本遺構に関連する庇の可能性も考えられる。図４には、これらの小穴を破線で結んで示した。仮に庇とすると、本遺構の東辺のＰ７、Ｐ８、Ｐ19と同規模となるため、南･東側に２面の庇が付く２間×５間の建物跡となる可能性も指摘しておきたい。

遺　　物（図５）

遺物はＰ１～５・８・16から26点が出土した。それらは主に土師器・須恵器片で、そのうち４点を図示した。図５－１･２は土師器の杯で、どちらもＰ３から出土しており、２は壁際で確認された。１の底部には回転糸切り痕が認められ、内面は黒色処理されず、コテ当て調整で円滑に仕上げられている。２は内面にヘラミガキが施され黒色処理される。３は須恵器の長頸瓶の口縁部で、内面に薄く灰が被る。４は須恵器の大甕片で、外面には平行タタキメ、内面にはヘラナデが施されている。

ま と め

本遺構は、出土遺物から９世紀後半から10世紀前半頃のものと考えられる。小穴から出土した

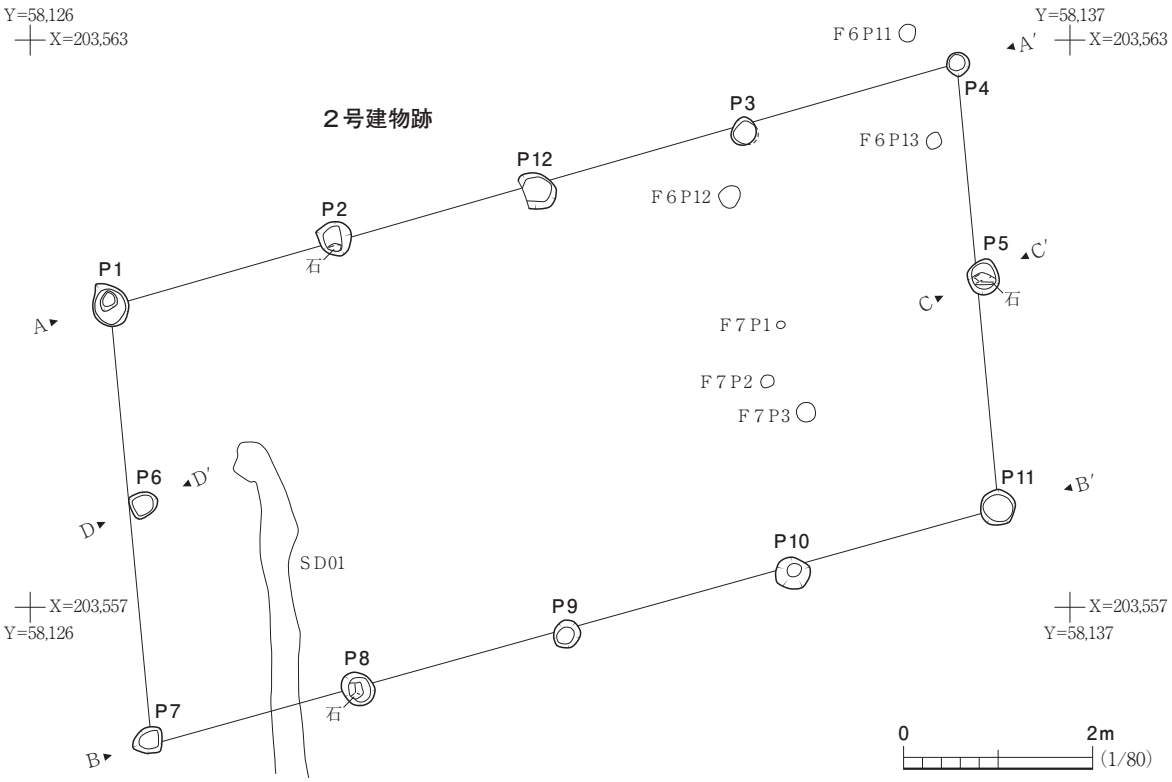


図６　２号建物跡（１）

木片の放射性炭素年代測定の結果も、８世紀から９世紀後半であり、伐採時期を考慮するとおおよそ一致してくる。本遺構は２号建物跡より一回り大きく、板間のある構造等から、同時期に存在した建物跡の中の主屋とみられる。（廣　川）

２号建物跡　ＳＢ02

遺　　構（図６・７、写真10～13）

本遺構は調査区の中央南寄りとなるＥ６・７、Ｆ６・７グリッドにかけて位置する。北側に約

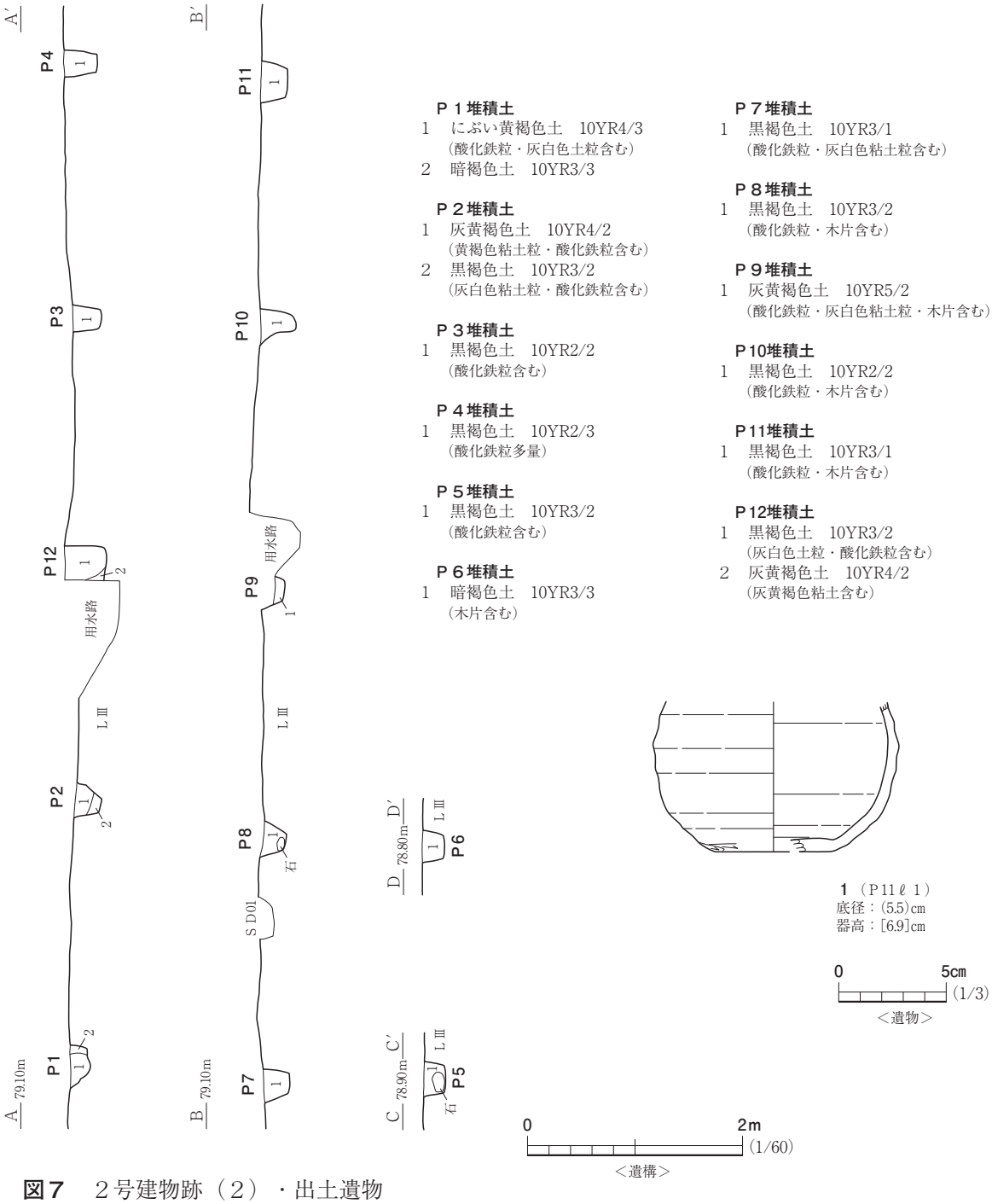


図７　２号建物跡（２）・出土遺物

10m離れて１号建物跡が並列し、約９ｍ南側には１号井戸跡が配置される。本遺構の北東方向には同様の柱跡とみられる小穴群が広がっている。１号溝跡が本遺構内に延びているが、柱穴部分とは重複関係がなく新旧関係は不明である。

本遺構はＬⅢ上面より検出された。２間×４間の東西に長い側柱建物跡で、主軸方向はＮ75°Ｅである。規模は、東西幅が9.3ｍ、その柱間が220～250㎝で最頻値230㎝、南北幅が4.8ｍ、その柱間が220～250㎝で、柱間を結んだラインは平行四辺形となり４隅は直角ではない。

それらを構成する小穴の堆積土はＬⅡに近似しており、暗褐色土ないし黒褐色土を主体に１～２層に分層した。堆積土中には川原石や木片がみられ、底面上にある大きめの石は図示した。なお、柱材の可能性のある木片２点については樹種同定及び放射性炭素年代測定を行っており、樹種はＰ１出土のものがコナラ節、Ｐ７出土のものがニレ属である。年代は、Ｐ１が1,150±20yrBP、Ｐ７が1,160±20yrBPという数値年代を得た。形態は楕円形状ないし円形をしており、大きさはＰ４、Ｐ６がやや小さく、長軸、短軸とも30～50㎝内に収まっている。深さは浅いもので16㎝、深いもので36㎝を測る。遺存状態のよいものでは底面はほぼ平らで、周壁は直立して立ち上がる。

遺　　物（図７、写真26）

遺物は、Ｐ１・11から主に土師器の甕とみられる小片10点が出土し、そのうち１点を図示した。図７－１は土師器の小型の甕である。外面のロクロ目が顕著で、底部周囲には手持ちヘラケズリが施されている。内外面には煤が付着する。

ま と め

本遺構は、出土遺物から平安時代以降のものとみられる。Ｐ１、Ｐ７から出土した木片の放射性炭素年代測定の結果は、９～10世紀頃であり、矛盾しない。１号建物跡と軸を揃えて並列することから、同遺構と同時期に営まれたものとみられる。（廣　川）

第３節　柱　列　跡

今回の調査で柱列跡としたものは１列である。１号柱列跡の付近には同規模の小穴群の広がりが認められるが、他の小穴とは異なり柱材とみられる木質部分の立ち上がりが確認されたため、柱列跡として報告する。１号建物跡の柱穴との重複関係からは本遺構が新しく、柱材の良好な遺存状態からも他の小穴より後出することが推察される。

１号柱列跡　ＳＡ01

遺　　構（図８、写真14）

本遺構は調査区の中央となるＥ５・６、Ｆ５グリッドにかけて位置する。他の小穴とは様相が異なり、柱材とみられる木質部分が検出面上から突き出た状態で確認された。それらをつなげると、１号建物跡の北東方向から南西方向へと延びている。本遺構のＰ２が１号建物跡のＰ５の一部を掘

り込んでいることから、本遺構は１号建物跡の廃絶後につくられていると判断される。

本遺構は１号建物跡と重複しており、１号建物跡Ｐ６から北東に約２ｍ離れて位置するＰ１、１号建物跡Ｐ５と重複するＰ２、１号建物跡Ｐ13から南西に約２ｍ離れて位置するＰ３で構成され、Ｐ１とＰ２間が約４ｍ、Ｐ２とＰ３間が約11.8ｍ、Ｐ１からＰ３の長さは約15.8ｍである。Ｐ３を起点にＰ１方向はＮ40°Ｅである。

本遺構を構成する小穴はＬⅢ上面を掘り込んでつくられているが、柱材の一部はＬⅡ中から確認できた。遺構内堆積土はＬⅡに近似した黒褐色土であるが、Ｐ２、Ｐ３の底面上ではＬⅢに起因する粘土塊が認められた。規模と平面形は、Ｐ１、Ｐ２が直径34cmの円形、Ｐ３は長軸33cm、短軸24cmの楕円形である。Ｐ１は遺存状態がよく、深さは39cmである。底面は平らで周壁は直立に立ち上がっている。底面から少し浮いた状態で直径15cm程度の柱材が約70cm残っていた。Ｐ２、Ｐ３にも直径18cmの柱材が確認でき、Ｐ２では底面から約50cmが残っていた。Ｐ１～３からは出土遺物がほとんどないが、Ｐ２からは内面黒色処理された土師器杯とみられる細片が出土している。

柱材３点については樹種同定及び放射性炭素年代測定を行ったが、樹種はいずれも柱材に多く用いられるクリと同定された。年代測定については、８世紀末から９世紀半ばと、１号建物跡よりもやや古めの年代観であったが、伐採時期や転用材の可能性を考慮すると問題ないものと考える。

ま と め

本遺構は、柱材が残されていることから柱列

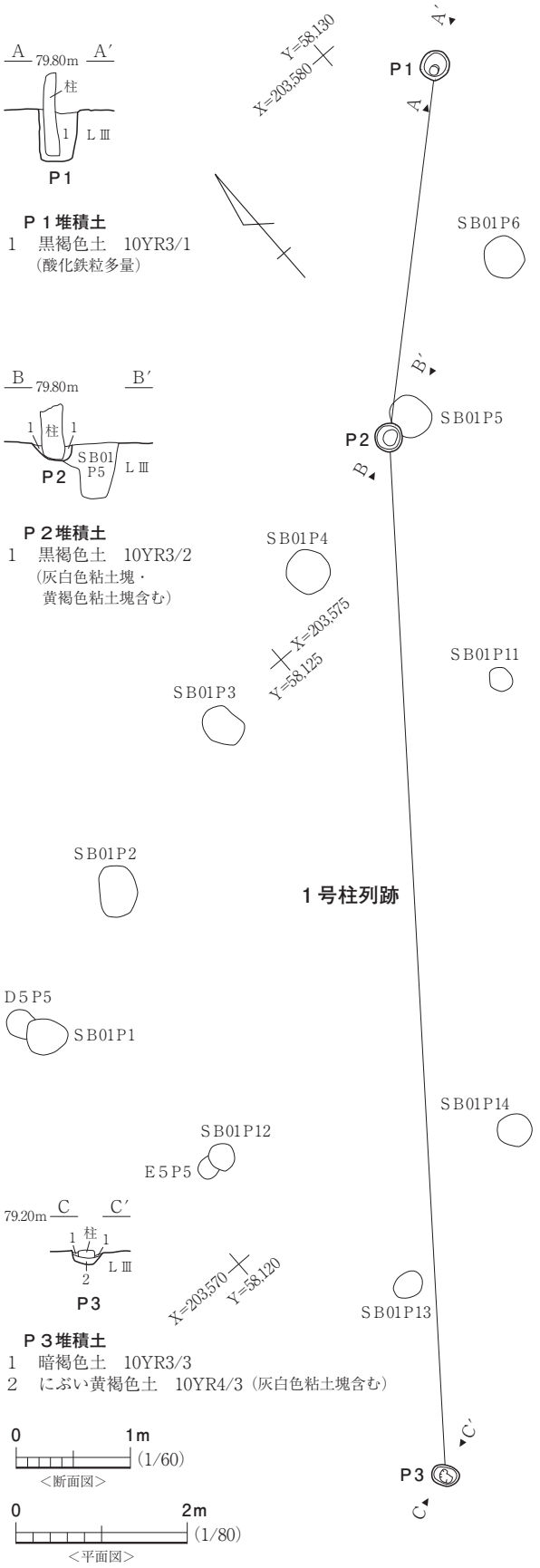


図８　１号柱列跡

跡として報告したが、その用途や構造については不明である。年代測定の結果から１・２号建物跡とはほぼ同時期のものとみられるが、本遺構が１号建物跡の柱穴を掘り込んでおり、柱材の遺存状態が良いことから、本遺跡で展開された古代の集落の終末期のものとみられる。　（廣　川）

第４節　井　戸　跡

調査区南端より井戸跡１基を検出した。水田の用水路脇にあり、標高78.2ｍの等高線がめぐる調査区内でも低い地点となるため、調査期間中を通して水はけが悪かった。付近には他に遺構が認められなかったが、やや離れて２号建物跡や、同様の建物跡の柱穴とみられる小穴群が存在し、それらと同時期に営まれたものとみられる。

１号井戸跡　ＳＥ01

遺　　構（図９・10、写真15～17）

本遺構は、調査区中央南端のＦ７・８、Ｇ７・８グリッドにかけて位置し、井戸枠の西側部分の部材がＬⅡ中より突き出た状態で確認できた。重複する遺構はない。はじめ木質部分については水田の用水路に残されたしがらみ状のものを想定したが、サブトレンチを設定した段階で、井戸枠の部材の一部であることが判明した。その後、井戸跡の調査に切り替え、遺存する井戸枠部分と掘形とを確認することができた。周囲の土壌が還元作用を受けてグライ化しているため不明瞭であるが、掘形はＬⅢ上面から掘り込まれていると判断した。

遺構内堆積土は８層に分層した。ℓ１・２は腐植土をわずかに含んだ灰色粘質土で、ℓ１のしまりがℓ２に比べ弱いため分層した。いずれも井戸を埋め戻した土とみられる。ℓ３～７は、井戸枠の外側となる掘形内に水平に堆積しており、裏込め等の構築土とみられる。なお、ℓ４～７は灰色砂質土と灰色粘質土が互層となっており、ℓ４の上部には大小の円礫や木材片といった裏込め材が認められた。底面はℓ８とした拳大の円礫を含んだ暗灰色粘質土が水平に堆積している。ℓ８は、井戸枠設置後に充填された層と考えている。

掘形の平面形は隅丸方形で、開口部分が１辺約220㎝、底面が長軸約140㎝、短軸約130㎝でやや東西軸に細長く、深さは約150㎝である。主軸方向はＮ65°Ｅである。底面はほぼ平坦で、周壁は緩やかに立ち上がり、開口部分で広がっている。

遺存する西側部分の井戸枠は、掘形の開口部分から70㎝程度内側に、西壁に並行するように設置されている。井戸枠部材は、両端に丸太材（隅柱）、その間に縦長の板材３枚（側板）が並列され、両端の隅柱の間には細長い板材（桟木）を横に通して側板を押さえている。隅柱の上端から1/3のところには、桟木用のほぞ穴が開けられている。また、側板の上方からは、その外側に沿って横長の板材が認められ、側板の上部構造のひとつとみられる。それら井戸枠部材はほぼ形状が保たれているものと考えられ、そこから復元される井戸枠は１辺約１ｍの方形で、４隅に隅柱を持ち、側板に

縦板を使用した構造のものと推測される。

遺存する井戸枠部材の西側部分では、３枚の縦板を組み合わせた側板部分では幅約90㎝、長さ約160㎝を測り、検出面下の約130㎝が地中に埋められていたものとみられる。それら側板の板材は、裏込めに円礫や木材等を使用して、ほぼ垂直に立てられている。板材の表面には丁寧な加工が加えられており、そのうちの１枚は他の建物からの転用材とみられる。

遺　　物（図10～12、写真26・28～31）

出土遺物は44点で、堆積土中から土師器の杯類、須恵器の甕類等が出土し、その中にはウシとみられる獣骨が認められた。獣骨は長さ20.8㎝、幅・厚さともに最大値1.8㎝で、特徴的な形状からウシの中手骨の部分とみられる。それらのうち図示したものは土師器４点、須恵器片１点で、獣骨は写真で掲載した。他に、井戸枠部材７点を図示した。

図10－１～４は土師器の杯で、グライ化した土壌中から出土した。全体的に色調が褐灰色で、固くしまりがある。１は底部に回転糸切り痕が認められ、内面がコテ当て調整され、黒色処理は施されていない。内面には煤が付着する。２・３は内面にヘラミガキと黒色処理が施されている。２の底部は手持ちヘラケズリで丸く仕上げられている。４は高台付杯で、内面が黒色処理される分厚いつくりで、高台の脚部はハの字状に開いている。同図５は須恵器の甕の体部片である。

図11・12は井戸枠部材である。図11－１は桟木で、遺存する端部には加工痕が認められる。樹種はコナラ節である。

図11－２は側板のひとつと考えられる横板で、遺存状態の良い一方の側面は「¬」状に成形されており、釘抜き穴状の痕跡が観察された。樹種はハリギリである。

図11－３、図12－３は隅柱に使用された丸太材で、直径約10㎝、長さ約130～140㎝の同規模のもので、側面には部分的に加工痕が認められ、形を整えている。どちらも上端から約30～40㎝のところに四角いほぞ穴が開けられており、図11－１の桟木が差し込まれていたものとみられる。図11－３には下端から約30㎝のところにも、ほぞ穴を開けようとした痕跡が認められる。樹種は、いずれもクマシデ属である。

図11－４、図12－１は側板で、縦板３枚のうちの２枚である。これらは長さ140㎝前後、厚さ４～５㎝と同規模で、板目の木取りや表面の丹念な加工痕等が近似する。表面の加工痕からは、チョウナとみられる工具で縦方向に削られている様子が観察される。図12－１の端部の中央には切断残しとみられるわずかに突出した部分が認められる。樹種は図11－４がモミ属、図12－１がスギである。

図12－２は図11－４、図12－１と同じ縦板のうちの１枚であるが、他の部材とは異なり堅牢な柾目の木取りのものである。一部炭化しており、不要となった建物等からの転用材とみられる。樹種はハリギリである。

ま と め

本遺構は、出土遺物から９世紀後半から10世紀前半頃のものと考えられる。裏込めの構築土に含まれていた木片３点について放射性炭素年代測定を行っているが、８世紀後半から９世紀後半の

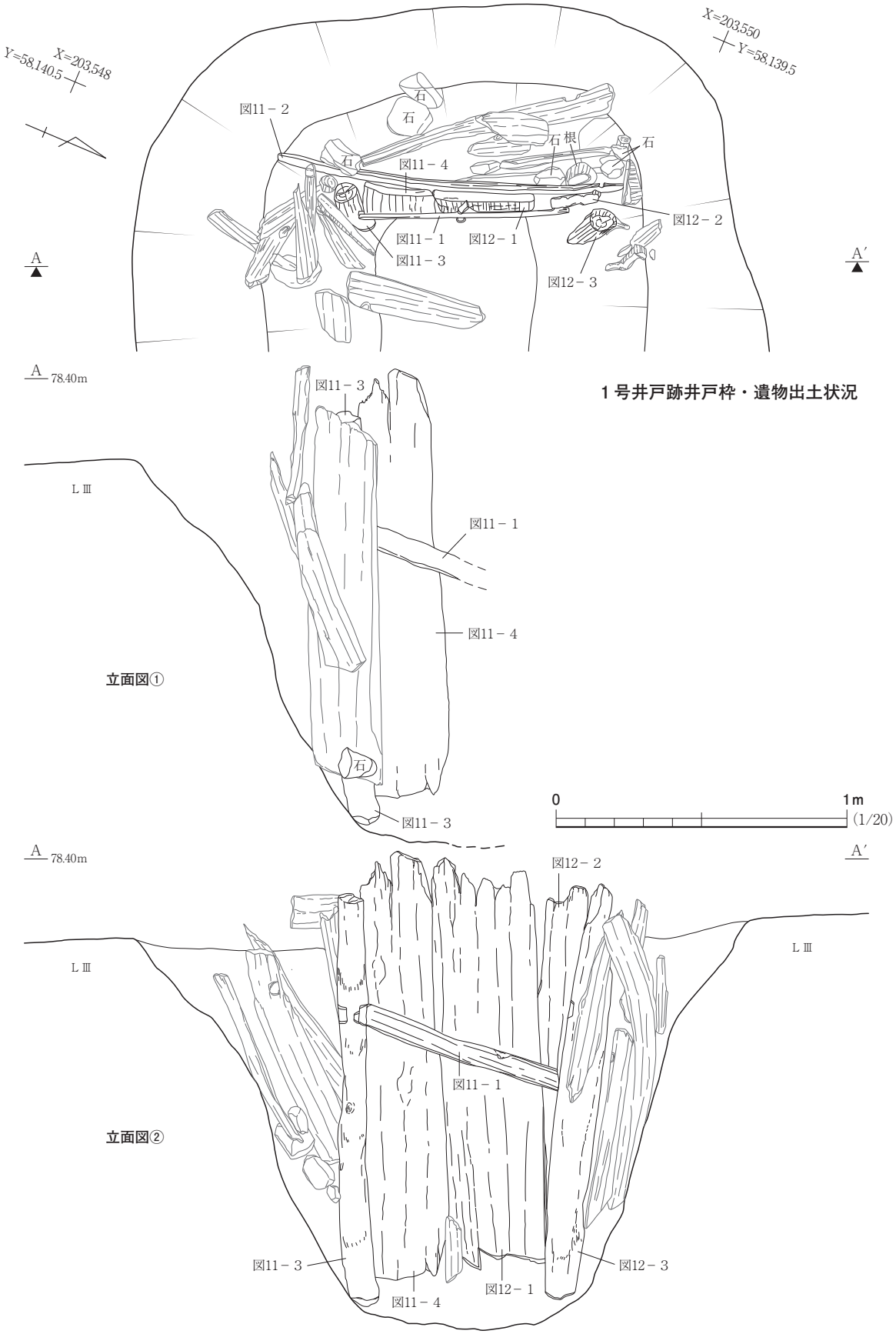

X=203,548
Y=58,140.5
X=203,550
Y=58,139.5
図11－2
石
石
石
石根
石
図11－4
図12－2
図11－1
図12－1
図11－3
図12－3
A
A′
A 78.40m
1号井戸跡井戸枠・遺物出土状況
図11－3
LⅢ
図11－1
図11－4
立面図①
石
図11－3
0
1m
(1/20)
A 78.40m
A′
図12－2
LⅢ
LⅢ
図11－1
立面図②
図11－3
図12－3
図12－1
図11－4

図９　１号井戸跡（１）

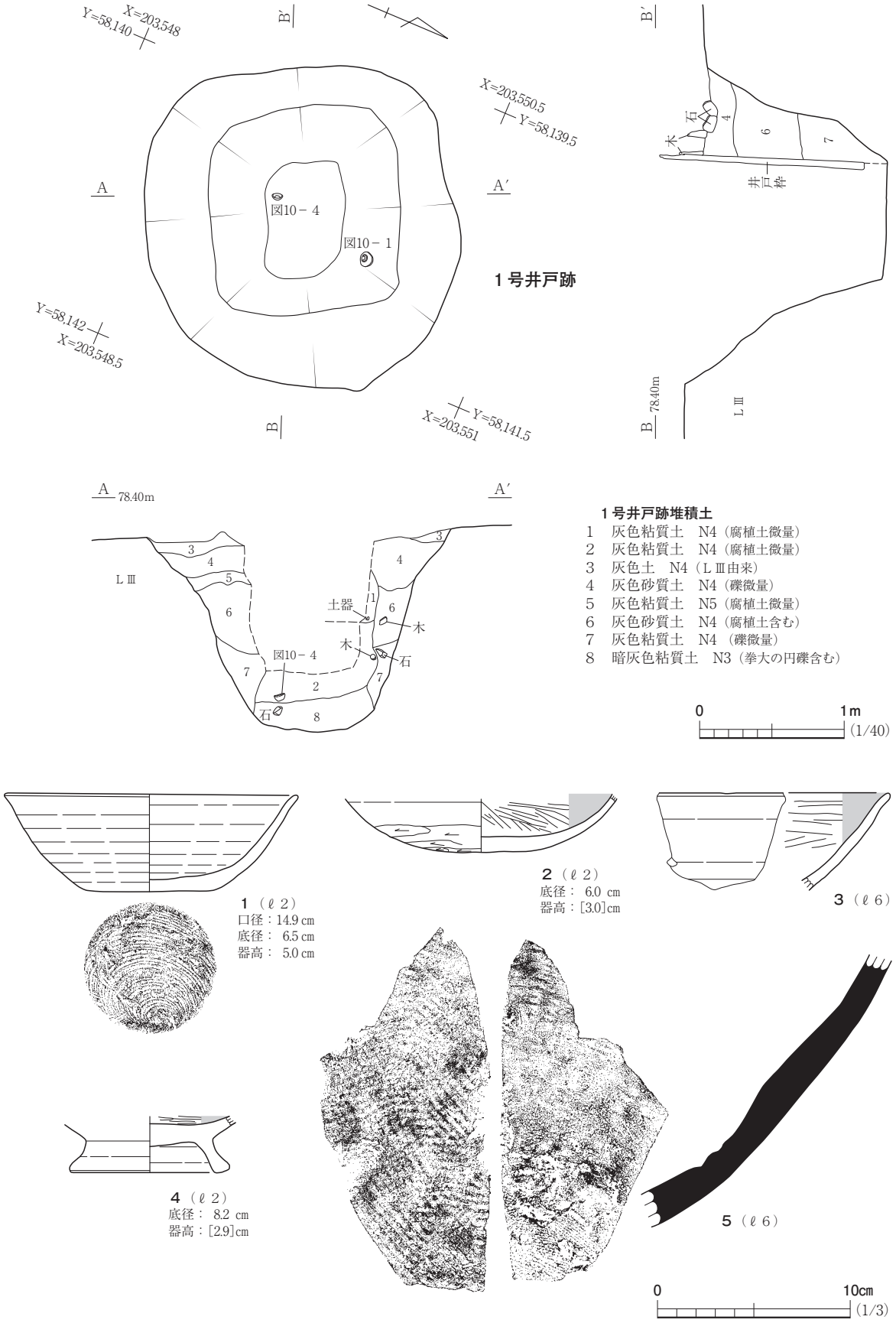


図10　１号井戸跡（２）・出土遺物（１）

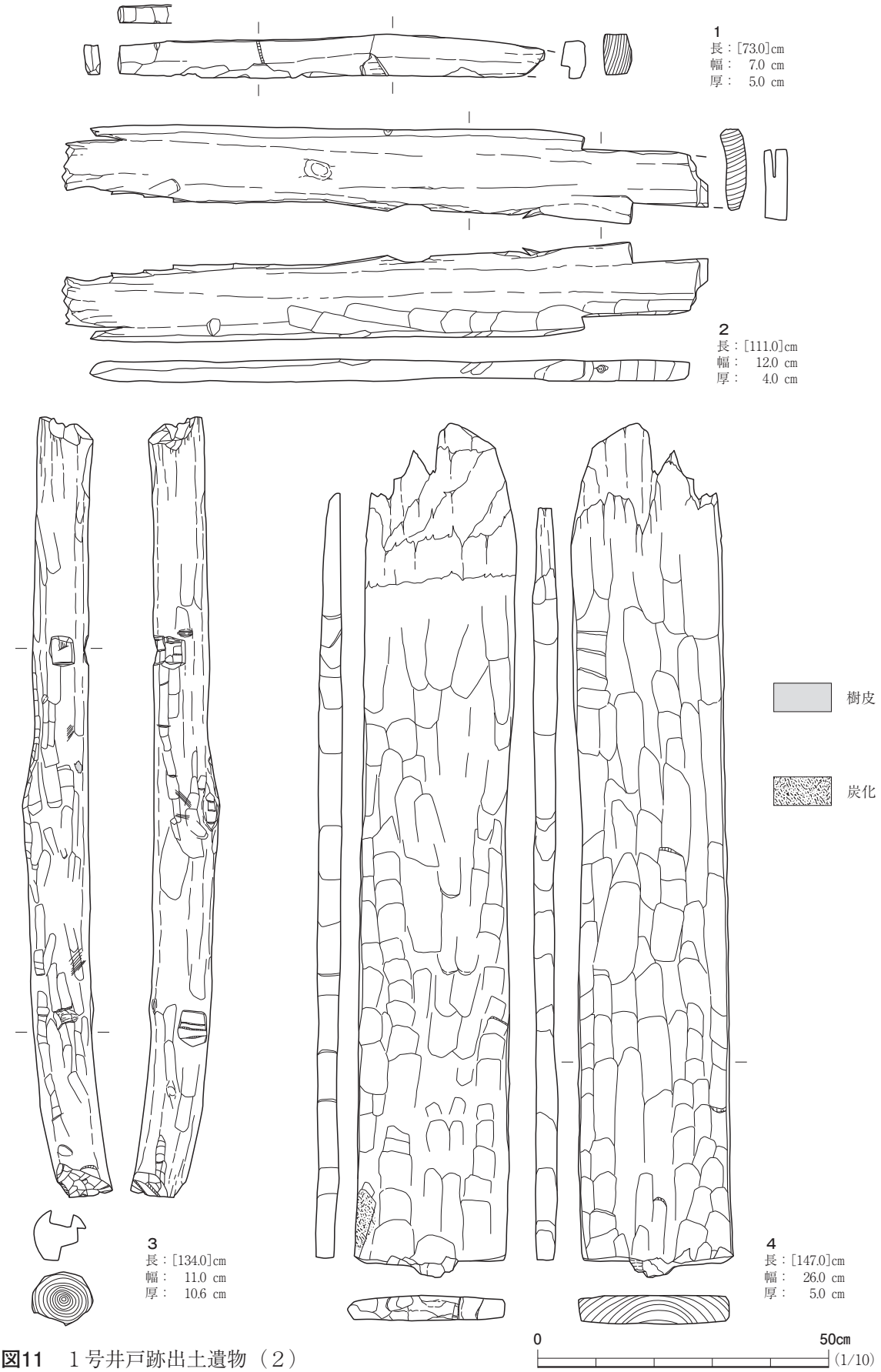


図11　１号井戸跡出土遺物（２）

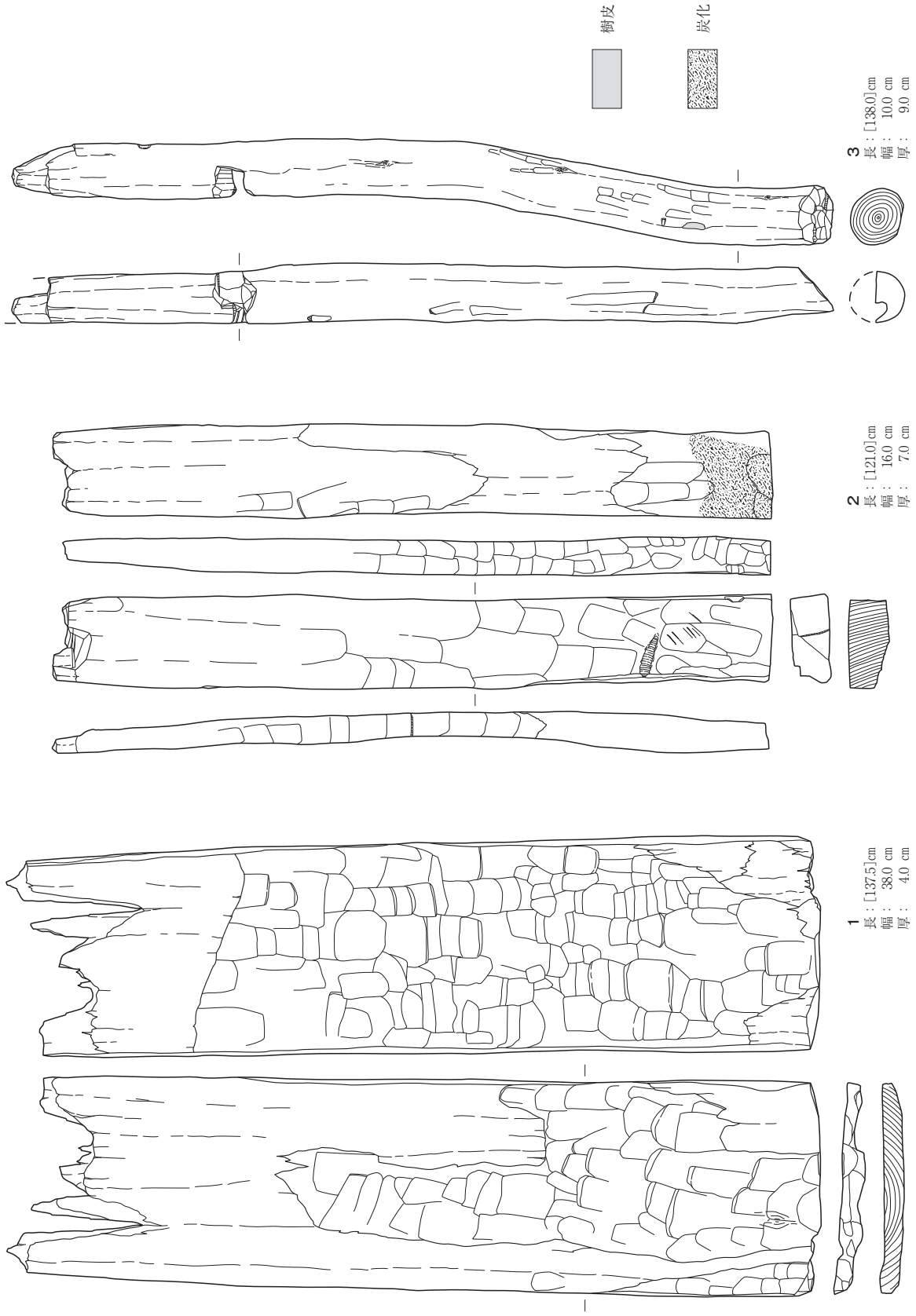


図12　１号井戸跡出土遺物（３）

0　50cm
(1/10)

年代が与えられており時期的に矛盾しない。井戸枠が残される井戸跡の検出事例では、建物跡数棟に井戸跡１基が組み合わされるようであり、本遺構も１・２号建物跡や付近の建物跡の柱穴とみられる小穴群と同時期に機能したものと推察される。（廣　川）

第５節　土　坑

今回の調査で発見された土坑は17基である。４・５・６・８・11・12・14号土坑の７基は、形態的な特徴から縄文時代の落し穴とみられ、そのうちの８・11・12号土坑は底面までの深さが約170cmを測るなど、全体的に良好な遺存状態で検出された。それ以外の10基は性格等は不明であるが、出土遺物等から概ね古代以降のものと推察される。

１号土坑　ＳＫ01（図13、写真18）

本土坑は調査区東端のＩ５グリッドに位置し、ＬⅢ上面より検出した。重複する遺構はない。本遺構から南西に4.5ｍほど離れて２号土坑が隣接する。

堆積土は３層に分層した。ℓ１は黒色粘質土、ℓ２・３は黒褐色粘質土で、ℓ２・３は、含有物の違いから細分した。それらはレンズ状堆積することから自然堆積土とみられる。

平面形は長軸約104cm、短軸約90cmの楕円形で、検出面からの深さは最深で28cmである。底面は皿状に窪み、周壁はほぼ直立する。主軸方向はＮ25°Ｅである。

遺物は、ℓ１より縄文土器片３点、土師器片１点が出土したが、細片で、表面が磨滅しているため図示しなかった。出土した縄文土器は、付近より縄文時代晩期の資料を確認しているため、当該期のものの可能性がある。

本遺構の具体的な時期や用途は不明である。（廣　川）

２号土坑　ＳＫ02（図13・16、写真18・26）

本土坑は調査区東端のＩ６グリッドに位置し、ＬⅢ上面より検出した。重複する遺構はない。本遺構の南に約1.5ｍには９号土坑、北東方向に約4.5ｍには１号土坑が配置される。

堆積土は黒褐色粘質土を基調とし、含有物の違いから２層に分層した。それらはレンズ状堆積することから自然堆積土とみられる。

平面形は長軸約104cm、短軸約84cmの楕円形で、検出面からの深さは最深で22cmである。底面は平坦で、周壁はほぼ直立する。主軸方向はＮ70°Ｗである。

出土遺物は土師器片16点、須恵器片９点が出土したが、ほとんどが細片でどれも検出面からのものである。中には、付近から出土した非ロクロ成形の杯や須恵器の大甕等と同一個体とみられるものも含まれていた。そのうち図示したものは、図16－１の須恵器のこね鉢１点である。器形は、底部から口縁部まで直線的に外傾する筒状のもので、底部が厚く、外側に張り出ている。底部の周

縁は手持ちヘラケズリが施され、底面には細い串状のものを斜め方向から無数に刺突している。胎土は緻密で、堅牢である。

本遺構の用途は不明であるが、時期については、遺構周辺や検出面から出土した遺物から８世紀後半頃のものと考えられる。（廣　川）

３号土坑　ＳＫ03（図13・16、写真18・27）

本土坑は調査区南東隅のＩ７グリッドに位置し、ＬⅢ上面より検出した。重複する遺構はない。本遺構から北に約５ｍ離れて９号土坑、２号土坑が配置される。

堆積土は黒褐色粘質土を基調とし、含有物の違いから２層に分層した。ℓ２は、壁際に三角堆積することから自然堆積土とみられる。

平面形は長軸約104㎝、短軸約98㎝のおよそ円形で、検出面からの深さは最深で35㎝である。底面は平坦で、周壁はほぼ直立する。主軸方向はＮ10°Ｗである。

出土遺物は土師器、須恵器片等８点で、そのうち図示したものは検出面から出土した図16－２の土師器杯と同図３の須恵器杯の２点である。２は非ロクロ成形の杯で、器形は平底で、口縁部がわずかに内湾する。外面には体部全体に横方向に手持ちヘラケズリが施されており、底部にはムシロ状の圧痕が認められる。３は底部周辺しか残らないが、回転糸切り痕が認められ、底部から体部にかけて内湾気味に立ち上がっている。

この２点以外は、表面や接合部分が磨滅して図示できなかったが、堆積土中からは同一個体の土師器の鉢ないし甕とみられる土器が出土している。

本遺構の用途は不明であるが、時期については、本遺構とその周辺から出土した遺物から８世紀後半頃のものと考えられる。（廣　川）

４号土坑　ＳＫ04（図13、写真18）

本土坑はＥ７グリッドに位置し、ＬⅢ上面より検出した。重複する遺構はない。本遺構の南側には、落し穴とみられる５号土坑、６号土坑が配置される。

平面形は隅丸長方形を呈し、底面は北から南にかけて緩やかに傾斜する。周壁は底部から上端に向かって開いている。規模は、長軸163㎝、短軸82㎝、検出面からの深さは118㎝である。主軸方向はＮ75°Ｗである。

底面の西端には楕円形の浅い小穴が確認された。小穴の規模は長軸29㎝、短軸23㎝、深さは底面から３㎝を測る。

堆積土は３層に分けた。ℓ１・２は、１～２㎝程度の白色礫を含んだ黒褐色粘質土である。これらの層はレンズ状の堆積状況を示すことから、自然流入土と考えられる。ℓ３はグライ化している。

本土坑は、形態から落し穴と考えられる。遺構の機能時期は縄文時代であろうが、出土遺物がなく、詳細な時期は不明である。調査区内からは複数の落し穴が確認されており、ほぼ同時期に機能

したものとみられる。　（由　井）

５号土坑　ＳＫ05（図13、写真18）

本土坑はＥ７グリッドに位置し、ＬⅢ上面より検出した。重複する遺構はない。本遺構と隣接して北側に４号土坑、南側に６号土坑が配置される。

堆積土は３層に分けた。ℓ１・２は黒褐色粘質土であるが、ℓ１は0.5～１㎝程度の白色礫粒を多量、ℓ２は１㎝程度の白色礫細粒を微量含んでいる。ℓ３は基盤層主体の土が堆積している。これらの層はレンズ状の堆積状況を示すことから、自然流入土と考えられる。

平面形は歪んだ隅丸長方形を呈し、底面はほぼ平坦である。規模は、長軸107㎝、短軸65㎝、検出面からの深さは62㎝である。主軸方向はＮ30°Ｅである。

底面の中央東寄りに楕円形の浅い小穴が確認された。小穴の規模は長軸38㎝、短軸21㎝、深さは底面から８㎝を測る。

本土坑は、形態から落し穴と考えられる。遺構の機能時期は縄文時代であろうが、出土遺物がなく、詳細な時期は不明である。同様の落し穴と考えられる４号土坑、６号土坑とは主軸方向が異なっており、本遺構の規模が小さいため、時期差があるのかもしれない。　（由　井）

６号土坑　ＳＫ06（図13、写真19）

本土坑はＥ７グリッドに位置し、ＬⅢ上面より検出した。重複する遺構はない。本遺構の北側には４号土坑、５号土坑が配置される。

堆積土は３層に分けた。基本土層のＬⅡｂを由来とする黒褐色粘質土を基調とし、含有物や色調がやや異なっている。これらの層はレンズ状の堆積状況を示すことから、自然流入土と考えられる。

平面形は隅丸長方形を呈し、底面ほぼ平坦である。周壁は底部からほぼ垂直に立ち上がり、上端付近は外側に開いている。規模は、長軸145㎝、短軸88㎝、検出面からの深さは127㎝である。主軸方向は、ほぼ東西方向に等しい。

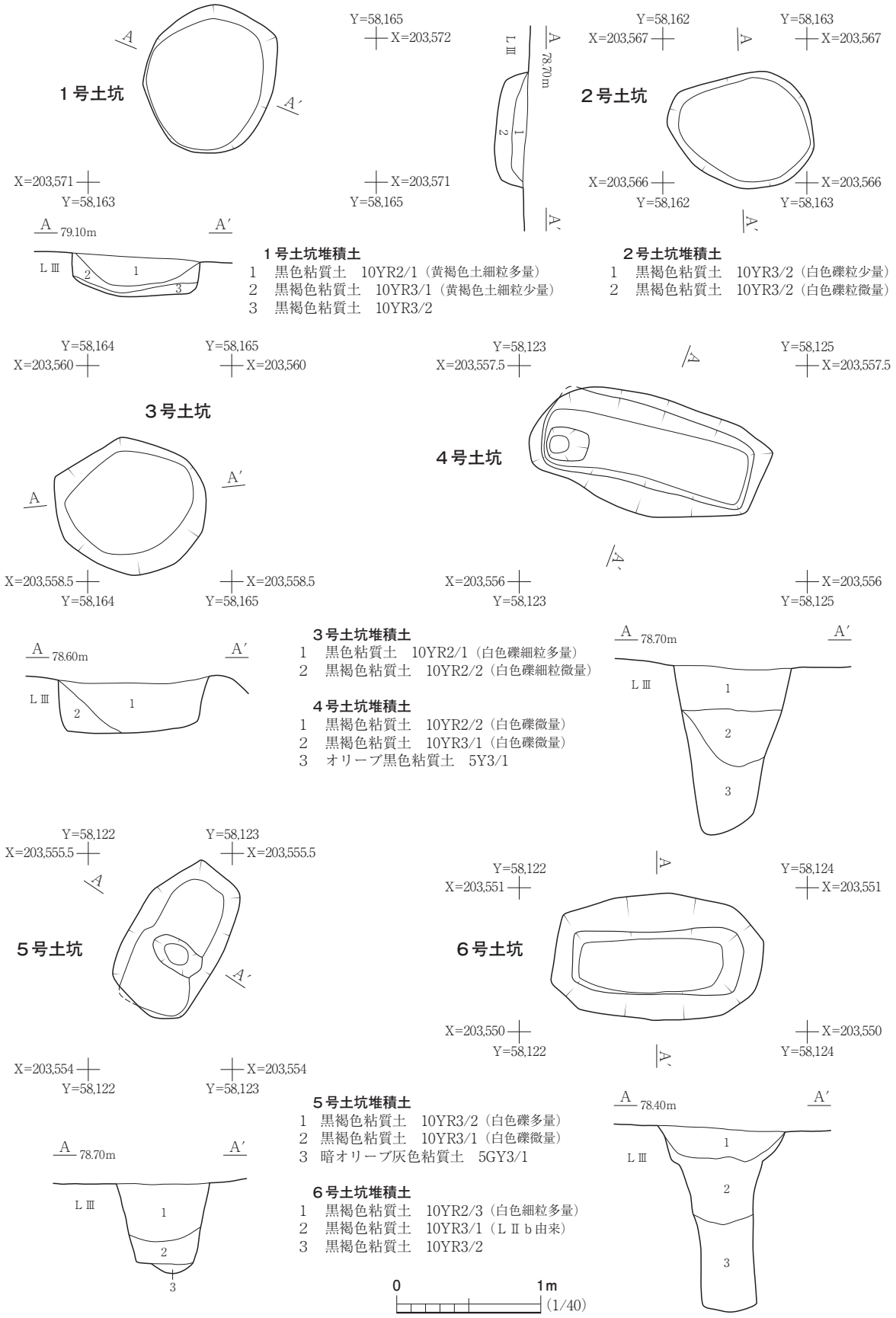
本土坑は、形態から落し穴と考えられる。遺構の機能時期は縄文時代であろうが、出土遺物がなく、詳細な時期は不明である。調査区内から複数検出している落し穴の一つであるが、そのうちの４号土坑とは規模や形状、主軸方向が近似している。　（由　井）

７号土坑　ＳＫ07（図14、写真18）

本土坑は調査区東部のＧ４、Ｈ４グリッドにかけて位置し、ＬⅢ上面より検出した。重複する遺構はない。本遺構の南側約３ｍには同規模の10号土坑が、北東側約５ｍには11号土坑、南西側約3.5ｍには12号土坑が配置されている。

堆積土は単層で、細かい白色礫を含んだ黒褐色粘質土である。

平面形は長軸約84㎝、短軸約78㎝のほぼ円形で、検出面からの深さは最深で26㎝である。底面



１号土坑堆積土
1　黒色粘質土　10YR2/1（黄褐色土細粒多量）
2　黒褐色粘質土　10YR3/1（黄褐色土細粒少量）
3　黒褐色粘質土　10YR3/2

２号土坑堆積土
1　黒褐色粘質土　10YR3/2（白色礫粒少量）
2　黒褐色粘質土　10YR3/2（白色礫粒微量）

３号土坑堆積土
1　黒色粘質土　10YR2/1（白色礫細粒多量）
2　黒褐色粘質土　10YR2/2（白色礫細粒微量）

４号土坑堆積土
1　黒褐色粘質土　10YR2/2（白色礫微量）
2　黒褐色粘質土　10YR3/1（白色礫微量）
3　オリーブ黒色粘質土　5Y3/1

５号土坑堆積土
1　黒褐色粘質土　10YR3/2（白色礫多量）
2　黒褐色粘質土　10YR3/1（白色礫微量）
3　暗オリーブ灰色粘質土　5GY3/1

６号土坑堆積土
1　黒褐色粘質土　10YR2/3（白色細粒多量）
2　黒褐色粘質土　10YR3/1（ＬⅡｂ由来）
3　黒褐色粘質土　10YR3/2

図13　１～６号土坑

は凹凸があり、周壁は直立する。

出土遺物が認められず、本遺構の具体的な時期や用途は不明である。（廣　川）

８号土坑　ＳＫ08（図14、写真19）

本土坑は調査区南西隅のＤ８・９グリッドに位置し、ＬⅢ上面より検出した。重複する遺構はない。落し穴とみられる４～６号土坑の一群は、北東方向に約11ｍ離れて配置される。

平面形は隅丸長方形を呈し、底面は北西部分が平坦で南北方向は北側へ傾斜している。周壁は底部から上端に向かって開いている。規模は、長軸177㎝、短軸104㎝、検出面からの深さは166㎝である。主軸方向はＮ40°Ｗである。

堆積土は２層に分けた。ℓ１は基本土層のＬⅡｂ由来の砂礫を多量に含んだ黒褐色粘質土である。ℓ２はグライ化しており、細分できなかった。これらの層は、レンズ状の堆積状況を示すことから、自然流入土と考えられる。

本土坑は、形態から落し穴と考えられる。遺構の機能時期は縄文時代であろうが、出土遺物がなく、詳細な時期は不明である。調査区内からは複数の落し穴が検出されているが、調査区東部に配置される11・12号土坑とは規模や形状、主軸方向が近似している。（由　井）

９号土坑　ＳＫ09（図14・16、写真19・27）

本土坑は調査区南東隅のＩ６グリッドに位置し、ＬⅢ上面より検出した。重複する遺構はない。本遺構から北に約1.5ｍ離れて２号土坑が配置される。

堆積土は２層に分層し、ℓ１の白色粘土をレンズ状に含んだ黒褐色粘質土を主体とし、ℓ２が周壁際にのみ認められる。断定はできないが、ℓ２の堆積状況から、ℓ２はなんらかの外枠の痕跡である可能性が考えられる。

平面形は長軸約48㎝、短軸約46㎝の円形で、検出面からの深さは最深で10㎝である。底面は平坦で、周壁はほぼ直立する。

出土遺物は土師器・須恵器片等21点で、そのうち図示したものは図16－４の土師器杯と５の須恵器杯の２点である。それらは比較的底部が大きく、底部から直線的に外傾する逆台形型の器形である。４は、底部に回転糸切り痕が残り、底部の一部とその周縁を手持ちヘラケズリで調整されている。内面は放射状にヘラミガキが施され、黒色処理される。５は、底部の切り離しが回転ヘラ切りである。

本遺構の時期の詳細や用途は不明である。時期については、検出面から出土した遺物から８世紀後葉から９世紀初頭頃のものと考えられる。（廣　川）

10号土坑　ＳＫ10（図14、写真19）

本土坑は調査区東部のＨ５グリッドに位置し、ＬⅢ上面より検出した。重複する遺構はない。本

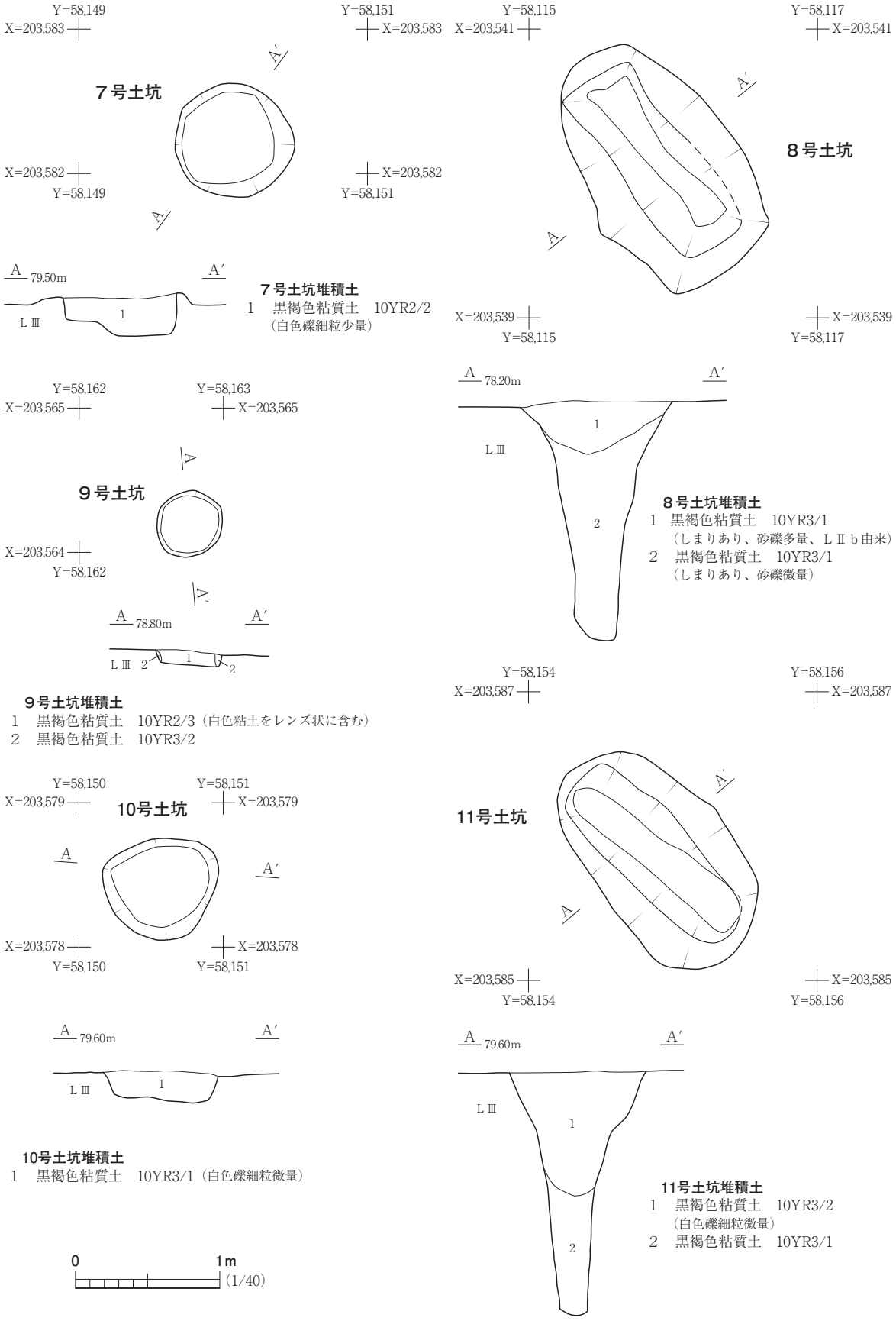

Y=58,149
X=203,583
Y=58,151
X=203,583
７号土坑
A′
A
X=203,582
Y=58,149
X=203,582
Y=58,151
A 79.50m
A′
L Ⅲ
1
７号土坑堆積土
1　黒褐色粘質土　10YR2/2
（白色礫細粒少量）
Y=58,115
X=203,541
Y=58,117
X=203,541
８号土坑
A′
A
X=203,539
Y=58,115
X=203,539
Y=58,117
A 78.20m
A′
1
L Ⅲ
2
８号土坑堆積土
1　黒褐色粘質土　10YR3/1
（しまりあり、砂礫多量、ＬⅡｂ由来）
2　黒褐色粘質土　10YR3/1
（しまりあり、砂礫微量）
Y=58,162
X=203,565
Y=58,163
X=203,565
９号土坑
A
A′
X=203,564
Y=58,162
A 78.80m
A′
L Ⅲ
2
1
2
９号土坑堆積土
1　黒褐色粘質土　10YR2/3（白色粘土をレンズ状に含む）
2　黒褐色粘質土　10YR3/2
Y=58,154
X=203,587
Y=58,156
X=203,587
11号土坑
A′
A
X=203,585
Y=58,154
X=203,585
Y=58,156
A 79.60m
A′
L Ⅲ
1
2
11号土坑堆積土
1　黒褐色粘質土　10YR3/2
（白色礫細粒微量）
2　黒褐色粘質土　10YR3/1
Y=58,150
X=203,579
Y=58,151
X=203,579
10号土坑
A
A′
X=203,578
Y=58,150
X=203,578
Y=58,151
A 79.60m
A′
L Ⅲ
1
10号土坑堆積土
1　黒褐色粘質土　10YR3/1（白色礫細粒微量）
0
1m
（1/40）

図14　７～11号土坑

遺構から北に約３ｍには同規模の７号土坑、北西に約3.5ｍには落し穴とみられる12号土坑が配置されている。

堆積土は単層で、細かい白色礫を含んだ黒褐色粘質土である。

平面形は長軸約82㎝、短軸約72㎝の不整な円形で、検出面からの深さは最深で18㎝である。底面には凹凸があり、周壁はほぼ直立する。主軸方向はＮ55°Ｅである。

出土遺物が認められず、本遺構の具体的な時期や用途は不明である。（廣　川）

11号土坑　ＳＫ11（図14、写真19）

本土坑は調査区壁際のＨ４グリッドに位置し、ＬⅢ上面より検出した。重複する遺構はない。本遺構の南西側には７・10・12号土坑が配置される。

堆積土は２層に分けた。２層とも黒褐色粘質土であるが、ℓ１は白色礫細粒を微量含んでいる。これらの層はレンズ状の堆積状況を示すことから、自然流入土と考えられる。

平面形は歪んだ長楕円形を呈し、底面は中央に向かって窪んでいる。周壁は底部からほぼ垂直に立ち上がり、中間から上端に向かって開いている。規模は、長軸169㎝、短軸97㎝、検出面からの深さは168㎝である。主軸方向はＮ50°Ｗである。

本土坑は、形態から落し穴と考えられる。遺構の機能時期は縄文時代であろうが、出土遺物がなく、詳細な時期は不明である。調査区内からは複数の落し穴が検出されているが、本遺構の南西方向に約９ｍ離れて位置する12号土坑とは規模や形状、主軸方向が一致している。（由　井）

12号土坑　ＳＫ12（図15、写真20）

本土坑はＧ４・５グリッドに位置し、ＬⅢ上面より検出した。重複する遺構はない。本遺構の東側には、７・10・11号土坑が配置される。

平面形は歪んだ長楕円形を呈し、底面はほぼ平坦である。周壁は底部から上端に向かって開いている。規模は、長軸171㎝、短軸81㎝、検出面からの深さは169㎝である。主軸方向はＮ35°Ｗである。

堆積土は２層に分けた。２層とも黒褐色粘質土であるが、ℓ１は白色礫粒を微量含んでいる。これらの層はレンズ状の堆積状況を示すことから、自然流入土と考えられる。

本土坑は、形態から落し穴と考えられる。遺構の機能時期は縄文時代であろうが、出土遺物がなく、詳細な時期は不明である。調査区内からは複数の落し穴が検出されているが、本遺構の北東方向に約９ｍ離れて位置する11号土坑とは規模や形状、主軸方向が近似している。（由　井）

13号土坑　ＳＫ13（図15、写真20）

本土坑は調査区西部北寄りのＣ４グリッドに位置し、ＬⅢ上面より検出した。重複する遺構はない。本遺構から北に約５ｍには17号土坑、約9.5ｍには16号土坑が配置されている。

堆積土は黒褐色土を基調とし、含有物の違いにより２層に分層した。レンズ状堆積を示すことか

ら、自然堆積土とみられる。

平面形は長軸約126cm、短軸約94cmの楕円形で、検出面からの深さは最深で10cmである。底面はやや凹凸があるものの、周壁はほぼ直立する。主軸方向はＮ30°Ｅである。

出土遺物が認められず、本遺構の時期や用途は不明である。（廣　川）

14号土坑　ＳＫ14（図15、写真20）

本土坑は調査区中央やや東よりのＧ６グリッドに位置し、ＬⅢ上面より検出面した。重複する遺構はない。周囲からは建物跡の柱穴とみられる小穴群が確認されている。

平面形は長楕円形を呈し、周壁は底部から上端に向かって開いている。南北中壁はオーバーハングし、底面はほぼ平坦である。規模は、長軸197cm、短軸99cm、検出面からの深さは154cmである。底面の南端には円形の浅い小穴が構築される。小穴の直径は47cm、深さは底面から８cmを測る。主軸方向はＮ25°Ｗである。

堆積土は２層に分けた。２層とも黒褐色土であるが、含有物の多寡により分層した。ℓ１は白色礫細粒を多量、ℓ２は白色礫細粒を微量含んでいる。ℓ２は還元作用を受けグライ化している。これらの層はレンズ状の堆積状況を示すことから、自然流入土と考えられる。

本土坑は、形態から落し穴と考えられる。遺構の機能時期は縄文時代であろうが、出土遺物がなく、詳細な時期は不明である。８・11・12号土坑とは規模や主軸方向が近似するが、他の落し穴に比べて、やや短軸幅が広く寸胴である。（由　井）

15号土坑　ＳＫ15（図15・16、写真20・27）

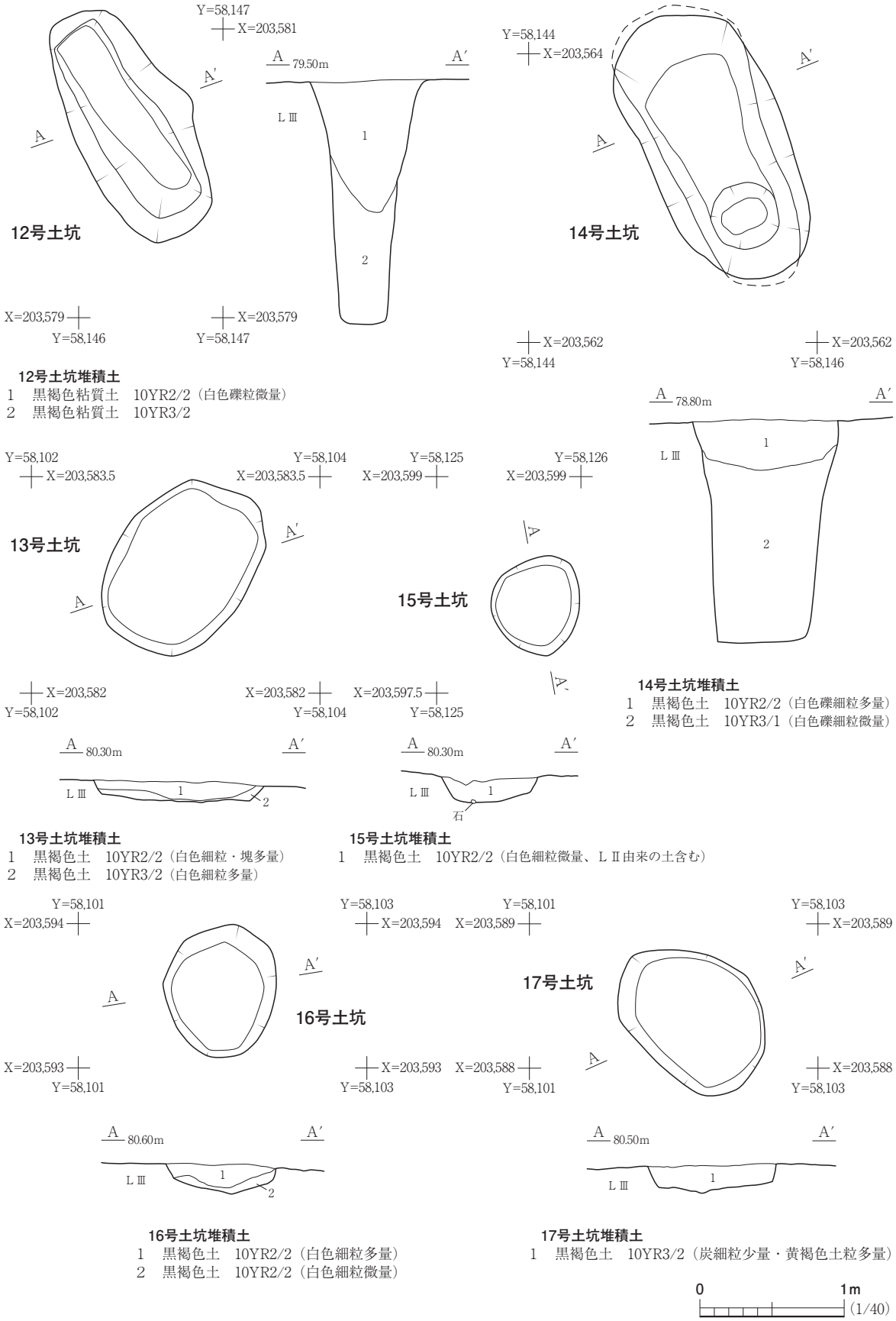
本土坑は調査区北部のＥ３グリッドに位置し、ＬⅢ上面より検出した。重複する遺構はない。本遺構から西に約９ｍ離れて２号溝跡が南北に延びる。

堆積土は単層で、基本土層のＬⅡｂを由来とする土を含む黒褐色土である。

平面形は長軸約68cm、短軸約62cmの不整な円形で、検出面からの深さは最深で18cmである。底面は皿状に窪み、周壁はほぼ直立する。主軸方向はＮ10°Ｗである。

出土遺物は土師器片27点で、そのうちの土師器甕２点を図16に示した。どちらも底部から体部下半までしか残っていない。６は底部が小さく薄手のつくりで、外面には平行タタキが認められ、底部近くは縦方向にヘラケズリが施されている。内面の底部近くには縦方向にヘラナデが認められる。７は外面に縦方向のヘラケズリ、内面に横方向のハケメが認められる。また、外面には煤やカマド設置に伴う粘土が付着している。また、底部外面にはカマド支脚の痕跡が円形に残される。

本遺構の用途は不明であるが、出土遺物から奈良時代から平安時代にかけてのものとみられる。調査区内からは確認できなかったが、７の土師器甕にカマドの設置痕跡があることから、周囲に竪穴住居跡が存在し、集落が営まれていたことが推察される。（廣　川）



12号土坑堆積土
1　黒褐色粘質土　10YR2/2（白色礫粒微量）
2　黒褐色粘質土　10YR3/2

14号土坑堆積土
1　黒褐色土　10YR2/2（白色礫細粒多量）
2　黒褐色土　10YR3/1（白色礫細粒微量）

13号土坑堆積土
1　黒褐色土　10YR2/2（白色細粒・塊多量）
2　黒褐色土　10YR3/2（白色細粒多量）

15号土坑堆積土
1　黒褐色土　10YR2/2（白色細粒微量、ＬⅡ由来の土含む）

16号土坑堆積土
1　黒褐色土　10YR2/2（白色細粒多量）
2　黒褐色土　10YR2/2（白色細粒微量）

17号土坑堆積土
1　黒褐色土　10YR3/2（炭細粒少量・黄褐色土粒多量）

図15　12～17号土坑

16号土坑　ＳＫ16（図15、写真20）

本土坑は調査区北西隅のＣ３グリッドに位置し、ＬⅢ上面より検出した。重複する遺構はない。本遺構から南に約４ｍには17号土坑、約9.5ｍには13号土坑が配置されている。

堆積土は基本土層のＬⅡｂを由来とする黒褐色土を基調とし、含有物の違いにより２層に分層した。それらがレンズ状堆積を示すことから、自然堆積土とみられる。主軸方向はＮ15°Ｅである。

平面形は長軸約94cm、短軸約78cmの不整な楕円形で、検出面からの深さは最深で22cmである。底面は皿状に窪み、周壁はほぼ直立する。

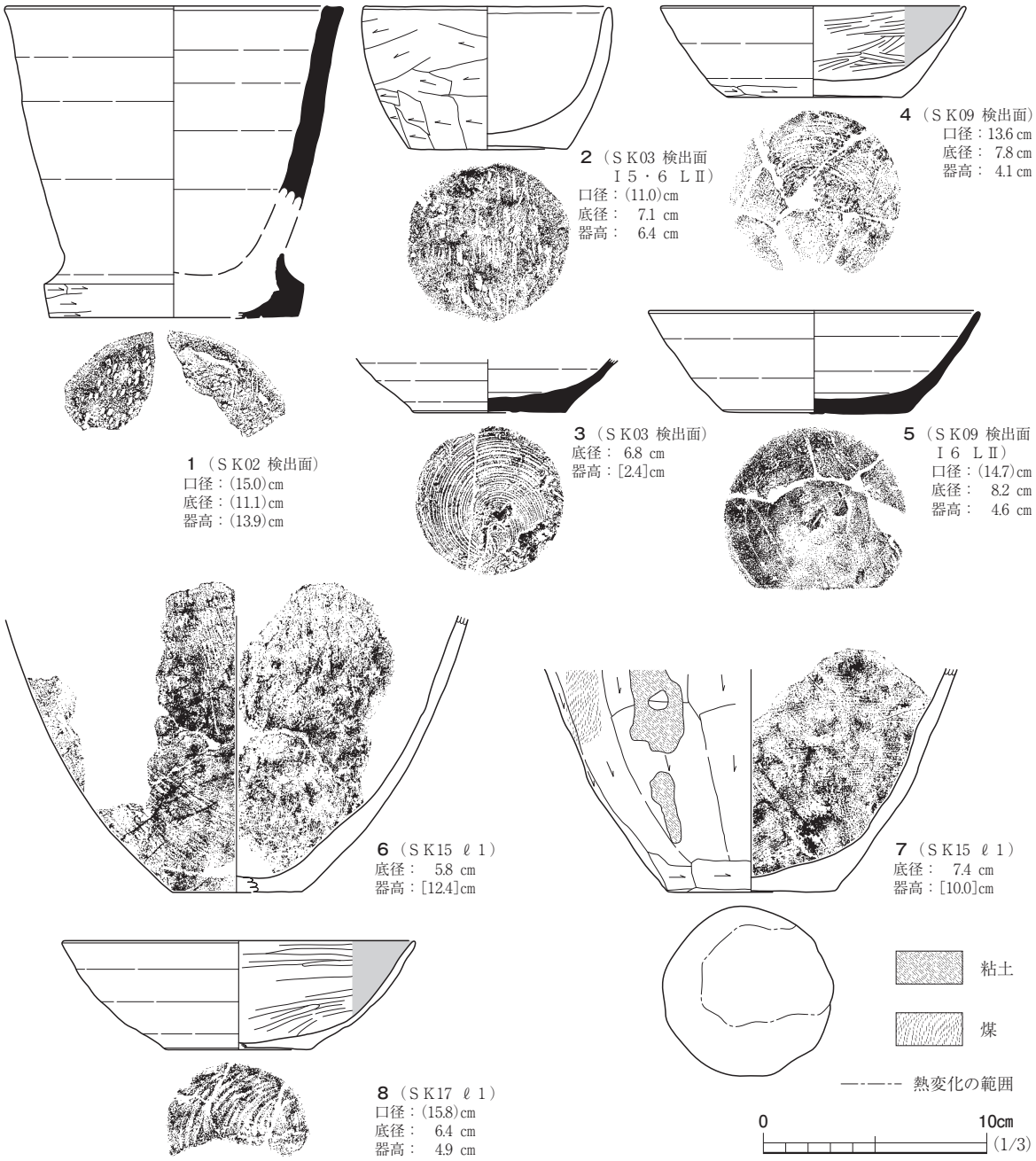


図16　土坑出土遺物

出土遺物が認められず、本遺構の具体的な時期や用途は不明である。　（廣　川）

17号土坑　ＳＫ17（図15・16、写真20）

本土坑は調査区北西部のＣ４グリッドに位置し、ＬⅢ上面より検出した。重複する遺構はない。本遺構から北に約４ｍには16号土坑、南に約５ｍには13号土坑が配置されている。

堆積土は単層で、基本土層のＬⅡｂを由来とする黒褐色土である。

平面形は長軸約116㎝、短軸約86㎝の不整な楕円形で、検出面からの深さは最深で14㎝である。底面は皿状に窪み、周壁はほぼ直立する。主軸方向はＮ45°Ｗである。

出土遺物は土師器片11点で、そのうち図16－８の土師器杯１点を図示した。８は底部に回転糸切り痕が残り、内面はヘラミガキが施され黒色処理される。器形は底部から緩やかに立ち上がり、口縁部がわずかに外反する。

本遺構の用途は不明であるが、出土遺物から９世紀後半頃のものとみられる。　（廣　川）

第６節　溝　跡

今回の調査で発見された溝跡は２条である。それらは等高線に直交して南北方向に延びていることから、用排水等に関連する溝跡とみられる。

１号溝跡　ＳＤ01（図17）

本遺構は、調査区南部のＥ７グリッドに位置し、ＬⅢ上面で検出された。２号建物跡とは直接の重複関係はないが同地点にあり、西側には落し穴とみられる４・５・６号土坑が配置される。

本遺構の堆積土は単層で、灰褐色砂質土が認められた。全長約５ｍでほぼ真北方向に直線的に延びており、北端部分がわずかに窪んでいる。最大幅は42㎝で、断面はＵ字状となり、検出面からの深さは12㎝ほどで、端部の窪みがやや深く20㎝を測る。

遺物は土師器の杯、甕類を中心に102点が出土した。細片が多く、図示したのは図17－１の１点である。１は土師器の杯で、底部に回転糸切り痕、内面にはヘラミガキ、黒色処理が認められる。

本遺構の用途は不明であるが、等高線と直交して延びることから用排水の機能を有していたと推測される。時期は、出土遺物から平安時代以降のものとみられる。　（廣　川）

２号溝跡　ＳＤ02（図17、写真21）

本遺構は、調査区北部のＤ２・３・４グリッドに位置し、ＬⅢ上面で検出された。調査区西部に南北方向に延びる旧沢の北部と重複しており、沢が埋まってからその延長上に掘り込まれ、調査区外へ続いている。なお、旧沢は落し穴とみられる８号土坑と重複しており、埋まった時期は８号土坑の構築以前である。

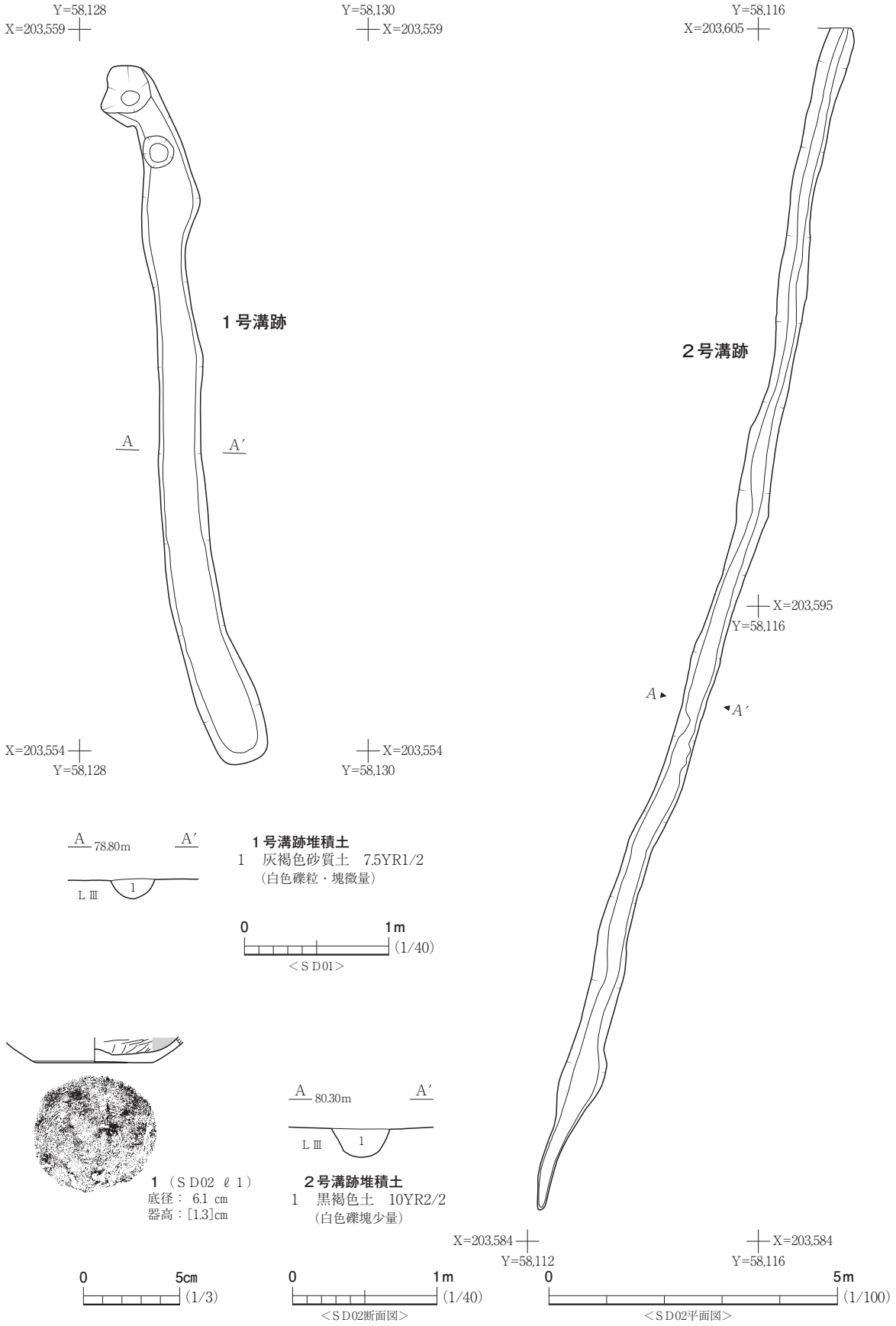


図17　１・２号溝跡・出土遺物

本遺構の堆積土は単層で、ＬⅡｂ由来の黒褐色土である。検出された部分の全長は約21ｍで、Ｎ20°Ｅ方向に直線的に延びている。幅は全体を通して50cmに満たず、断面はＵ字状であるが凹凸がみられ、深さは検出面から40cm前後である。

出土遺物は土師器片５点で、細片のため図示はできなかった。

本遺構の時期や用途は不明であるが、等高線と直交して延びることから、用排水の機能を有していたと推測される。（廣　川）

第７節　その他の遺構

その他の遺構としては、性格不明遺構１基と小穴群が検出された。１号性格不明遺構は１号建物跡の東隣に配置され、小穴群については一部が調査区北部から確認されるが、１号建物跡と２号建物跡の南東側に集中している。それらは、１・２号建物跡とおよそ同時期のものとみられる。

１号性格不明遺構　ＳＸ01

遺　　構（図18、写真23）

本遺構は、調査区中央のＦ５グリッドに位置し、ＬⅢ上面より検出した。重複する遺構はない。重機による表土除去の段階から隅丸方形の範囲が確認され、竪穴住居跡を想定して調査を進めたが、底面が一定せず段状に下がっているため用途不明の竪穴状の窪地と判断した。

堆積土は３層に分層した。ℓ１・２は自然堆積土で、周囲から流れ込んだものとみられ、炭化材、炭化物粒を多く含んでいる。なお、炭化材２点を樹種同定した結果、コナラ節とヌルデであった。ℓ３は底面上に一定の厚さで堆積し、ＬⅢ塊を斑状に含んでいることから人為的に埋められた層と考えられる。西壁の一部で確認されたℓ３′は、壁の崩落土と考えられる。

大きさは長軸約400cm、短軸約340cmで、やや南北軸に細長い隅丸方形である。主軸方向はＮ20°Ｗである。深さは北西隅の最深部分で40cmを測るが、南は浅く、北に行くに従って段階的に深くなっている。北西隅の一角は皿状に窪んだ形状となっており、底面には長さ約60cmの角礫が認められた。底面の平たい部分は、若干の凹凸がありながらも南から北へ緩く傾斜している。

遺　　物（図18、写真27）

出土遺物は、土師器を中心に130点が出土するが、細片が多い。このうち、３点を図18に示した。１は土師器の杯で、内面黒色処理が施されている。２は緑釉陶器片で、碗の口縁部片である。胎土の緻密な薄手の作りで、暗オリーブ灰色の釉が認められる。３は箆状石器である。

ま と め

本遺構は、廃絶後に人為的に埋められている。その後、遺物の多くが浅い窪地となったところに流れ込んだものとみられる。出土した炭化材２点の放射性炭素年代は９世紀初め頃を示すが、出土遺物は周辺の遺構から出土するものと大きな違いが認められず、少なくとも建物跡や井戸跡が機能

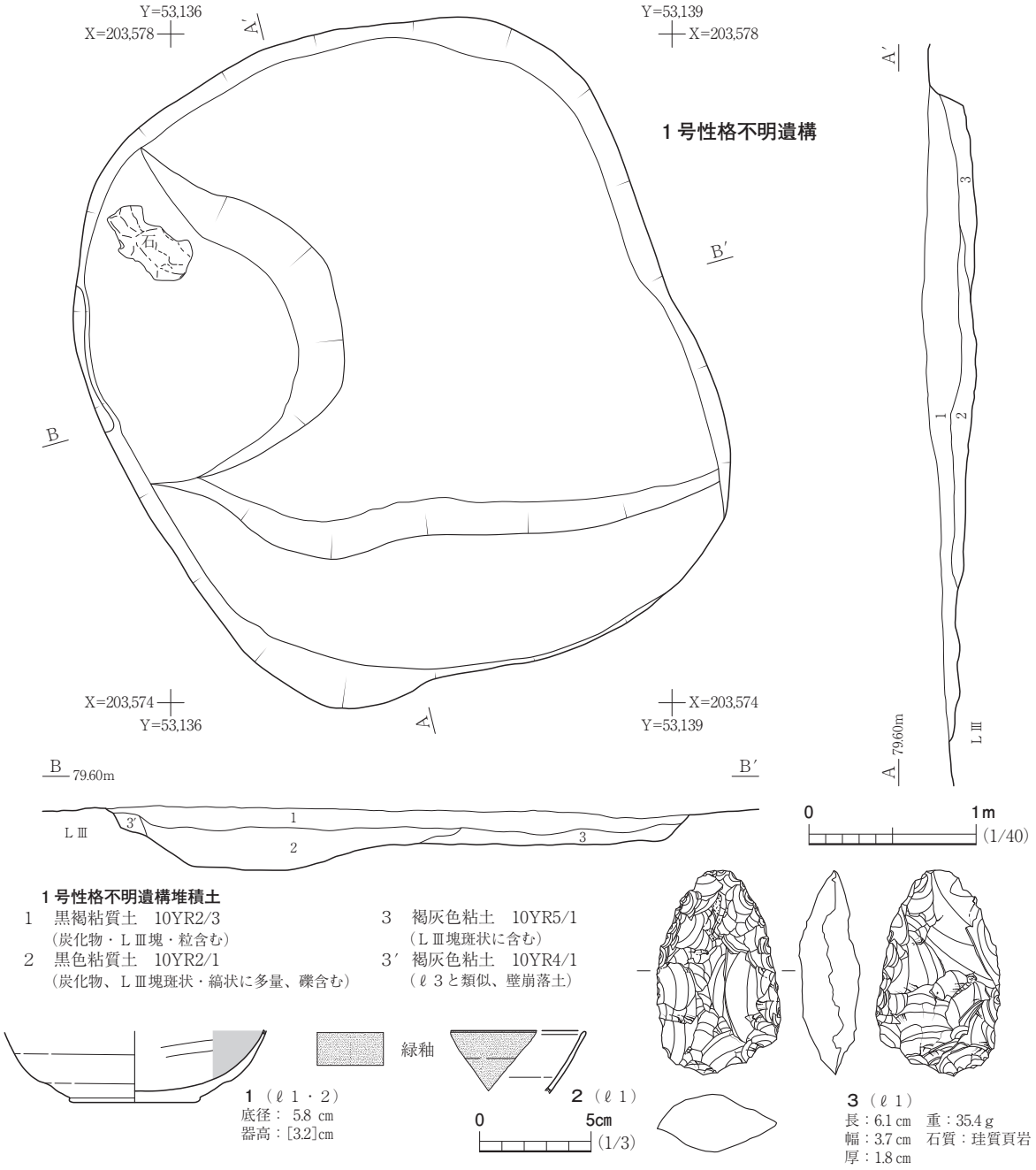


図18　１号性格不明遺構・出土遺物

していた時期には窪地となって残っていたものと考えられる。　（廣　川）

小 穴 群（図19～21、写真24・25）

検出した小穴は62基である。小穴はグリッドごとに番号を付け、表１に、長軸(cm)、短軸(cm)、深さ(cm)、堆積土等の所見をまとめた。検出面は大半がＬⅢ上面だが、ＬⅡ中から確認できたものもあった。堆積土はいずれも単層で、黒褐色土を呈するものが多い。なお、Ｄ５Ｐ１～３、Ｅ６Ｐ５・９、Ｆ５Ｐ１、Ｇ６Ｐ６は欠番とした。

調査区北部の３個以外は、小穴群のまとまりは１号建物跡と２号建物跡の間と、２号建物跡の北

東方向に集中している。それらは１・２号建物跡の柱穴と近似しており、同時期に営まれた同様の建物跡の柱穴とみられ、複数の建物の存在が推察される。また、１号建物跡の南側の一群は、南辺に並行して一列に並ぶものもあるため、庇等の関連施設のものとも考えられる。

出土遺物は、土師器片14点である。この他、木片が２点出土した。このうち３点を図示した。なお、木片２点は建物跡の柱穴から認められたものと同様に柱材の可能性が考えられる。図21－１は赤焼き土器で、内面にコテ当て調整が施される。２は土師器の杯で、内面に単位の細いヘラミガキが密に施され、黒色処理される。１・２とも、底部には回転糸切り痕が認められる。３は筒形土器の細片で、輪積み痕が残される。（廣　川）

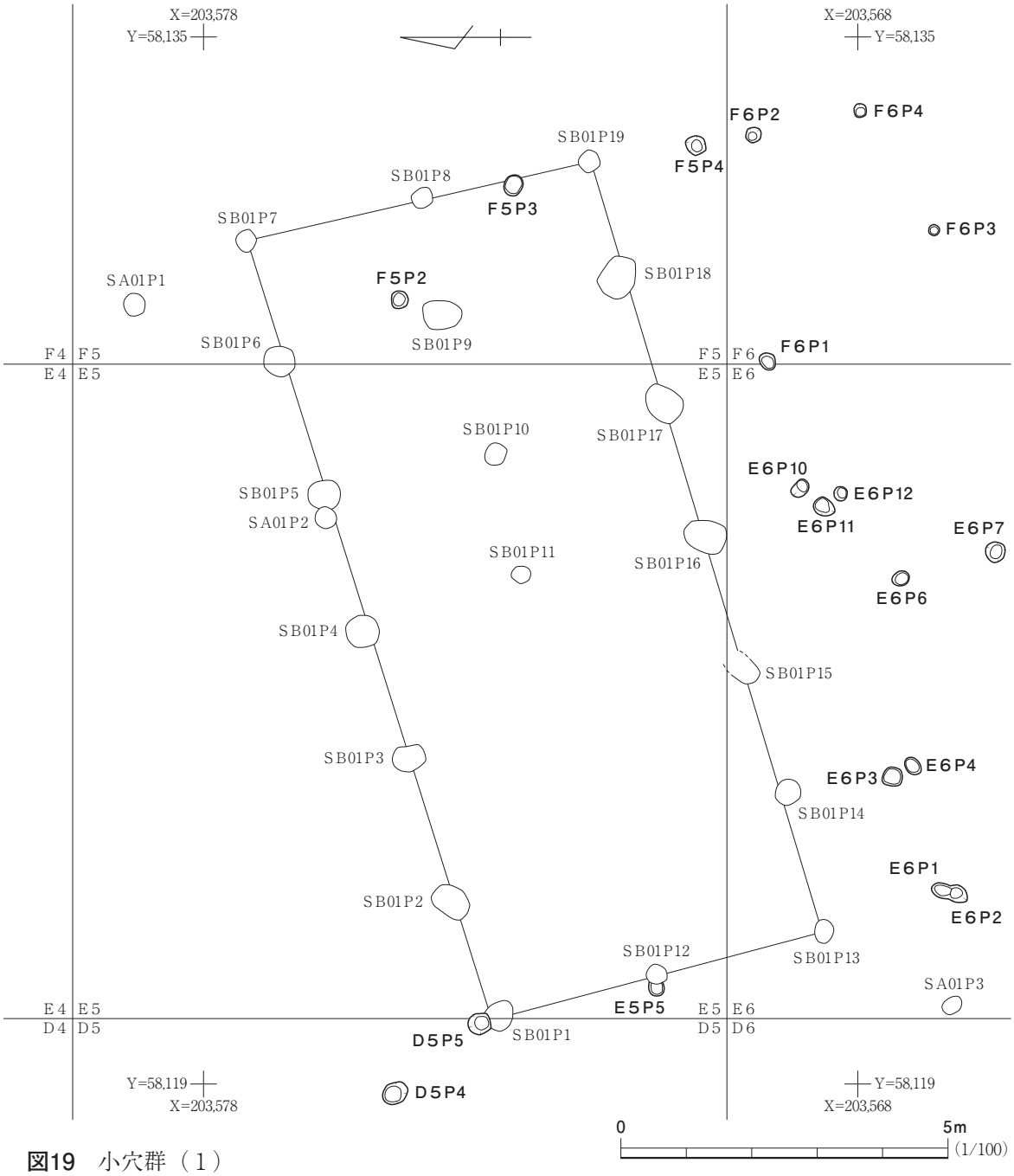


図19　小穴群（１）

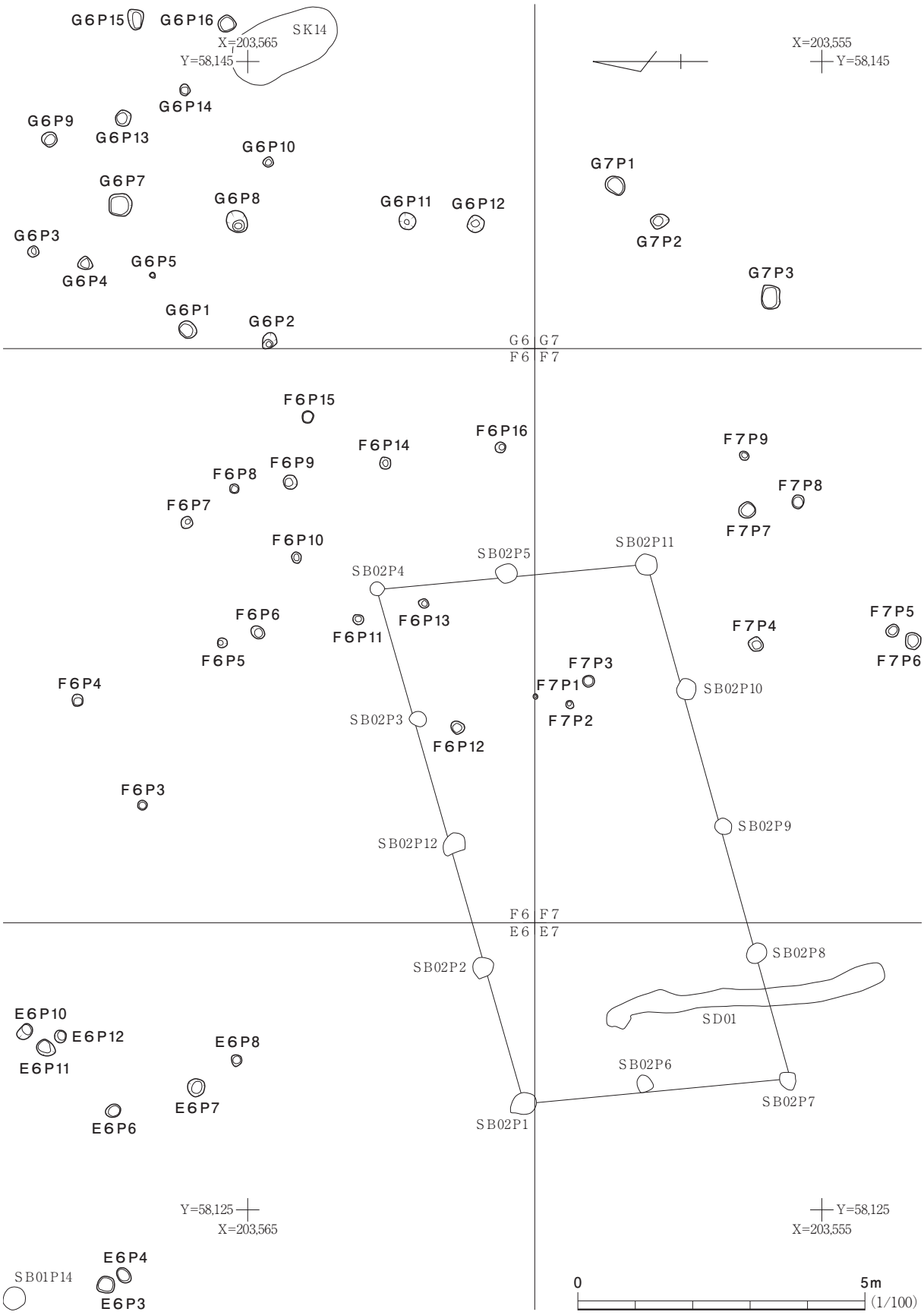

G6P15
G6P16
SK14
X=203,565
Y=58,145
X=203,555
Y=58,145
G6P14
G6P9
G6P13
G6P10
G7P1
G6P7
G6P8
G6P11
G6P12
G7P2
G6P3
G6P5
G6P4
G7P3
G6P1
G6P2
G6 G7
F6 F7
F6P15
F6P16
F7P9
F6P14
F6P9
F6P8
F7P8
F6P7
F7P7
F6P10
SB02P5
SB02P11
SB02P4
F6P6
F6P13
F7P5
F6P11
F7P4
F6P5
F7P6
F7P3
F6P4
F7P1
SB02P10
SB02P3
F7P2
F6P12
F6P3
SB02P9
SB02P12
F6 F7
E6 E7
SB02P8
SB02P2
SD01
E6P10
E6P12
E6P8
E6P11
SB02P6
E6P7
SB02P7
E6P6
SB02P1
Y=58,125
X=203,565
Y=58,125
X=203,555
E6P4
SB01P14
E6P3
0
5m
(1/100)

図20　小穴群（２）

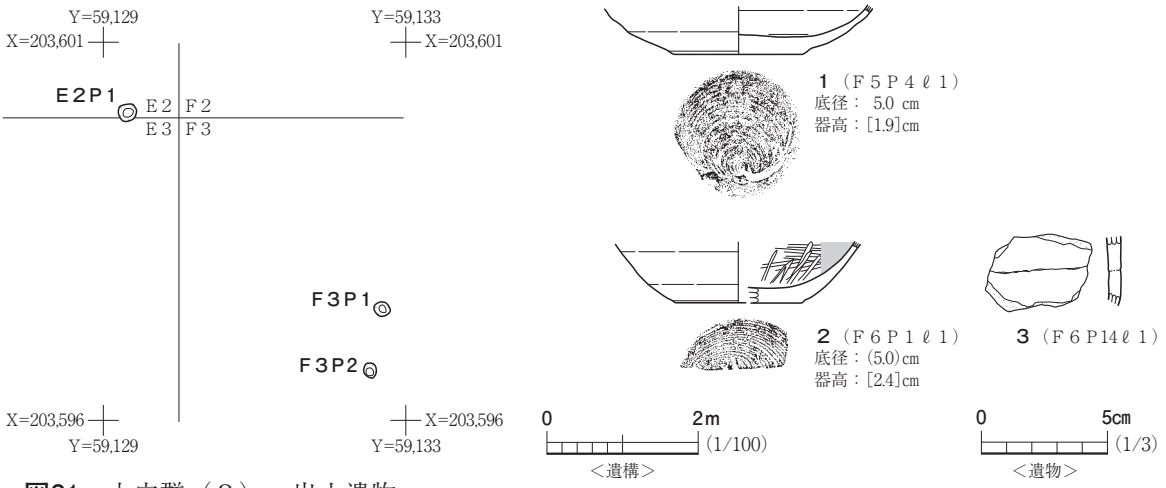


図21　小穴群（３）・出土遺物

表１－１　小穴群一覧

P番号	グリッド	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	堆積土	備　考
4	D5	40	32	14	10YR3/1 黒褐色土(灰白色粘土塊含む)	
5	D5	34	30	25	10YR3/2 黒褐色土(灰白色粘土粒含む)	
1	E2	24	24	6	10YR4/1 褐灰色土(灰白色粘土塊、酸化鉄粒含む)	
5	E5	25	22	21	－	
1	E6	30	23	10	10YR3/3 暗褐色土(黄褐色粘土塊、木片含む)	
2	E6	30	27	12	10YR3/2 黒褐色土(明黄褐粘土含む)	P3→P2
3	E6	34	32	8	10YR3/2 黒褐色土(明黄褐粘土含む)	
4	E6	31	22	8	10YR3/2 黒褐色土(灰色粘土含む)	
6	E6	28	24	26	10YR3/2 黒褐色土(灰白色粘土塊、酸化鉄粒含む)	
7	E6	32	32	27	10YR4/1 褐灰色土(灰白色粘土塊、酸化鉄粒含む)	
8	E6	20	20	21	10YR4/2 灰黄褐色土(黄褐色粘土塊、酸化鉄粒含む)	
10	E6	30	22	27	10YR4/1 褐灰色土(酸化鉄粒含む)	
11	E6	34	27	24	10YR4/1 褐灰色土(酸化鉄粒含む)	
12	E6	22	20	30	10YR4/1 褐灰色土(酸化鉄粒含む)	
1	F3	22	22	23	10YR3/3 暗褐色土(酸化鉄粒含む)	
2	F3	20	18	37	10YR3/2 黒褐色土(酸化鉄粒含む)	
2	F5	26	26	10	10YR3/2 黒褐色土(酸化鉄粒含む)	
3	F5	34	28	28	10YR2/2 黒褐色土(酸化鉄粒、灰白色粘土粒含む)	
4	F5	30	28	17	10YR3/1 黒褐色土(酸化鉄粒含む)	
1	F6	30	24	25	10YR3/1 黒褐色土(酸化鉄粒、黄褐粘土粒含む)	
2	F6	25	24	42	10YR3/1 黒褐色土(酸化鉄粒、黄褐粘土粒含む)	
3	F6	18	18	35	10YR3/2 黒褐色土(灰白色粘土塊、酸化鉄粒含む)	
4	F6	22	22	23	10YR3/1 黒褐色土(灰白色粘土塊、酸化鉄粒含む)	
5	F6	18	18	21	10YR4/2 灰黄褐色土(黄褐色粘土塊、酸化鉄粒含む)	
6	F6	28	20	19	10YR4/1 褐灰色土(灰白色粘土粒、酸化鉄粒含む)	
7	F6	22	20	21	10YR3/1 黒褐色土(灰白色粘土粒、酸化鉄粒含む)	
8	F6	16	16	17	10YR3/2 黒褐色土(黄褐色粘土粒、酸化鉄粒含む)	
9	F6	26	24	12	10YR3/1 黒褐色土(灰白色粘土粒、酸化鉄粒含む)	
10	F6	20	18	31	10YR3/3 暗褐色土(黄褐色粘土粒、酸化鉄粒含む)	
11	F6	18	18	20	10YR3/1 黒褐色土(黄褐色粘土粒、酸化鉄粒含む)	
12	F6	14	10	18	10YR4/1 褐灰色土(灰白色粘土塊、酸化鉄粒含む)	
13	F6	20	18	38	10YR3/2 黒褐色土(酸化鉄粒、木片含む)	
14	F6	24	20	26	10YR3/1 黒褐色土(灰白色粘土粒、黄褐色粘土粒含む)	
15	F6	22	20	7	10YR3/2 黒褐色土(灰白色粘土塊)	
16	F6	20	20	35	10YR3/2 黒褐色土(灰白色粘土粒、酸化鉄粒含む)	
1	F7	10	8	20	10YR3/1 黒褐色土(酸化鉄粒含む)	
2	F7	12	12	16	10YR3/2 黒褐色土(酸化鉄粒、黄褐粘土粒含む)	
3	F7	12	10	22	10YR3/2 黒褐色土(酸化鉄粒、黄褐粘土粒含む)	
4	F7	28	26	21	10YR3/1 黒褐色土(酸化鉄粒含む)	
5	F7	24	20	18	10YR5/2 灰黄褐色土(酸化鉄粒含む)	
6	F7	30	30	17	10YR5/2 灰黄褐色土(酸化鉄粒含む)	
7	F7	30	28	22	－	

表１－２　小穴群一覧

Ｐ番号	グリッド	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	堆積土	備　考
8	F7	24	20	24	－	
9	F7	20	14	32	－	
1	G6	28	32	19	10YR3/3 暗褐色土(黄褐色粘土塊、酸化鉄粒含む)	
2	G6	32	28	16	10YR3/2 黒褐色土(灰白色粘土粒、酸化鉄粒含む)	
3	G6	20	20	32	10YR3/2 黒褐色土(灰白色粘土粒、黄褐色粘土粒)	
4	G6	24	24	37	10YR3/2 黒褐色土(灰白色粘土粒、黄褐色粘土粒)	
5	G6	12	10	10	10YR3/2 黒褐色土(灰白色粘土粒、酸化鉄粒含む)	
7	G6	40	40	16	10YR3/3 暗褐色土(黄褐色粘土粒、酸化鉄粒含む)	
8	G6	42	36	31	10YR3/2 黒褐色土(酸化鉄粒多量含む)	柱痕あり
9	G6	26	26	22	10YR3/2 黒褐色土(炭化物粒、酸化鉄粒多量含む)	
10	G6	18	18	14	10YR4/2 灰黄褐色土(黄褐色粘土塊、酸化鉄粒多量含む)	
11	G6	30	28	18	－	
12	G6	30	30	18	－	
13	G6	28	28	18	10YR3/3 暗褐色土(炭化物粒、灰白色粘土塊、酸化鉄粒含む)	
14	G6	20	20	16	10YR3/3 暗褐色土(酸化鉄粒含む)	
15	G6	36	26	20	10YR3/2 黒褐色土(酸化鉄粒、炭化物粒含む)	
16	G6	30	30	17	10YR3/4 暗褐色土(灰白色粘土塊、酸化鉄塊含む)	
1	G7	36	32	16	10YR3/3 暗褐色土(灰白色粘土塊、黄褐色粘土塊含む)	
2	G7	32	22	24	10YR3/3 暗褐色土(黄褐色粘土粒、酸化鉄粒含む)	
3	G7	42	32	17	10YR3/2 黒褐色土(黄褐色粘土粒、酸化鉄粒含む)	

第８節　遺構外出土遺物

今回の調査では、遺構外から縄文土器、土師器、須恵器、石製品等が計6,078点出土し、主体となるものは平安時代の土師器、須恵器である。遺物は細片が多く、磨滅しており、器形全体を復元できたものは少ない。

調査区全体に遺物包含層であるＬⅡが広がっており、遺物のほとんどがＬⅡ出土である。出土地点の傾向を見ると、調査区北東部のＥ２・３、Ｆ２・３グリッドからの出土量が多く、縄文土器や石製品の大半はこの地点を含む調査区の北部から出土している。平安時代の土師器、須恵器はこの地点の他に、1･2号建物跡と１号井戸跡の周辺となるＥ６、Ｆ５～７、Ｇ７グリッド付近に多く、特に井戸跡より北側のＦ７グリッドに集中している。また、調査区南東端のＩ６グリッドからは、縄文時代晩期と奈良時代の資料が比較的遺存が良好な状態で出土した。

縄文土器（図22、写真32）

図22－１～14は縄文土器である。縄文土器は細片が多く、器面が磨滅したものばかりのため、文様が判別できる数点を図示した。そのため時期の消長は不明であるが、少なくとも前期から晩期の資料を確認することができた。

１～３は爪形文状の刻み目が認められることから、早期中葉～前期後葉に収まる時期のものと考えられる。４は縄圧痕が施されることから早期末から前期初頭、５は器面が荒れるものの、ループ文が認められることから前期前葉のものである。６は後期前葉の綱取Ⅱ式とみられる口縁部片で、口縁部下端に沈線が巡り、そこから懸垂文が描かれるようである。７～９は晩期中葉の大洞Ｃ２式

とみられ、口縁部の周囲には沈線が巡らされている。10は櫛歯状文が施される粗製土器である。

11～13は、他の資料と比べて遺存状態がよく、縄文時代晩期末から弥生時代初頭にかけてのものと考えられる。11・12は台付浅鉢の口縁部片とみられ、同一個体の可能性もある。波状口縁となり、口唇部と口縁部に沿った内外面には沈線が施されている。体部の文様は変形工字文が描かれ、下半には磨消縄文が施されている。14はこれらの浅鉢の底部に付くとみられる台の部分で、横位の沈線が認められる。13は平縁の浅鉢の口縁部片で、内面には口縁部に沿って沈線が巡り、外面には沈線で変形工字文が描かれている。

弥生土器（図22、写真32）

図22－15は壺の一部とみられる弥生土器で、弥生時代中期のものである。最大胴径となる体部上半部分には、沈線で横方向に文様が描かれ、磨消縄文が施されている。他に調査区内からは弥生土器と判断できる資料は認められなかった。

土 師 器（図23～26、写真33～35）

図23～図26－１～３は、奈良時代から平安時代にかけての土師器である。

図23－１～５は非ロクロ成形の杯で、器形と調整技法から８世紀後半頃のものとみられる。器形はいずれも平底で、底面から直線的に立ち上がり、口縁部はやや内湾気味である。内面は、ヘラミガキが施され黒色処理されている。外面は、やや小型の１では体部から底部にかけて縦方向に指ナデが認められるが、２～５は底部から口縁部近くまで手持ちヘラケズリで整形されている。また、これらの胎土は近似しており、白く緻密である。

図23－６～図24－９はロクロ成形の杯類で、内面にヘラミガキが施され黒色処理される一群（図23－６～図24－４）と、ヘラミガキ、黒色処理が認められない一群（図24－５～９）とに大別できる。図23－６は、底部から体部下半にかけて回転ヘラケズリが施されている。同図７の底部切り離しは不明であるが、体部下半には手持ちヘラケズリが施されている。同図８～20の底部には回転糸切り痕が認められ、底部周囲には手持ちヘラケズリが施されている。遺存状態のよい７～９・11の器形は、底部からゆるやかに立ち上がり、口縁部がわずかに外反する。図23－21～図24－４は底部の切り離しが回転糸切り、無調整のものである。

図24－５～９は底部に回転糸切りが認められ、内面はコテ当て調整で円滑に仕上げられている。６は底部から緩やかに立ち上がって外傾し、７は器高が低く、底部から大きく開いて外傾し、口縁部がわずかに内湾し、皿状の器形となる。

図24－10～15・17は杯類の高台部分である。10・11・13・14の杯部はヘラミガキが施され、黒色処理されるが、12・15・17には黒色処理が認められない。10・11の高台は短く、12～15の高台は長い。また、12は垂直に立ち上がるが、13～15はハの字状に開いている。17は他のものより厚手となるため、杯ではなく鉢の可能性もある。同図16は柱状高台の付く、小型の耳皿である。底

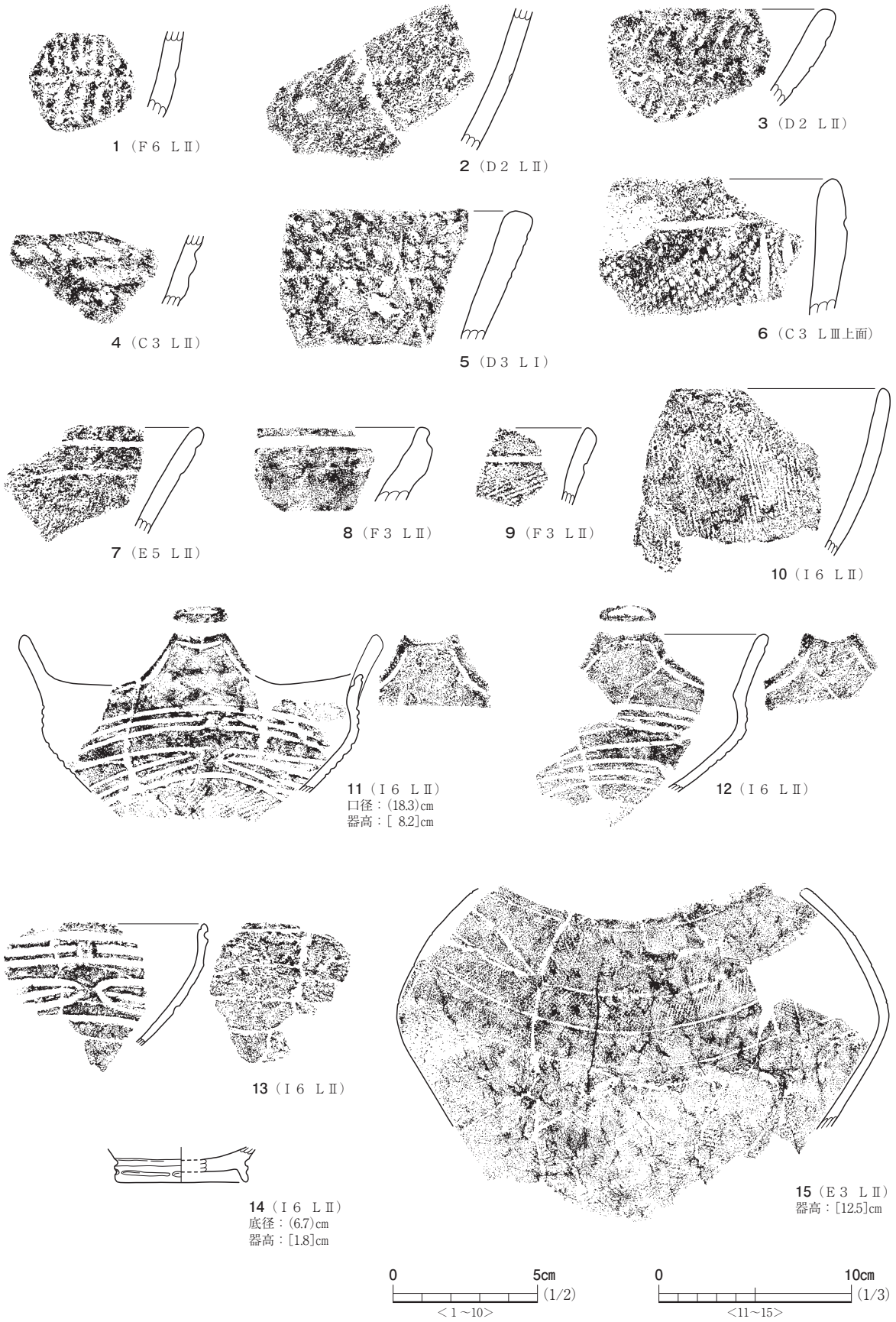


図22　遺構外出土遺物（１）

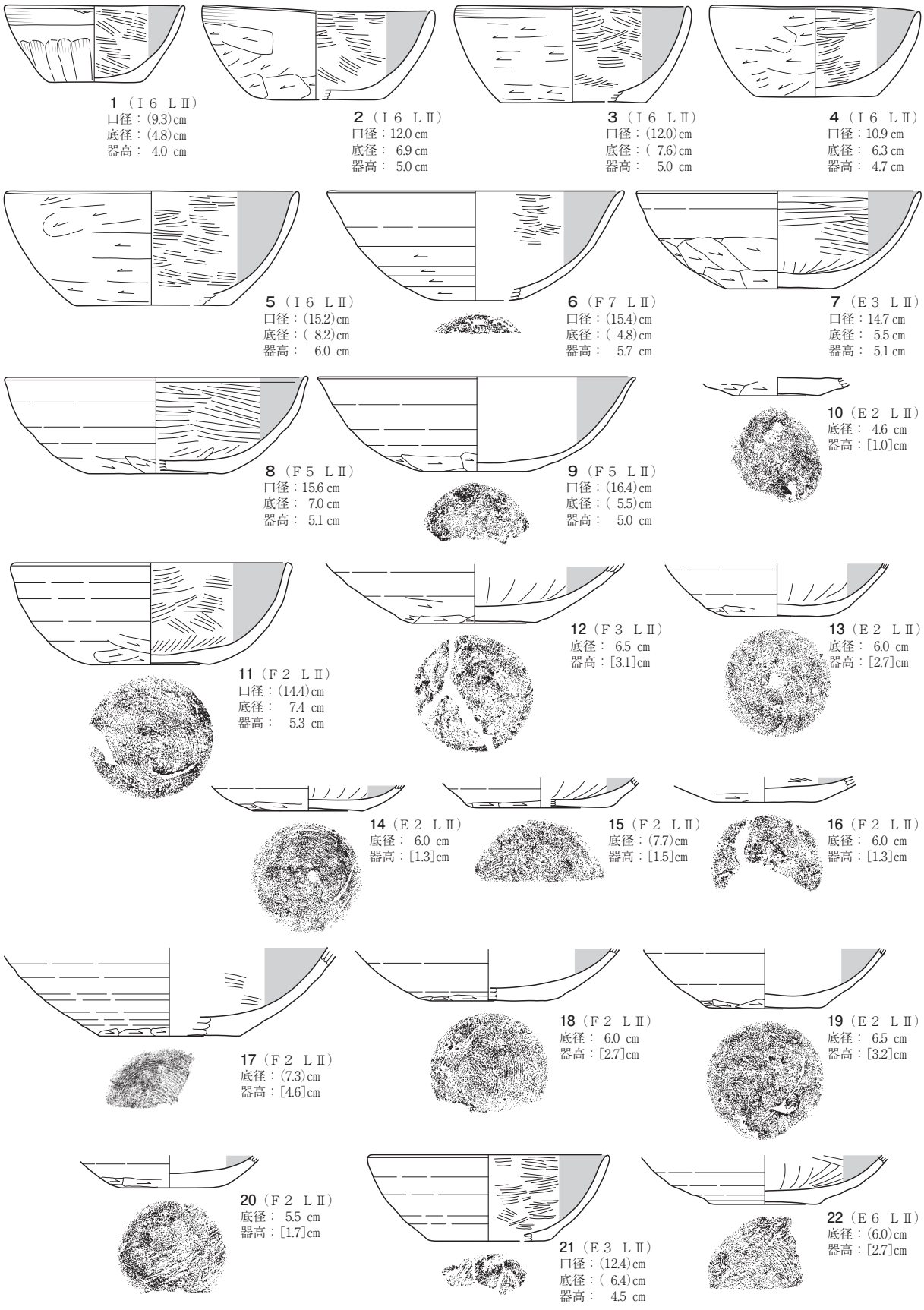


図23　遺構外出土遺物（２）

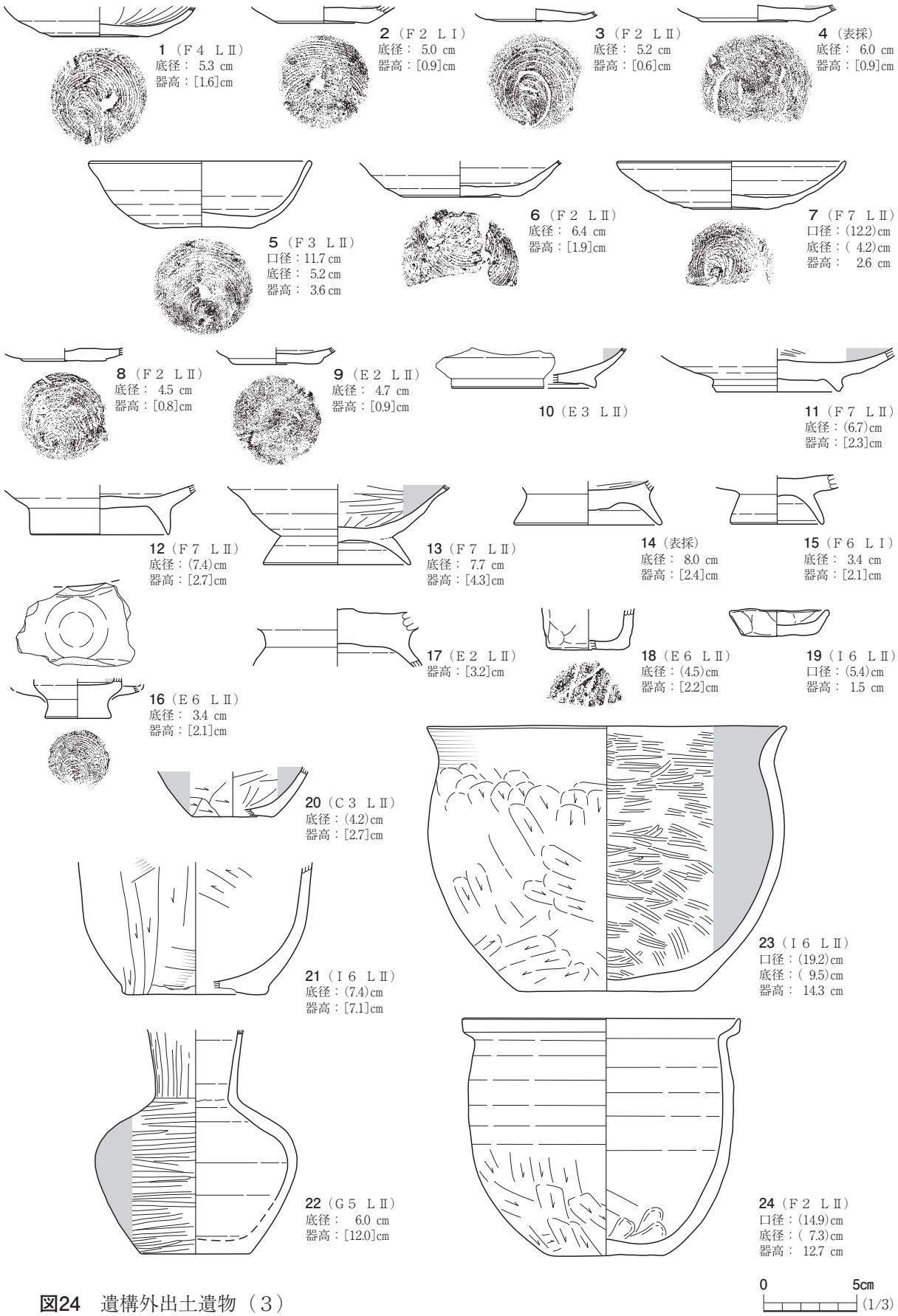


図24　遺構外出土遺物（３）

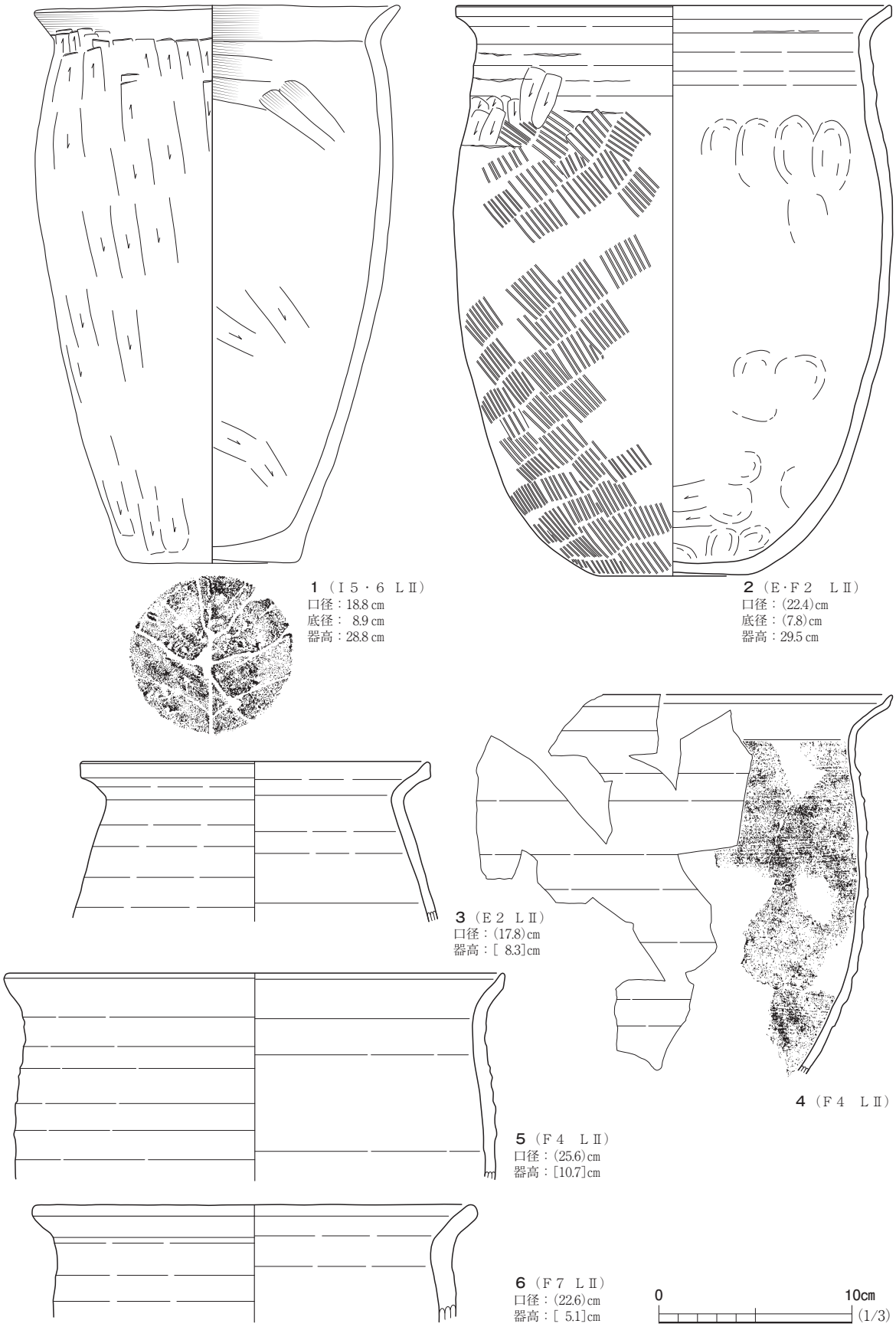


図25　遺構外出土遺物（４）

部には回転糸切り痕が残る。内面は黒色処理が施されるが、調整は磨滅のため不明瞭である。

図24－18・19は手づくね土器で、18の底部には木葉痕が認められる。20は杯のミニチュア土器で、外面にはケズリ、内面にはミガキが施され、内外面ともに黒色処理される。同図22は須恵器の長頸瓶を模倣したとみられるもので、外面には丹念にミガキが施され、黒色処理が施されている。

図24－21・23・24、図25、図26－１～３は甕で、そのうち図24－21・23、図25－１、図26－３は非ロクロ成形のもので、他の資料より古い特徴が認められる。図24－23は丸みのある甕で、外面には口縁部がヨコナデ、体部がヘラケズリ、内面にはヘラミガキ、黒色処理が認められ、図23－２～５の杯と調整技法や胎土が酷似している。図25－１は長胴の甕で、底部には木葉痕が認められる。外面には縦方向にヘラケズリが施され、内面には下方にヘラケズリ、口縁部と周囲にはナデが認められる。図24－24、図25－２～６、図26－１・２はロクロ成形の甕である。図24－24は小型の甕で、外面の体部下半にはヘラケズリ、内面の底部周辺にはヘラナデが認められる。図25－２は出羽甕とも呼ばれる丸底の長胴甕で、外面には底部から体部全体に平行タタキが施され、内面には指オサエが認められる。図26－３は非ロクロ成形の甕で、口縁部には指オサエが残り、歪んだつくりとなっている。

須 恵 器（図26・27、写真36）

図26－４～14、図27は須恵器である。図26－４・５は杯で、底部から緩やかに立ち上がって口縁部がわずかに外反する。底部には回転糸切り痕が残り、４の底部周囲には手持ちヘラケズリが施されている。６は長頸瓶の口縁部から頸部にかけての資料である。７～９は瓶類の底部近くで、７・９は回転ヘラケズリが施され、７・８は高台部分が外側に短く張り出している。６・８の表面には灰が被った様子が観察できる。10は土師器の調整技法を有するもので、寸胴の器形の外面には縦方向に密にヘラミガキが施されている。底部には「村」もしくは「札」といった文字とみられる線刻が認められる。

図26－11～14は甕類で、11・12が口縁部、13・14が底部の資料である。13は底部周囲に回転ヘラケズリが認められ、断面三角形の短い高台が付き、14は上げ底状となっている。図27は須恵器の破片で、外面には平行タタキが認められる。内面には、１がタタキメ、２が指当て、３が同心円の当て具痕が認められる。

灰釉陶器（図26、写真36）

調査区内から出土した灰釉陶器は、図26－15の１点である。15は碗の高台部分で、緩やかに湾曲する断面が三日月状の高台が付き、内面には斑状のガラス質の灰釉が観察できる。

土 製 品（図26、写真36）

図26－16・17は土鈴である。どちらも鈕の部分しか残っていない。17には紐通しの穴が認められる。

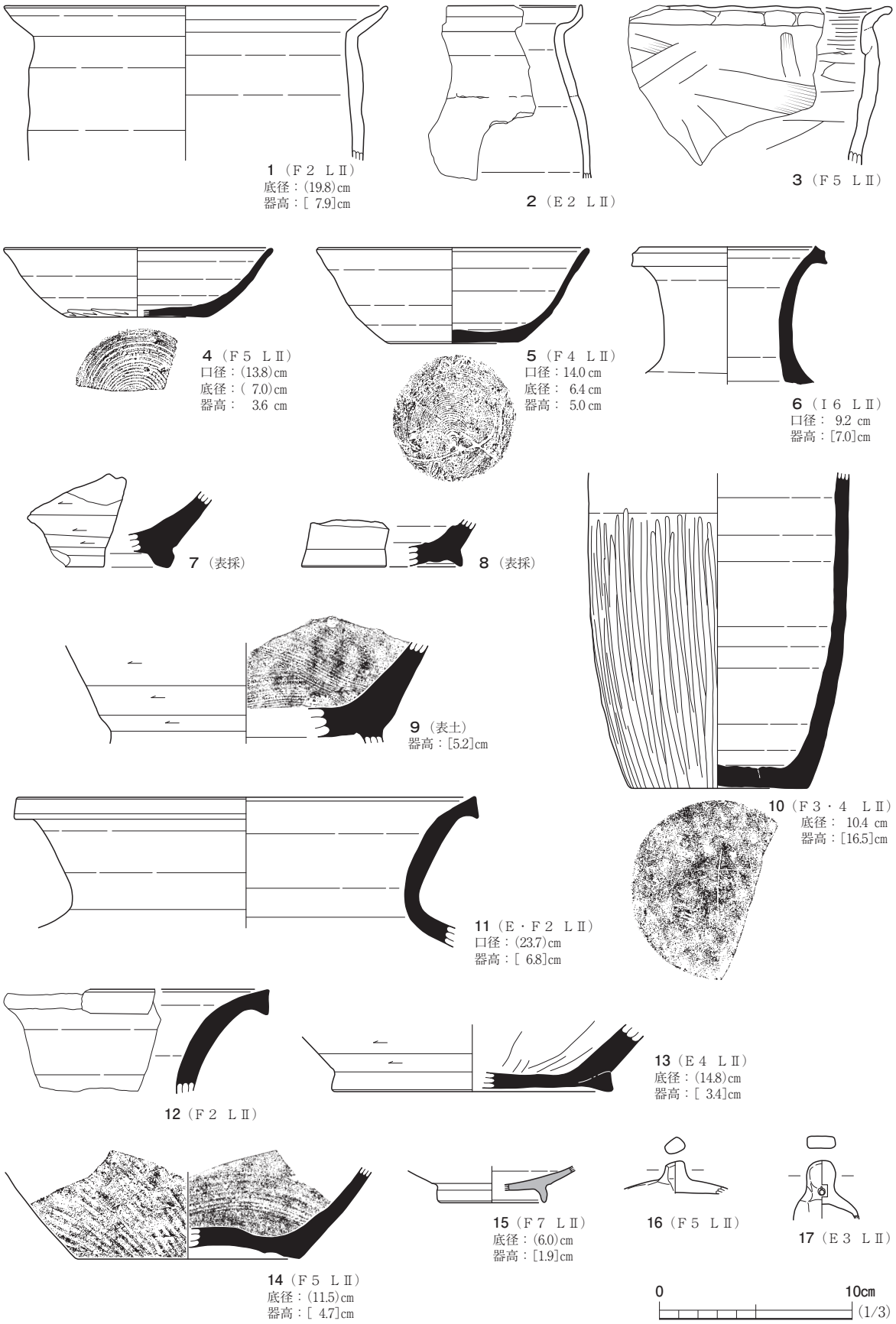


図26　遺構外出土遺物（５）

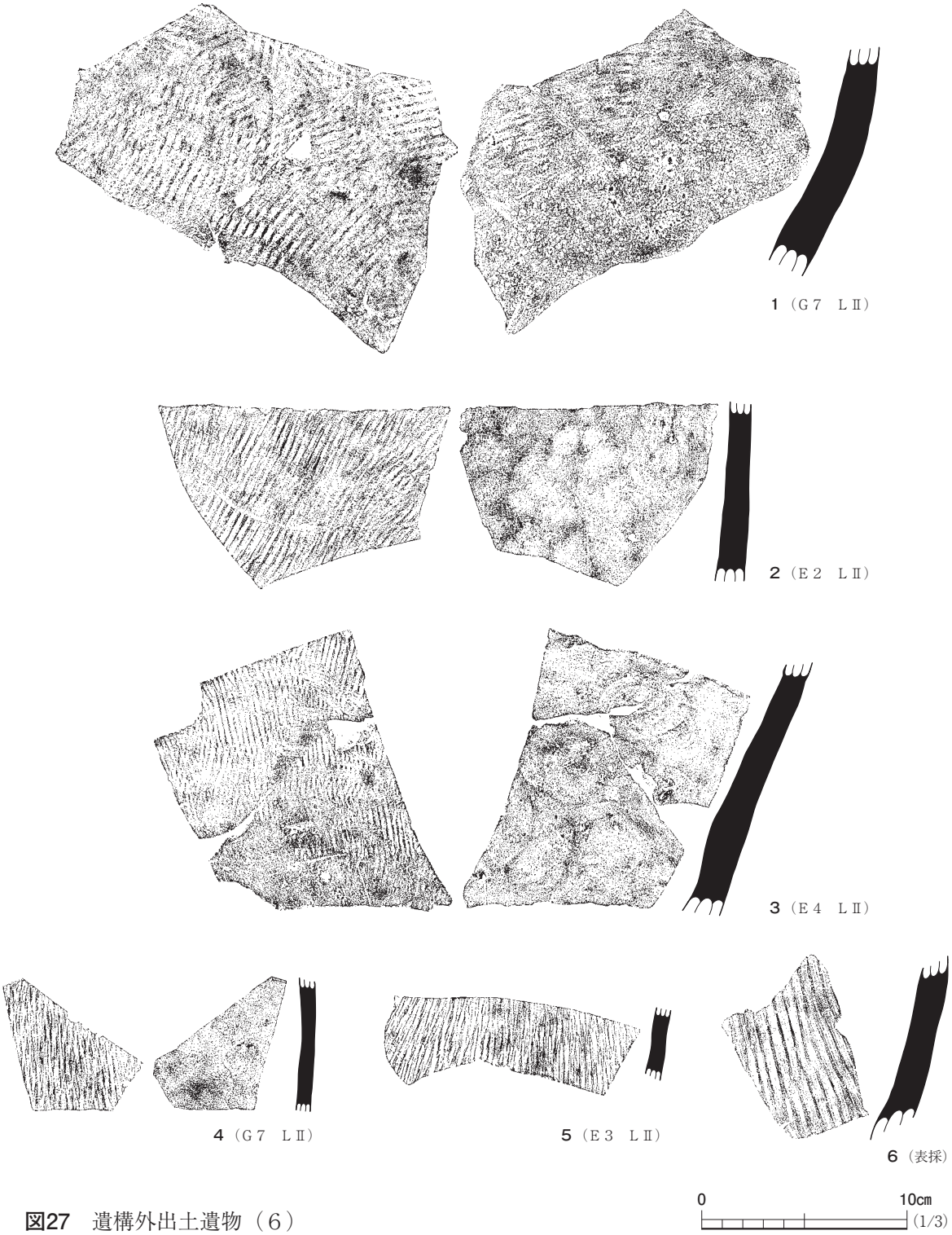


図27　遺構外出土遺物（６）

石 製 品（図28・29、写真37）

図28・29は石製品である。図示はしなかったが、調査区内からは石英ないし玉髄の石塊が認められ、それら石材に加工痕のあるものも出土している。この種の石材については付近一帯の土壌に含まれている。

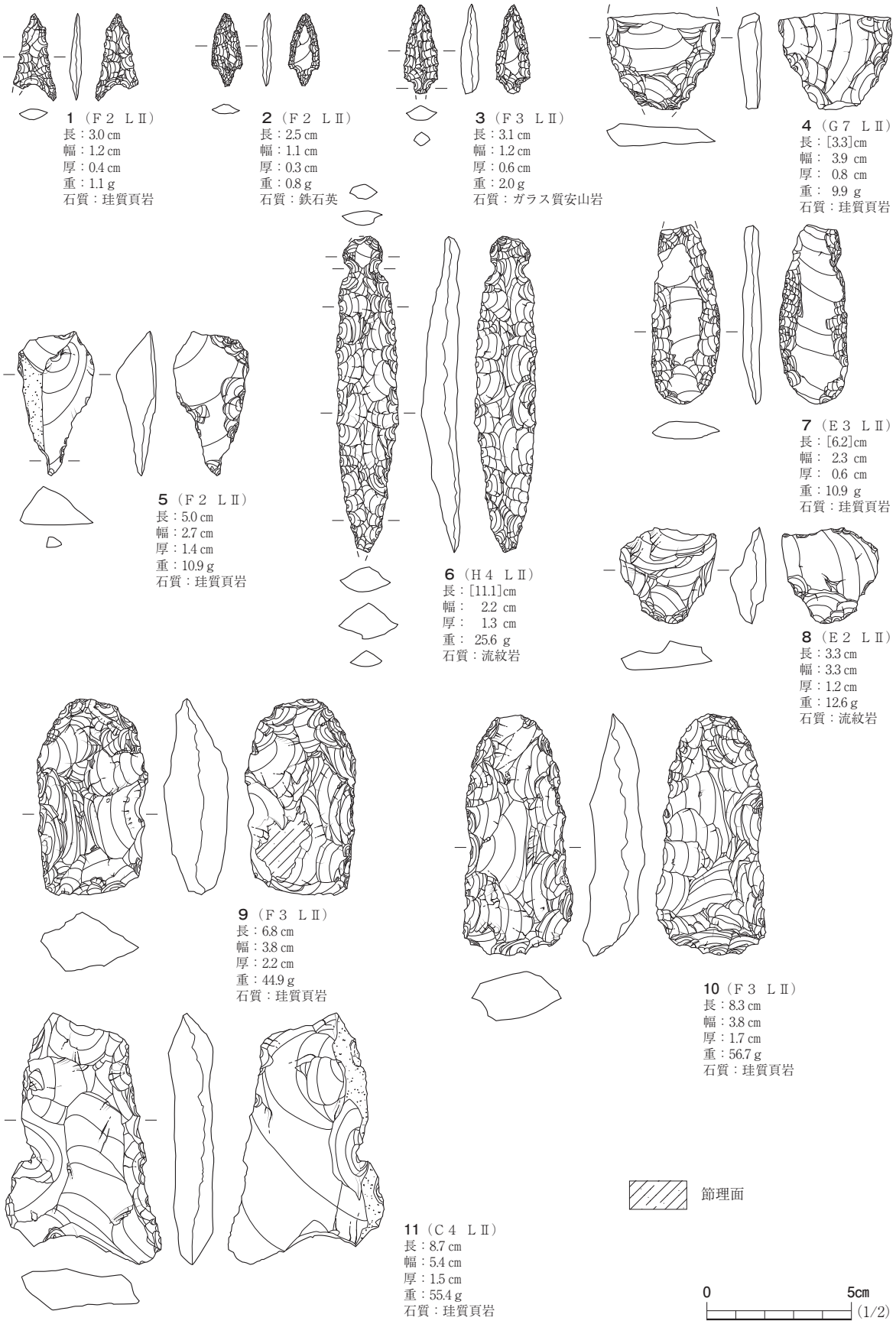


図28　遺構外出土遺物（７）

図28－１～３は石鏃である。１の基部は無茎で抉りがあり、片側が欠けている。２・３の基部は有茎である。４は石槍で、先端からの大半と基部が欠損する。５は石錐である。６・７は縦長の石匙である。６は縦長の剥片の両面を丁寧に加工し、先端が尖った細長い柳葉状の形態となり、やや厚みがある。７はつまみ部分が欠けている。８は掻器で、端部の両面から加工して刃部を作り出している。９・10は箆状石器である。11は削器で、側面には片面から作り出した刃部が認められる。

図29－１は打製石斧で、中央に抉りのある分銅形である。２は磨製石斧を再利用しており、元の基部のところを再調整して刃部を作り出している。３は凹石、４～６は磨石で、４・６の端部には敲打痕が認められる。

（廣　川）

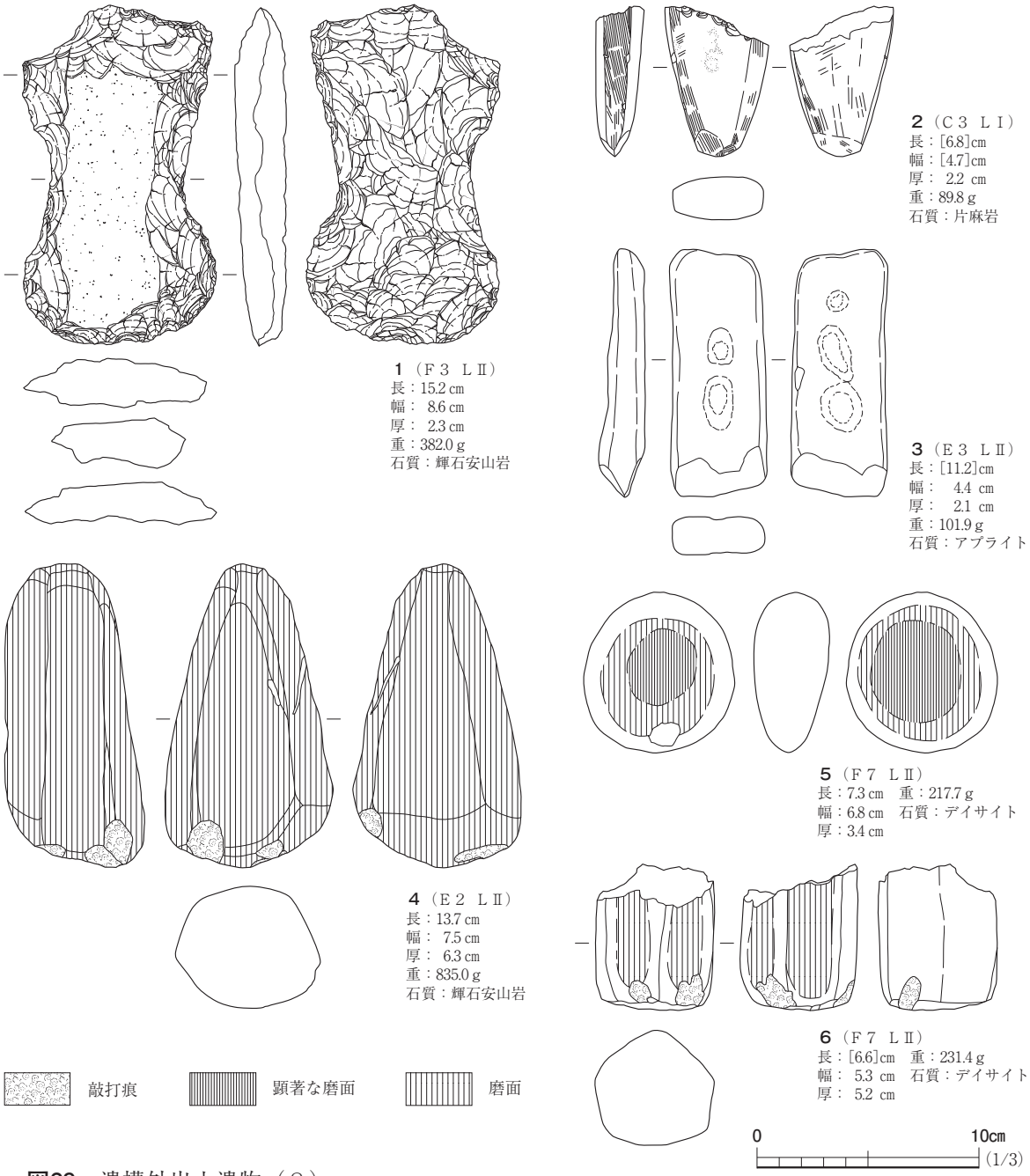


図29　遺構外出土遺物（８）

第３章　　総　　括

川原田遺跡からは、調査区全域に広がる遺物包含層とともに、掘立柱建物跡２棟、柱列跡１列、井戸跡１基、土坑17基、溝跡２条、性格不明遺構１基、小穴62基が検出された。今回の調査によって、縄文時代の落し穴が点在する狩場や、平安時代の掘立柱建物跡で構成される集落等を確認することができた。下記にそれらの概要をまとめる。

縄文時代の遺構は落し穴７基が検出され、調査区の北東隅から南西隅にかけて帯状に分布している。そのうちの３基は、検出面からの深さが約170㎝を測り、遺存状態が大変良いことが特筆される。狩場という性質から共伴する遺物は認められなかったが、遺物包含層からは縄文時代の各時期の遺物が出土しており、調査区外の周辺に生活の痕跡が埋没している可能性がある。

その後、しばらくは出土遺物が途絶えるが、調査区の南東部から奈良時代後半頃のまとまった遺物が出土し、平安時代に入ると掘立柱建物跡や井戸跡等で構成される集落が形成される。検出された掘立柱建物跡は、主屋とみられる板間と土間の空間を有する建物と、やや小さめの側柱のみの建物とが確認され、その他にも多数の柱穴とみられる小穴が存在することから複数の建物が繰り返し建て替えられた様子がうかがわれる。主屋には庇が付いていた可能性もあり、同時期とみられる井戸跡には丁寧な加工が施された井戸枠の部材が残されるなど、地域の相応の有力者が居住していたものとみられる。

平安時代の集落の形成時期は９世紀後半から10世紀前半頃に収まるものとみられ、主体となる遺物包含層から出土する資料の時期とも一致している。建物跡の周囲や遺物包含層から出土する資料には、細片ではあるものの緑釉陶器片や猿投窯産とみられる灰釉陶器碗が出土しており、出羽甕とも呼ばれる日本海側に分布する特徴的な器形の土師器甕が認められるなど、出土遺物からも一般集落とはやや異なった様相を示している。また、少数ながら出土した須恵器と土師器にはそれぞれの技法を折衷するものが認められる。

本遺跡は桑折町から福島市飯坂方面へ通じる交通の要衝にあり、検出遺構や出土遺物からはいくつかの興味深い知見が得られた。特に、県内では10世紀以降の集落の調査数が少なく、９世紀後半から10世紀にかけての過渡期の集落の貴重な調査事例となった。　　（廣　川）

引用・参考文献

桑折町史出版委員会　2002 『桑折町史　通史編１』
篠原豊一　1990 「平城京の井戸とその祭祀」『奈良市埋蔵文化財調査センター紀要』奈良市教育委員会
福島県教育委員会　2014 「鶴沼Ｃ遺跡」『会津縦貫北道路遺跡発掘調査 15』
福島県教育委員会　2016 『福島県内遺跡分布調査報告 23』
松井章編　2006 『動物考古学の手引き』独立行政法人文化財研究所 奈良文化財研究所

第４編　馬場（ばば）遺跡

遺跡記号	ＱＲ－ＢＢＡ
所在地	伊達郡桑折町大字成田字馬場・稲山
時代・種類	中近世の居住域
調査期間	平成28年10月27日～11月７日
調査員	廣川紀子・由井文菜

第１章　遺跡の位置と調査経過

第１節　遺跡の位置と現況

馬場遺跡は、福島県伊達郡桑折町大字成田字馬場・稲山に所在する。地形的には標高60ｍほどの低位段丘上に立地し、遺跡及び周辺地は整地され、畑や水田等の耕作地として利用されており、遺跡の北側には工場用地が隣接する。

遺跡から100ｍほど東には近世の奥州街道に比定される県道353号線が桑折町中心街へと延びており、この県道沿いには併行して調査が行われた新宿遺跡（第５編）や古代・近世の須恵器・陶器の窯跡が点在する。また、南西0.5kmほど離れた聖光学院高等学校の敷地内では、中世の屋敷跡である土井ノ内遺跡が調査されており、遺跡の周辺からは中世の遺跡が複数確認されている。　（廣　川）

第２節　調　査　経　過

馬場遺跡は、相馬福島道路建設中の工事現場から不時発見された遺跡である。福島県教育委員会では、新発見の遺跡として確認調査を行い、工事予定地となる馬場遺跡の一部では発掘調査が必要

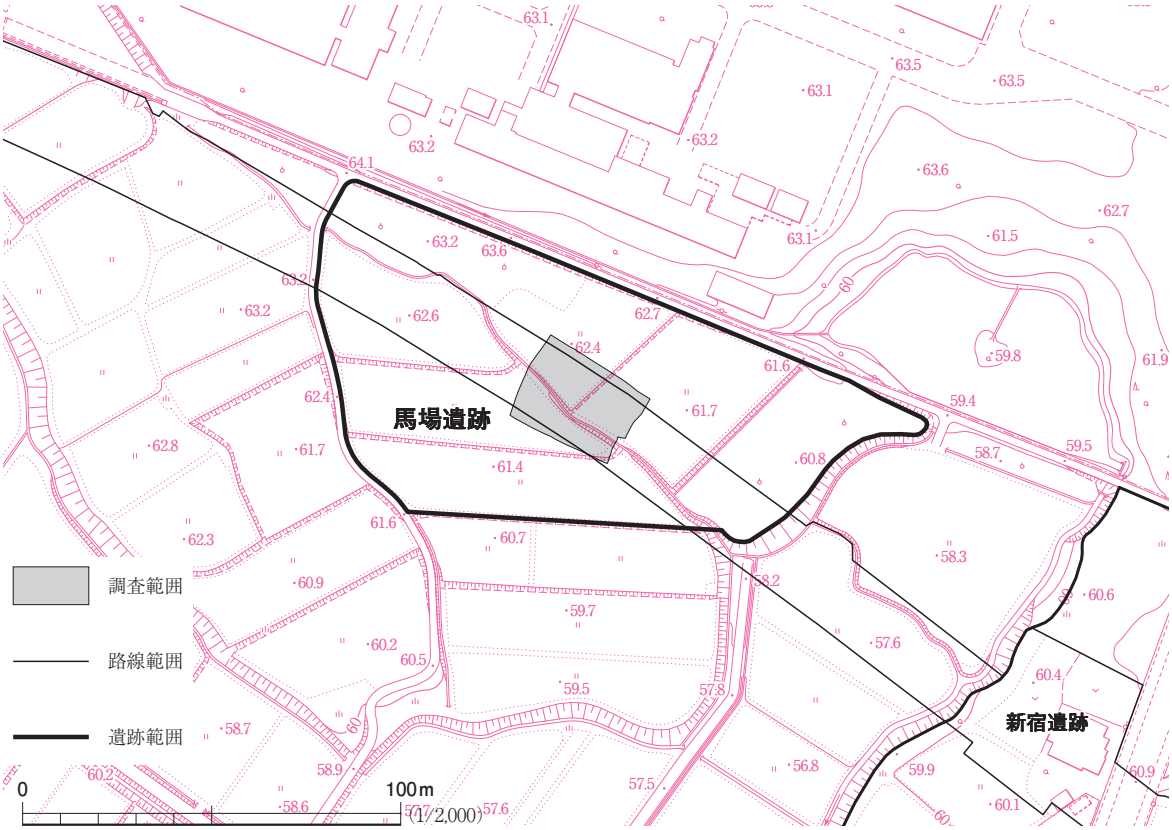


図１　調査区位置図

となった。10月27日付で福島県教育委員会より馬場遺跡600㎡の発掘調査の指示を受け、急遽、調査中の新宿遺跡から調査員、作業員を割いて調査に入った。

調査に係った作業日数は延べ３日である。以下に、調査の経過について記す。

11月１日(火)：発掘器材類を搬入し、遺構検出作業に入る。１～３号土坑、１・２号溝跡を検出し、調査区北東部に小穴群の広がりを確認する。順次、検出遺構の精査及び記録作業を進める。

11月２日(水)：引き続き、遺構検出作業、１号溝跡の精査及び記録を行う。

11月７日(月)：地形測量と並行して、調査区の全体写真を撮影するため清掃作業を行う。全体写真の撮影後、発掘器材類を新宿遺跡へ搬出する。

11月８日(火)：県文化財課及び工事側の立会いの下、引き渡しを行った。　（廣　川）

第２章　発見された遺構と遺物

第１節　調査成果の概要と基本土層

調査成果の概要

馬場遺跡は、相馬福島道路を建設中の工事現場から不時発見された遺跡である。工事前までは主に水田等の耕作地として利用されていた。ほぼ平坦な地形である。

今回の調査範囲には３面の水田がかかっており、その間を東西方向に流れている現在の用水路により中央部が破壊されている。

検出された遺構は、土坑３基、溝跡２条、小穴36基で、遺構と周辺から出土した遺物から中近世のものとみられる。

基本土層（図２、写真３）

基本土層は、色調・土質の諸特徴からＬⅠ・Ⅱの２層に分層した。

ＬⅠは、表土及び盛土層である。周辺一帯は耕作地として圃場整備されており、その際に耕作土として盛られたものとみられる。

ＬⅡは、ＬⅠ直下から確認される層で、この上面が遺構検出面である。ＬⅡの上には盛土が直接堆積し、遺構内に堆積する土層が確認されないことから、ＬⅡは後世にある程度掘削を受けたものと推察される。ＬⅡの色調は、明赤褐色土(5YR5/8)から灰黄褐色粘土(10YR6/2)にわたり、上半部は赤みが強く、下部になると粘性度が増すようである。含有物は径１㎜以下の細砂が斑文状に混じり、径５㎜以下の黒色土の偽礫が少量含まれる。場所によっては還元によりグライ化しているところも認められる。　（廣　川）

図２　遺構配置図・基本土層

第２節　　土　　坑

今回の調査で発見された土坑は３基である。それらは調査区の中央より西側から検出されるが、規格性はなく、用途も不明である。

１号土坑　ＳＫ01（図３，写真４）

本土坑は、調査区中央のＣ２グリッドに位置し、ＬⅡ上面で検出された。区画溝とみられる２号溝跡から約４ｍ東側に離れており、重複する遺構はない。

堆積土は単層で、ＬⅡ粒をわずかに含む黒褐色土である。

平面形は隅丸方形を基調としたもので、北東隅がやや広がっている。大きさは長軸約75㎝、短軸約65㎝で、深さは検出面から最大15㎝を測る。主軸方向はＮ60°Ｗである。周壁はほぼ直立し、北東隅から東壁にかけてはやや緩やかである。底面は平坦である。

本遺構からは出土遺物が認められず、時期や用途は不明である。（廣　川）

２号土坑　ＳＫ02（図３，写真４・７）

本土坑は、調査区中央南寄りのＣ３グリッドに位置し、ＬⅡ上面で検出された。調査区内を東西に延びる現代の用水路の撹乱から南に約1.5ｍ離れており、重複する遺構はない。

堆積土はＬⅡ塊を斑状に含む褐灰色粘質土の単層で、人為堆積と考えられる。グライ化していた。

平面形は楕円形で、大きさは長軸約175㎝、短軸約135㎝で、深さは検出面から約35㎝である。主軸方向はＮ60°Ｗである。周壁はほぼ直立し、底面はやや凹凸があるもののほぼ平坦である。

出土遺物は、須恵器片１点と土製品１点である。図３－１は須恵器の高台杯の底部片で、高台部分が剥離した底面には回転糸切り痕が認められる。同図２は橙色の素焼きの土製品で、底面近くから出土した。型押しの獅子頭で、火鉢の表面に付く装飾部分とみられる。大きく見開いた目とへの字状に閉じた口、渦巻き状のたてがみが表現されている。

本土坑の時期の詳細や用途は不明であるが、出土遺物の火鉢の装飾部分から近世以降の所産と考えられる。（廣　川）

３号土坑　ＳＫ03（図３、写真４）

本土坑は、調査区北西部のＣ１・２グリッドに位置し、ＬⅡ上面で検出した。１号溝跡から北へ約５ｍ、２号溝跡から西へ約1.5ｍ離れており、重複する遺構はない。

堆積土は２層に分層した。ℓ２の褐灰色粘質土が底面近くに薄くレンズ状に認められ、その上にℓ１の灰褐色土が堆積する。

平面形は不整形で、楕円形状の土坑の西側に１段高く舌状の張り出しが付いたような形状であ

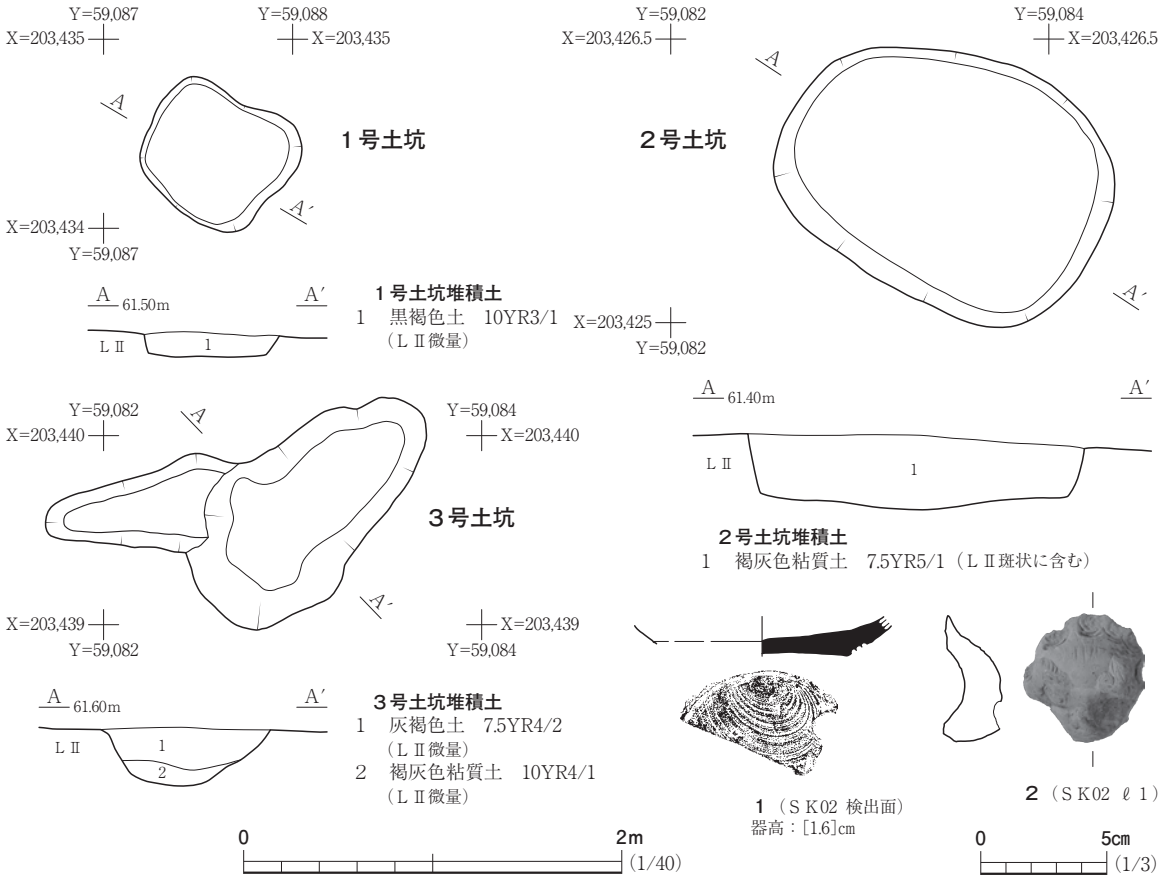


図３　１～３号土坑・出土遺物

る。大きさは全体で約210cmを測るが、張り出し部分を除く楕円形部分では、長軸約150cm、短軸約75cmで、深さは約25cmである。底面はわずかに皿状に窪む。張り出し部分は長さ約90cm、最大幅約50cm、深さは約10cmで、底面はほぼ平坦である。

本遺構から出土遺物は認められず、時期や用途は不明である。（廣　川）

第３節　溝　跡

今回の調査で発見された溝跡は２条である。いずれも調査区内を東西に流れていた現代の用水路の撹乱に沿うように、その北側から検出したものである。重複関係があり、１号溝跡が古く、２号溝跡が新しい。

１号溝跡　ＳＤ01（図４）

本遺構は、調査区中央西寄りのＢ２・Ｃ２グリッドに位置し、ＬⅡ上面で検出された。現代の用水路の撹乱のすぐ北側を並行するように延びている。２号溝跡に掘り込まれて途切れるが、東側の延長上で確認した溝跡も本遺構と判断した。西端部は南西方向に屈曲している。

堆積土は単層で、ＬⅡ粒をわずかに含んだ黒褐色土である。

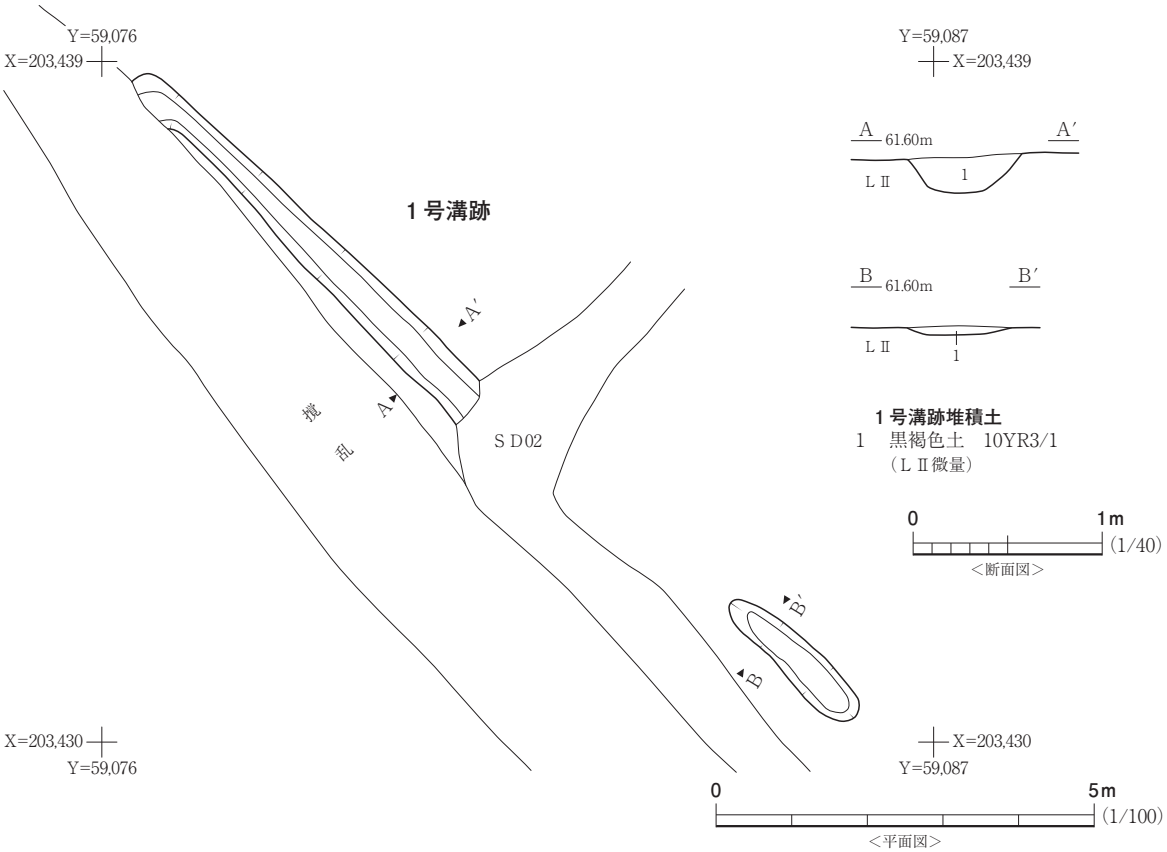


図４　１号溝跡

本遺構は重複する２号溝跡と撹乱に掘り込まれているため、遺存する部分での大きさは長さ約6.5ｍ、最大幅約70㎝で、深さは約15㎝である。断面形はＵ字型で、底面はわずかに窪んでいる。延長上に確認された溝跡は長さ約2.0ｍ、最大幅約60㎝である。その部分まで含めると、全長は少なくとも長さ13ｍ程度はあったようである。

出土遺物がないため時期の詳細については不明であるが、２号溝跡に先行してつくられた区画溝のようなものと推測される。（廣　川）

２号溝跡　ＳＤ02（図５）

本遺構は、調査区中央西寄りのＣ２・３グリッドに位置し、ＬⅡ上面で検出された。１号溝跡と重複しており、本遺構が新しい。現代の用水路の撹乱に掘り込まれ、全体の形状は不明であるが、その撹乱部分に直交し、そこから直角に折れて撹乱と同じ方向に延びていたようである。

堆積土は単層で、ＬⅡ粒をわずかに含んだ灰褐色土である。

本遺構の形態は直角に折れたＬ字形をしており、長さは撹乱に直交する部分で約8.5ｍ、並行する部分で約7.5ｍ、遺存する部分全体では16ｍ程度である。遺存する部分の幅は約80㎝で、断面形はＵ字型で底面は窪んでいる。

出土遺物は、堆積土中より瓷器系陶器の細片が１点出土している。表面が灰赤色、断面が灰色で、外面には黒色のガラス質の釉状の付着物が認められる。図示はしなかったが、他にも調査区内から

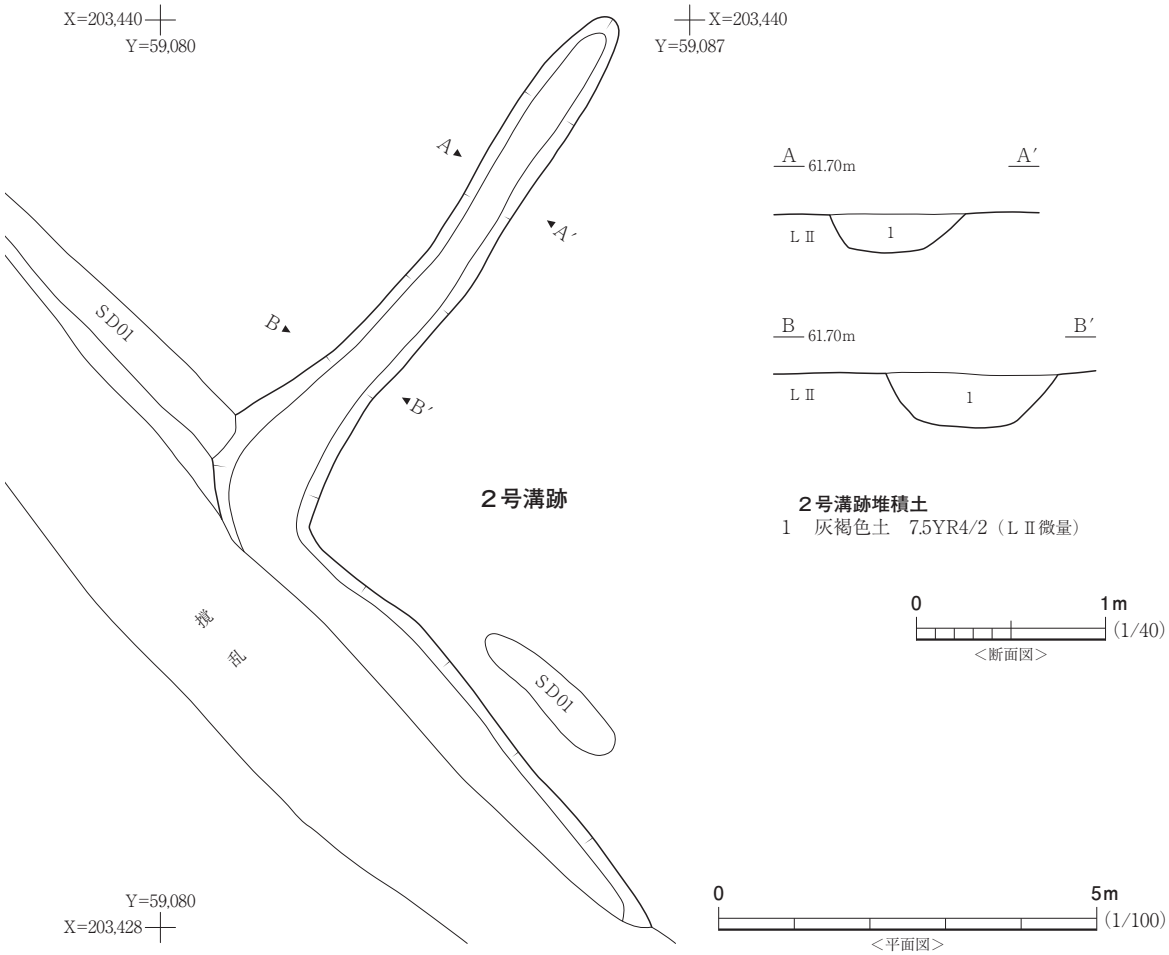


図５　２号溝跡

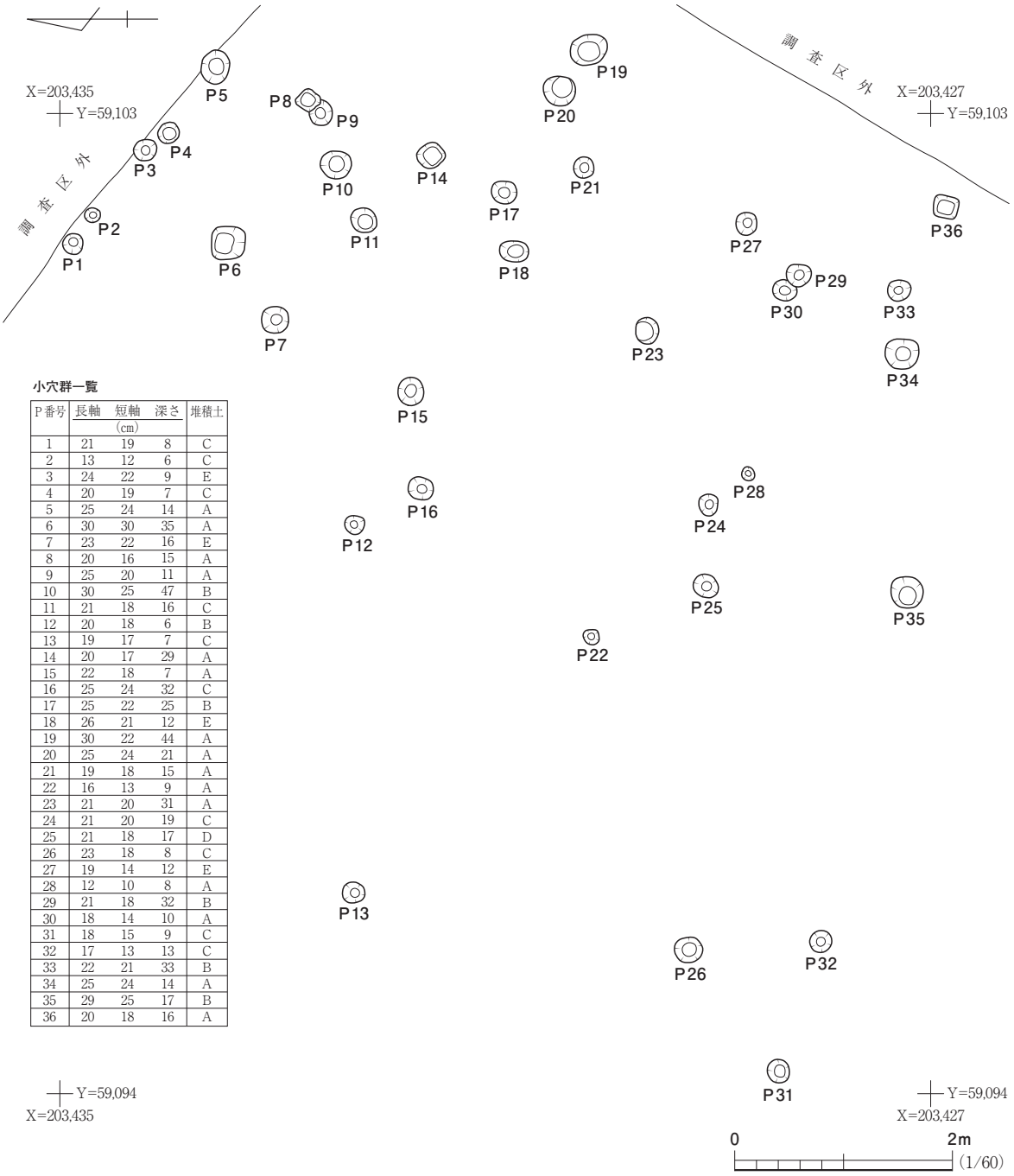
同一個体の可能性のある細片が出土している。

出土遺物から本遺構の時期は中世以降のものとみられ、直角に折れ曲がる形状から区画溝と考えられる。（廣　川）

第４節　小　穴　群

調査区東部のＥ２・３、Ｄ２・３グリッドにかけて小穴群の広がりを確認できた。検出された小穴は36基で、検出面はＬⅡ上面である。重複関係がＰ９(旧)→Ｐ８(新)、Ｐ30(旧)→Ｐ29(新)で認められた。これら小穴は建物跡の柱穴跡と考えられるが、同一の建物跡を構成する一群としては確認できなかった。

検出された小穴には番号を付け、挿図中の一覧表に規模と堆積土をまとめた。堆積土についてはすべて単層で、色調と含有物の違いによりＡ～Ｅに分類した。（廣　川）



小穴群一覧

P番号	長軸	短軸	深さ	堆積土
	(cm)			
1	21	19	8	C
2	13	12	6	C
3	24	22	9	E
4	20	19	7	C
5	25	24	14	A
6	30	30	35	A
7	23	22	16	E
8	20	16	15	A
9	25	20	11	A
10	30	25	47	B
11	21	18	16	C
12	20	18	6	B
13	19	17	7	C
14	20	17	29	A
15	22	18	7	A
16	25	24	32	C
17	25	22	25	B
18	26	21	12	E
19	30	22	44	A
20	25	24	21	A
21	19	18	15	A
22	16	13	9	A
23	21	20	31	A
24	21	20	19	C
25	21	18	17	D
26	23	18	8	C
27	19	14	12	E
28	12	10	8	A
29	21	18	32	B
30	18	14	10	A
31	18	15	9	C
32	17	13	13	C
33	22	21	33	B
34	25	24	14	A
35	29	25	17	B
36	20	18	16	A

図６　小穴群

表１　小穴堆積土

A	暗褐色土　10YR3/3	ＬⅡ粒、砂礫、炭化物粒微量	しまりあり
B	黒褐色土　10YR2/2	ＬⅡ粒少量、ＬⅡ塊・砂礫・炭化物粒微量	しまりあり
C	褐色土　10YR4/6	ＬⅡ粒少量、ＬⅡ塊・砂礫・炭化物粒微量	しまりあり
D	黒色土　10YR1.7/1	ＬⅡ粒微量	ややしまりあり
E	暗褐色土　10YR3/4	ＬⅡ粒、砂礫、炭化物粒少量	しまりあり

第５節　遺構外出土遺物

遺構外から出土した遺物は13点で、ほとんどが撹乱として扱った用水路跡からである。それらには土師器、須恵器、中近世の陶磁器等が含まれ、そのうちの須恵器２点、陶磁器４点を図示した。細片のため図示しなかったが、同じ撹乱からは相馬焼とみられる碗数点も認められた。

遺　　物（図７、写真７）

図７－１・２は須恵器片である。１は壺ないし瓶類の体部下半で底部が欠損している。２は甕の体部片で外面に格子状のタタキメ、内面に同心円状の当て具痕が認められ、全体的にすり減っている。

同図３～５は瓷器系の陶器である。３は鉢の底部、４は甕の口縁部、５は甕の肩部の細片である。５には黒色でガラス質の釉状の付着物が認められる。

同図６は肥前系の染付碗である。内面には矢羽根状の模様が描かれている。　（廣　川）

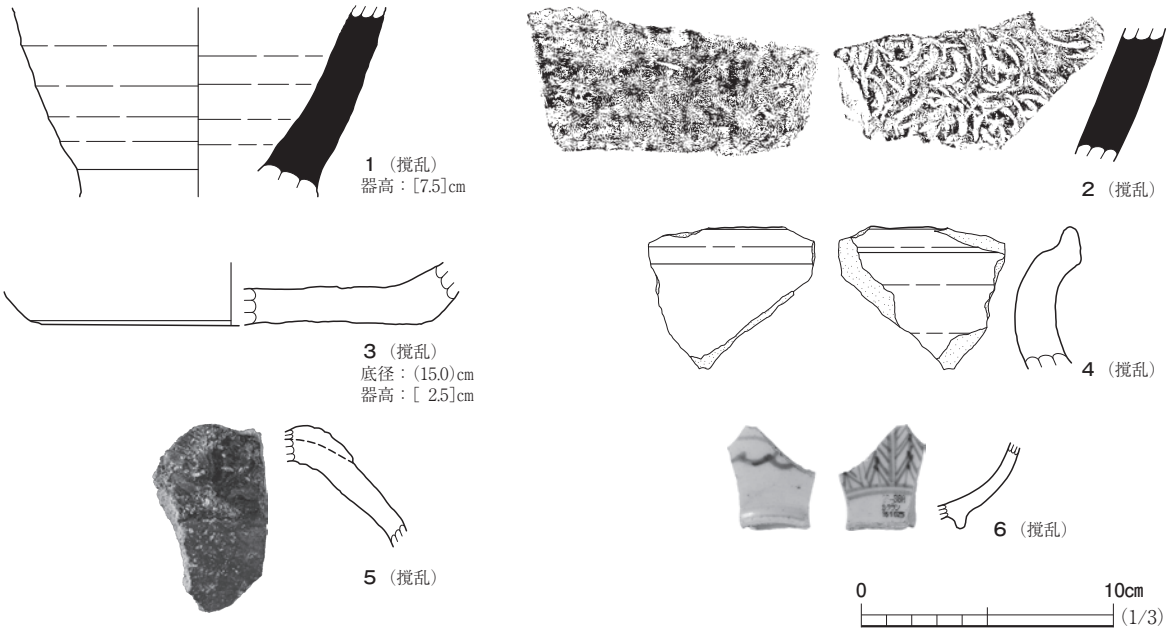


図７　遺構外出土遺物

第３章　　総　　括

馬場遺跡は、工事中の現場から不時発見された遺跡である。調査前の現況は、畑や水田等の耕作地として利用されており、調査区を横断するように東西方向に用水路が延びていた。

本遺跡からは、土坑３基、溝跡２条、小穴36基が検出された。それらの遺構は、周辺から出土する遺物や遺構の特徴により、中世から近世にかけてのものとみられる。本遺跡の東側70～80ｍの位置には、新宿遺跡（第５編）が立地するが、同遺跡との関連を明確に示すような痕跡は確認されなかった。

検出された２条の溝跡は、重複関係から新旧２時期あるが、いずれも区画溝の性格を有すると考えられる。また、調査区の北東部には、掘立柱建物跡の柱穴とみられる小穴36基が集中することから、建て替えながら数時期にわたり居住していた様子が認められる。

なお、遺跡の周辺には、奈良時代から平安時代にかけての須恵器が生産された伊達市伊達窯跡や桑折町成田前窯跡、近世とされる伊達市瀬戸場窯跡、桑折町赤坂窯跡が知られている。本遺跡からの出土遺物は乏しいが、これらの窯跡との関係が考えられるものも出土している。　　（廣　川）

引用・参考文献

桑折町史出版委員会　2002 『桑折町史　通史編１』

第５編　新宿（しんじゅく）遺跡

遺跡記号	ＱＲ－ＳＮＺ
所在地	伊達郡桑折町大字成田字新宿・稲山
時代・種類	縄文時代の狩場、古代の集落跡 中世の居住域、中近世の道跡
調査期間	平成28年10月17日～平成29年１月27日
調査員	菅原祥夫・渡邉春喜・廣川紀子 枝松雄一郎・由井文菜

第１章　遺跡の位置と調査経過

第１節　遺跡の位置と現況

新宿遺跡は、福島県伊達郡桑折町大字成田字新宿・稲山に所在する。遺跡は、標高60ｍほどの低位段丘上に立地し、北から南へ舌状に延びる丘陵頂部の平坦な地形となっており、現況では宅地や耕作地として利用されている。また、丘陵下の低地帯には水田が広がっており、そこからの比高差は４～６ｍ程度である。

遺跡の東側には、旧伊達町方面から桑折町中心街へ抜ける県道353号線が南北方向へ延びる。この県道353号線は近世の奥州街道に比定されており、瀬上宿のあった福島市瀬上地区方面から旧伊達町内を通り、桑折宿のあった桑折町中心街を通って伊達郡国見町方面へ続いている。遺跡付近の段丘崖や開析谷には、奈良・平安時代の須恵器窯跡や近世頃とされる陶器窯跡が点在している。本遺跡の南側には、赤坂窯跡が隣接し、東側の段丘崖には桑折台遺跡が周知の遺跡として確認されている。また、桑折町内をはじめとする周辺一帯には中世の遺跡や館跡が数多く存在する。（廣　川）

第２節　調 査 経 過

新宿遺跡の調査は、９月８日付で福島県教育委員会より1,850㎡の発掘調査の指示を受けて実施した。調査に係った作業日数は延べ68日である。以下に、調査の経過について週ごとに記す。

10月第２週：13日（木）から調査終盤となった川原田遺跡から器材類の移動を始め、14日（金）にプレハブ・トイレを設置して調査準備に取りかかる。

10月第３週：17日（月）に調査区内に重機を搬入して建物基礎等の撤去を開始し、19日（水）から調査区南部の表土除去作業に入る。

10月第４週：24日（月）から作業員を雇用し、重機による表土除去作業と並行して遺構検出作業を行う。１号堀跡、２号溝跡と小穴群の広がりを確認する。

11月第１週：表土除去、遺構検出の両作業とも順調に推移する。１号道跡、１号住居跡を確認する。１日（火）より作業員の一部が馬場遺跡の調査に移る。

11月第２週：８日（火）には馬場遺跡の調査から作業員が戻り、表土除去作業が終了する。10日（木）に基本土層図を作成する。

11月第３週：１号住居跡、１号堀跡、２号溝跡を中心に遺構の精査・記録を進める。17日（木）に連絡所用プレハブを作業員駐車場近くへ移設する。

11月第４週：各遺構の精査・記録を継続する。

12月第１週：２日（金）に排土置き場内に器材倉庫用プレハブを設置する。

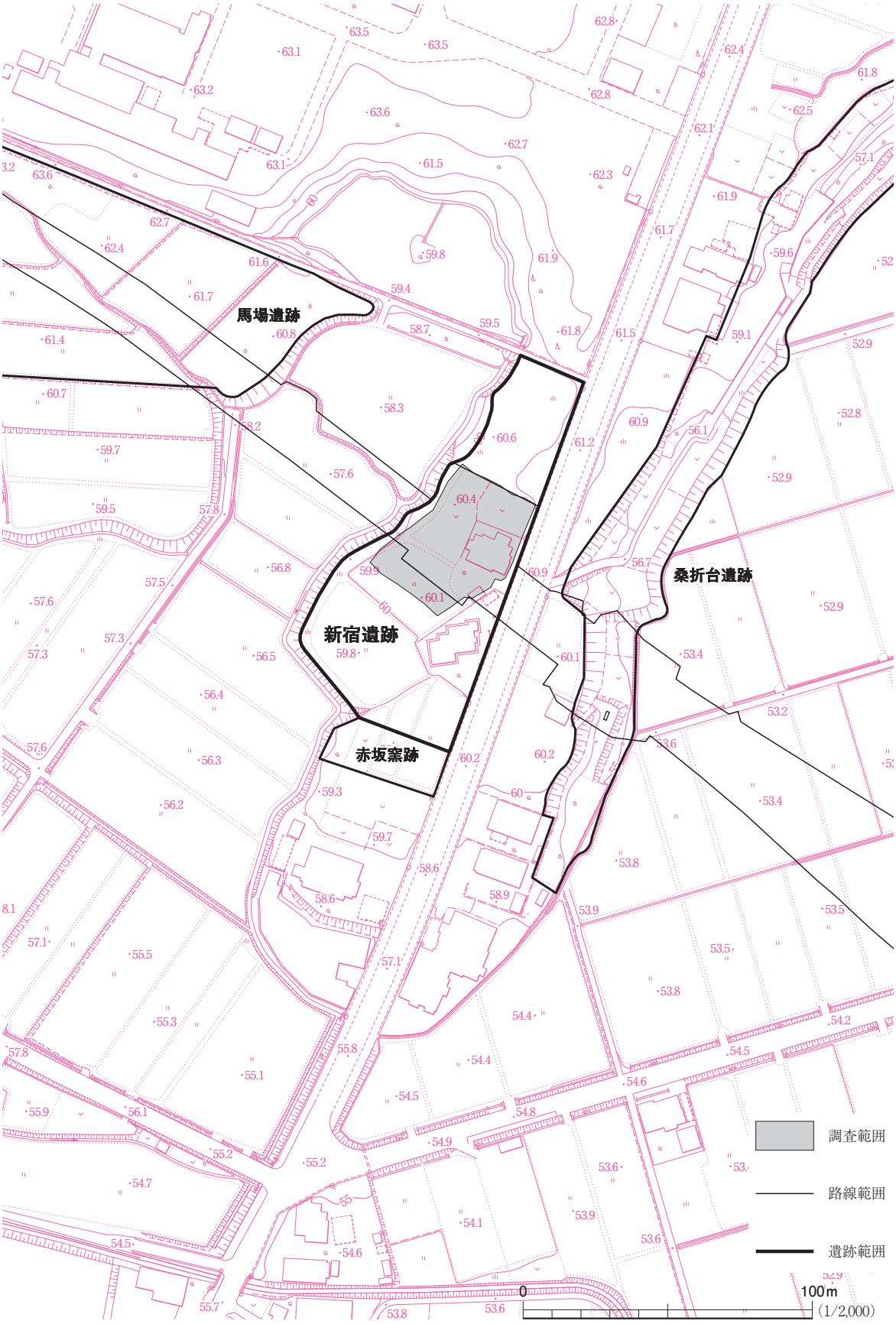


図１　調査区位置図

12月第２週：１号堀跡の路面を確認し、記録する。８日(木)にプレハブに発電機を設置する。
12月第３週：降雪により作業が進まず、２号住居跡、小穴群等の調査区北部の遺構精査に集約する。
12月第４週：年内の調査は、１号堀跡、１号道跡を残してほぼ終了する。22日(木)には年末年始の作業休みに向け、調査区内の安全対策を徹底する。
１月第２週：10日(火)より年明け後の作業を再開する。積雪のため除雪と排水を繰り返しながら、１号堀跡の路面下の部分を掘り下げる。11日(水)に地形測量を行う。
１月第３週：週の前半は１号堀跡の底面を確認し、週の後半は１号道跡の側溝部分を掘り下げる。
１月第４週：１号堀跡と１号道跡の重複関係を確認し、平面図を作成する。26日(木)の空中写真撮影に向け、除雪と排水を行う。27日(金)に調査区内を片づけ、器材類を撤収する。
１月第５週：31日(火)に県文化財課及び工事側の立会いの下、引き渡しを行った。　　(廣　川)

第２章　発見された遺構と遺物

第１節　調査成果の概要と基本土層

調査成果の概要

新宿遺跡は北から南へと舌状に延びる丘陵頂部の平坦部分に立地し、畑や水田等の耕作地として利用されている。今回の調査区の範囲は、県道353号線の西側に隣接した箇所で、調査前現況は宅地、畑、水田等である。

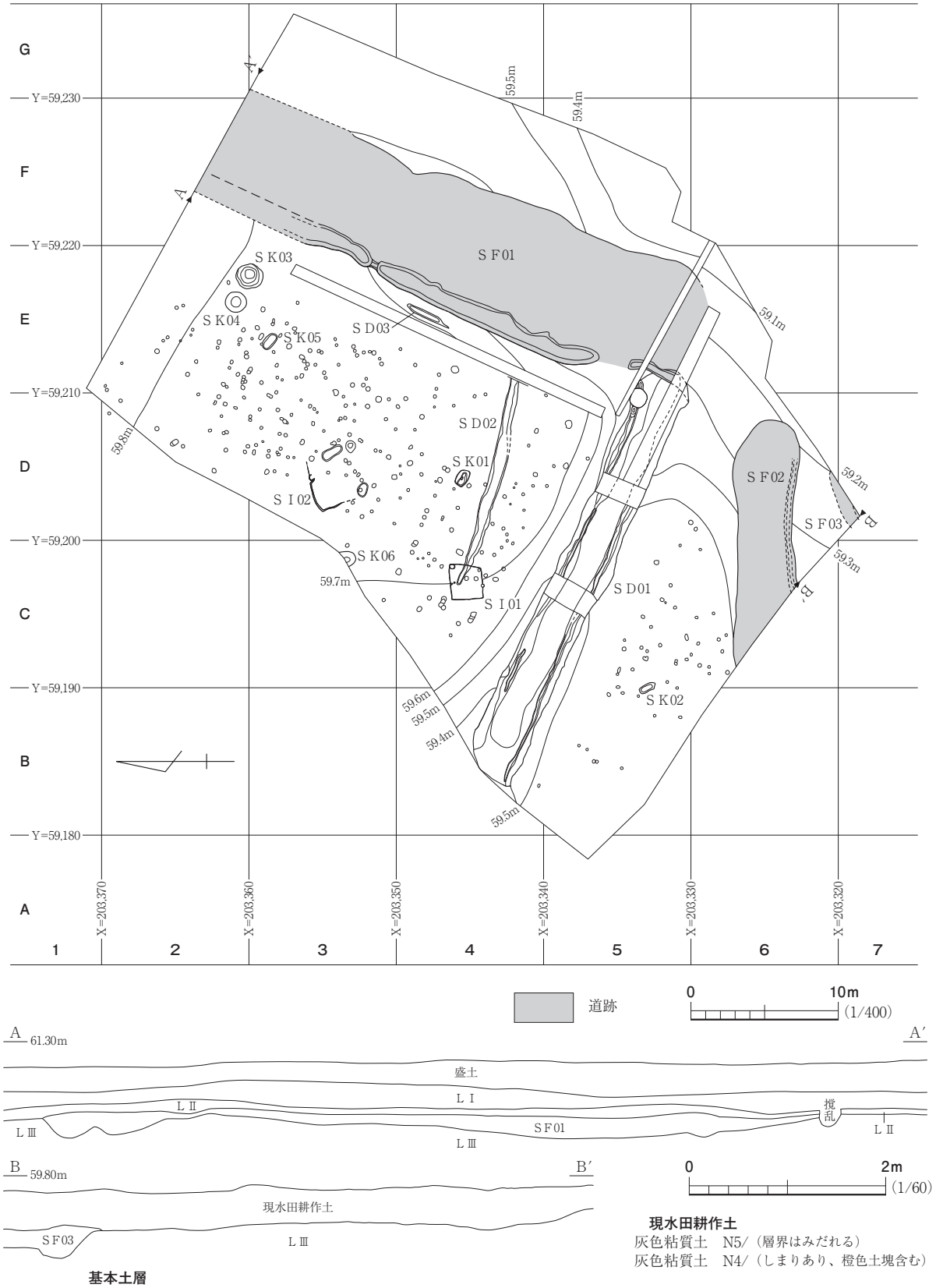
検出された遺構は、竪穴住居跡２軒、土坑６基、道跡３条、堀跡１条、溝跡２条、小穴群である。これらの遺構と出土遺物から、遺跡の時代・性格は縄文時代の狩場、古代の小規模集落、中世の街道筋に営まれた居住域、中世から近世にかけての道跡と考えられる。

基本土層（図２、写真６）

基本土層は、色調・土質の諸特徴からＬⅠ～Ⅲに分層した。

調査区内は、中央部及び北部が宅地とその周りの畑地となっており、南部が水田に利用されていた。そのため、基本土層は調査区壁を利用して北部と南部の２箇所で確認を行った。北側の調査区境には土手状の高まりが分厚い盛土として認められ、南部の水田では北部で確認されたＬⅠ・Ⅱの堆積土が認められず、現水田耕作土とみられる灰色粘質土がＬⅢ上に厚く堆積している。

ＬⅢは調査区内全体で確認できる基盤層で、ＬⅢ上面が検出面である。検出された住居跡や柱穴とみられる小穴の一部では深さが数cmと浅いことから、圃場整備等で掘削が繰り返され、その後にＬⅠ・Ⅱが堆積したものと推察される。ＬⅢは粘性度が強く、調査区北部ではにぶい橙色粘質土(7.5YR6/4)から橙色粘質土(7.5YR6/6)、南部ではにぶい褐色粘質土(7.5YR5/4)から明褐色粘質土



現水田耕作土
灰色粘質土　N5/（層界はみだれる）
灰色粘質土　N4/（しまりあり、橙色土塊含む）

基本土層
ＬⅠ　灰褐色土　7.5YR4/2（ＬⅢ、酸化鉄塊・粒少量）
ＬⅡ　褐灰色粘質土　7.5YR5/1（酸化鉄塊・粒多量）
ＬⅡ′　灰色粘質土　7.5Y5/1（調査区南側で観察）
ＬⅢ　にぶい橙色粘質土　7.5YR6/4 ～橙色粘質土　7.5YR6/6
（調査区南側ではにぶい褐色粘質土〔7.5YR5/4〕～明褐色粘質土〔7.5YR5/6〕、部分的に灰白色粘質土〔10YR8/2〕）

図２　遺構配置図・基本土層

(7.5YR5/6)と確認された。ＬⅢ上面から20～30㎝下位では灰白色粘質土として認められ、採取された白色粘土は土器づくりに遜色ないものである。　（廣　川）

第２節　竪 穴 住 居 跡

今回の調査で発見された竪穴住居跡は２軒である。宅地等の造成の影響を受けており、遺存状態はよくない。そのうちの１号住居跡は１辺約２ｍの小型のもので、もう一方の２号住居跡からは近隣の須恵器窯産とみられる焼き歪みのある須恵器杯が出土している。時期が不明であり、それらの窯跡との関係は判断できないが、調査区の北端からは粘土採掘坑２基が確認されている。２軒の竪穴住居跡は、周囲から検出された小穴群より先行して築かれており、中世の居住域として展開する以前に営まれた古代の小規模集落を構成していたものと考えられる。

１号住居跡　ＳＩ01

遺　　構（図３、写真７）

本遺構は、調査区中央西寄りのＣ４グリッドに位置する。検出面はＬⅢ上面である。１辺約２ｍの小型の住居跡で、後世に床面近くまで掘削され、周壁はほとんど残っていない。およそ東西方向に延びる２号溝跡と重複し、本遺構が新しい。また、周囲には掘立柱建物跡の柱穴とみられる小穴

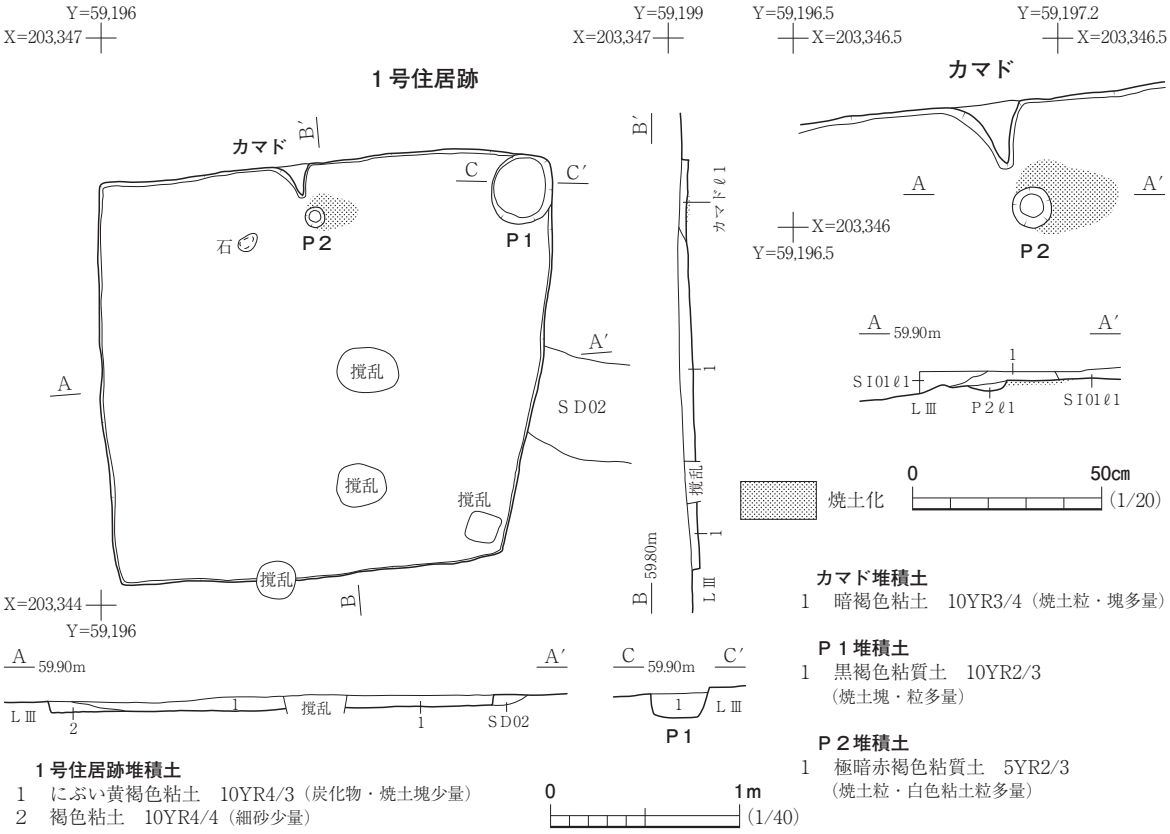


図３　１号住居跡

が多数検出されるが、その一部が本遺構を掘り込んでつくられている。同じ竪穴住居跡の２号住居跡は北東方向に８ｍほど離れている。

遺構内堆積土は、わずかに床面上に堆積する２層を確認した。そのうちℓ２は壁際にのみ認められる。検出面からの深さは５㎝程度で、わずかに残る周壁は直立する。床面は平坦で、貼り床等は認められなかった。

本遺構の平面形は歪んだ方形で、南壁は約２ｍだが、北壁は約2.4ｍとやや長い。主軸方向はほぼ真北を示す。北東隅には貯蔵穴とみられるＰ１が認められた。Ｐ１は長軸約38㎝、短軸約34㎝の南北にやや細長い楕円形で、深さ約15㎝を測り、底面は平らで周壁はほぼ直立している。

カマドは北壁の中央に付設されていた。その遺存状態は悪く、長軸約30㎝、短軸約20㎝の楕円形の燃焼面と、その西側に北壁から18㎝ほど張り出したカマド袖の一部が確認されたのみである。東側のカマド袖は認められなかった。燃焼面上に残されたカマド内堆積土には焼土が多く含まれ、その部分を取り除くと、燃焼面の西部から直径約10㎝の浅い窪み状のＰ２が検出された。Ｐ２はカマドに付随する支脚等の痕跡とみられる。

出土遺物は、土師器杯や須恵器甕・瓶類等の９点が出土したが、細片のため図示しなかった。

ま と め

本遺構の遺存状態は悪く、出土遺物も乏しいため、時期の詳細については不明であるが、今回の調査で確認された２号住居跡とは同時期ないしそれほど時期を隔てずに営まれたものと推測される。本遺構は、小型の住居跡であるため、一般的な居住用というよりも作業小屋のようなものであったと考えられる。（廣　川）

２号住居跡　ＳＩ02

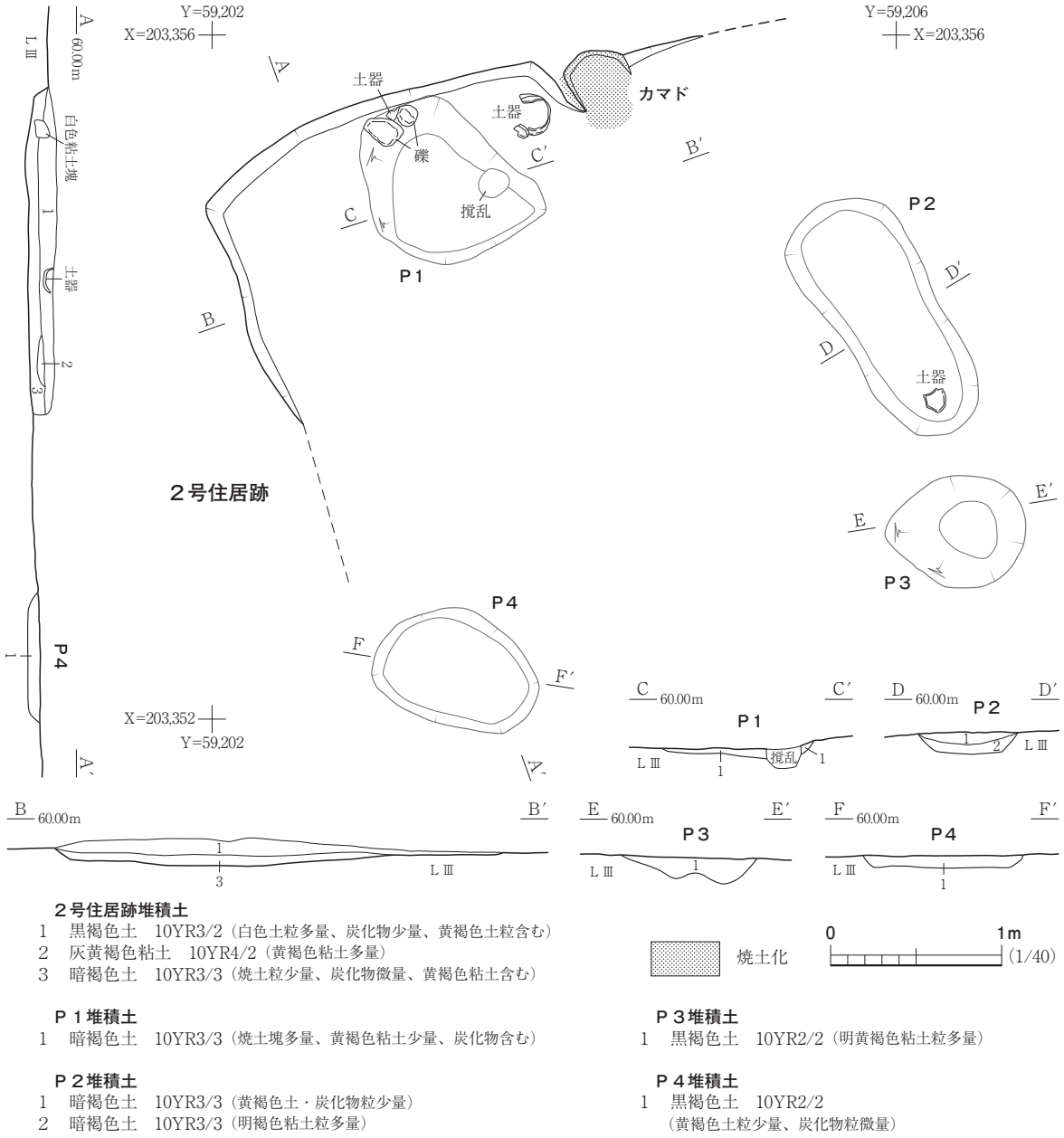
遺　　構（図４・５、写真８・９）

本遺構は、調査区中央西寄りのＤ３グリッドに位置する。検出面はＬⅢ上面である。後世の掘削により、周壁は北西隅しか残っていないが、その周囲からある程度まとまった遺物が出土した。それらには焼き歪みのある須恵器杯が含まれており、付近の須恵器窯から直接入手したものと推察される。遺跡が所在する一帯の基盤層には土器づくりに良好な灰白色粘土が含まれており、調査区の北端からは粘土採掘坑２基が検出され、本遺構内の堆積土中からも白色粘土塊が認められている。

本遺構の東側には、掘立柱建物跡の柱穴とみられる小穴群が検出され、同じ竪穴住居跡で小型の１号住居跡は南西方向に約８ｍ離れている。また、本遺構から西方向には縄文時代の落し穴とみられる６号土坑が検出されている。

遺構内堆積土は、住居跡の北西隅で３層を確認した。ℓ２の灰黄褐色粘土は部分的に認められるもので、ℓ３は北西隅の床面上に厚さ５～10㎝程度で水平に堆積している。ℓ３は掘形とみられるＰ２の堆積土に近いため、部分的に貼り床が残ったものかもしれない。

本遺構は、北壁部分で３ｍほどしか残らないが、北西隅から約2.5ｍのところにカマドが設置さ



２号住居跡堆積土
1　黒褐色土　10YR3/2（白色土粒多量、炭化物少量、黄褐色土粒含む）
2　灰黄褐色粘土　10YR4/2（黄褐色粘土多量）
3　暗褐色土　10YR3/3（焼土粒少量、炭化物微量、黄褐色粘土含む）

Ｐ１堆積土
1　暗褐色土　10YR3/3（焼土塊多量、黄褐色粘土少量、炭化物含む）

Ｐ２堆積土
1　暗褐色土　10YR3/3（黄褐色土・炭化物粒少量）
2　暗褐色土　10YR3/3（明褐色粘土粒多量）

Ｐ３堆積土
1　黒褐色土　10YR2/2（明黄褐色粘土粒多量）

Ｐ４堆積土
1　黒褐色土　10YR2/2
（黄褐色土粒少量、炭化物粒微量）

図４　２号住居跡（１）

れているため、一辺約５ｍの方形の住居跡と推測される。掘形とみられるＰ２～４の配置からも４～５ｍ四方の住居跡が想定される。カマドの西側には貯蔵穴とみられるＰ１が検出された。長軸約100㎝、短軸約80㎝の不整な方形の窪み状のもので、壁の立ち上がりは北・東壁のみでわずかに認められ、底面は平坦である。北壁には数個の石が認められた。

カマドは、カマド袖が部分的に残されており、東部では15㎝、西部では40㎝ほど張り出し、その間が熱を受けて赤変している。燃焼面はカマド袖間の約35㎝、奥壁からの約45㎝の範囲で確認された。カマド堆積土は３層に分層した。ℓ１は燃焼部に堆積した土、ℓ２はカマドの袖を構成していた土が崩れて再堆積した土も含まれる可能性があるため、カマド堆積土として扱った。ℓ３はカマド袖の構築土である。

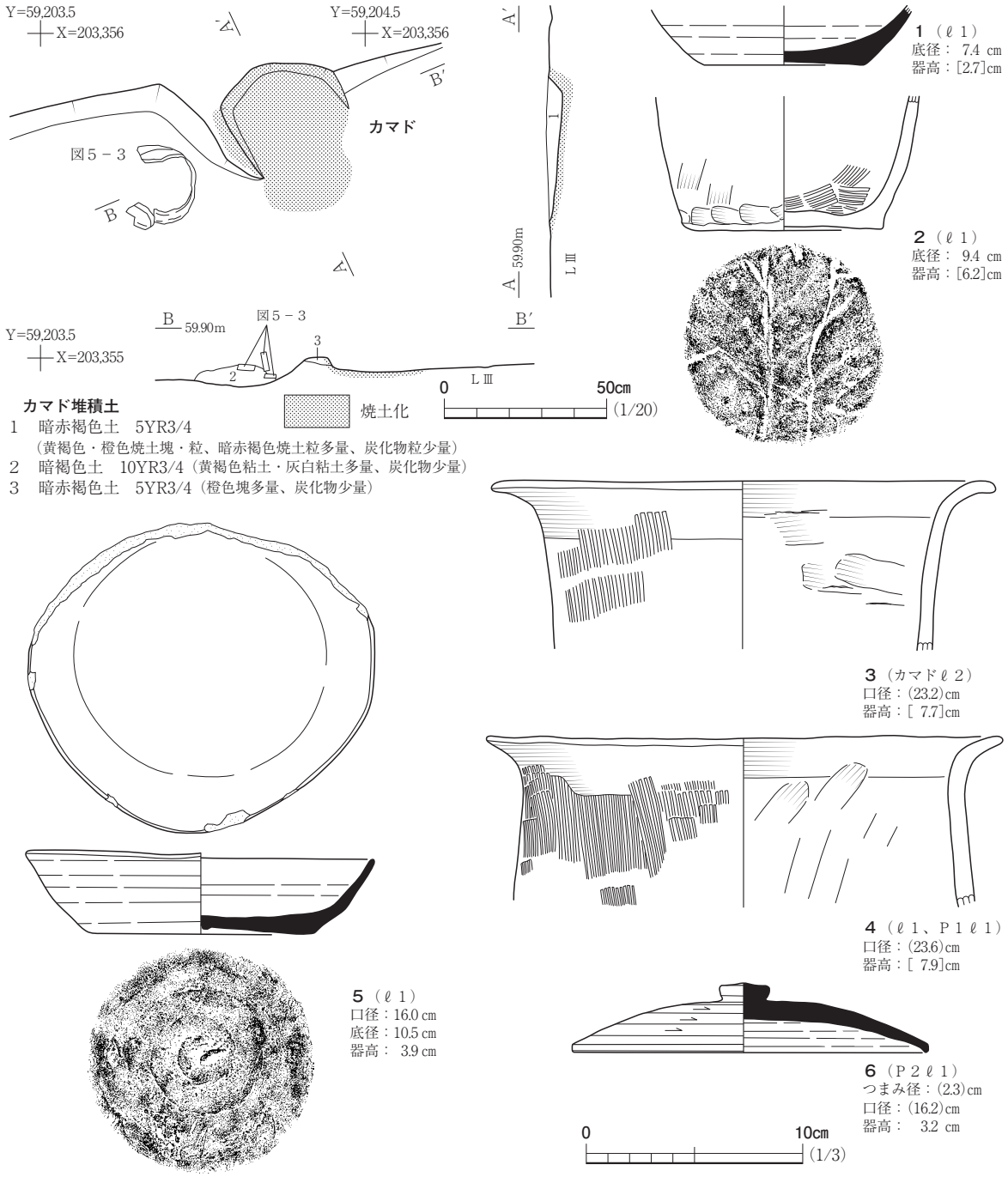


図５　２号住居跡（２）・出土遺物

Ｐ２～４は住居跡の掘形の痕跡とみられ、Ｐ２は東壁沿いに、Ｐ３とＰ４はそれぞれ南東隅と南西隅から検出された。Ｐ２が長軸約150cm、短軸約60cm、Ｐ３が長軸約80cm、短軸約70cm、Ｐ４が長軸約100cm、短軸約70cmで、深さがそれぞれ10～15cmに収まる。Ｐ２～４の堆積土は近似するが、含有物や色調が若干異なる。なお、Ｐ２からは須恵器蓋が出土した。

遺　　物（図５、写真20）

遺物は、カマド脇やＰ１の貯蔵穴を中心に土師器片や須恵器片が出土している。そのうち図示したものは、遺存状態の良い６点である。

図５－２～４は土師器甕である。２は底部周囲に指ナデ、内面にハケメが施され、底部には木葉痕が認められる。また、内面の数箇所で種子圧痕状のものが観察できた。３はカマド脇に口縁部が下に伏せられて出土したものである。３・４とも口縁部が外湾し、外面にはハケメ、内面にはナデが施されている。１・５は須恵器の杯であるが、１は赤褐色を呈し、５は焼き歪みが認められ、周辺の須恵器窯で生産された焼き損じとみられる。どちらも底部には回転ヘラ切り痕が認められる。５は底部が大きく、体部が直線的に短く立ち上がっている。６は須恵器の蓋で外面にヘラケズリが施され、全体的に平たいつくりとなっている。低い宝珠状のつまみが付き、端部がわずかに屈曲する。

ま と め

本遺構の遺存状態は悪いが、カマドの付く竪穴住居跡である。出土遺物から８世紀後半頃のものと考えられる。本遺跡の周辺には複数の窯跡が存在するが、当該期のものとしては、伊達市瀬戸場に所在する伊達窯跡群が知られる。８世紀後半から９世紀にかけての古代信夫郡の須恵器生産を担っていた。本遺構から出土した須恵器は、胎土や焼成がこの伊達窯跡群から出土した資料と酷似することから、伊達窯産とみられる。また、出土遺物の中には須恵器の焼き損じ品が含まれるため、本遺跡を営んだ人々が何らかの生産に関わっていた可能性も考えられる。　（廣　川）

第３節　　土　　坑

今回の調査で発見された土坑は６基である。形態的な特徴から、３・４号土坑は粘土採掘坑、６号土坑は縄文時代の落し穴とみられる。１・２・５号土坑の用途は不明であるが、主軸方向や形態に類似点が認められる。

１号土坑　ＳＫ01（図６、写真10）

本土坑は調査区中央のＤ４グリッドに位置し、ＬⅢ上面より検出した。重複する遺構はないが、本遺構の南約1.5ｍには２号溝跡が東西方向に延びており、周囲には掘立柱建物跡の柱穴とみられる小穴群が広がっている。

堆積土は７層に分層した。自然堆積とみられ、ℓ２～７が段階的に堆積したところで、ℓ１が全体を覆っている。ℓ１～３は黒褐色粘質土で、基本土層中からは確認できなかったが、圃場整備等による開削以前には本遺構周辺に堆積していたと考えられる。

平面形は長軸約120㎝、短軸約80㎝の不整な長方形ないし楕円形で、検出面からの深さは最深で70㎝を測る。主軸方向はＮ60°Ｗである。底面は不整な楕円形状に一段下がっており、その中央がさらに丸く窪んでいるが、周壁は垂直に立ち上がる。出土遺物は認められなかった。

本遺構の時期や用途は不明である。調査区内からは本遺構と同様の方形状の土坑である２・５号土坑が確認されており、何らかの関連性が考えられる。　（廣　川）

２号土坑　ＳＫ02（図６、写真10）

本土坑は調査区南部のＢ５・Ｃ５グリッドに位置し、ＬⅢ上面より検出した。重複する遺構はないが、周囲には掘立柱建物跡の柱穴とみられる小穴群が広がっている。

堆積土は３層に分層し、レンズ状堆積を示すことから自然堆積とみられる。

平面形は長軸約116㎝、短軸約48㎝の長方形ないし楕円形で、検出面からの深さは最深で50㎝を測る。主軸方向はＮ30°Ｗである。底面は平坦で、周壁は直立する。出土遺物は認められなかった。

本遺構の時期や用途は不明である。調査区内からは本遺構と同様の方形状の土坑が他に２基確認されており、特に５号土坑とは主軸方向、規模や形態が近似している。両遺構間は34ｍほど離れているものの、何らかの関連性が考えられる。（廣　川）

３号土坑　ＳＫ03（図６、写真10）

本土坑は調査区北部のＥ２・３グリッドに位置し、ＬⅢ上面より検出した。重複する遺構はないが、西側に並んで４号土坑が配置される。東側約３ｍには１号道跡が南北方向に延びており、南西方向に約５ｍ離れて５号土坑があり、周囲には掘立柱建物跡の柱穴とみられる小穴群が広がっている。

堆積土は６層に分層した。全体的に基盤層中の白色粘土塊を含んでおり、褐灰色粘質土と黒褐色土ないし黒褐色粘質土が交互に堆積している。ℓ６はグライ化している。

平面形は長軸約180㎝、短軸約170㎝の歪んだ円形で、検出面からの深さは最深で140㎝を測る。基盤層の白色粘土層を約110㎝掘り込んでいる。底面は皿状に窪み、周壁は緩やかに立ち上がるが、北東部では一部抉れている。

遺物は、土師器・須恵器の細片３点のほか、図７－１に図示した凹石１点が出土した。１は丸みのある扁平な石英安山岩製で、片側が欠けている。中央部にはわずかな凹みが認められる。

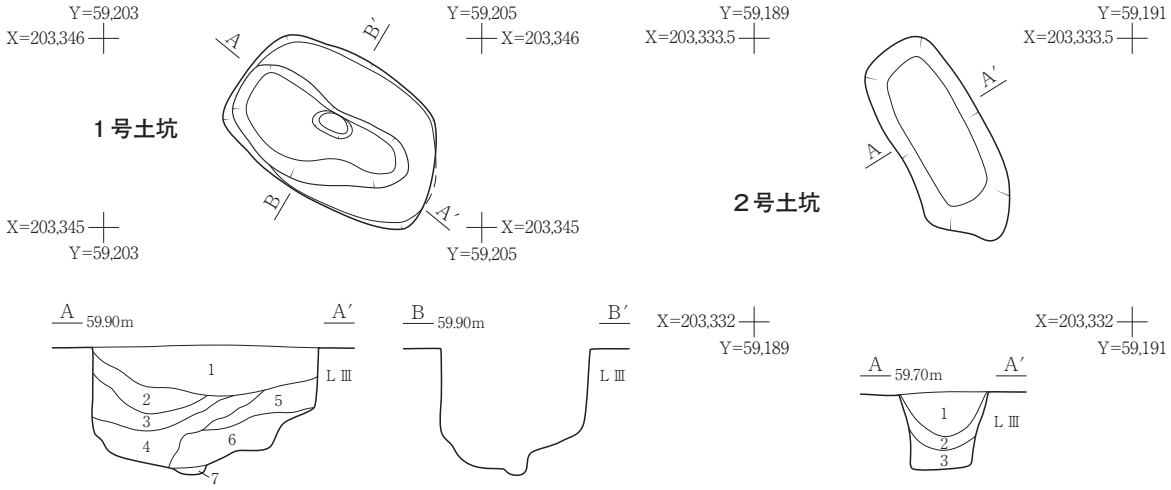
本遺構は基盤層の白色粘土層を深く掘り込んでいることから、白色粘土の採取を目的とした粘土採掘坑と考えられる。また、本遺跡の周辺には古代、近世の窯跡が確認されており、調査区内からは中世陶器の焼き損じ品が出土する。そのため、本遺構はそれらの窯跡との関連が指摘できる。（廣　川）

４号土坑　ＳＫ04（図６、写真10）

本土坑は調査区北部のＥ２グリッドに位置し、ＬⅢ上面より検出した。重複する遺構はないが、東側に並んで３号土坑が配置される。東側約５ｍには１号道跡が南北方向に延びており、南西方向に約2.5ｍ離れて５号土坑があり、周囲には掘立柱建物跡の柱穴とみられる小穴群が広がっている。

堆積土は７層に分層した。ℓ１～６は黒褐色土を基調としており、全体的に黄褐色ないし浅黄色の粘土塊・粒を含んでいる。ℓ７の褐色粘質土は、底面上に厚く堆積する。

平面形は直径140㎝前後の円形で、検出面からの深さは最深で70㎝である。基盤層の白色粘土層を約50㎝掘り込んでいる。底面は皿状に窪み、周壁は緩やかに立ち上がる。

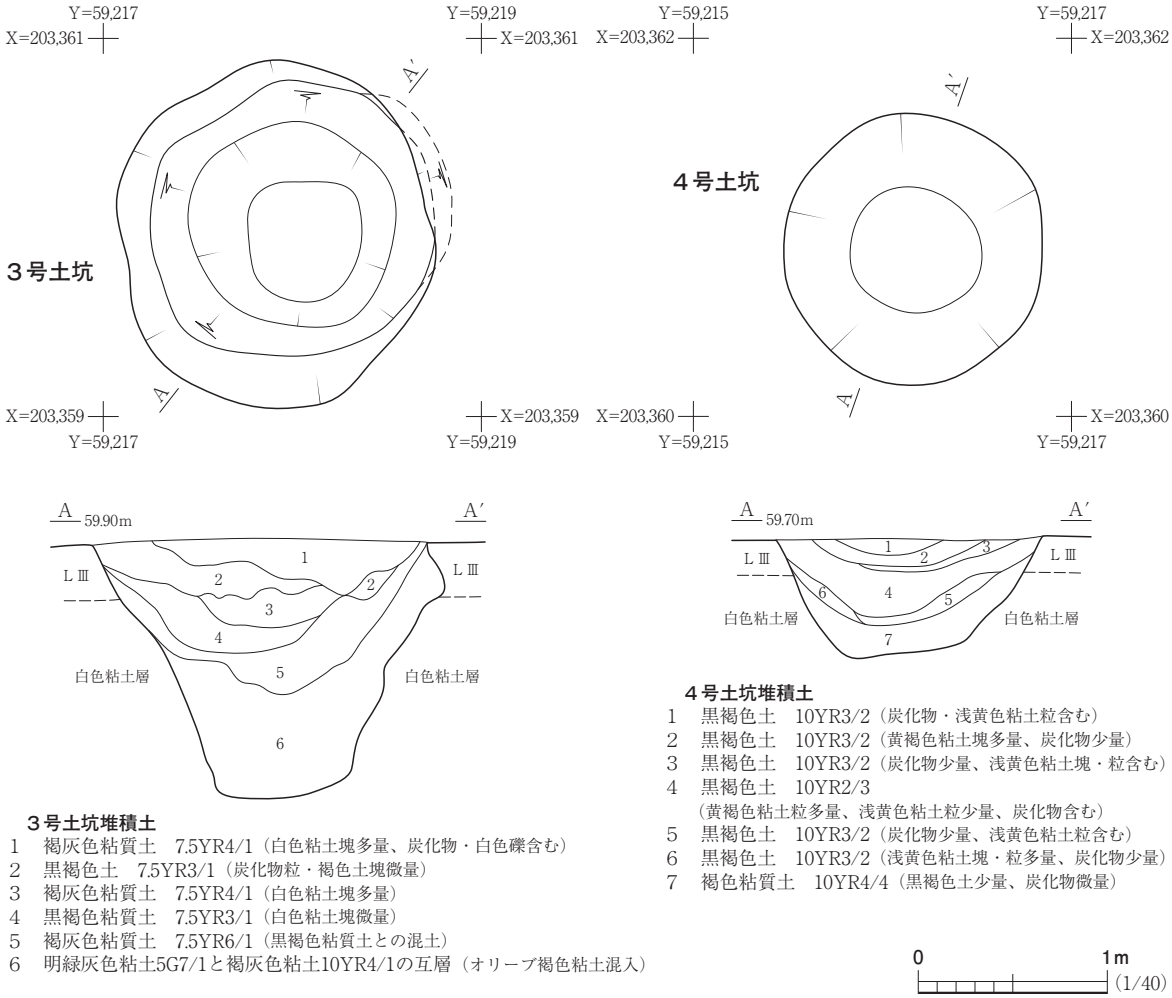


１号土坑堆積土

1　黒褐色粘質土　10YR2/3
2　暗褐色粘質土　10YR3/4
3　黒褐色粘質土　10YR2/3（白色粘土塊多量）
4　褐色粘質土　10YR4/4
5　にぶい黄褐色粘質土　10YR4/3（白色粘土塊少量）
6　暗褐色粘質土　10YR3/4（白色粘土塊少量）
7　褐色粘質土　10YR4/4（白色粘土塊・黒色土偽礫多量）

２号土坑堆積土

1　灰褐色粘質土　7.5YR4/2（砂質成分微量）
2　褐色粘質土　7.5YR4/4
3　暗褐色粘質土　7.5YR3/3（黒褐色土混入）



３号土坑堆積土

1　褐灰色粘質土　7.5YR4/1（白色粘土塊多量、炭化物・白色礫含む）
2　黒褐色土　7.5YR3/1（炭化物粒・褐色土塊微量）
3　褐灰色粘質土　7.5YR4/1（白色粘土塊多量）
4　黒褐色粘質土　7.5YR3/1（白色粘土塊微量）
5　褐灰色粘質土　7.5YR6/1（黒褐色粘質土との混土）
6　明緑灰色粘土5G7/1と褐灰色粘土10YR4/1の互層（オリーブ褐色粘土混入）

４号土坑堆積土

1　黒褐色土　10YR3/2（炭化物・浅黄色粘土粒含む）
2　黒褐色土　10YR3/2（黄褐色粘土塊多量、炭化物少量）
3　黒褐色土　10YR3/2（炭化物少量、浅黄色粘土塊・粒含む）
4　黒褐色土　10YR2/3
（黄褐色粘土粒多量、浅黄色粘土粒少量、炭化物含む）
5　黒褐色土　10YR3/2（炭化物少量、浅黄色粘土粒含む）
6　黒褐色土　10YR3/2（浅黄色粘土塊・粒多量、炭化物少量）
7　褐色粘質土　10YR4/4（黒褐色土少量、炭化物微量）

図６　１～４号土坑

出土遺物は図示しなかったが、剥片石器１点が出土した。

本遺構は基盤層の白色粘土層を深く掘り込んでいることから、白色粘土の採取を目的とした粘土採掘坑と考えられる。また、本遺跡の周辺には古代、近世の窯跡が確認されており、調査区内からは中世陶器の焼き損じ品が出土する。そのため、本遺構は３号土坑と同様にそれらの窯跡との関連が指摘できる。（廣　川）

５号土坑　ＳＫ05（図７、写真10）

本土坑は調査区北側のＥ３グリッドに位置し、ＬⅢ上面より検出した。重複する遺構はないが、周囲には掘立柱建物跡の柱穴とみられる小穴群が広がっている。

堆積土は10層に分層した。レンズ状堆積を示すことから自然流入土とみられ、黒褐色土ないし暗褐色土と基盤層由来の崩落土が交互に堆積している。

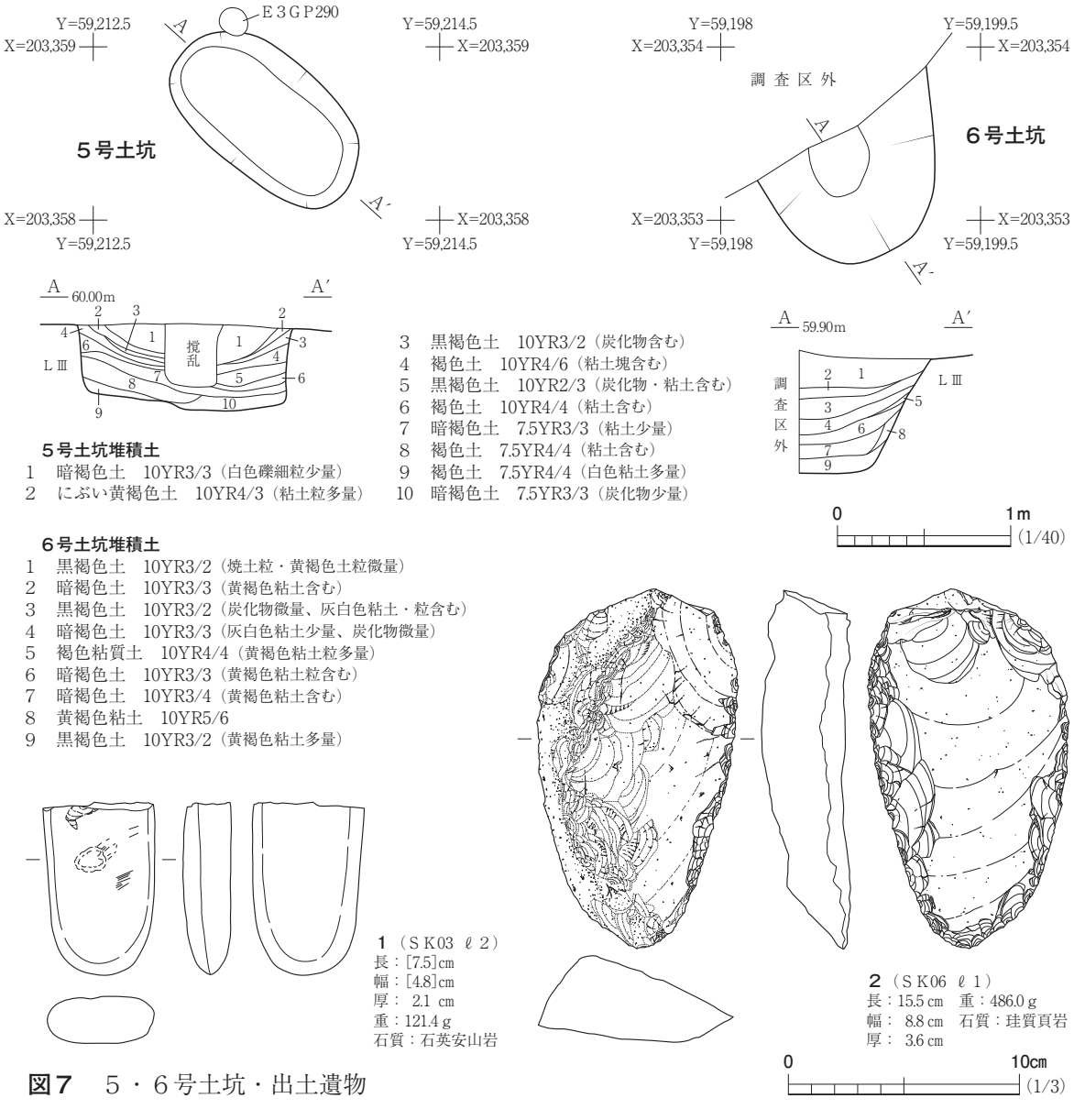


図７　５・６号土坑・出土遺物

平面形は長軸約124cm、短軸約68cmの長方形ないし楕円形で、検出面からの深さは最深で50cmを測る。主軸方向はＮ50°Ｗである。底面はほぼ平坦で、周壁は直立する。出土遺物は認められなかった。

本遺構の時期や用途は不明である。調査区内からは本遺構と同様の方形状の土坑が２基確認されており、特に主軸方向、規模や形態が近似する２号土坑とは何らかの関連性が考えられる。（廣　川）

６号土坑　ＳＫ06（図７、写真10・21）

本土坑は調査区西端のＣ３グリッドに位置し、ＬⅢ上面より検出した。形態的な特徴から落し穴と考えられるが、北西部の大半は調査区外に延びている。重複する遺構はなく、本遺構の東に約３ｍには２号住居跡があり、周囲には掘立柱建物跡の柱穴とみられる小穴群が広がっている。

堆積土は９層に分層し、旧表土由来の黒褐色土と暗褐色土が交互に堆積している。ℓ５とℓ８は周壁の崩落土で、壁際に薄く堆積する。これ以外の層は、周囲からの自然流入土とみられる。

平面形は長軸約150cm以上の長楕円形と推定され、遺存する部分で長軸方向が約70cm、短軸約110cmである。検出面からの深さは最深で70cm前後である。底面は平坦で、周壁はほぼ直立する。

出土遺物はℓ１から出土した削器１点で、図７－２に図示した。２は珪質頁岩製で、大きめの縦長剥片の両側を細かく加工して刃部を作り出している。背面には自然面が残り、腹面には打痕が認められる。

本遺構は縄文時代の落し穴とみられるが、時期の詳細については不明である。付近からも縄文時代とみられる石器や剥片が出土しており、当時の狩場と考えられる。（廣　川）

第４節　道　跡

今回の調査で発見された道跡は３条である。試掘調査の段階で、近世の奥州街道に比定される県道353号線と並行する道跡の一部が確認されていたが、今回の調査によりその道跡と枝道とみられる２号道跡と３号道跡の一部が検出された。また、道跡の西側に直交して設置されている堀跡は、ある時期に埋め戻され、１号道跡の枝道として再利用されていたようである。１号道跡と１号堀跡の周囲から検出された小穴群は、当時の街道筋に営まれた建物跡の柱穴とみられる。

１号道跡　ＳＦ01

遺　構（図８、写真11・12）

本遺構は、調査区東部のＥ３～５、Ｆ２～５グリッドにかけて位置する。検出面はＬⅢ上面である。調査区東側に隣接し、およそ南北方向に延びている県道353号線と並行するものとみられるが、道跡の南側部分は宅地等の造成で確認できなかった。２号道跡、３号道跡は本遺構の枝道と考えられるため、本遺構の南側もそれらの方向に延びていたものと推測される。１号堀跡は本遺構と重複し、本遺構の一部を掘り込んでつくられている。

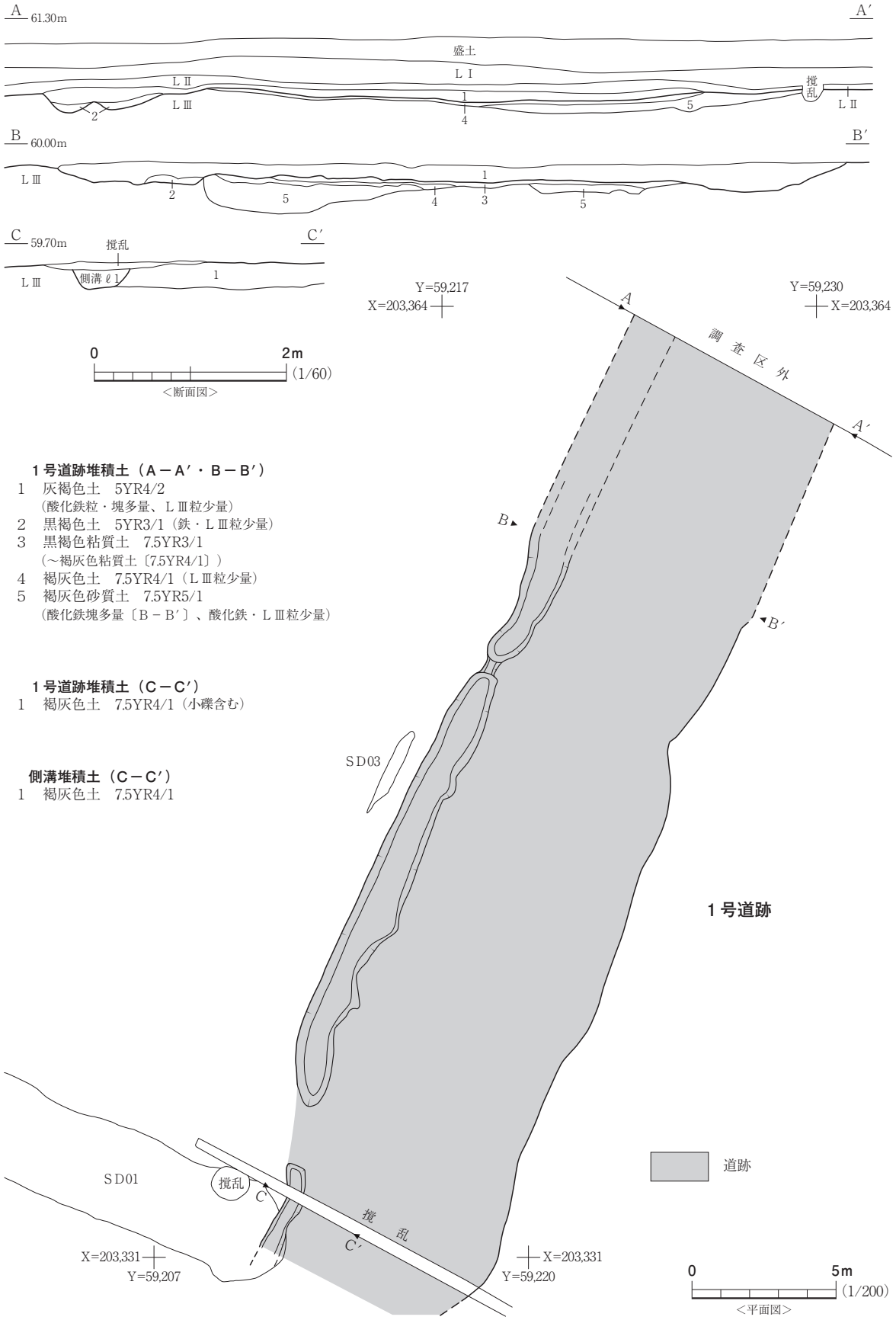

A 61.30m
A′
盛土
ＬⅠ
ＬⅡ
ＬⅢ
撹乱
B 60.00m
B′
C 59.70m
C′
側溝ℓ1
0
2m
(1/60)
＜断面図＞
Y=59,217
X=203,364
Y=59,230
X=203,364
調査区外
1号道跡堆積土（Ａ－Ａ′・Ｂ－Ｂ′）
1　灰褐色土　5YR4/2
（酸化鉄粒・塊多量、ＬⅢ粒少量）
2　黒褐色土　5YR3/1（鉄・ＬⅢ粒少量）
3　黒褐色粘質土　7.5YR3/1
（～褐灰色粘質土〔7.5YR4/1〕）
4　褐灰色土　7.5YR4/1（ＬⅢ粒少量）
5　褐灰色砂質土　7.5YR5/1
（酸化鉄塊多量〔Ｂ－Ｂ′〕、酸化鉄・ＬⅢ粒少量）
1号道跡堆積土（Ｃ－Ｃ′）
1　褐灰色土　7.5YR4/1（小礫含む）
側溝堆積土（Ｃ－Ｃ′）
1　褐灰色土　7.5YR4/1
ＳＤ03
1号道跡
ＳＤ01
撹乱
撹乱
道跡
X=203,331
Y=59,207
X=203,331
Y=59,220
0
5m
(1/200)
＜平面図＞

図８　１号道跡

堆積土は５層に分層した。ℓ５は掘形内に堆積する砂質土で、この上面が最初の路面とみられる。ただし、使用時には幾度となく補修や改修が加えられていたものと考えられ、ℓ５の堆積が認められず、ℓ４のみが確認できた部分があるなど一定していない。ℓ３はℓ４・５上に薄く堆積するため、道として使用された最終段階に堆積したものとみられる。ℓ２は側溝内堆積土で、底面近くに薄く堆積する。側溝は西端部分でしか確認できなかったが、図８の断面図Ｂ－Ｂ′では東端部でℓ３が途切れ、Ｕ字状の窪みが認められることから東端にも設置されていた可能性がある。

本遺構の規模は、調査区内で確認できた範囲内では全長約35ｍ、幅が８ｍ前後である。およそ南北方向に直線的に延びており、主軸方向はＮ20°Ｅである。確認できた西端部分の側溝の規模は、幅約150㎝、検出面からの深さは最深で25㎝前後である。断面は横長のＵ字形であるが、北端ではＷ字形となるため補修が繰り返され新旧があった可能性も考えられるが、面的には追認できなかった。なお、枝道として利用されていた１号堀跡が埋められた後、断面図Ｃ－Ｃ′に示す幅60㎝、深さ20㎝程度の小規模な側溝が掘り込まれたようである。

遺　　物（図９、写真21）

出土遺物は30点で、そのうち６点を図示した。ほとんどが側溝部分から出土している。

図９－１は須恵器の高台付杯で、高台が外側に短く張り出し、杯部には回転ヘラ切り状の痕跡が認められる。同図２～４は、瓷器系とみられる中世陶器の細片である。２はこね鉢とみられる鉢の底部近くで、内面には使用による摩耗が認められる。外面にはヘラケズリ、底部周辺に指ナデが認められ、内面の指ナデは強く押し付けられている。３は甕の肩部で、粘土紐の積み上げ痕が認めら

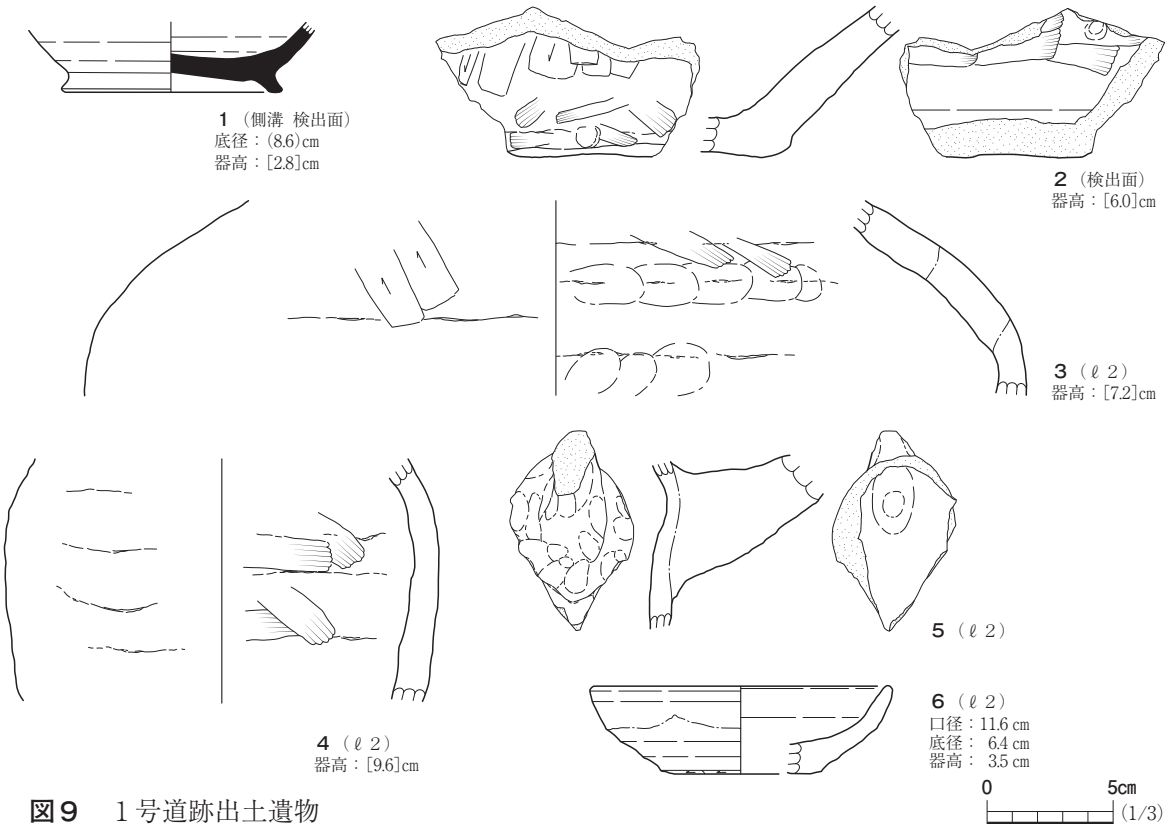


図９　１号道跡出土遺物

れ、内面では粘土紐のつなぎめを指で押さえながら調整しているようである。４は壺とみられる肩部から体部上半部分で、内外面とも粘土紐の積み上げ痕が認められ、内面には横方向の指ナデが観察される。２・３の器面は橙色ないし灰赤色であるが、４は黒っぽく、色調・質感とも須恵器に近い。

同図５・６は近世陶器で、福島市飯坂町に所在する岸窯跡からは同様のものが出土している。５は手付水注の把手の部分とみられ、手づくねで成形されており、釉が完全に溶けきらず黄色っぽく変色している。６は小型の丸皿で、外面の上半部分と内面全体に灰色の釉がかけられ、外面の釉は２次的な被熱で発砲している。底部はほとんど残らないが、部分的にヘラケズリが認められる。

ま と め

本遺構は、宅地等の造成で掘削を受けており、出土遺物も乏しい。そのため時期の詳細については不明であるが、中近世の陶器片が出土しており、重複する１号堀跡の年代観から古代末から中世にかかる時期には存在していたようである。近世の奥州街道に比定される県道353号線のすぐ西側を並行していることから、近世以前の本地域の主要な幹線道路と推察され、その候補としては古代の東山道、中世の奥六郡に通じる奥の大道が考えられる。（廣　川）

２・３号道跡　ＳＦ02・03

遺　　構（図10、写真13）

本遺構は、調査区東部のＣ６、Ｄ６・７グリッドにかけて位置する。検出面はＬⅢ上面である。１号道跡の南側部分が遺存しないため、本遺構との重複関係は確認できなかった。１号道跡が当該地域の主要幹線道路と推察されるため、本遺構の２・３号道跡はある時期の枝道と考えられる。２号道跡は西方向に調査区外へと延びており、地形に則して丘陵下に続くものとみられる。３号道跡は調査区南端から側溝部分の一部分を確認したのみである。

遺構内堆積土は還元作用を受け、一部グライ化する。側溝堆積土も含め２号道跡で７層、３号道跡で４層に分層した。２号道跡の側溝ℓ１～４は側溝内堆積土で南端にのみ確認された。２号道跡の掘形内には、ℓ１～３がおよそ水平に堆積する。ℓ１はしまりが認められたことから、ℓ１上面は路面だった可能性もあるが、上部が現水田耕作土により削られているため判然としない。３号道跡のℓ１は掘形内堆積土、側溝ℓ１～３は西端に認められた側溝内堆積土である。

２号道跡の規模は、調査区内で確認できた範囲で全長約17ｍ、幅４ｍ前後である。南端に側溝が認められ、幅50㎝前後、検出面からの深さ約30㎝を測り、断面形がＵ字ないしＶ字となる。３号道跡は、調査区の南東隅から調査区の東壁に沿って約４ｍ確認できた。西端の側溝部分とみられ、幅約80㎝、検出面からの深さ約35㎝で、断面はＵ字状である。

遺　　物（図10）

出土遺物はほとんどなく、１点を図示した。

図10－１は２号道跡の側溝部分から出土したもので、須恵器の壺とみられる肩部の資料である。内面には当て具痕が認められる。

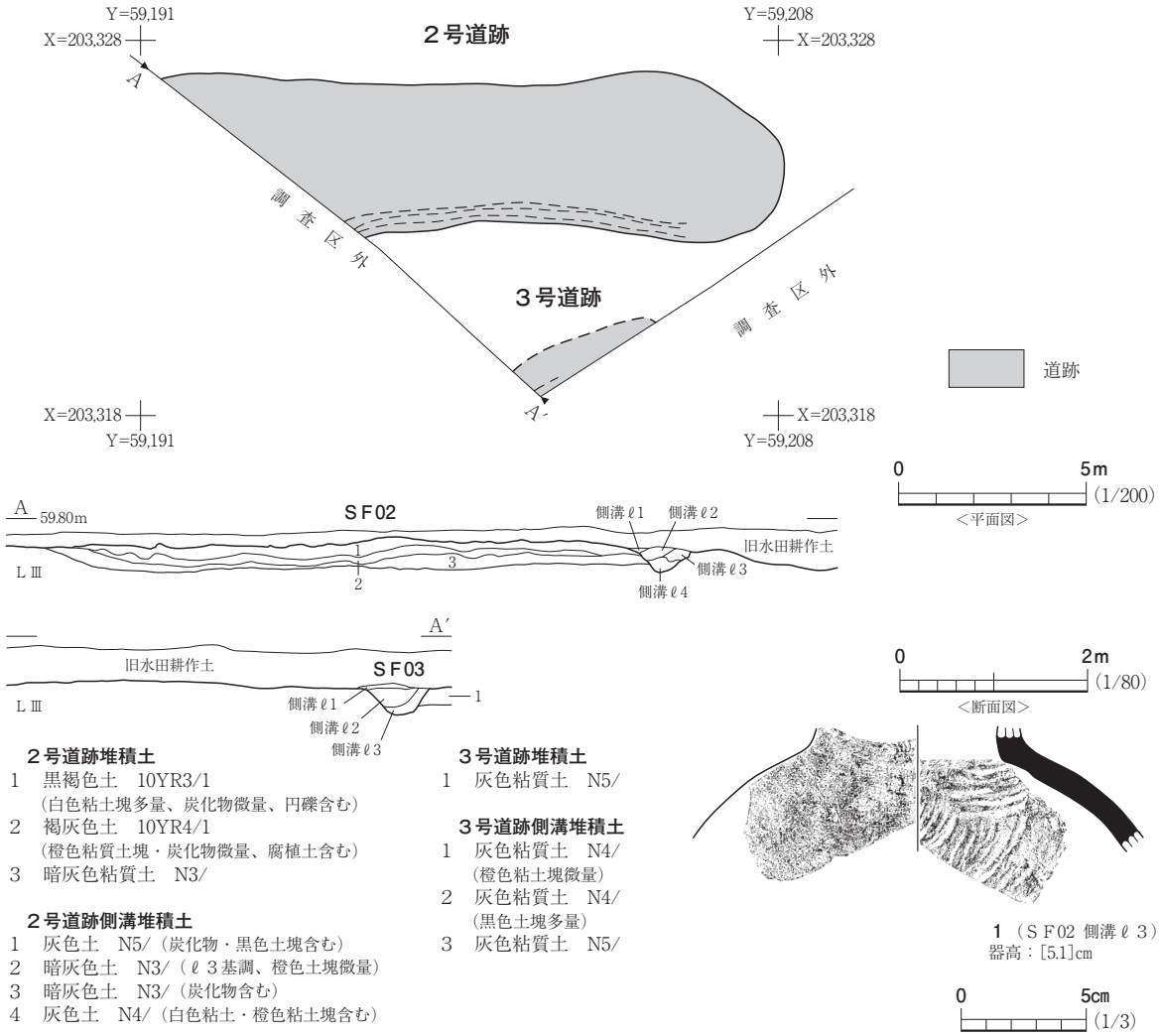


図10　２・３号道跡・出土遺物

ま と め

本遺構は、耕作地等の造成で掘削を受けており、出土遺物も乏しい。そのため、時期の詳細は不明であるが、２・３号道跡ともに１号道跡の枝道と考えられる。２号道跡と３号道跡との関係は判然としないが､同時期に使用されたのではなく､枝道がつくり替えられたものである可能性もある。

（廣　川）

第５節　　堀　　跡

今回の調査では堀跡ないし溝跡３条が確認された。堀跡は、他に検出された溝跡２条とは規模や用途が異なり、防御的な機能を有するものと判断したため１号堀跡として報告する。

１号堀跡は、南北に延びる１号道跡の西側に南北を分断するように設置されるが、程なくして埋められて１号道跡の枝道として活用されている。これらの道跡の周囲には建物跡の柱穴が多数検出されている。

１号堀跡　ＳＤ01

遺　　構（図11、写真14～16）

本遺構は、調査区南寄りのＢ４・５、Ｃ４・５、Ｄ５、Ｅ５グリッドにかけて位置する。検出面はＬⅢ上面で、１号道跡と重複する。本遺構には防御性を高めた堀としての側面と、１号道跡の枝道としての側面とが認められ、それらの機能ごとに少なくとも２時期に分けることができる。当初は堀として、北から南へ延びる舌状の丘陵地がやや括れる部分に設置されており、１号道跡を境に丘陵頂部の西側を南北に分断していた。その後に埋め戻され、その部分が枝道として再利用されるようである。１号道跡と本遺構の丁字路沿いには掘立柱建物跡の柱穴とみられる小穴群が広がっているが、それらは道跡と重複しないことから、本遺構が通路として再利用された時期のものとみられる。

本遺構の堆積土は12層に分層した。道跡としての路面がℓ６上面となり、その前後の層で大別できる。本遺構は、はじめ断面が台形ないし箱形に掘り込まれるが、その底面上には基盤層由来のℓ10～12の明褐灰色ないし褐灰色の粘質土が厚く堆積している。ℓ10～12には周囲からの自然流入の形跡が認められないことから、掘り込んですぐに埋め戻され、断面をＶ字状に整えている可能性が考えられる。ℓ７～９はその後に堆積した自然堆積土で、それらが堆積し浅くなったところで、ℓ６の黒褐色砂質土で埋められて路面を形成している。ℓ６の砂質土は、水はけの悪く滑りやすい基盤層の粘質土とは異なり、道としての機能を意識して外部から持ち込まれたものとみられる。ℓ５は道の両端に認められた側溝内の堆積土である。ℓ４は路面上に薄く堆積することから、使用時に堆積したものとみられる。ℓ２はＬⅢ塊が斑状に含まれるため人為堆積土と考えられ、道としての利用が途絶えた段階で埋められたものとみられる。

本遺構の規模は、全長約30.4ｍで、幅が開口部分で約3.2～3.6ｍ、底面ではややばらつくが、約1.2～1.6ｍである。１号道跡に直交しており、主軸方向はＮ25°Ｅである。底面は部分的に凹凸が認められるがおおよそ平たくなっている。周壁は、東西端がやや緩やかであるが南北端は急傾斜で立ち上がっている。検出面から底面までの深さは、1.2ｍ程度である。後世の造成で掘削を受けているため不明だが、掘り上げた土砂を土塁状に盛られていたものと想定すると、相応の規模となるものとみられる。

道としては、両端に側溝をもつ構造のものとみられるが、北西部では一部分しか確認できなかった。道幅はおよそ2.6～2.8ｍである。側溝幅は約10～50㎝とばらつきがあるが、深さは10～20㎝程度であまり変わりはない。路面は平坦に整えられている。

遺　　物（図12）

遺物片は94点出土した。土師器・須恵器等の細片が多く、そのうち４点を図示した。

図12－１は須恵器の高台付杯で、高台が垂直に貼り付けられている。２はロクロ成形のかわらけとみられる細片で、路面構築土のℓ６から出土している。３は瓷器系の中世陶器とみられる片口

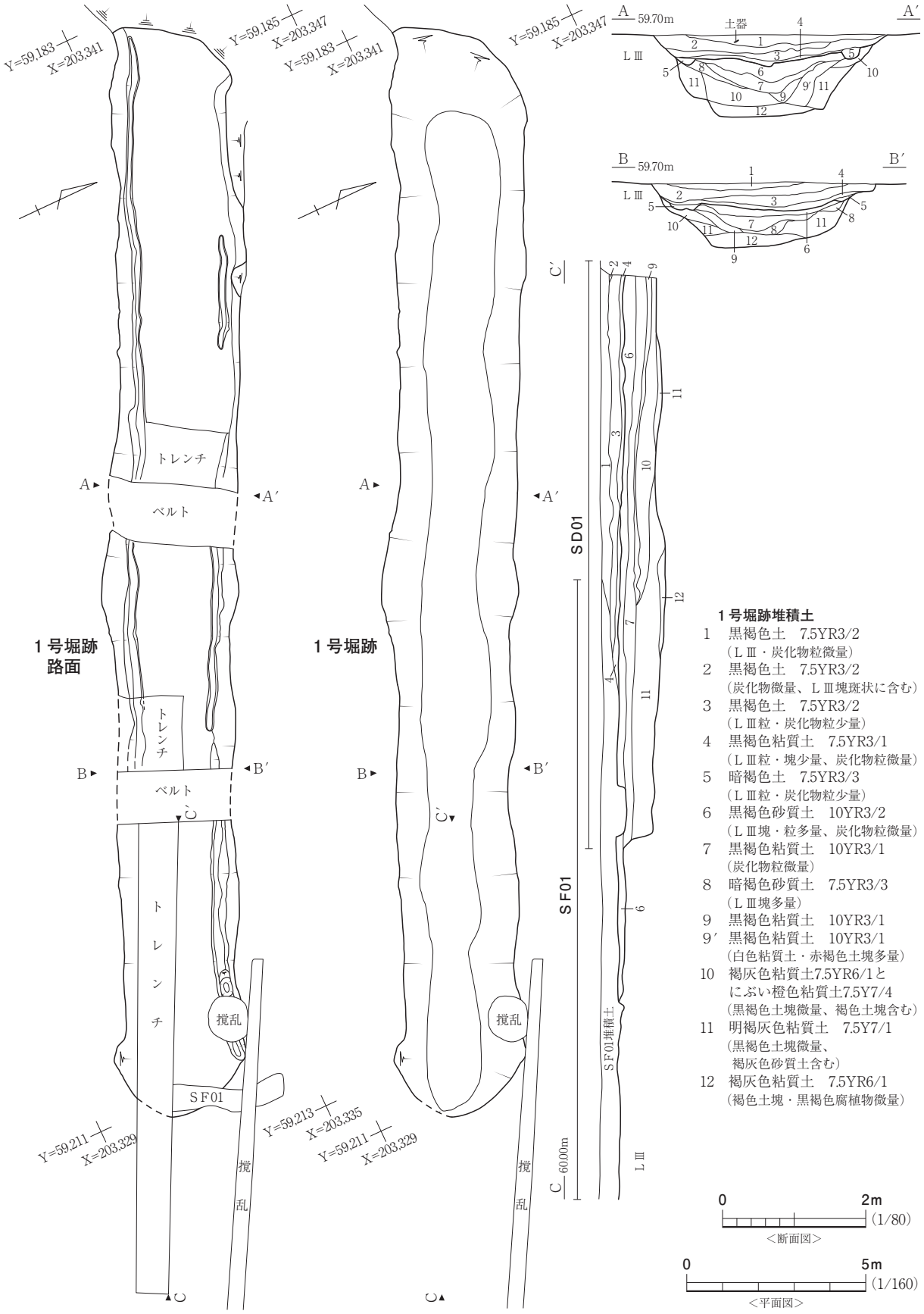

Y=59.183
X=203.341
Y=59.185
X=203.347
Y=59.183
X=203.341
Y=59.185
X=203.347
A
59.70m
A′
土器
L Ⅲ
B
59.70m
B′
トレンチ
ベルト
A
A′
1 号堀跡
路面
トレンチ
B
B′
ベルト
C
C′
トレンチ
撹乱
SF01
Y=59.211
X=203.329
Y=59.213
X=203.335
Y=59.211
X=203.329
撹乱
1 号堀跡
A
A′
B
B′
C′
C
撹乱
撹乱
SD01
SF01
SF01堆積土
60.00m
L Ⅲ
1 号堀跡堆積土
1　黒褐色土　7.5YR3/2
（L Ⅲ・炭化物粒微量）
2　黒褐色土　7.5YR3/2
（炭化物微量、L Ⅲ塊斑状に含む）
3　黒褐色土　7.5YR3/2
（L Ⅲ粒・炭化物粒少量）
4　黒褐色粘質土　7.5YR3/1
（L Ⅲ粒・塊少量、炭化物粒微量）
5　暗褐色土　7.5YR3/3
（L Ⅲ粒・炭化物粒少量）
6　黒褐色砂質土　10YR3/2
（L Ⅲ塊・粒多量、炭化物粒微量）
7　黒褐色粘質土　10YR3/1
（炭化物粒微量）
8　暗褐色砂質土　7.5YR3/3
（L Ⅲ塊多量）
9　黒褐色粘質土　10YR3/1
9′　黒褐色粘質土　10YR3/1
（白色粘質土・赤褐色土塊多量）
10　褐灰色粘質土7.5YR6/1と
にぶい橙色粘質土7.5Y7/4
（黒褐色土塊微量、褐色土塊含む）
11　明褐灰色粘質土　7.5Y7/1
（黒褐色土塊微量、
褐灰色砂質土含む）
12　褐灰色粘質土　7.5YR6/1
（褐色土塊・黒褐色腐植物微量）
0
2m
(1/80)
＜断面図＞
0
5m
(1/160)
＜平面図＞

図11　１号堀跡

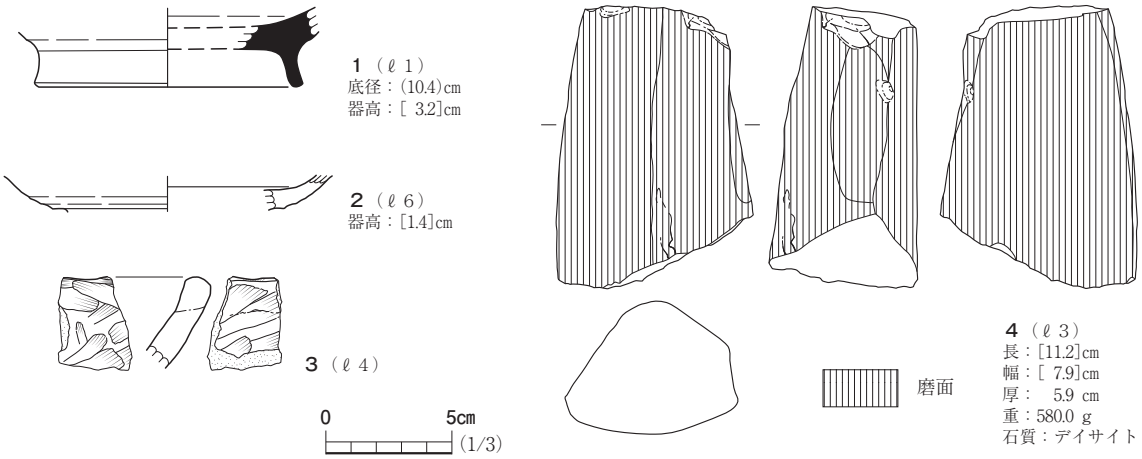


図12　１号堀跡出土遺物

の鉢で内外面に指ナデが認められる。４は磨石で、欠けた両端を除き、全面に磨面が認められる。

ま と め

本遺構は、路面の構築土よりかわらけが出土することから、少なくとも枝道として再利用された時期は古代末以降と考えられる。時期の詳細については不明であるが、出土遺物は少なく、堆積土の状況からも堀としての使用期間は短いものと推察される。１号道跡の枝道としてとして整備された後は、道脇に複数の建物が立ち並ぶようである。本遺構の消長からは、堀が設置されるような緊張関係から一転、街道筋の居住域として展開される様子がうかがわれる。　（廣　川）

第６節　　溝　　跡

今回の調査で発見された溝跡は２条である。２条の溝跡の性格や時期は不明であるが、２号溝跡は重複する１号住居跡に先行してつくられている。また、３号溝跡は１号道跡の側溝の外側に平行している。

２号溝跡　ＳＤ02（図13、写真17）

本遺構は、調査区中央のＣ４・Ｄ４・Ｅ４グリッドにかけて東西方向に延びており、ＬⅢ上面で検出された。１号道跡に直交するように延びているが、東端部分は建物の基礎等により撹乱を受け確認できなかった。西端部分は１号住居跡と重複し、本遺構が先行してつくられている。本遺構の周囲には小穴群が広がっているが、重複関係は確認できなかった。

本遺構は東西方向へ直線的に延びており、西端部分は１号住居跡に掘り込まれているため底面近くしか残っていない。主軸方向はＮ72°Ｗである。全長は遺存する部分で14.6ｍ、最大幅約100cm、深さは20cm程度である。断面は西端近くではＵ字状であるが、他の部分では底面はほぼ平坦で、そこからわずかに直線的に立ち上がる。堆積土はℓ１の黒褐色粘質土を基調とし、Ｂ－Ｂ′、Ｃ－Ｃ′ではレンズ状堆積することから自然堆積とみられる。

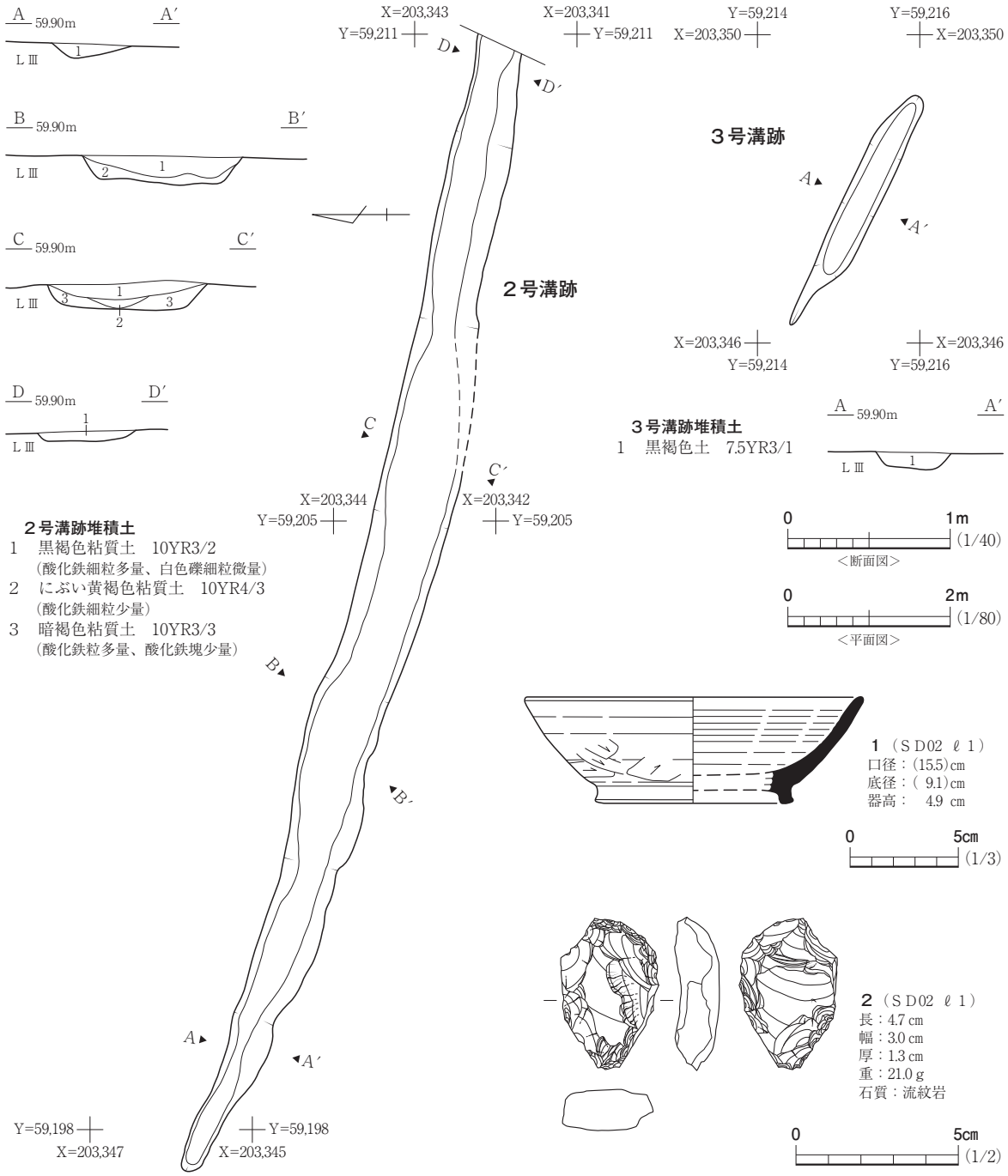


図13　２・３号溝跡・出土遺物

出土遺物は、土師器・須恵器の小片等13点で、そのうち２点を図示した。図13－１は須恵器の高台付杯で、短い高台が付き、体部から口縁部にかけて直線的に外傾している。内面にはロクロ目が密に入っており、外面の体部下半にはヘラケズリが認められる。２は流紋岩の剥片石器で、石槍の未成品とみられる。

本遺構は、等高線に沿って、直線的に延びることから区画溝のようなものと考えられる。時期の詳細については不明であるが、重複する１号住居跡と出土遺物から奈良時代以前の所産とみられる。

（廣　川）

３号溝跡　ＳＤ03（図13）

本遺構は、調査区中央北寄りのＥ４グリッドに位置し、ＬⅢ上面で検出された。１号道跡の側溝の外側に平行するように延びており、１号道跡と関連するものとみられる。他の遺構との重複関係は認められなかった。

本遺構は１号道跡と平行しておよそ南北方向に延びており、主軸方向はＮ20°Ｅである。全長は最長で320㎝、最大幅約40㎝、深さは10㎝程度である。底面はほぼ平坦で、そこから緩やかに立ち上がっている。堆積土はℓ１の黒褐色土の単層である。出土遺物は認められなかった。

本遺構の時期や用途は不明である。１号道跡の側溝の外側に約60㎝離れて平行するため、道跡と同時期に機能していたものとみられる。（廣　川）

第７節　小　穴　群

小穴群は、道跡の西側から多数検出されるが、道跡や堀跡と重複するものはない。それらの小穴は、堀跡が枝道として利用されていたころの街道筋に存在した建物跡の柱穴とみられ、道跡や堀跡に並行して直線的に並ぶものも認められる。小穴は、総じて浅いことから、耕作地や宅地として造成を受け、消失したものも少なくないと推測される。なお、Ｐ１・２・６・53・61・71・88・98・101・105・112～116・118・181・244は欠番とした。

小 穴 群（図14～16、写真18・19）

検出した小穴は322基である。小穴は番号を付け、表１・２に長軸(㎝)、短軸(㎝)、深さ(㎝)、堆積土等の所見をまとめた。堆積土はいずれも単層でＡ～Ｃに大別でき、含有物の違いにより、それらを１～３に分別した。検出面はＬⅢ上面である。

遺　　物（図17、写真22・23）

出土遺物は土師器・須恵器等の細片が多い。遺物が出土した遺構については、表１の備考欄に記した。図示したものは、Ｐ142、Ｐ243から出土した瓷器系の中世陶器３点とＰ310から出土した石器１点である。このうち、Ｐ142とＰ243は直線距離で約7.4ｍ離れているが、出土した資料はどれも同一個体の可能性が考えられる壺ないし甕の細片とみられ、器形や色調が近似している。

Ｐ142はＤ４グリッドに位置し、１号土坑のすぐ北側に配置されるもので、長軸約40㎝と他の小穴より大きめのものである。Ｐ243は調査区西端のＣ３グリッドに位置し、落し穴とみられる６号土坑の北西方向に位置し、周囲には他の小穴が少ない。小穴の配置図からは、建物跡等の同一の遺構にはならないものとみられる。

図17－１・２はＰ142より出土した壺ないし甕で、１は口縁部、２は底部である。１の口縁部は短く外湾し、口唇部のすぐ内側にはＵ字状の段が認められる。表面には自然釉が認められ、内面の頸部のつなぎめ部分には指オサエ痕が連続して残されている。内面には部分的に焼きハゼが認めら

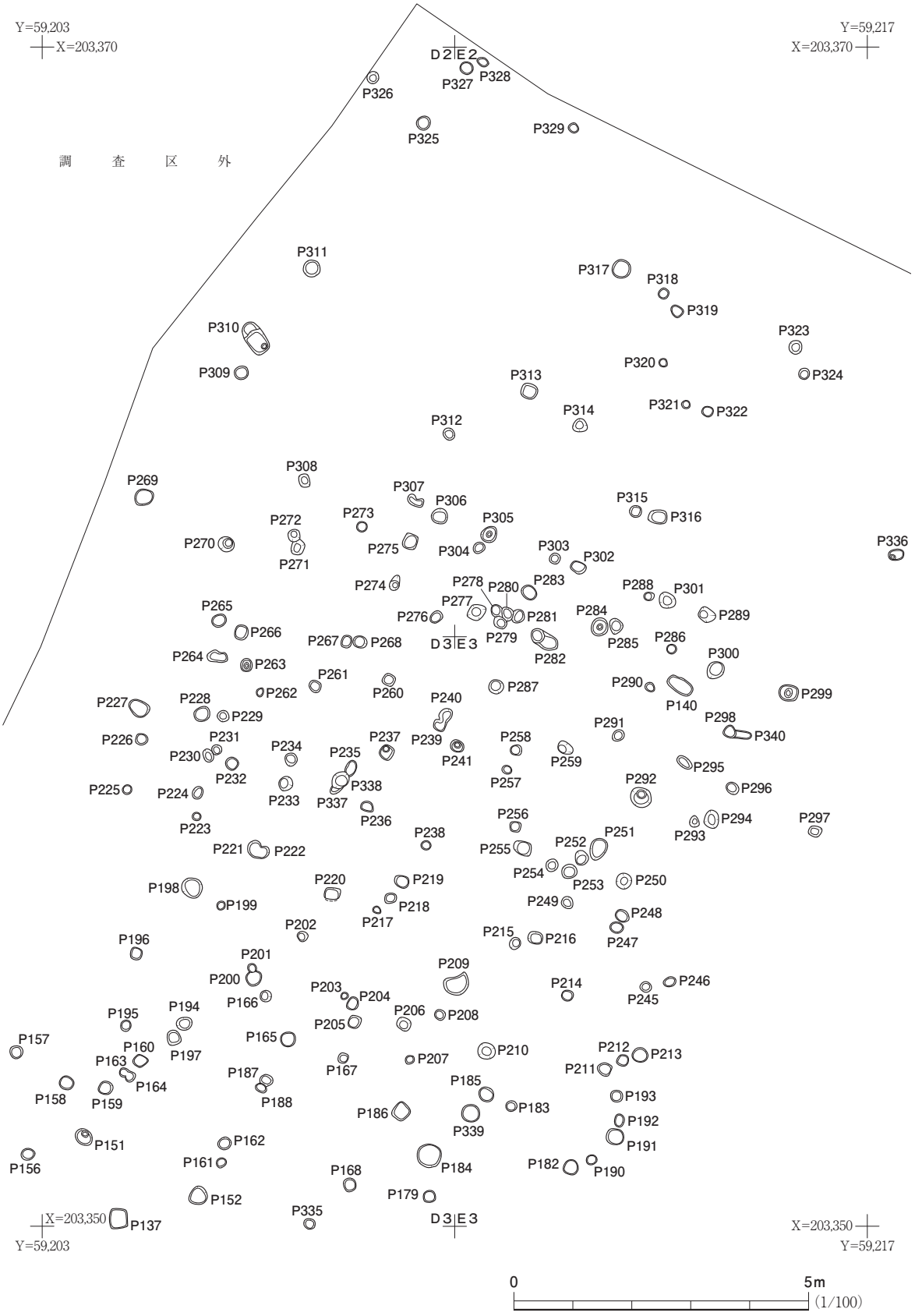

Y=59,203
X=203,370
Y=59,217
X=203,370
D2E2
P326
P327
P328
P325
P329
調　査　区　外
P311
P317
P318
P319
P310
P323
P309
P320
P324
P313
P314
P321
P322
P312
P308
P269
P307
P306
P315
P316
P272
P273
P305
P270
P275
P304
P303
P302
P336
P271
P274
P278
P280
P283
P288
P301
P277
P265
P276
P281
P284
P289
P266
P267
P268
D3E3
P279
P285
P286
P264
P263
P282
P300
P261
P290
P262
P260
P287
P299
P227
P228
P240
P140
P229
P298
P291
P226
P231
P237
P239
P258
P340
P230
P234
P235
P241
P259
P295
P232
P257
P292
P225
P224
P233
P338
P337
P296
P236
P256
P294
P297
P223
P238
P251
P293
P221
P222
P255
P252
P254
P253
P250
P198
P220
P219
P249
P199
P218
P248
P217
P202
P215
P216
P247
P196
P201
P209
P200
P203
P214
P246
P166
P204
P245
P195
P194
P206
P208
P205
P157
P165
P160
P210
P212
P213
P163
P197
P207
P211
P187
P167
P185
P164
P158
P159
P188
P193
P186
P183
P192
P339
P151
P162
P191
P156
P161
P168
P184
P182
P190
P152
P179
P335
X=203,350
P137
D3E3
X=203,350
Y=59,203
Y=59,217
0
5m
(1/100)

図14　小穴群（１）

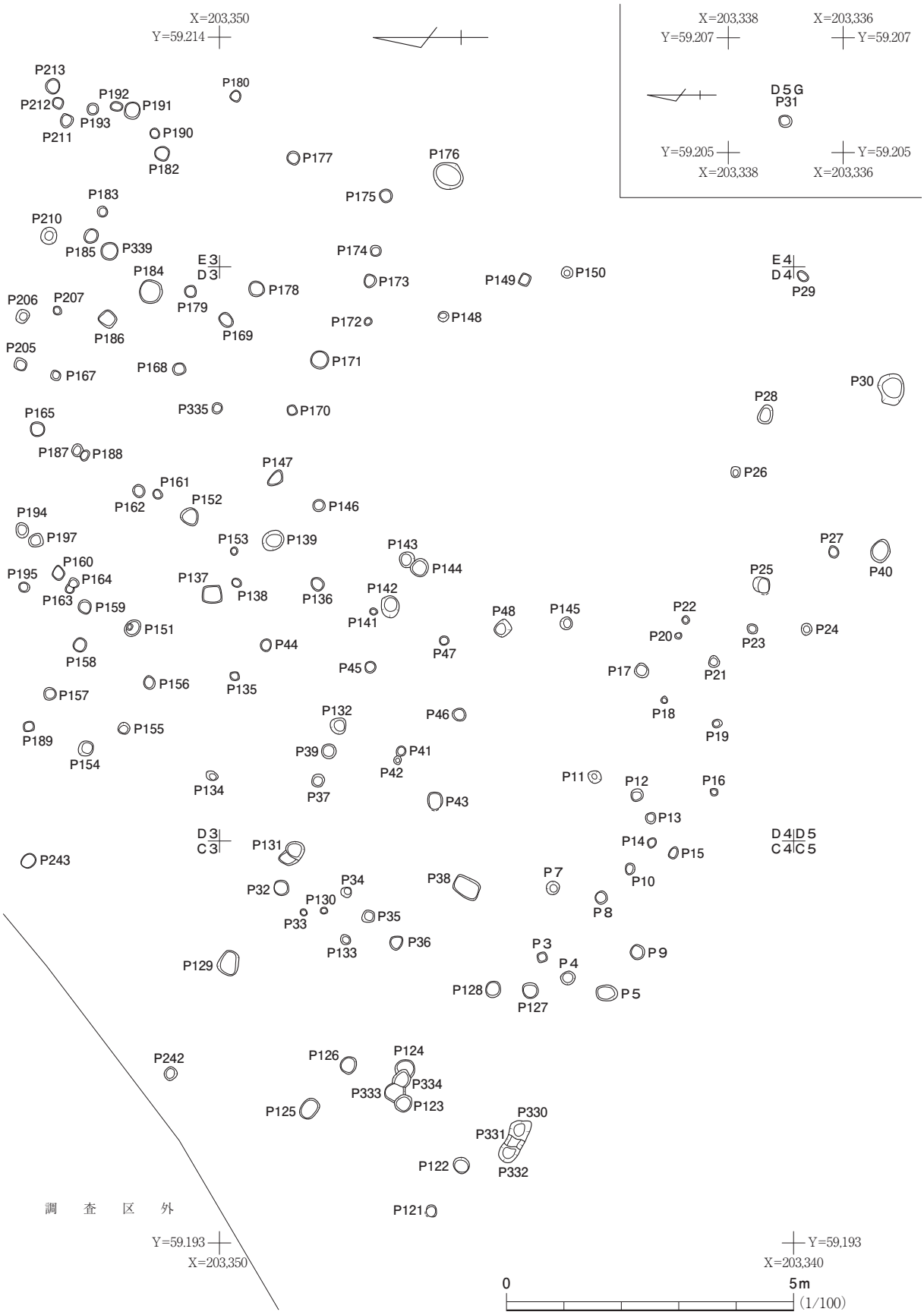

X=203,350
Y=59.214
X=203,338
Y=59.207
X=203,336
Y=59.207
D5G
P31
Y=59.205
X=203,338
Y=59.205
X=203,336
P213
P212
P192
P191
P193
P211
P180
P190
P182
P177
P176
P183
P175
P210
P185
P339
P174
E3
D3
P184
P178
P173
P149
P150
E4
D4
P29
P206
P207
P179
P186
P169
P172
P148
P205
P167
P168
P171
P30
P28
P165
P335
P170
P187
P188
P147
P26
P161
P162
P152
P146
P194
P197
P153
P139
P143
P27
P160
P144
P40
P195
P164
P137
P138
P136
P142
P25
P163
P159
P141
P48
P145
P22
P151
P20
P23
P24
P158
P44
P47
P17
P21
P45
P157
P156
P135
P18
P132
P46
P189
P155
P19
P39
P41
P154
P42
P11
P12
P16
P134
P37
P43
P13
D3
C3
P131
P14
P15
D4D5
C4C5
P243
P7
P10
P32
P34
P38
P130
P8
P33
P35
P3
P133
P36
P9
P129
P4
P128
P5
P127
P242
P126
P124
P334
P333
P123
P125
P330
P331
P122
P332
調　査　区　外
P121
Y=59.193
X=203,350
Y=59,193
X=203,340
0
5m
(1/100)

図15　小穴群（2）

X=203,340
Y=59,200
X=203,327
Y=59,200
D5 D6
C5 C6
P102
P103
P99
P100
P96
P97
P94
P89
P90
P91
P95
P80
P92
P81
P83
P85
P93
P65
P72
P82
P86
P66
P84
P64
P70
P87
P76
P68
P67
P73
P69
P75
P104
P59
P74
P77
P79
P60
P58
P78
P62
C5
B5
P50
P63
C6
B6
P49
P51
P52
P55
P54
P57
P56
P107
P108
P109
P110
P106
P111
調　査　区　外
P117
P119
P120
Y=59,182
X=203,340
Y=59,182
X=203,327
調査区外
0
5m
(1/100)

図16　小穴群（３）

表１－１　小穴群一覧

P番号	グリッド	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	堆積土	備　考
3	C4	18	18	5	B2	
4	C4	24	23	21	C2	白色粘土含む
5	C4	36	27	16	A3	
7	C4	22	21	29	C2	白色粘土含む
8	C4	25	22	15	A2	赤褐色土粒含む
9	C4	25	24	18	C1	
10	C4	21	17	7	A2	白色粘土含む
11	D4	23	22	40	C2	柱痕あり
12	D4	23	22	13	C3	
13	D4	21	18	22	A2	
14	C4･D4	20	16	3	C2	
15	C4	22	15	8	C3	
16	D4	15	14	15	C2	
17	D4	35	34	40	C2	柱痕あり、土師器出土
18	D4	14	12	16	C3	
19	D4	18	16	13	C3	縄文土器出土
20	D4	14	11	19	C2	柱痕あり
21	D4	21	18	13	B2	柱痕あり
22	D4	14	11	13	B2	
23	D4	20	18	12	B2	柱痕あり
24	D5	21	19	20	C2	
25	D4	32	28	22	C2	
26	D4	19	17	9	C2	
27	D5	22	19	7	C2?	
28	D4	34	24	9	C2	柱痕あり
29	D5	24	16	3	B2	
30	D5	54	40	22	B2	
31	D5	24	21	12	C2	
32	C4	27	24	12	A1 or C3	須恵器出土、柱痕あり
33	C4	13	12	2	B2	
34	C4	21	20	27	C2	柱痕あり
35	C4	22	21	10	C2	
36	C4	25	22	14	A2	
37	D4	24	21	15	B2	土師器出土
38	C4	48	33	10	B2	柱痕あり
39	D4	29	26	13	B2	柱痕あり
40	D5	40	34	6	－	
41	D4	17	17	13	C1	炭化物粒含む、柱痕あり
42	D4	15	13	16	C2	
43	D4	31	25	19	B2	ＬⅢ塊含む
44	D4	24	20	6	B2	柱痕あり
45	D4	21	19	23	C2	柱痕あり
46	D4	25	22	7	B2	
47	D4	18	17	6	B2	
48	D4	27	24	3	B2	
49	B5	29	22	10	B2	
50	B5･C5	28	18	11	B2	
51	B5	26	16	13	B2	
52	B5	17	15	11	－	
54	B5	18	16	10	B3	柱痕あり
55	B5	23	20	18	B2	
56	B5	16	11	12	B2	
57	B5	26	17	28	B?	
58	C5	16	15	23	B3	
59	C5	43	17	22	C2	
60	C5	24	22	12	ℓ1 C3、ℓ2 A2	
62	C5	20	18	15	A3	
63	B5･C5	10	19	10	ℓ1 A2、ℓ2 B2	
64	C5	30	26	7	B2	
65	C5	17	16	10	C2	
66	C5	23	22	14	C2 or B2	柱痕あり
67	C5	(18)	(16)	6	C3	＊P67・68・69重複
68	C5	(22)	(20)	3	B2	＊P67・68・69重複
69	C5	(22)	(20)	10	C3	＊P67・68・69重複
70	C5	22	20	11	B2	柱痕あり
72	C5	26	22	14	－	
73	C5	(21)	17	6	C2	＊P73→P74
74	C5	18	24	7	C2	＊P73→P74
75	C5	22	17	13	C2	
76	C5･C6	22	15	8	B2	柱痕あり
77	C6	26	25	23	－	
78	C6	18	17	5	B2	
79	C6	28	26	20	A3	
80	C5	28	22	18	B3	柱痕あり
81	C5	23	19	15	C3	柱痕あり
82	C5	(24)	(21)	8	－	＊P82・83重複
83	C5	(23)	(22)	7	B2	柱痕あり＊P82･83重複
84	C6	25	19	27	C3	
85	C6	11	10	6	B2	
86	C6	26	22	4	B1	
87	C6	23	20	20	C3	
89	C5	29	24	3	B?	
90	C5	16	11	6	B2	
91	C5	34	20	3	B2	
92	C6	22	17	13	C2	柱痕あり
93	C6	21	17	11	C2	
94	C5	25	20	20	A3	柱痕あり
95	C6	19	17	8	－	
96	C5	33	30	4	B2	
97	C5	19	16	4	C3	
99	C5	20	16	3	A2	
100	C6	20	15	3	C2	柱痕あり
102	D5･D6	32	29	－	B2	柱痕あり
103	D6	29	22	14	B2	柱痕あり
104	C6	20	19	13	A2	
106	B5	17	15	8	B2	
107	B5	18	18	3	－	
108	B5	18	16	3	－	
109	B5	25	20	－	－	
110	B5	22	20		－	
111	B5	17	15	9	B3	
117	B4	17	13	18	C3	
119	B5	23	20	－	C3	
120	B5	22	19	－	C3	
121	C4	22	18	24	C?	
122	C4	30	28	14	C3	柱痕あり
123	C4	31	28	29	C3	白色粘土含む＊P333→P123
124	C4	(35)	34	8	C3	橙色土粒含む、土師器出土 ＊P124→P334
125	C4	37	30	11	－	柱痕あり
126	C4	30	28	18	A2	柱痕あり
127	C4	28	27	13	－	
128	C4	29	27	20	－	
129	C3･C4	42	30	20	A2	柱痕あり
130	C4	14	12	14	C2	
131	C4	43	29	11	C3	
132	D4	29	27	23	C1	
133	C4	19	18	13	B2	
134	D3	22	18	24	C1	
135	D4	18	16	9	A1	
136	D4	26	22	14	A2	
137	D3･D4	32	26	8	B2	焼土含む
138	D4	16	15	8	B2	
139	D4	40	32	23	C2	
140	E3	47	22	30	－	
141	D4	16	12	11	A1	
142	D4	40	28	21	C1	中世陶器出土
143	D4	(26)	24	15	A2	
144	D4	31	30	28	A2	土師器出土
145	D4	23	22	26	B2	
146	D4	22	22	11	B2	
147	D4	35	22	8	B2	
148	D4	20	18	8	B1	
149	D4	21	20	12	B2	
150	D4	21	20	20	B2	
151	D3	31	26	25	B1	
152	D3	33	30	22	B1	
153	D4	16	13	8	C2	
154	D3	28	25	13	C1	
155	D3	23	20	19	C2	
156	D3	25	19	17	C2	
157	D3	23	23	18	B1	
158	D3	26	24	6	B2	土師器出土
159	D3	26	23	18	C3	土師器出土
160	D3	21	20	12	B3	柱痕あり
161	D3	18	16	6	A1	
162	D3	24	22	7	C1	
163	D3	21	16	19	C1	須恵器出土＊P163→P164
164	D3	26	16	19	B1	＊P163→P164
165	D3	26	17	10	－	礎石か？
166	D3	21	20	18	B1	
167	D3	18	17	15	A1	
168	D3	25	22	14	A1	
169	D4	28	22	11	B1	
170	D4	18	17	6	B2	
171	D4	33	31	7	－	
172	D4	16	12	6	B2	
173	D4	23	21	8	C1	
174	E4	20	20	13	C1	
175	E4	24	22	12	C2	
176	E4	55	46	11	B3	
177	E4	27	28	15	B3	

表１－２　小穴群一覧

P番号	グリッド	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	堆積土	備　考
178	D4	28	28	8	C1	
179	D3	21	20	3	－	
180	E4	18	17	3	B?	
182	E3	27	25	9	B1	
183	E3	18	17	8	B1	
184	D3	42	41	15	B1	
185	E3	27	24	14	B3	
186	D3	30	29	23	B3	
187	D3	22	(20)	10	B2	＊P187→P188
188	D3	20	15	19	B?	＊P187→P188
189	D3	20	18	8	A1	
190	E3	19	18	7	C2	
191	E3	31	27	9	C2	
192	E3	23	18	10	－	
193	E3	22	21	7	B3	
194	D3	28	24	9	－	
195	D3	20	19	6	B3	
196	D3	22	21	14	A1	
197	D3	25	2212	8	C1	
198	D3	37	33	5	C3	
199	D3	16	151	13	C3	
200	D3	29	26	14	C3	＊P200→201
201	D3	(16)	14	13	B2	＊P200→201
202	D3	20	18	13	C1	
203	D3	15	13	12	C2	
204	D3	23	19	17	C3	
205	D3	23	20	19	C3	
206	D3	25	21	32	B2	
207	D3	16	15	3	－	
208	D3	18	17	12	C2	
209	D3･E3	45	32	9	－	
210	E3	30	26	31	C1	
211	E3	25	21	5	－	
212	E3	19	18	8	B2	
213	E3	27	25	7	A1	
214	E3	20	18	11	B?	
215	E3	22	17	10	－	
216	E3	25	20	18	C1	
217	D3	15	11	8	A2	
218	D3	19	19	7	C3	
219	D3	27	21	10	－	柱痕あり
220	D3	27	20	33	B2	柱痕あり
221	D3	23	(21)	28	B1	柱痕あり＊P221・222重複
222	D3	31	(17)	25	B1	柱痕あり＊P221・222重複
223	D3	16	15	7	B2	
224	D3	22	18	17	B2	
225	D3	17	15	33	B3	
226	D3	22	21	8	B2?	
227	D3	37	25	7	B2	
228	D3	30	26	4	C2	
229	D3	21	20	15	A1	
230	D3	24	18	19	A3	
231	D3	17	16	18	C1	
232	D3	22	22	9	C3	
233	D3	24	24	29	C3	
234	D3	22	22	17	B2	
235	D3	(27)	19	19	C2	
236	D3	24	18	14	C?	
237	D3	25	22	25	B2	
238	D3	19	17	5	B1	
239	D3	23	18	14	－	
240	D3	23	21	17	A1	
241	D3･E3	26	22	35	A2	
242	C3	23	33	10	－	
243	C3	28	24	20	－	柱痕あり、礎石か？中世陶器出土
245	E3	19	18	7	C?	
246	E3	23	17	10	－	
247	E3	24	20	8	A1	
248	E3	25	21	6	C1	
249	E3	23	20	10	C1	
250	E3	27	26	46	A3	
251	E3	40	28	6	-	
252	E3	26	24	22	-	
253	E3	27	24	13	C2	
254	E3	21	21	11	A3	
255	E3	30	23	34	A2	
256	E3	20	18	12	B1	
257	E3	17	15	9	C2	
258	E3	21	18	21	A3	
259	E3	28	21	15	B2	
260	D3	23	21	11	A2	

P番号	グリッド	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	堆積土	備　考
261	D3	23	18	9	A2	
262	D3	16	13	4	C2	
263	D3	23	20	34	A1	
264	D3	37	16	12	C2	
265	D2	26	21	14	C1	柱痕あり
266	D2	28	24	20	A2	
267	D3	23	19	3	A1	
268	D3	26	21	14	A3	
269	D2	33	28	21	C1	柱痕あり
270	D2	31	28	22	C3	柱痕あり
271	D2	27	23	33	C3	
272	D2	22	21	24	C2	
273	D2	19	18	10	A1	土師器出土
274	D2	27	15	20	C3	
275	D2	31	15	24	C2	
276	D2	24	23	20	A1	須恵器出土
277	E2	35	26	25	C2	柱痕あり
278	E2	21	19	22	A1	
279	E2	25	19	36	C2	
280	E2	26	20	15	C1	
281	E2	25	20	14	C1	
282	E2･E3	51	25	14	C?	
283	E2	29	24	31	B3	
284	E2	32	28	23	C3	
285	E2	27	20	25	C2	柱痕あり
286	E3	18	18	7	－	
287	E3	26	22	28	C2	柱痕あり
288	E2	16	19	12	－	
289	E2	31	23	23	－	
290	E3	19	14	4	A2	
291	E3	24	19	21	A1	柱痕あり
292	E3	38	33	17	C2	柱痕あり
293	E3	20	16	9	－	
294	E3	31	26	16	B1	
295	E3	31	17	10	B3	
296	E3	23	19	8	C2	
297	E3	22	18	10	B2	
298	E3	22	22	23	－	須恵器出土
299	E3	32	28	36	A2	柱痕あり
300	E3	32	28	29	B?	
301	E2	32	26	8	B2	
302	E2	26	20	22	C2	
303	E2	17	17	10	A1	
304	E2	22	19	6	A1	
305	E2	29	26	24	A1	
306	D2	28	24	16	A1	
307	D2	30	13	9	C2	
308	D2	25	21	8	C	
309	D2	23	23	22	A3	土師器・須恵器出土
310	D2	59	33	30	C3	石製品出土
311	D2	27	24	8	C2	
312	D2	22	20	8	B2	
313	E2	32	26	31	C3	
314	E2	37	24	15	C2	
315	E2	22	20	17	B2	
316	E2	34	23	19	A3	
317	E2	33	32	9	A?	柱痕あり
318	E2	20	18	16	B1	
319	E2	24	19	12	－	柱痕あり
320	E2	15	14	6	C2	
321	E2	16	15	8	B2	
322	E2	21	18	9	C3	
323	E2	25	24	7	C1	
324	E2	20	20	5	B?	
325	D2	24	23	7	C2	
326	D2	23	20	24	C3	
327	E2	22	21	7	C?	
328	E2	23	27	4	B2	
329	E2	21	17	5	C2	
330	C4	35	(24)	26	A3	焼土・炭化材含む ＊P332→P331→P330
331	C4	30	(30)	20	C2	白色粘土含む＊P332→P331→P330
332	C4	35	(30)	23	A2	＊P332→P331→P330
333	C4	(35)	(35)	23	C3	白色粘土含む＊P333→P123・334
334	C4	34	33	8.0	C3	＊P124・333→P334
335	D3･D4	21	20	49	B?	
336	E2	25	20	19	C2	
337	D3	25	15	17	C3	
338	D3	(35)	(37)	19	C3	
339	E3	32	30	11	C1	
340	E3	34	15	21	C2	

表２　小穴堆積土

A	10YR3/1 黒褐色土	1 2 3	炭化物粒含む ⅠⅢ粒含む 炭化物粒・ⅠⅢ粒含む
B	10YR4/2 灰黄褐色土	1 2 3	炭化物粒含む ⅠⅢ粒含む 炭化物粒・ⅠⅢ粒含む
C	10YR3/3 暗褐色土	1 2 3	炭化物粒含む ⅠⅢ粒含む 炭化物粒・ⅠⅢ粒含む

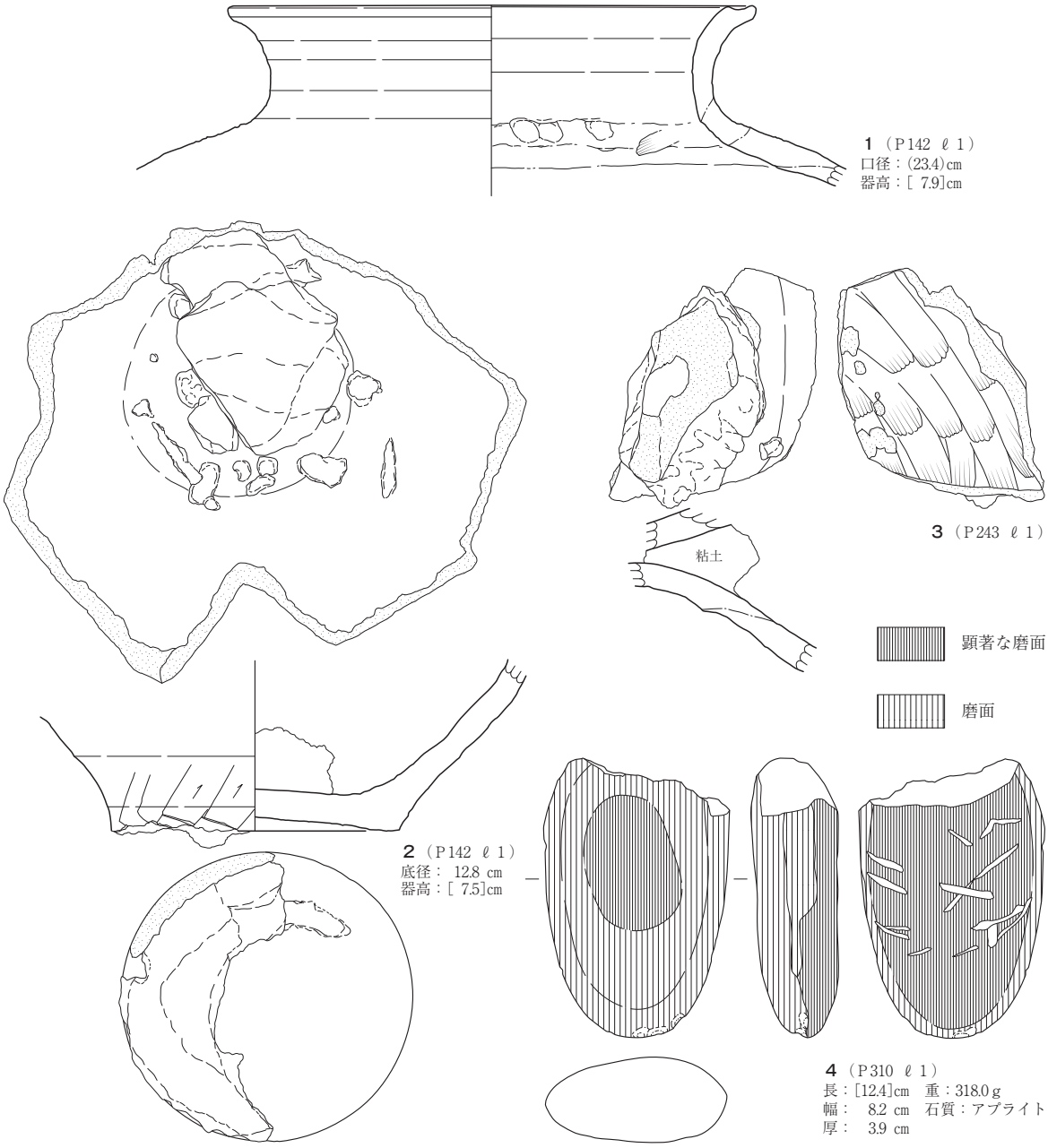


図17　小穴群出土遺物

れる。２は底部から緩やかにふくらみを持って立ち上がっており、底部周辺にはヘラケズリが認められる。焼き損じ品とみられ、底部には三日月状に焼き台が付着し、内面には拳大の粘土塊がそのまま残された状態で焼成されている。

同図３はＰ243より出土した同じく壺ないし甕の肩部片であるが、粘土塊が貼りつき、別の体部片とともに焼成された状態である。外面には１と同様の自然釉が認められる。また、内面には焼きハゼがあり、同じＰ243から出土した他の体部片にも確認できた。

図17－１～３の３点は、どれも外面が灰褐色を呈し、にぶい黄橙色の自然釉が認められるものである。本遺跡の周辺に当該期の窯跡は確認されていないが、焼き損じ品であるため、それらの流入経路を考えると付近に生産の場が存在する可能性が考えられる。

同図４は磨石で、丸みのある平たい形状をしており、表面全体に磨面が認められる。　（廣　川）

第８節　遺構外出土遺物

遺構外出土遺物として図示したものは図18の２点である。撹乱から出土しており、どちらも近世以降のものであるが、本遺跡は近世の所産である奥州街道、赤坂窯跡が隣接しているため報告することとする。

１は岸窯跡産とみられる小型の壺で、口縁部が短く直立する。釉が完全に溶けきらず淡黄色となっており､同じく岸窯跡産とみられる１号道跡から出土した手付水注(図９－５)の釉に近似する。

２は土鈴である。時期は不明であるが、現在も民芸品として親しまれている「まさる」の土鈴部分とみられる。この付近では堤人形系の玩具「まさる」が生産されている。　（廣　川）

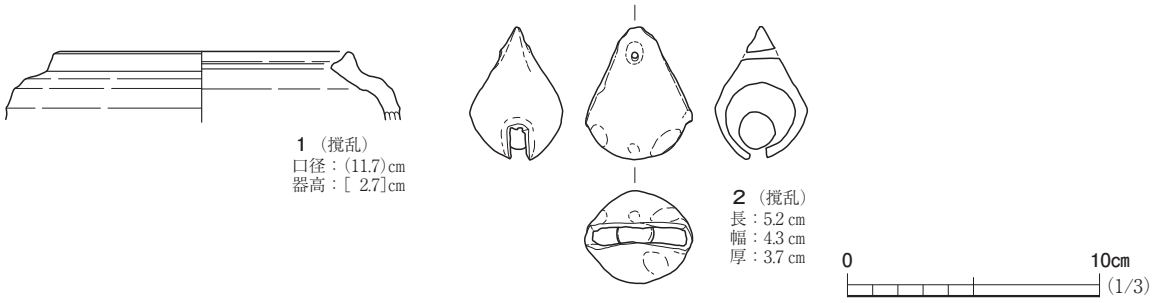


図18　遺構外出土遺物

第３章　　総　　括

新宿遺跡からは、竪穴住居跡２軒、土坑６基、道跡３条、堀跡１条、溝跡２条、小穴群が検出された。今回の調査によって、縄文時代の狩場、奈良時代の小規模集落、中世の街道筋の居住域、中世から近世にかけての街道を確認することができた。下記に各時代の概要をまとめる。

縄文時代の遺構としては落し穴１基を検出したのみであるが、調査区内からは縄文時代の石器類が出土することから、調査区外の周辺で生活の痕跡が存在している可能性がある。

奈良時代になると、遺跡周辺の段丘崖や開析谷といった地形を利用して伊達市(旧伊達町)に所在する伊達窯跡に代表される須恵器窯の操業が開始され、奈良時代から平安時代にかけての一大生産地となる。調査区内からも、それらの窯跡産とみられる須恵器片が認められる。この時期の遺構としては、８世紀後半頃の所産と考えられる竪穴住居跡２軒が検出された。そのうちの１軒からは、焼き損じとみられる須恵器杯が出土し、これについても付近の窯跡産のものと推察される。

中世の遺構は、道跡、堀跡、小穴群である。このうち１号道跡は、調査区東側に隣接する近世の奥州街道に比定される県道353号線に平行して南北方向に延びている。そのため、１号道跡はその前段階の主要な幹線道路と考えられ、中世の奥六郡に通じる「奥の大道」が想定される。堀跡はこの道跡の西側に直交するように検出され、遺跡が立地する丘陵地のやや括れた部分に掘り込まれている。堆積状況から、堀として機能していた期間は短いものと推察され、出土遺物から、古代末には埋め戻されて主要道路への枝道として整備されている。

その後、１号道跡及び枝道の周辺には建物跡の柱穴とみられる小穴群の広がりが認められ、街道筋には複数の建物が建ち並んでいたようである。また、小穴の一部からは焼き損じの中世陶器片が出土した。調査区内からは古代以降の粘土採掘坑が検出され、基盤層からは良質な粘土が採取されることから､付近一帯には周知の古代や近世の窯跡以外にも未発見の窯跡が存在する可能性がある。

１号道跡は、出土遺物から近世初頭頃までは機能していたものと考えられ、近世に入り奥州街道が整備されて役割を終えたものとみられる。一方、主要道路としての始まりについては、堀跡との関係から古代末には機能していたようである。伊達郡国見町では古代の東山道とみられる道跡が調査されているが、本遺構についてもその可能性を指摘しておきたい。　　（廣　川）

引用・参考文献

伊達町教育委員会　1983　『伊達窯跡群詳細分布報告』伊達町文化財調査報告書第２集
伊達町教育委員会　1987　『伊達窯跡調査報告Ⅰ』伊達町文化財調査報告書第３集
国見町教育委員会　2010　『阿津賀志山防塁指定調査概報２』国見町文化財調査報告第 17 集
福島市教育委員会　1998　『岸窯跡』福島市埋蔵文化財報告書第 111 集

付　編　自然科学分析

第１章　沼ヶ入遺跡出土炭化材の自然科学分析

株式会社　加速器分析研究所

第１節　樹 種 同 定

１．試　　料

沼ヶ入遺跡は、伊達市霊山町下小国字沼ヶ入・御渡の河岸段丘上に位置する。本遺跡では中世とされる掘立柱建物跡が検出され、柱痕から建築材の可能性がある炭化材片が出土したことから、当時の木材利用状況を調査する目的で、炭化材４点の樹種同定を行った（表１）。

なお、同一試料の放射性炭素年代測定が実施され、13～14世紀頃の年代値が示されている（付編第１章第２節参照）。

２．分析方法

炭化材はステンレス剃刀で横断面、放射断面、接線断面を割り出しプレパラートに固定して反射光式顕微鏡で観察し、現生標本の形態に基づき同定を行った。

３．結　　果

同定結果を表１に示す。本遺跡の炭化材は４試料のうち３点がクリ、１点はイネ科と同定された。以下に同定の根拠を示す。

・クリ（*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.）

年輪最初に大きな道管が数個塊をなして、その後徐々に径を減じて火炎状ないし波状に小道管が配列する環孔材。道管の穿孔板は単一で、放射組織は同性で単列ないし時々２細胞幅となる。

・イネ科（Poaceae）

破片が小さく茎の外側輪郭が不明であるが、確認できた維管束は原生木部腔と一対の後生木部道管と師部からなり、外側を繊維組織が取り囲んでいる。全体がもろく断面が小さいため、横断面内の維管束の配列等が不明でイネ科との同定にとどめる。草本であるため、放射断面と接線断面は柔細胞が並んでいる。

４．考　　察

本遺跡の炭化材は４点中３点がクリで、いずれも掘立柱建物跡の柱痕から出土したことから建築部材にクリが使われていた可能性がある。また、１点はイネ科であったが、イネ科のタケ亜科やヨシ、ススキなど住居構築材として使われるイネ科は多い。

福島県の中世の柱材の分析結果としては、戦国～江戸初期とされる麻生館遺跡で13点中５点、蛭館遺跡で５点中３点にクリが使われ、針葉樹よりも利用比が高い（伊東ほか 2012）。本遺跡の結果からも、中世において柱材としてクリを頻繁に利用していたことがうかがえる。

※）本分析は、古代の森研究舎の協力を得て行った。

参考文献

伊東隆夫・山田昌久（編）　2012　『木の考古学　出土木製品用材データベース』海青社

表１　出土炭化材の樹種

試料番号	遺構	層位	樹種
DT-NGI2-01	ＳＢ03	Ｐ６柱痕	クリ
DT-NGI2-02	ＳＢ03	Ｐ７柱痕	クリ
DT-NGI2-03	ＳＢ03	Ｐ９柱痕	イネ科
DT-NGI2-04	ＳＢ03	P15柱痕	クリ

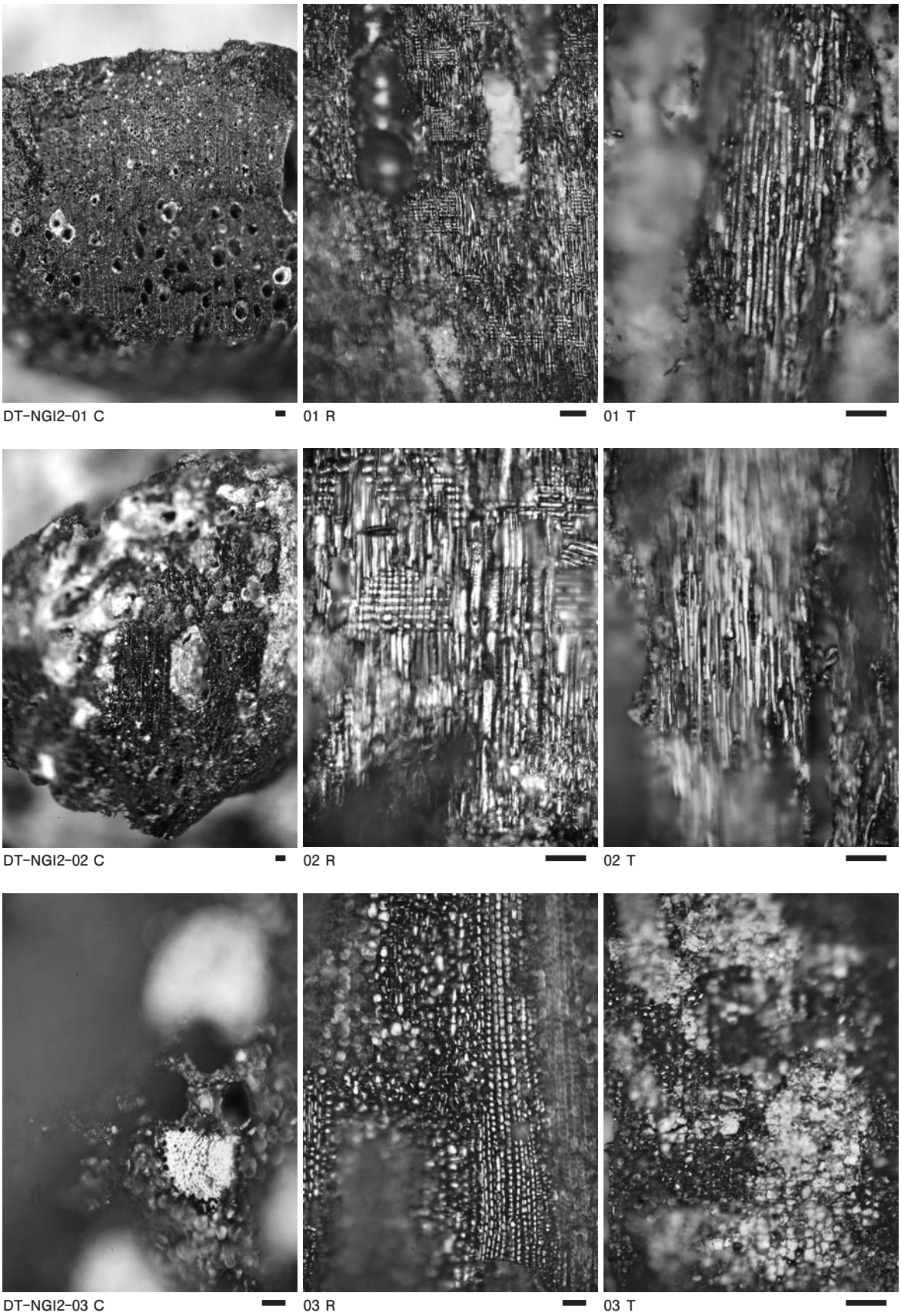


図 1　出土炭化材の顕微鏡写真（1）　　C：横断面　R：放射断面　T：接線断面　スケール：0.1㎜

図２　出土炭化材の顕微鏡写真（２）　　**C**：横断面　**R**：放射断面　**T**：接線断面　**スケール**：0.1㎜

第２節　放射性炭素年代測定

１．測定対象試料

沼ヶ入遺跡は、福島県伊達市霊山町下小国字沼ヶ入・御渡（北緯37° 45′ 57″、東経140° 35′ 23″）に所在し、河岸段丘上に立地する。測定対象試料は、掘立柱建物跡柱痕の堆積土から出土した炭化材４点である（表２）。なお、これらの試料を対象に樹種同定も実施されている（付編第１章第１節参照）。

２．測定の意義

建物の年代を考えるための補助資料とする。

３．化学処理工程

（１）メス・ピンセットを使い、土等の付着物を取り除く。

（２）酸－アルカリ－酸（AAA：Acid Alkali Acid）処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA 処理における酸処理では、通常１mol/ℓ（１M）の塩酸（HCl）を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム（NaOH）水溶液を用い、0.001M から１M まで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が１M に達した時には「AAA」、１M 未満の場合は「AaA」と表２に記載する。

（３）試料を燃焼させ、二酸化炭素（CO_2）を発生させる。

（４）真空ラインで二酸化炭素を精製する。

（５）精製した二酸化炭素を、鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト（C）を生成させる。

（６）グラファイトを内径１㎜のカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

４．測定方法

加速器をベースとした^{14}C-AMS専用装置（NEC社製）を使用し、^{14}Cの計数、^{13}C濃度（^{13}C/^{12}C）、^{14}C濃度（^{14}C/^{12}C）の測定を行う。測定では、米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOx Ⅱ）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

５．算出方法

（１）δ^{13}C は、試料炭素の^{13}C 濃度（^{13}C/^{12}C）を測定し、基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表した

値である（表２）。AMS 装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。

（２）^{14}C 年代（Libby Age：yrBP）は、過去の大気中 ^{14}C 濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年（0yrBP）として遡る年代である。年代値の算出には、Libby の半減期（5568年）を使用する（Stuiver and Polach 1977）。^{14}C 年代は δ^{13}C によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表２に、補正していない値を参考値として表３に示した。^{14}C 年代と誤差は、下１桁を丸めて10年単位で表示される。また、^{14}C 年代の誤差（±１σ）は、試料の ^{14}C 年代がその誤差範囲に入る確率が68.2％であることを意味する。

（３）pMC（percent Modern Carbon）は、標準現代炭素に対する試料炭素の ^{14}C 濃度の割合である。pMC が小さい（^{14}C が少ない）ほど古い年代を示し、pMC が100以上（^{14}C の量が標準現代炭素と同等以上）の場合 Modern とする。この値も δ^{13}C によって補正する必要があるため、補正した値を表２に、補正していない値を参考値として表３に示した。

（４）暦年較正年代とは、年代が既知の試料の ^{14}C 濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の ^{14}C 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、^{14}C 年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、１標準偏差（1 σ = 68.2％）あるいは２標準偏差（2 σ = 95.4％）で表示される。グラフの縦軸が ^{14}C 年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、δ^{13}C 補正を行い、下一桁を丸めない ^{14}C 年代値である。なお、較正曲線及び較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal13データベース（Reimer et al. 2013）を用い、OxCalv4.2較正プログラム（Bronk Ramsey 2009）を使用した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表３に示した。暦年較正年代は、^{14}C 年代に基づいて較正（calibrate）された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」または「cal BP」という単位で表される。

６．測定結果

測定結果を表２・３に示す。

３号建物跡の柱痕出土試料４点の ^{14}C 年代は、670 ± 20yrBP（DT-NGI2-01）から620 ± 20yrBP（DT-NGI2-03、DT-NGI2-04）の狭い範囲に集中する。暦年較正年代（1 σ）は、最も古いDT-NGI2-01が1285～1381calADの間に２つの範囲、最も新しいDT-NGI2-03が1300～1394calADの間に３つの範囲で示される。４点は近い値となり、重なる範囲もある。

試料の炭素含有率はすべて60％を超える十分な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

参考文献

Bronk Ramsey C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, *Radiocarbon* 51 (1), pp.337-360.

Reimer, P.J. et al. 2013 IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years calBP, *Radiocarbon* 55 (4), pp.1869-1887.

Stuiver M. and Polach H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data, *Radiocarbon* 19 (3), pp.355-363.

表２　放射性炭素年代測定結果（δ ^{13}C補正値）

（試料№の頭部「DT-NGI2-」を省略表記）

測定番号	試料№	採取場所	試料形態	処理方法	δ ^{13}C（‰）（AMS）	δ ^{13}C 補正あり	
						Libby Age（yrBP）	pMC（%）
IAAA-161644	01	ＳＢ01Ｐ６柱痕	炭化材	AAA	−25.71 ± 0.21	670 ± 20	92.03 ± 0.26
IAAA-161645	02	ＳＢ01Ｐ７柱痕	炭化材	AAA	−24.40 ± 0.21	660 ± 20	92.14 ± 0.26
IAAA-161646	03	ＳＢ01Ｐ９柱痕	炭化材	AAA	−26.16 ± 0.25	620 ± 20	92.61 ± 0.26
IAAA-161647	04	ＳＢ01Ｐ15柱痕	炭化材	AAA	−25.87 ± 0.21	620 ± 20	92.54 ± 0.26

表３　放射性炭素年代測定結果（δ ^{13}C未補正値）及び暦年較正年代

［参考値］

測定番号	δ ^{13}C 補正なし		暦年較正用（yrBP）	１σ暦年代範囲	２σ暦年代範囲
	Age（yrBP）	pMC（%）			
IAAA-161644	680 ± 20	91.90 ± 0.20	667 ± 22	1285calAD − 1300calAD（39.6%） 1369calAD − 1381calAD（28.6%）	1278calAD − 1313calAD（52.6%） 1357calAD − 1389calAD（42.8%）
IAAA-161645	650 ± 20	92.26 ± 0.26	657 ± 22	1287calAD − 1305calAD（31.0%） 1364calAD − 1385calAD（37.2%）	1281calAD − 1318calAD（45.6%） 1352calAD − 1390calAD（49.8%）
IAAA-161646	640 ± 20	92.39 ± 0.25	616 ± 22	1300calAD − 1325calAD（27.9%） 1345calAD − 1369calAD（26.9%） 1381calAD − 1394calAD（13.4%）	1295calAD − 1399calAD（95.4%）
IAAA-161647	640 ± 20	92.38 ± 0.26	622 ± 22	1299calAD − 1320calAD（27.9%） 1350calAD − 1370calAD（26.0%） 1380calAD − 1392calAD（14.3%）	1292calAD − 1330calAD（37.4%） 1338calAD − 1398calAD（58.0%）

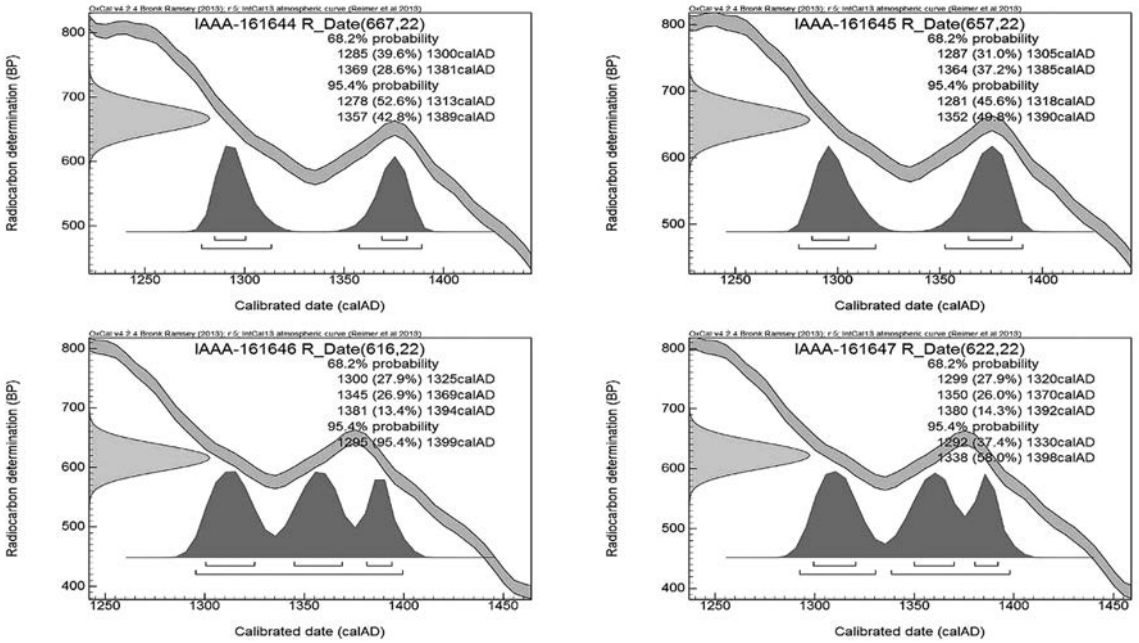


図３　暦年較正年代グラフ

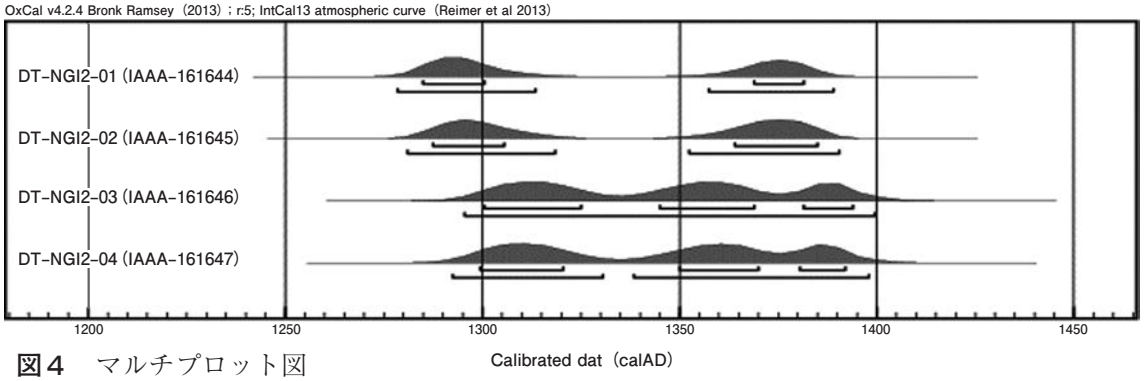


図４　マルチプロット図

第２章　上ノ台館跡出土炭化材の自然科学分析

株式会社　加速器分析研究所

第１節　樹 種 同 定

１．試　　料

上ノ台館跡は、伊達市霊山町下小国字上ノ台の丘陵上に位置する。本遺跡では土坑及び木炭窯跡が検出され、遺構の底面から炭化材が出土したことから、当時の燃料材などの木材利用状況を調査する目的で炭化材16点の樹種同定を行った（表４）。

なお、同一試料の放射性炭素年代測定が実施され、１号土坑の試料はModern、２号土坑の試料は７～８世紀頃、１号木炭窯跡の試料は13世紀前半を主とする年代値が示されている（付編第２章第２節参照）。

２．分析方法

炭化材はステンレス剃刀で横断面、放射断面、接線断面を割り出しプレパラートに固定して反射光式顕微鏡で観察し、現生標本の形態に基づき同定を行った。

３．結　　果

同定結果を表４に示す。１号土坑から出土した炭化材３点はすべてマツ属複維管束亜属、２号土坑から出土した炭化材３点はすべてクリ、１号木炭窯跡から出土した炭化材10点は、クヌギ節６点、コナラ節３点、クリ１点に同定された。以下に同定の根拠を示す。

・マツ属複維管束亜属（*Pinus* subgen. *Diploxylon*）

早材部から晩材部への移行はやや急で、早材部と晩材部の境界付近に垂直樹脂道が多く見られる。放射組織は柔細胞の上下に放射仮道管があり、放射柔細胞の分野壁孔は窓状で放射仮道管の内壁が鋸歯状に突出する。接線断面で見られる放射細胞に、しばしば水平樹脂道が含まれるものが確認できる。

・クリ（*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.）

年輪最初に大きな道管が数個塊をなして、その後徐々に径を減じて火炎状ないし波状に小道管が配列する環孔材。道管の穿孔板は単一で、放射組織は同性で単列ないし時々２細胞幅となる。

・コナラ属コナラ節（*Quercus* sect. *Prinus*）

年輪最初に大きな道管が数個塊をなして、その後徐々に径を減じて火炎状ないし波状にやや角張った薄壁の小道管が配列する環孔材で、２～３ミリ程度の間隔で横断面に広放射組織が現れる。道管の穿孔板は単一で、放射組織は同性で単列と多細胞幅の広放射組織がある。

・コナラ属クヌギ節（*Quercus* sect. *Aegilops*）

年輪最初に大きな道管が数列配列し、その後徐々に径を減じて波状に厚壁の円い小道管が配列する環孔材で、横断面に広放射組織が見える。道管の穿孔板は単一で、放射組織は同性で単列と多細胞幅の広放射組織がある。

４．考　　察

１号土坑から出土した炭化材はすべてModernで、1950年以降のものであった。２号土坑から出土した炭化材はすべてクリであり、比較的締まった炭であることから燃料材として焼成された可能性が高い。また、１号木炭窯跡から出土した炭化材はクヌギ節が多く、コナラ節とクリも見られる。これらの樹種は、炭の原料として古代～中世にかけて選択的に使われていたと推測される。

南相馬市の割田Ｈ遺跡では古墳末～平安時代と

される製鉄炉跡や木炭窯跡で大量の炭化材が同定されており、コナラ節とクヌギ節が圧倒的に多い。また割田Ｃ遺跡ではクリが卓越した木炭窯跡も確認されている（伊東ほか 2012）。

※）本分析は、古代の森研究舎の協力を得て行った。

参考文献

伊東隆夫・山田昌久（編） 2012 『木の考古学　出土木製品用材データベース』海青社

表４　出土炭化材の樹種

試料番号	遺構	層位	樹種
DT-KNT-01	ＳK01	底面	マツ属複維管束亜属
DT-KNT-02	ＳK01	底面	マツ属複維管束亜属
DT-KNT-03	ＳK01	底面	マツ属複維管束亜属
DT-KNT-04	ＳK02	底面	クリ
DT-KNT-05	ＳK02	底面	クリ
DT-KNT-06	ＳK02	底面	クリ
DT-KNT-07	ＳC01	底面	コナラ節
DT-KNT-08	ＳC01	底面	クヌギ節
DT-KNT-09	ＳC01	底面	クヌギ節
DT-KNT-10	ＳC01	底面	コナラ節
DT-KNT-11	ＳC01	底面	クヌギ節
DT-KNT-12	ＳC01	底面	クヌギ節
DT-KNT-13	ＳC01	底面	クヌギ節
DT-KNT-14	ＳC01	底面	クヌギ節
DT-KNT-15	ＳC01	底面	コナラ節
DT-KNT-16	ＳC01	底面	クリ

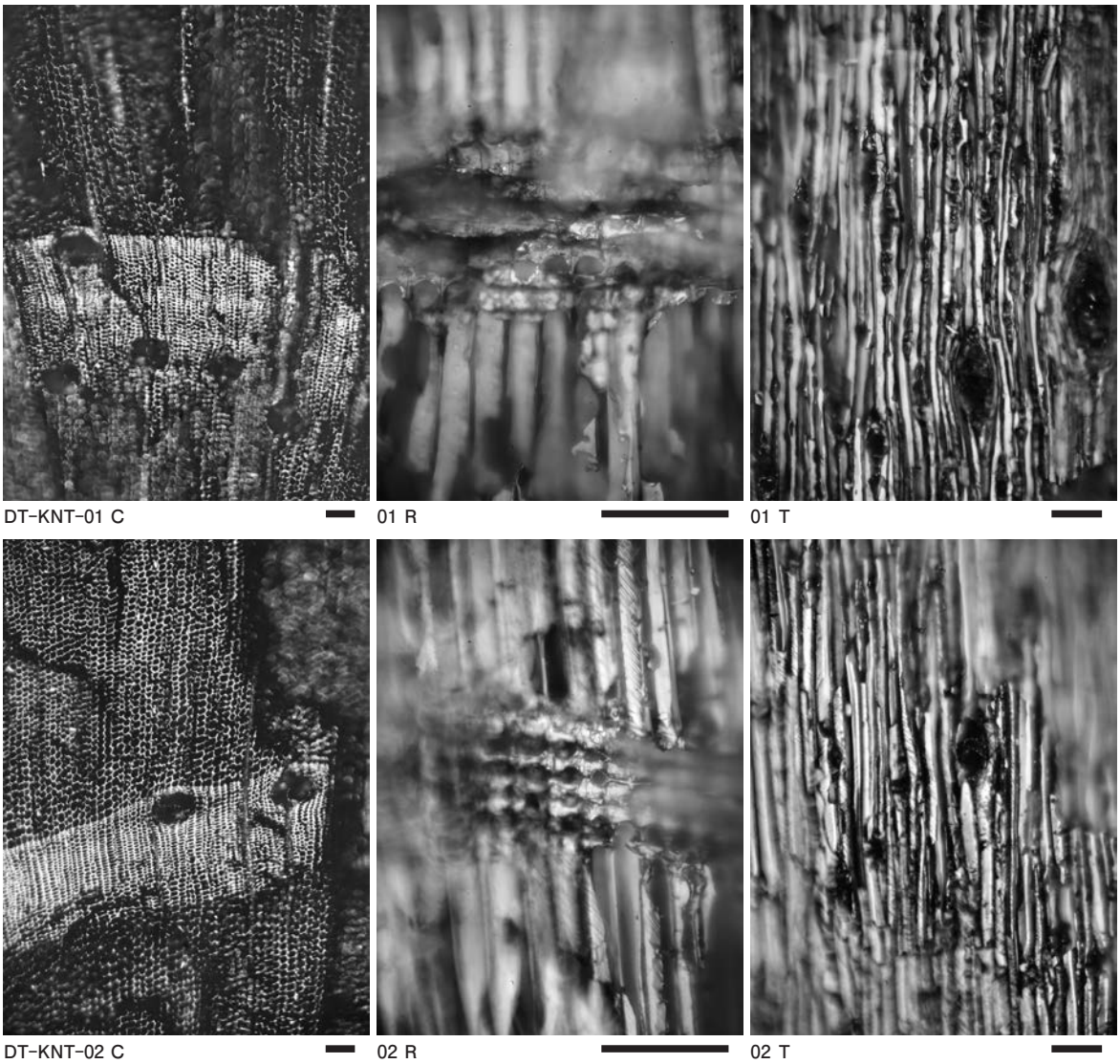


図５　出土炭化材の顕微鏡写真（１）

C：横断面　**R**：放射断面　**T**：接線断面　**スケール**：0.1㎜

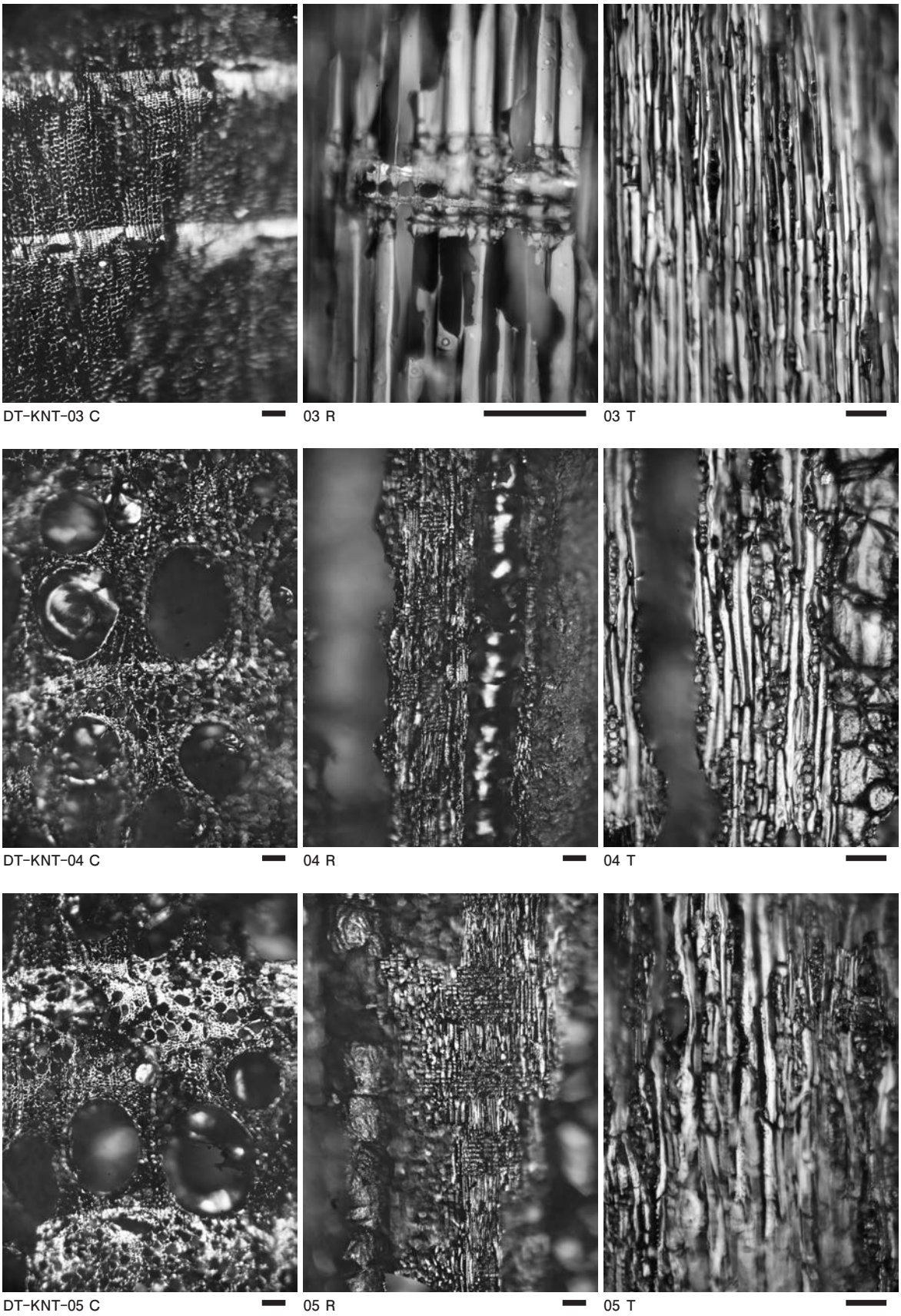


図6　出土炭化材の顕微鏡写真（2）

C：横断面　R：放射断面　T：接線断面　スケール：0.1㎜

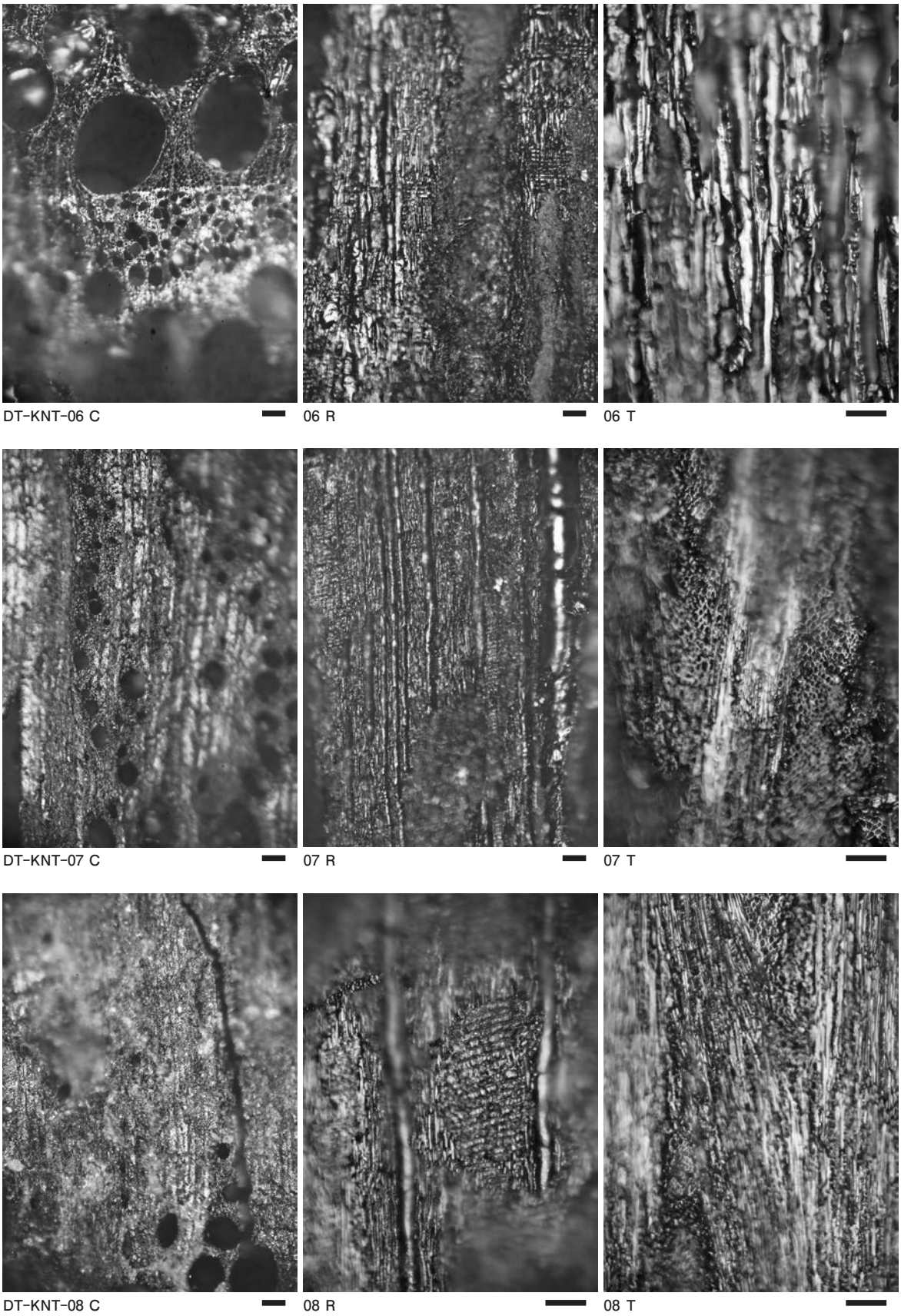


図７　出土炭化材の顕微鏡写真（３）

C：横断面　**R**：放射断面　**T**：接線断面　**スケール**：0.1㎜

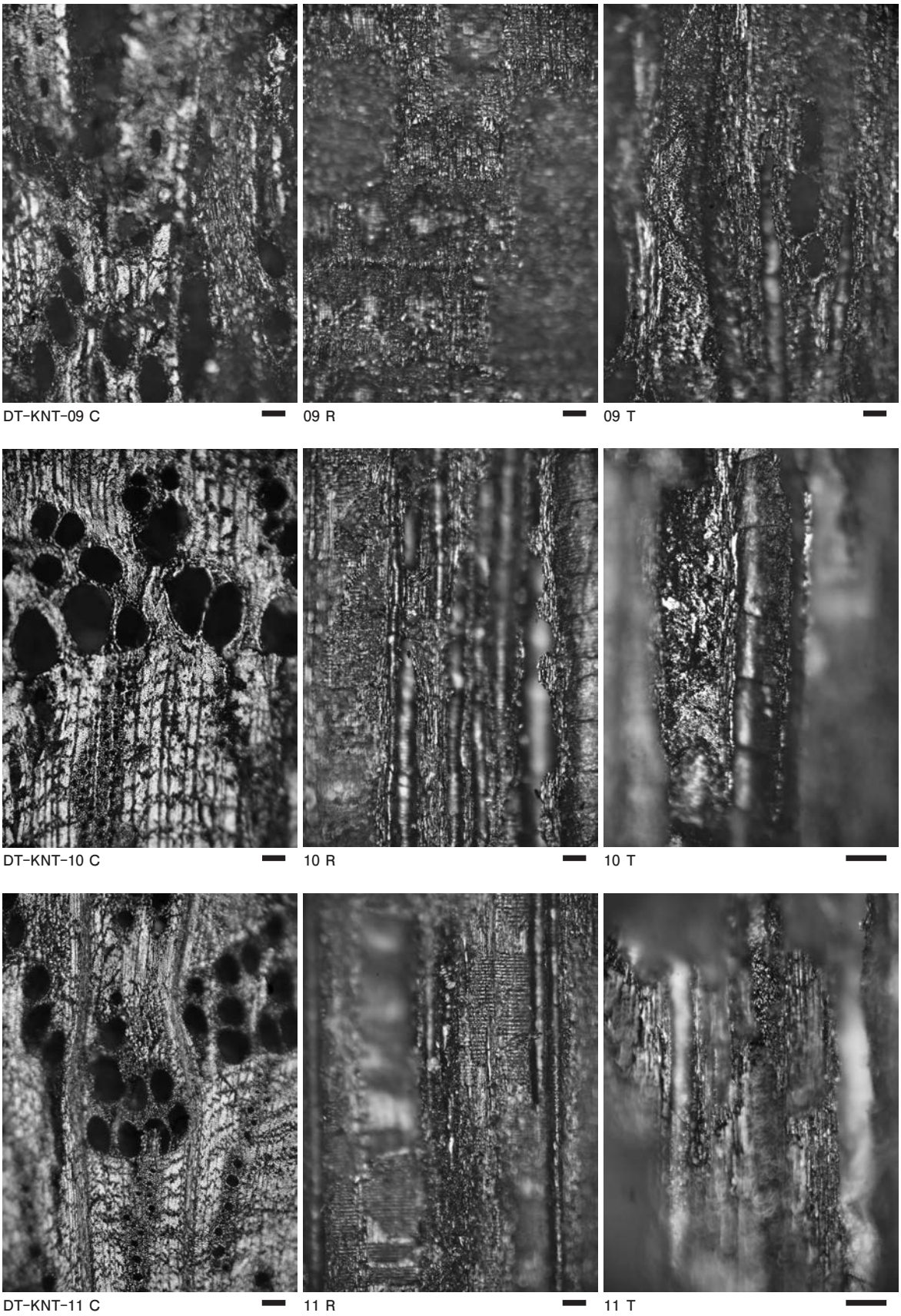


図８　出土炭化材の顕微鏡写真（４）

C：横断面　**R**：放射断面　**T**：接線断面　**スケール**：0.1㎜

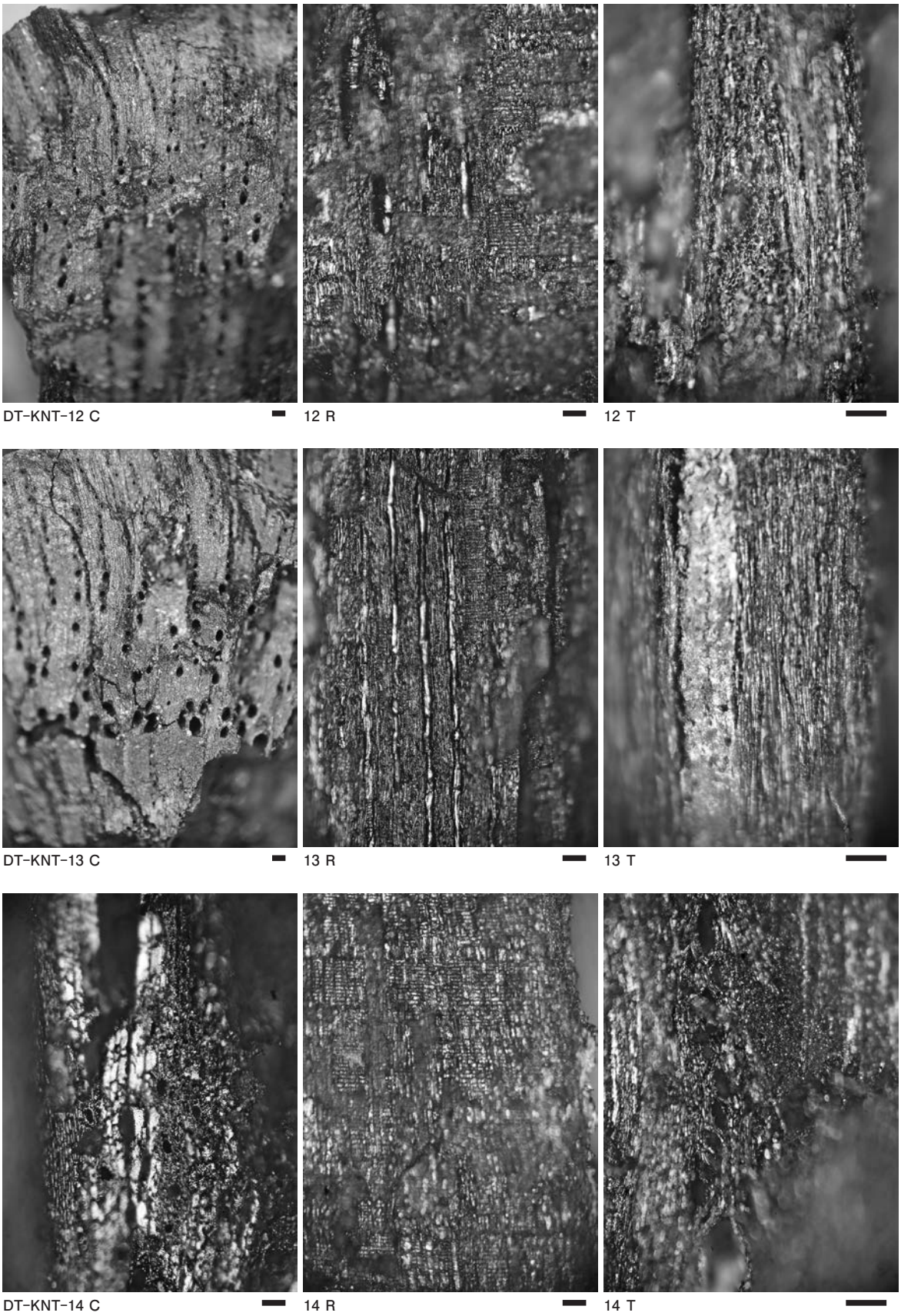


図９　出土炭化材の顕微鏡写真（５）

C：横断面　**R**：放射断面　**T**：接線断面　**スケール**：0.1㎜

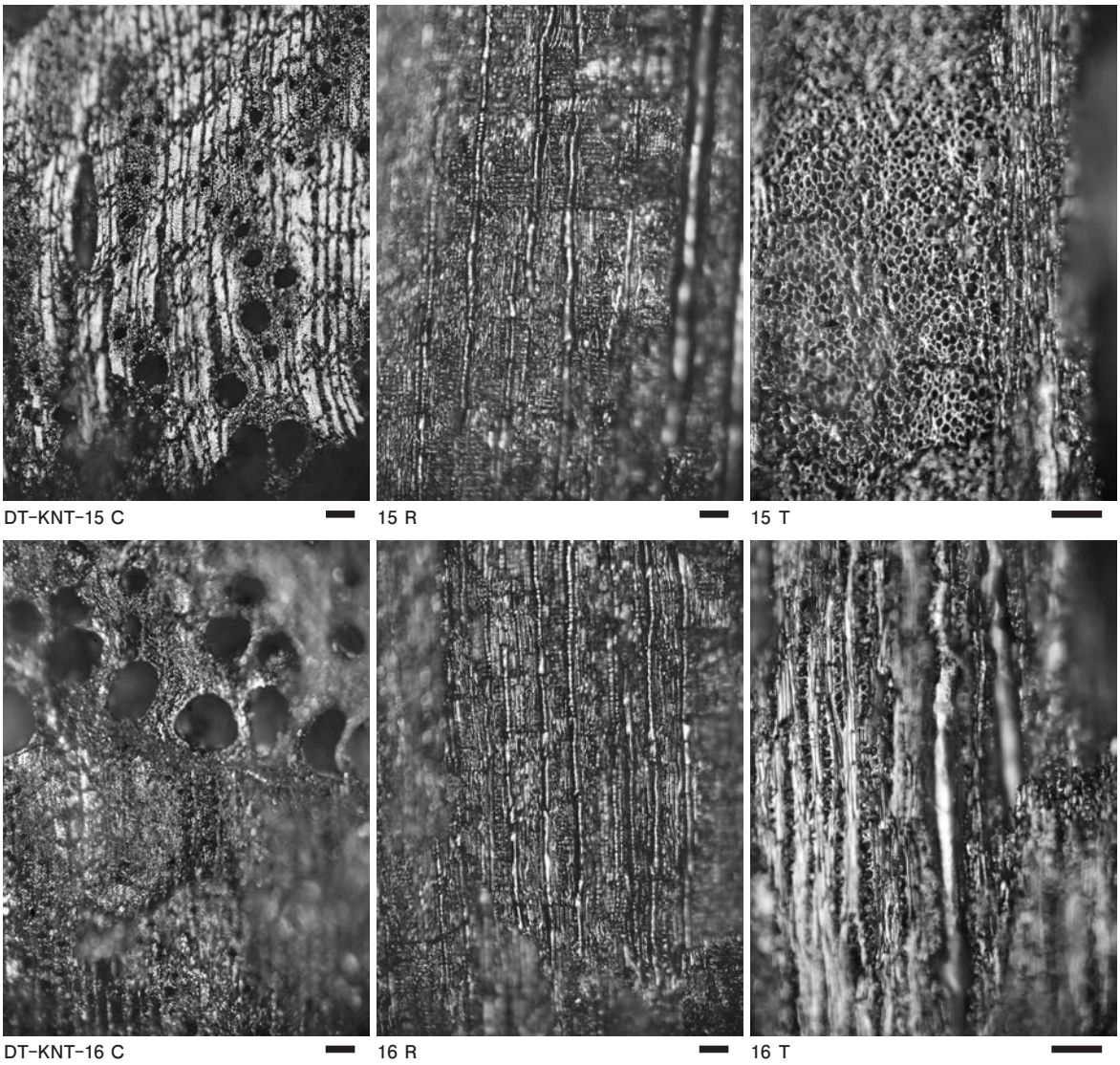


図10　出土炭化材の顕微鏡写真（６）　　**C**：横断面　**R**：放射断面　**T**：接線断面　**スケール**：0.1㎜

第２節　放射性炭素年代測定

１．測定対象試料

上ノ台館跡は、福島県伊達市霊山町下小国字上ノ台（北緯37°46′12″、東経140°35′14″）に所在し、丘陵上に立地する。測定対象試料は、土坑、木炭窯跡から出土した炭化材16点である（表５）。なお、同一試料を対象に樹種同定も実施されている（付編第２章第１節参照）。

２．測定の意義

土坑、木炭窯跡の年代を考えるための補助資料とする。

３．化学処理工程

（１）メス・ピンセットを使い、土等の付着物を取り除く。

（２）酸－アルカリ－酸（AAA：Acid Alkali Acid）処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA 処理における酸処理では、通常１mol/ℓ（１

M）の塩酸（HCl）を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム（NaOH）水溶液を用い、0.001Mから１Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が１Mに達した時には「AAA」、１M未満の場合は「AaA」と表５に記載する。

（３）試料を燃焼させ、二酸化炭素（CO_2）を発生させる。

（４）真空ラインで二酸化炭素を精製する。

（５）精製した二酸化炭素を、鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト（C）を生成させる。

（６）グラファイトを内径１㎜のカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

４．測定方法

加速器をベースとした^{14}C-AMS専用装置（NEC社製）を使用し、^{14}Cの計数、^{13}C濃度（^{13}C/^{12}C）、^{14}C濃度（^{14}C/^{12}C）の測定を行う。測定では、米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOx Ⅱ）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

５．算出方法

（１）δ^{13}C は、試料炭素の^{13}C 濃度（^{13}C/^{12}C）を測定し、基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表した値である（表５）。AMS装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。

（２）^{14}C 年代（Libby Age：yrBP）は、過去の大気中^{14}C 濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年（0yrBP）として遡る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期（5568年）を使用する（Stuiver and Polach 1977）。^{14}C 年代はδ^{13}Cによって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表５に、補正していない値を参考値として表６に示した。^{14}C 年代と誤差は、下１桁を丸めて10年単位で表示される。また、^{14}C 年代の誤差（±１σ）は、試料の^{14}C 年代がその誤差範囲に入る確率が68.2％であることを意味する。

（３）pMC（percent Modern Carbon）は、標準現代炭素に対する試料炭素の^{14}C 濃度の割合である。pMCが小さい（^{14}Cが少ない）ほど古い年代を示し、pMCが100以上（^{14}Cの量が標準現代炭素と同等以上）の場合Modernとする。この値もδ^{13}Cによって補正する必要があるため、補正した値を表５に、補正していない値を参考値として表６に示した。

（４）暦年較正年代とは、年代が既知の試料の^{14}C 濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の^{14}C 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、^{14}C 年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、１標準偏差（1σ＝68.2％）あるいは２標準偏差（2σ＝95.4％）で表示される。グラフの縦軸が^{14}C 年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、δ^{13}C 補正を行い、下一桁を丸めない^{14}C 年代値である。なお、較正曲線及び較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal13データベース（Reimer et al. 2013）を用い、OxCalv4.2較正プログラム（Bronk Ramsey 2009）を使用した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表６に示した。暦年較正年代は、^{14}C 年代に基づいて較正（calibrate）された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」または「cal BP」という単位で表される。

６．測定結果

測定結果を表５・６に示す。

１号土坑出土試料３点の^{14}C年代は、すべてModernとなっており、1950年以降の炭化材と考えられる。

２号土坑出土試料３点の^{14}C年代は、DT-

KNT-04、05が1300±20yrBP、DT-KNT-06が1290±20yrBPである。暦年較正年代(1σ)は、DT-KNT-04が672～764calAD、DT-KNT-05が667～764calAD、DT-KNT-06が680～765calADの間に各々２つの範囲で示される。３点の値は重なる範囲が多く、ほぼ同年代を示している。

１号木炭窯跡出土試料10点の^{14}C年代は、830±20yrBP(DT-KNT-10、14、15)から780±20yrBP(DT-KNT-12、13)の狭い範囲に集中する。暦年較正年代(1σ)は、最も古いDT-KNT-10が1190～1249calADの範囲、最も新しいDT-KNT-12が1228～1272calADの間に２つの範囲で示される。すべての試料の値が13世紀前半頃を中心に重なり合っている。

試料の炭素含有率はすべて70%前後の十分な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

参考文献

Bronk Ramsey C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, *Radiocarbon* 51 (1), pp.337-360.

Reimer, P.J. et al. 2013 IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years calBP, *Radiocarbon* 55 (4), pp.1869-1887.

Stuiver M. and Polach H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data, *Radiocarbon* 19 (3), pp.355-363.

表５　放射性炭素年代測定結果(δ^{13}C補正値)

(試料№の頭部「DT-KNT-」を省略表記)

測定番号	試料№	採取場所	試料形態	処理方法	δ^{13}C (‰) (AMS)	δ^{13}C補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-161648	01	ＳK01底面	炭化材	AAA	-26.84 ± 0.27	Modern	175.45 ± 0.40
IAAA-161649	02	ＳK01底面	炭化材	AAA	-26.72 ± 0.23	Modern	181.44 ± 0.40
IAAA-161650	03	ＳK01底面	炭化材	AAA	-26.38 ± 0.21	Modern	148.54 ± 0.34
IAAA-161651	04	ＳK02底面	炭化材	AAA	-26.03 ± 0.19	1,300 ± 20	85.09 ± 0.24
IAAA-161652	05	ＳK02底面	炭化材	AAA	-25.75 ± 0.28	1,300 ± 20	85.03 ± 0.21
IAAA-161653	06	ＳK02底面	炭化材	AAA	-24.19 ± 0.27	1,290 ± 20	85.19 ± 0.22
IAAA-161654	07	ＳC01底面	炭化材	AAA	-25.18 ± 0.21	800 ± 20	90.52 ± 0.25
IAAA-161655	08	ＳC01底面	炭化材	AAA	-26.74 ± 0.19	810 ± 20	90.43 ± 0.25
IAAA-161656	09	ＳC01底面	炭化材	AAA	-25.99 ± 0.21	800 ± 20	90.47 ± 0.25
IAAA-161657	10	ＳC01底面	炭化材	AAA	-24.24 ± 0.23	830 ± 20	90.18 ± 0.25
IAAA-161658	11	ＳC01底面	炭化材	AAA	-26.84 ± 0.20	790 ± 20	90.60 ± 0.25
IAAA-161659	12	ＳC01底面	炭化材	AAA	-25.00 ± 0.30	780 ± 20	90.80 ± 0.25
IAAA-161660	13	ＳC01底面	炭化材	AAA	-25.84 ± 0.19	780 ± 20	90.70 ± 0.26
IAAA-161661	14	ＳC01底面	炭化材	AAA	-28.45 ± 0.23	830 ± 20	90.21 ± 0.25
IAAA-161662	15	ＳC01底面	炭化材	AAA	-23.54 ± 0.20	830 ± 20	90.23 ± 0.25
IAAA-161663	16	ＳC01底面	炭化材	AAA	-24.37 ± 0.24	790 ± 20	90.64 ± 0.25

表６－１　放射性炭素年代測定結果(δ^{13}C未補正値)及び暦年較正年代

[参考値]

測定番号	δ^{13}C補正なし		暦年較正用 (yrBP)	1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-161648	Modern	174.80 ± 0.39	Modern		
IAAA-161649	Modern	180.80 ± 0.39	Modern		
IAAA-161650	Modern	148.12 ± 0.33	Modern		
IAAA-161651	1,310 ± 20	84.91 ± 0.24	1,296 ± 22	672calAD - 710calAD (44.9%) 746calAD - 764calAD (23.3%)	665calAD - 725calAD (62.4%) 739calAD - 769calAD (33.0%)
IAAA-161652	1,320 ± 20	84.90 ± 0.21	1,302 ± 20	667calAD - 710calAD (47.5%) 746calAD - 764calAD (20.7%)	663calAD - 721calAD (65.4%) 741calAD - 768calAD (30.0%)
IAAA-161653	1,270 ± 20	85.33 ± 0.21	1,287 ± 20	680calAD - 712calAD (39.8%) 744calAD - 765calAD (28.4%)	669calAD - 727calAD (59.1%) 737calAD - 769calAD (36.3%)
IAAA-161654	800 ± 20	90.49 ± 0.25	800 ± 22	1223calAD - 1257calAD (68.2%)	1208calAD - 1272calAD (95.4%)
IAAA-161655	840 ± 20	90.10 ± 0.25	808 ± 22	1220calAD - 1255calAD (68.2%)	1190calAD - 1268calAD (95.4%)

表６－２　放射性炭素年代測定結果（δ ^{13}C 未補正値）及び暦年較正年代

［参考値］

測定番号	δ ^{13}C 補正なし		暦年較正用 (yrBP)	１σ暦年代範囲	２σ暦年代範囲
	Age（yrBP）	pMC（%）			
IAAA-161656	820 ± 20	90.28 ± 0.25	804 ± 22	1222calAD – 1256calAD（68.2%）	1193calAD – 1198calAD（ 1.1%） 1205calAD – 1271calAD（94.3%）
IAAA-161657	820 ± 20	90.33 ± 0.25	830 ± 22	1190calAD – 1249calAD（68.2%）	1167calAD – 1258calAD（95.4%）
IAAA-161658	820 ± 20	90.26 ± 0.25	793 ± 22	1224calAD – 1261calAD（68.2%）	1215calAD – 1273calAD（95.4%）
IAAA-161659	770 ± 20	90.8 ± 0.24	775 ± 21	1228calAD – 1231calAD（ 5.8%） 1245calAD – 1272calAD（62.4%）	1221calAD – 1276calAD（95.4%）
IAAA-161660	800 ± 20	90.55 ± 0.25	784 ± 22	1225calAD – 1233calAD（17.0%） 1243calAD – 1266calAD（51.2%）	1218calAD – 1274calAD（95.4%）
IAAA-161661	880 ± 20	89.57 ± 0.25	827 ± 22	1192calAD – 1198calAD（ 5.1%） 1205calAD – 1254calAD（63.1%）	1168calAD – 1259calAD（95.4%）
IAAA-161662	800 ± 20	90.49 ± 0.25	826 ± 22	1193calAD – 1197calAD（ 4.0%） 1205calAD – 1255calAD（64.2%）	1169calAD – 1259calAD（95.4%）
IAAA-161663	780 ± 20	90.75 ± 0.24	789 ± 21	1224calAD – 1236calAD（23.2%） 1241calAD – 1263calAD（45.0%）	1217calAD – 1272calAD（95.4%）

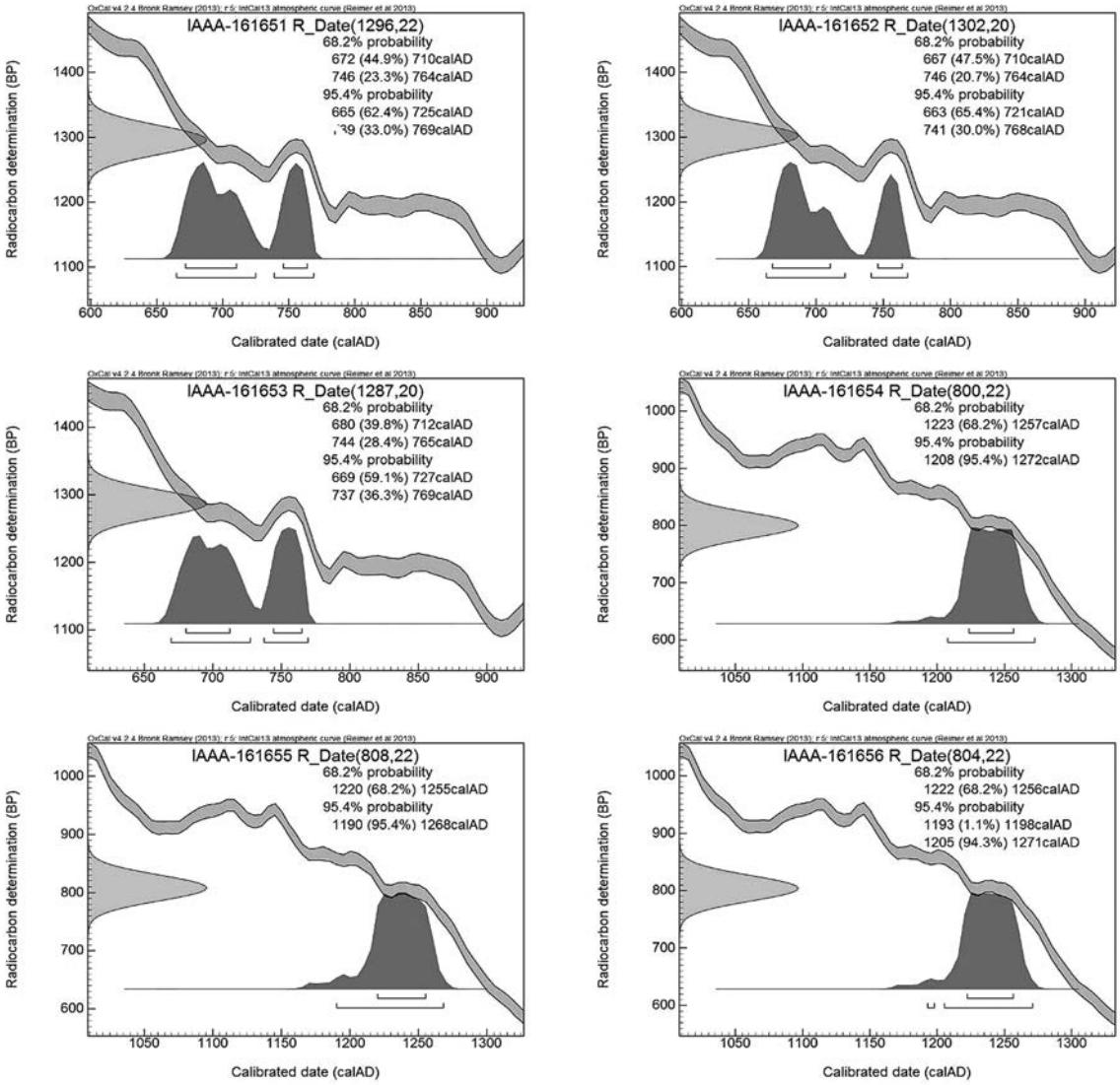


図11　暦年較正年代グラフ（１）

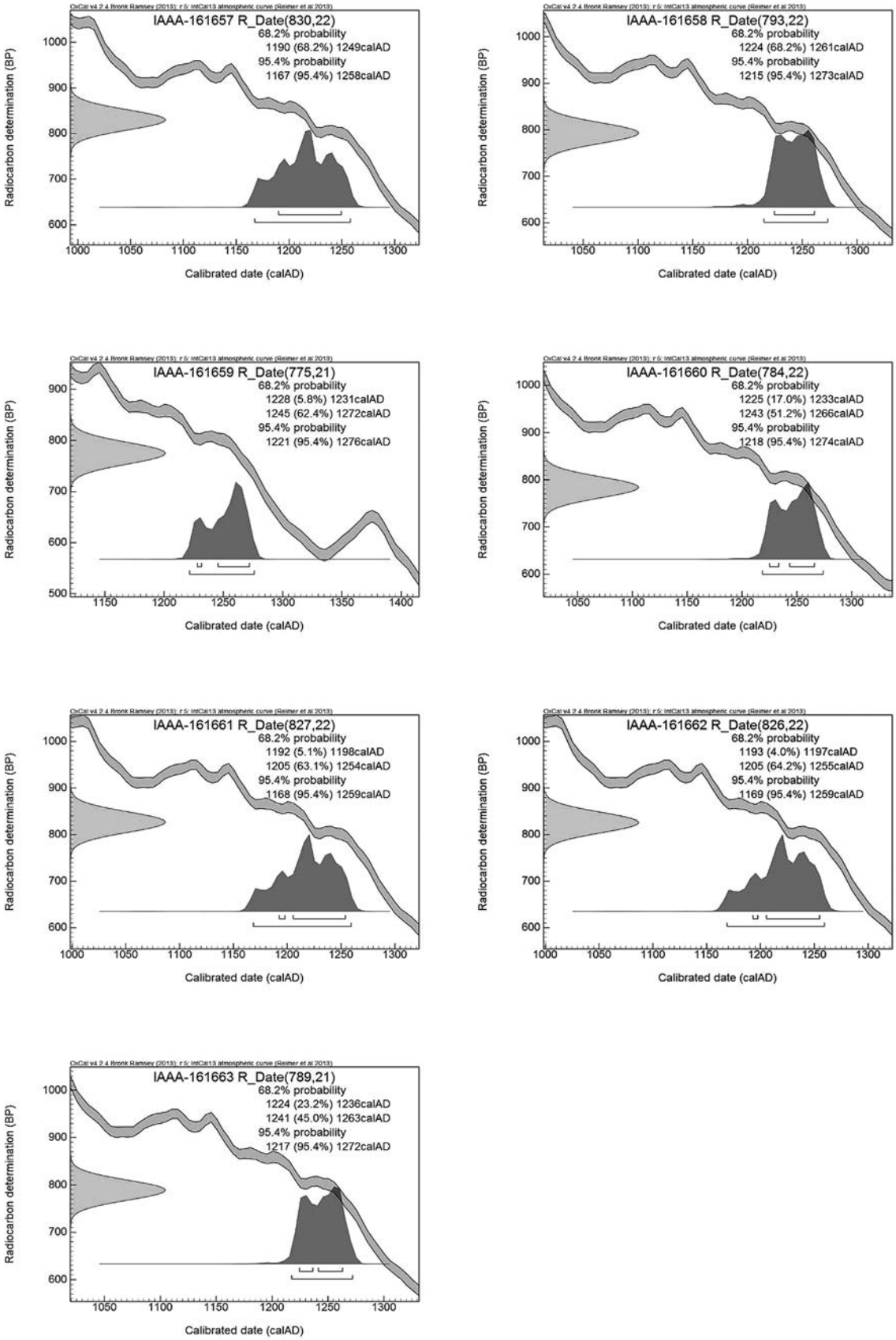


図12　暦年較正年代グラフ（２）

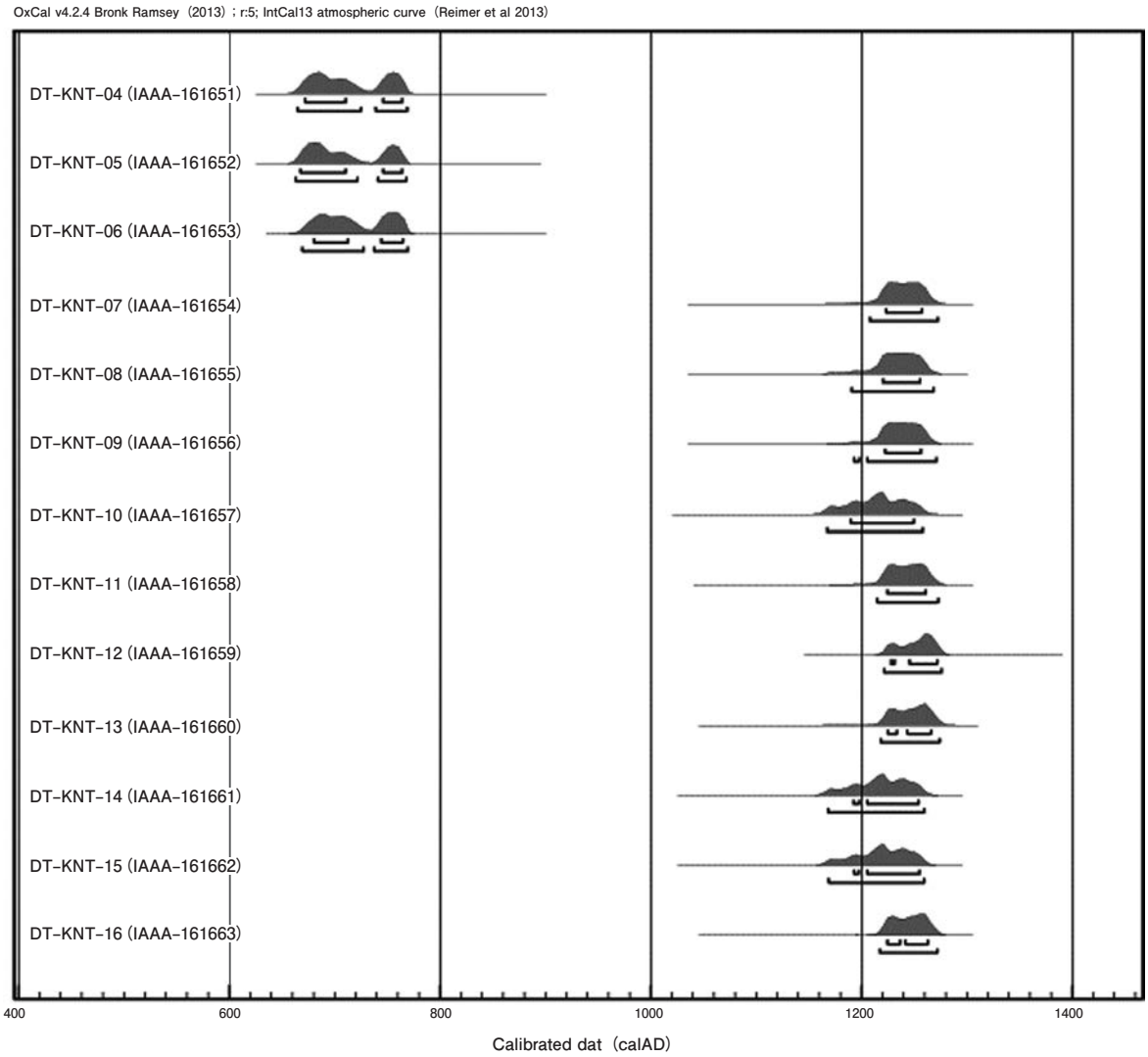


図13　マルチプロット図

第３章　川原田遺跡出土加工材と炭化材の自然科学分析

株式会社　加速器分析研究所

第１節　樹 種 同 定

１．試　　料

川原田遺跡は桑折町大字松原字川原田のに位置する。本遺跡では柱列跡及び掘立柱建物跡の柱痕に柱材が残っており、また井戸跡に井戸枠の構築材が残っていた。さらに、掘立柱建物跡の柱穴及び用途不明遺構からは炭化材片が出土した。そこで当時の土木建築材などの木材利用状況を調査する目的で、合計15点の木材や炭化材を対象に樹種同定を行った。

なお、同一試料の放射性炭素年代測定が実施され、９～10世紀頃の年代値が示されている（付編第３章第２節参照）。

２．分析方法

木材試料からはステンレス剃刀で横断面、放射断面、接線断面の切片を採取しガムクロラールでプレパラートを作成し、生物顕微鏡で観察・同定を行った。炭化材はステンレス剃刀で横断面、放射断面、接線断面を割り出しプレパラートに固定して反射光式顕微鏡で観察し、同定を行った。同定は現生標本ならびに島地ほか（1982）を参考にした。

３．結　　果

同定結果を表７に示す。１号柱列跡の柱材３点、１号掘立柱建物跡の柱材５点はすべてクリ、２号掘立柱建物跡の柱材１点はコナラ節、炭化材１点はニレ属、１号井戸跡の井戸枠材のうち、２点はクリ、１点はニレ属、１号性格不明遺構の炭化材のうち、１点はコナラ節、１点はヌルデに同定された。以下に同定の根拠を示す。

・**クリ**（*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.）

年輪最初に大きな道管が数個塊をなして、その後徐々に径を減じて火炎状ないし波状に小道管が配列する環孔材。道管の穿孔板は単一で、放射組織は同性で単列ないし時々２細胞幅となる。

・**コナラ属コナラ節**（*Quercus* sect. *Prinus*）

年輪最初に大きな道管が数個塊をなして、その後徐々に径を減じて火炎状ないし波状にやや角張った薄壁の小道管が配列する環孔材で２～３㎜程度の間隔で横断面に広放射組織が現れる。道管の穿孔板は単一で、放射組織は同性で単列と多細胞幅の広放射組織がある。

・**ニレ属**（*Ulmus*）

年輪はじめに１～２列大きな道管が配列し、急に径を減じて小道管が斜線状、接線状に接合してやや規則的に配列する環孔材で軸方向柔細胞は周囲状。道管側壁は交互壁孔で穿孔板は単一、小道管内にはらせん肥厚が見られる。放射組織は平伏細胞のみの同性で比較的整った紡錘形で６～７細胞幅である。

・**ヌルデ**（*Rhus javanica* L.）

年輪はじめにやや大きい道管が数列配列し、徐々に径を減じながらやや斜線状に短く連なって配列する環孔材である。本試料はかなり小径で枝と思われ、早材部道管がそれほど大きくなく小道管もまばらである。道管の穿孔板は単一で小道管内壁にらせん肥厚がある。放射組織は平伏細胞の上下に直立細胞が数段ある異性で１～３細胞幅と細く、直立細胞の単列部を介して多列部とつながっている放射組織がある。

４．考　　察

本遺跡では、平安時代の９世紀から10世紀頃と

みられる柱列や建物の柱９点中８点にクリが使われ、１点はコナラ節であった。また井戸枠材３点のうち２点はクリが使われ、１点はニレ属であった。東北地方では、縄文時代に比べて柱材にクリが用いられる比率は低下するものの、４割程度を占め、コナラ節も１割程度使われている（伊東ほか 2012）。本遺跡の同定結果もこの傾向に調和的であった。また本遺跡の井戸枠材には、クリのほかにニレ属が使われている。ニレ属は、井戸枠材に頻繁に使われるケヤキに構造が似ていることから、井戸枠材として用いられた可能性も考えられる。炭化材は、柱穴と性格不明遺構から検出されているため、建築部材か燃料材か限定はできないが、ニレ属やコナラ節は建築部材や燃料材として有用である。１点出土したヌルデは炭材にも利用されるが、本遺跡で出土した試料は樹皮が付いている上、極めて細く、用材としては焚き付けの可能性がある。

※）本分析は、古代の森研究舎の協力を得て行った。

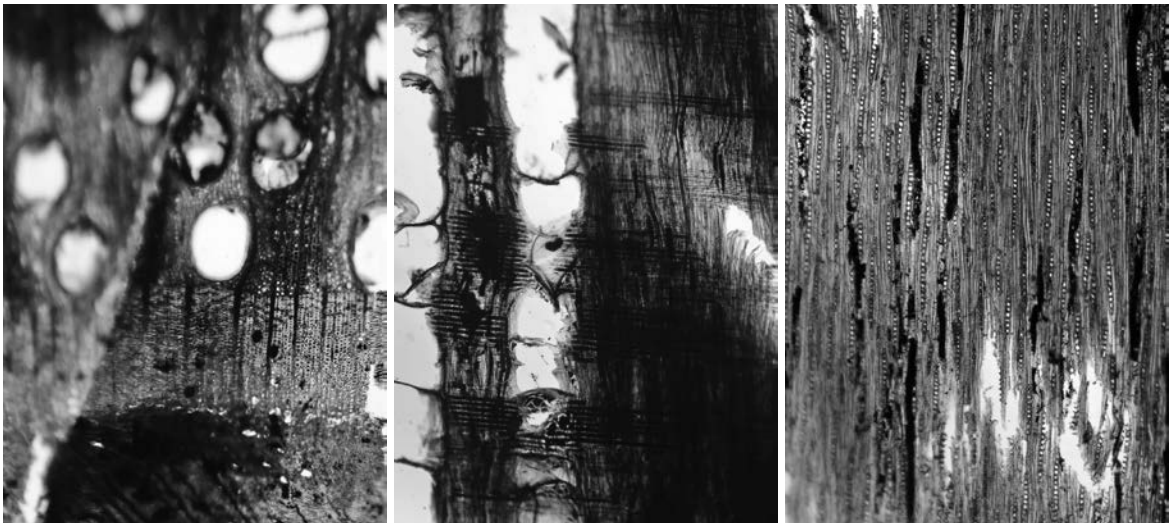
参考文献

伊東隆夫・山田昌久（編）　2012　『木の考古学　出土木製品用材データベース』海青社

島地謙・伊東隆夫　1982　『図説　木材組織』地球社

表７　出土加工材と炭化材の樹種

試料番号	遺構	層位	試料形態	樹種
QR-KHD-01	ＳＡ01	Ｐ１柱痕	柱材	クリ
QR-KHD-02	ＳＡ01	Ｐ２柱痕	柱材	クリ
QR-KHD-03	ＳＡ01	Ｐ３柱痕	柱材	クリ
QR-KHD-04	ＳＢ01	Ｐ１柱痕	柱材	クリ
QR-KHD-05	ＳＢ01	Ｐ３柱痕	柱材	クリ
QR-KHD-06	ＳＢ01	Ｐ４柱痕	柱材	クリ
QR-KHD-07	ＳＢ01	Ｐ８柱痕	柱材	クリ
QR-KHD-08	ＳＢ01	P16柱痕	柱材	クリ
QR-KHD-09	ＳＢ02	Ｐ１柱痕	柱材	コナラ節
QR-KHD-10	ＳＥ01	ℓ６	井戸枠	クリ
QR-KHD-11	ＳＥ01	ℓ５	井戸枠	クリ
QR-KHD-12	ＳＥ01	ℓ３	井戸枠	ニレ属
QR-KHD-13	ＳＢ02	Ｐ７柱痕	炭化材	ニレ属
QR-KHD-14	ＳＸ01	ℓ１	炭化材	コナラ節
QR-KHD-15	ＳＸ01	ℓ２	炭化材	ヌルデ



QR-KHD-01 C　01 R　01 T

図14　出土加工材の顕微鏡写真（１）

C：横断面　**R**：放射断面　**T**：接線断面　**スケール**：0.1㎜

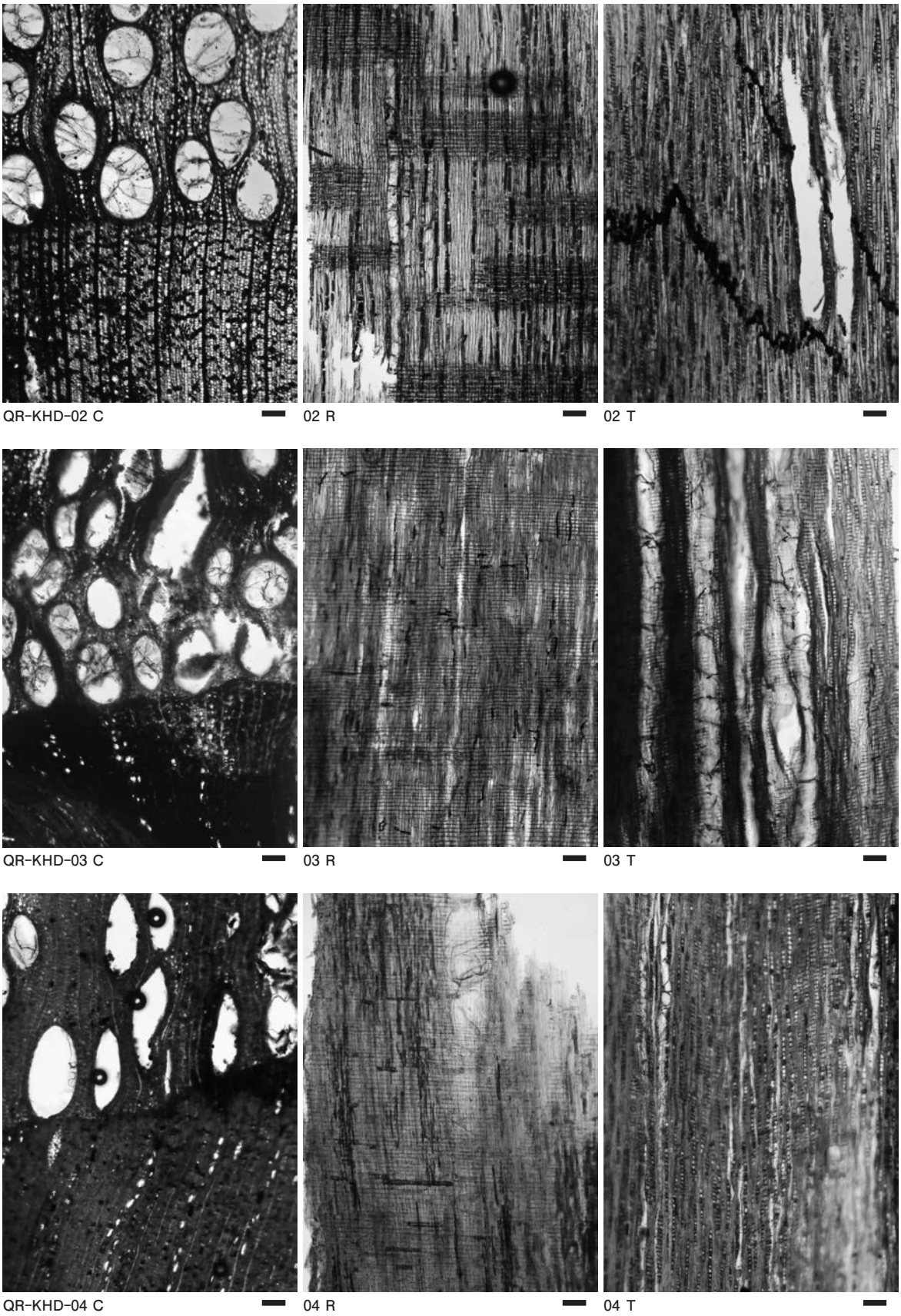


図15　出土加工材の顕微鏡写真（２）

C：横断面　**R**：放射断面　**T**：接線断面　**スケール**：0.1㎜

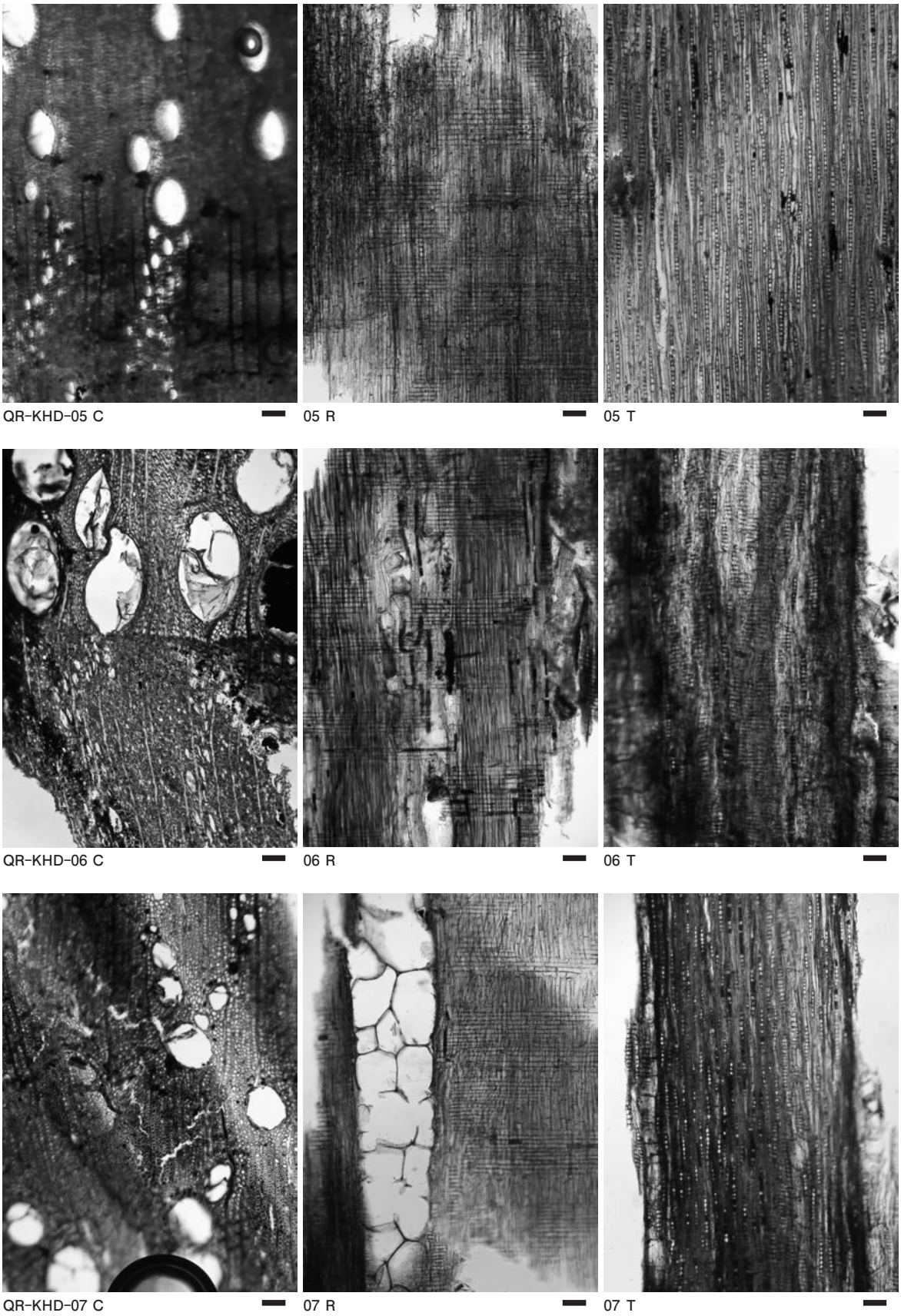


図16　出土加工材の顕微鏡写真（３）

C：横断面　**R**：放射断面　**T**：接線断面　**スケール**：0.1㎜

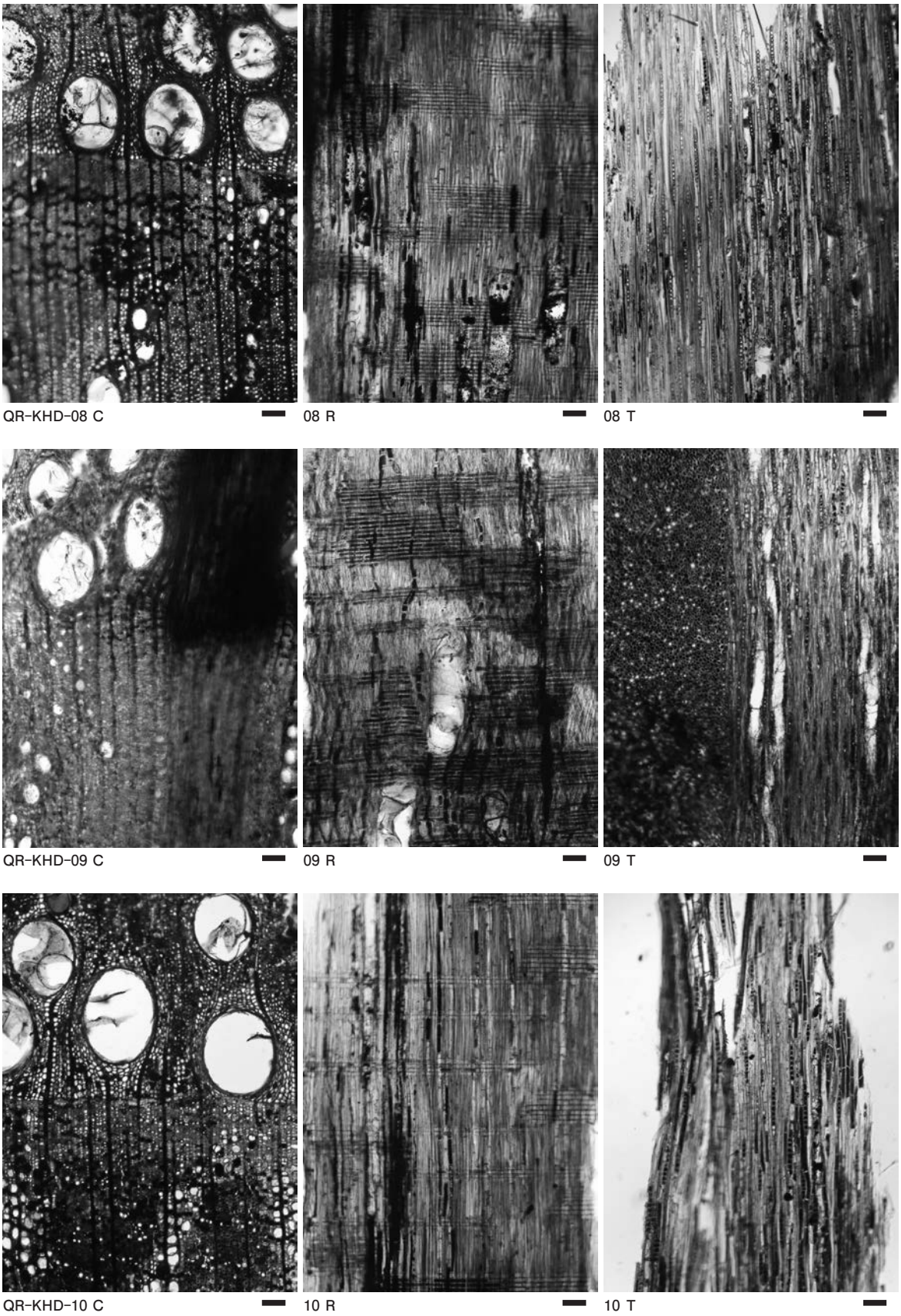


図17　出土加工材の顕微鏡写真（４）

C：横断面　**R**：放射断面　**T**：接線断面　**スケール**：0.1㎜

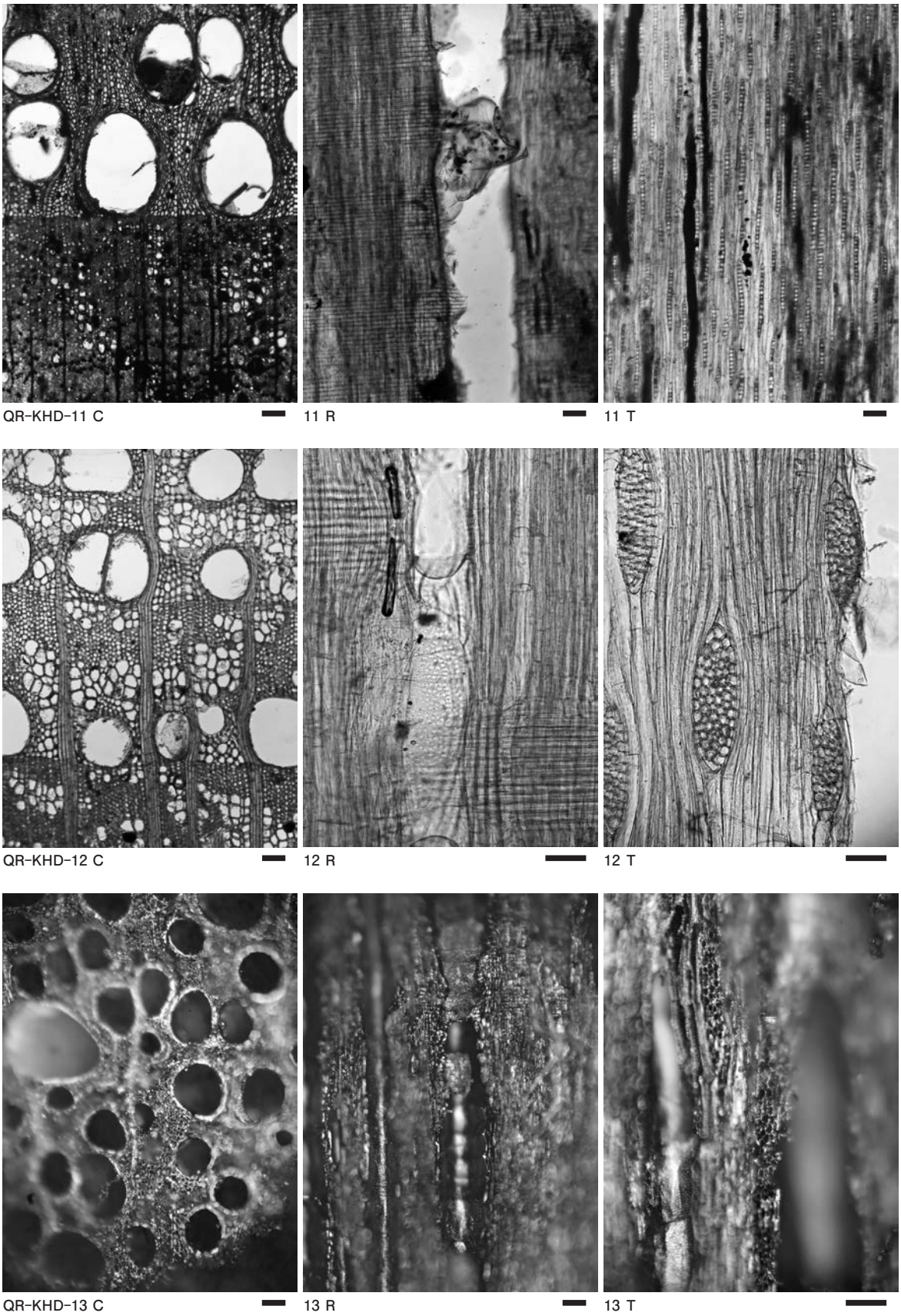


図18　出土加工材と炭化材の顕微鏡写真　　C：横断面　R：放射断面　T：接線断面　スケール：0.1㎜

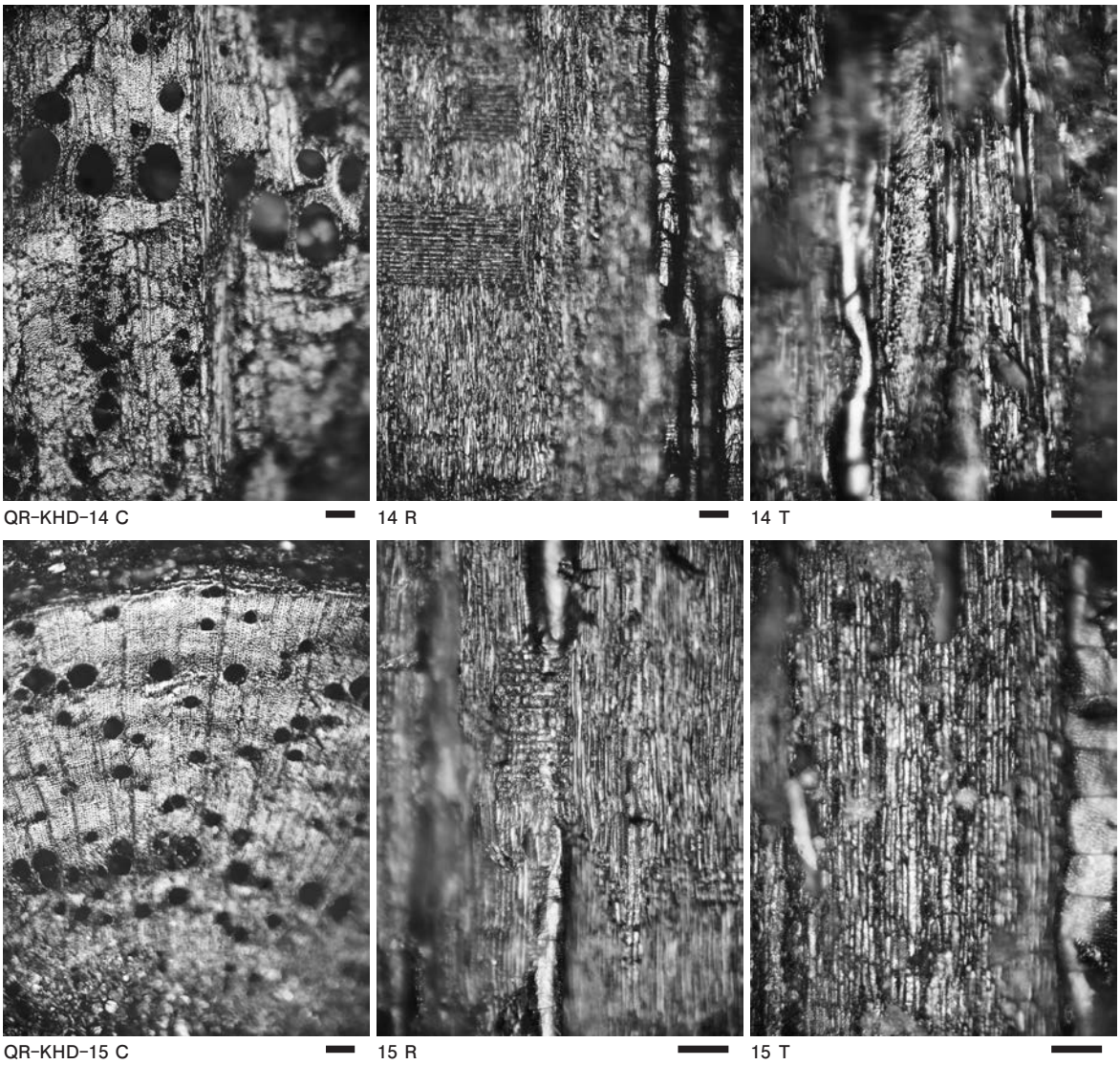


図19　出土炭化材の顕微鏡写真　　**C**：横断面　**R**：放射断面　**T**：接線断面　**スケール**：0.1㎜

第２節　放射性炭素年代測定

１．測定対象試料

川原田遺跡は、福島県桑折町大字松原字川原田に所在する。測定対象試料は、柱列跡、掘立柱建物跡等の遺構から出土した木片、炭化材の合計15点である（表８）。QR-KHD-01～09は柱材、QR-KHD-10～12は井戸枠材である。なお、同一試料を対象に樹種同定も実施されている（付編第３章第１節参照）。

２．測定の意義

柱列跡、掘立柱建物跡等の年代を考えるための補助資料とする。

３．化学処理工程

（１）メス・ピンセットを使い、土等の付着物を取り除く。

（２）酸－アルカリ－酸（AAA：Acid Alkali Acid）処理により不純物を化学的に取り除く。その後、

超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA 処理における酸処理では、通常１mol/ℓ（１M）の塩酸（HCl）を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム（NaOH）水溶液を用い、0.001M から１M まで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が１M に達した時には「AAA」、１M 未満の場合は「AaA」と表５に記載する。

（３）試料を燃焼させ、二酸化炭素（CO_2）を発生させる。

（４）真空ラインで二酸化炭素を精製する。

（５）精製した二酸化炭素を、鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト（C）を生成させる。

（６）グラファイトを内径１㎜のカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

４．測定方法

加速器をベースとした^{14}C-AMS専用装置（NEC社製）を使用し、^{14}Cの計数、^{13}C濃度（^{13}C/^{12}C）、^{14}C濃度（^{14}C/^{12}C）の測定を行う。測定では、米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOx Ⅱ）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

５．算出方法

（１）δ^{13}C は、試料炭素の^{13}C 濃度（^{13}C/^{12}C）を測定し、基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表した値である（表５）。AMS 装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。

（２）^{14}C 年代（Libby Age：yrBP）は、過去の大気中^{14}C 濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年（0yrBP）として遡る年代である。年代値の算出には、Libby の半減期（5568年）を使用する（Stuiver and Polach 1977）。^{14}C 年代はδ^{13}C によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表８に、補正していない値を参考値として表９に示した。^{14}C 年代と誤差は、下１桁を丸めて10年単位で表示される。また、^{14}C 年代の誤差（±１σ）は、試料の^{14}C 年代がその誤差範囲に入る確率が68.2％であることを意味する。

（３）pMC（percent Modern Carbon）は、標準現代炭素に対する試料炭素の^{14}C 濃度の割合である。pMC が小さい（^{14}C が少ない）ほど古い年代を示し、pMC が100以上（^{14}C の量が標準現代炭素と同等以上）の場合 Modern とする。この値もδ^{13}C によって補正する必要があるため、補正した値を表８に、補正していない値を参考値として表９に示した。

（４）暦年較正年代とは、年代が既知の試料の^{14}C 濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の^{14}C 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、^{14}C 年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、１標準偏差（1 σ = 68.2％）あるいは２標準偏差（2 σ = 95.4％）で表示される。グラフの縦軸が^{14}C 年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、δ^{13}C 補正を行い、下一桁を丸めない^{14}C 年代値である。なお、較正曲線及び較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal13データベース（Reimer et al. 2013）を用い、OxCalv4.2較正プログラム（Bronk Ramsey 2009）を使用した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表９に示した。暦年較正年代は、^{14}C 年代に基づいて較正（calibrate）された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」または「cal BP」という単位で表される。

６．測定結果

測定結果を表８・９に示す。

試料15点の^{14}C 年代は、1200 ± 20yrBP（QR-KHD-12）から1080 ± 20yrBP（QR-KHD-11）の狭

い範囲に集中する。暦年較正年代(1σ)は、最も古いQR-KHD-12が775～868calADの間に２つの範囲、最も新しいQR-KHD-11が901～995calADの間に２つの範囲で示される。９～10世紀頃の間で年代値が重なり合う試料が多い。遺構ごとに見ても、年代値のまとまりは良い。

試料の炭素含有率はすべて40%を超えるおおむね適正な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

参考文献

Bronk Ramsey C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, *Radiocarbon* 51 (1) , pp.337-360.

Reimer, P.J. et al. 2013 IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years calBP, *Radiocarbon* 55 (4) , pp.1869-1887.

Stuiver M. and Polach H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data, *Radiocarbon* 19 (3) , pp.355-363.

表８　放射性炭素年代測定結果（δ ^{13}C補正値）

（試料№の頭部「QR-KHD-」を省略表記）

測定番号	試料№	採取場所	試料形態	処理方法	δ ^{13}C（‰）（AMS）	δ ^{13}C補正あり	
						Libby Age（yrBP）	pMC（%）
IAAA-161673	01	ＳA01Ｐ1柱痕	木片	AAA	-23.87 ± 0.22	1,160 ± 20	86.60 ± 0.23
IAAA-161674	02	ＳA01Ｐ2柱痕	木片	AAA	-27.22 ± 0.26	1,110 ± 20	87.12 ± 0.25
IAAA-161675	03	ＳA01Ｐ3柱痕	木片	AaA	-26.65 ± 0.25	1,140 ± 20	86.72 ± 0.24
IAAA-161676	04	ＳB01Ｐ1柱痕	木片	AAA	-27.23 ± 0.24	1,100 ± 20	87.19 ± 0.24
IAAA-161677	05	ＳB01Ｐ3柱痕	木片	AAA	-23.38 ± 0.22	1,110 ± 20	87.09 ± 0.25
IAAA-161678	06	ＳB01Ｐ4柱痕	木片	AAA	-27.98 ± 0.18	1,140 ± 20	86.75 ± 0.24
IAAA-161679	07	ＳB01Ｐ8柱痕	木片	AAA	-25.60 ± 0.26	1,090 ± 20	87.27 ± 0.25
IAAA-161680	08	ＳB01Ｐ16柱痕	木片	AAA	-25.15 ± 0.22	1,120 ± 20	87.02 ± 0.24
IAAA-161681	09	ＳB02Ｐ1柱痕	木片	AAA	-25.11 ± 0.28	1,150 ± 20	86.70 ± 0.24
IAAA-161682	10	ＳE01ℓ6	木片	AAA	-26.13 ± 0.25	1,120 ± 20	86.97 ± 0.24
IAAA-161683	11	ＳE01ℓ5	木片	AAA	-26.51 ± 0.20	1,080 ± 20	87.41 ± 0.24
IAAA-161684	12	ＳE01ℓ3	木片	AAA	-25.96 ± 0.28	1,200 ± 20	86.12 ± 0.24
IAAA-161685	13	ＳB02Ｐ7柱痕	炭化材	AaA	-25.07 ± 0.22	1,160 ± 20	86.57 ± 0.24
IAAA-161686	14	ＳX01ℓ1	炭化材	AaA	-23.75 ± 0.30	1,140 ± 20	86.76 ± 0.24
IAAA-161687	15	ＳX01ℓ2	炭化材	AAA	-26.35 ± 0.19	1,150 ± 20	86.63 ± 0.23

表９－１　放射性炭素年代測定結果（δ ^{13}C未補正値）及び暦年較正年代

［参考値］

測定番号	δ ^{13}C補正なし		暦年較正用（yrBP）	1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲
	Age（yrBP）	pMC（%）			
IAAA-161673	1,140 ± 20	86.80 ± 0.23	1,156 ± 21	778calAD - 790calAD（ 8.9%） 827calAD - 841calAD（ 6.9%） 864calAD - 900calAD（30.7%） 922calAD - 949calAD（21.7%）	776calAD - 905calAD（67.3%） 917calAD - 967calAD（28.1%）
IAAA-161674	1,140 ± 20	86.73 ± 0.24	1,107 ± 22	898calAD - 925calAD（32.3%） 944calAD - 975calAD（35.9%）	891calAD - 987calAD（95.4%）
IAAA-161675	1,170 ± 20	86.43 ± 0.23	1,144 ± 21	880calAD - 904calAD（23.1%） 918calAD - 966calAD（45.1%）	777calAD - 791calAD（ 4.8%） 805calAD - 843calAD（ 7.3%） 860calAD - 974calAD（83.3%）
IAAA-161676	1,140 ± 20	86.79 ± 0.24	1,101 ± 22	900calAD - 922calAD（29.0%） 948calAD - 980calAD（39.2%）	891calAD - 990calAD（95.4%）
IAAA-161677	1,080 ± 20	87.38 ± 0.25	1,110 ± 23	897calAD - 927calAD（33.4%） 943calAD - 974calAD（34.8%）	890calAD - 987calAD（95.4%）
IAAA-161678	1,190 ± 20	86.22 ± 0.24	1,142 ± 22	881calAD - 904calAD（21.9%） 917calAD - 966calAD（46.3%）	777calAD - 791calAD（ 4.3%） 805calAD - 843calAD（ 6.7%） 860calAD - 975calAD（84.3%）
IAAA-161679	1,100 ± 20	87.17 ± 0.24	1,093 ± 22	901calAD - 921calAD（25.1%） 951calAD - 987calAD（43.1%）	892calAD - 995calAD（95.4%）

表９－２　放射性炭素年代測定結果（δ ^{13}C 未補正値）及び暦年較正年代

［参考値］

測定番号	δ ^{13}C 補正なし Age（yrBP）	pMC（%）	暦年較正用（yrBP）	１σ暦年代範囲	２σ暦年代範囲
IAAA-161680	1,120 ± 20	86.99 ± 0.24	1,117 ± 22	895calAD – 928calAD（35.7%） 941calAD – 969calAD（32.5%）	887calAD – 984calAD（95.4%）
IAAA-161681	1,150 ± 20	86.68 ± 0.23	1,146 ± 21	879calAD – 903calAD（24.8%） 919calAD – 964calAD（43.4%）	777calAD – 791calAD（ 5.5%） 805calAD – 843calAD（ 8.7%） 860calAD – 972calAD（81.2%）
IAAA-161682	1,140 ± 20	86.77 ± 0.23	1,121 ± 21	894calAD – 906calAD（14.2%） 916calAD – 931calAD（17.8%） 938calAD – 968calAD（36.1%）	886calAD – 983calAD（95.4%）
IAAA-161683	1,110 ± 20	87.14 ± 0.24	1,080 ± 22	901calAD – 921calAD（18.9%） 953calAD – 995calAD（49.3%）	897calAD – 926calAD （25.1%） 942calAD – 1017calAD（70.3%）
IAAA-161684	1,220 ± 20	85.95 ± 0.24	1,200 ± 22	775calAD – 778calAD（ 2.6%） 789calAD – 868calAD（65.6%）	769calAD – 889calAD（95.4%）
IAAA-161685	1,160 ± 20	86.56 ± 0.23	1,158 ± 21	778calAD – 790calAD（10.0%） 827calAD – 841calAD（ 7.9%） 864calAD – 899calAD（32.1%） 924calAD – 945calAD（18.2%）	776calAD – 904calAD（70.9%） 918calAD – 965calAD（24.5%）
IAAA-161686	1,120 ± 20	86.98 ± 0.23	1,141 ± 21	884calAD – 903calAD（20.5%） 919calAD – 964calAD（47.7%）	777calAD – 790calAD（ 3.7%） 807calAD – 842calAD（ 4.9%） 862calAD – 975calAD（86.8%）
IAAA-161687	1,180 ± 20	86.39 ± 0.23	1,153 ± 21	778calAD – 790calAD（ 7.4%） 830calAD – 838calAD（ 3.5%） 867calAD – 901calAD（29.7%） 920calAD – 953calAD（27.6%）	776calAD – 794calAD（ 9.0%） 800calAD – 906calAD（52.5%） 915calAD – 968calAD（33.9%）

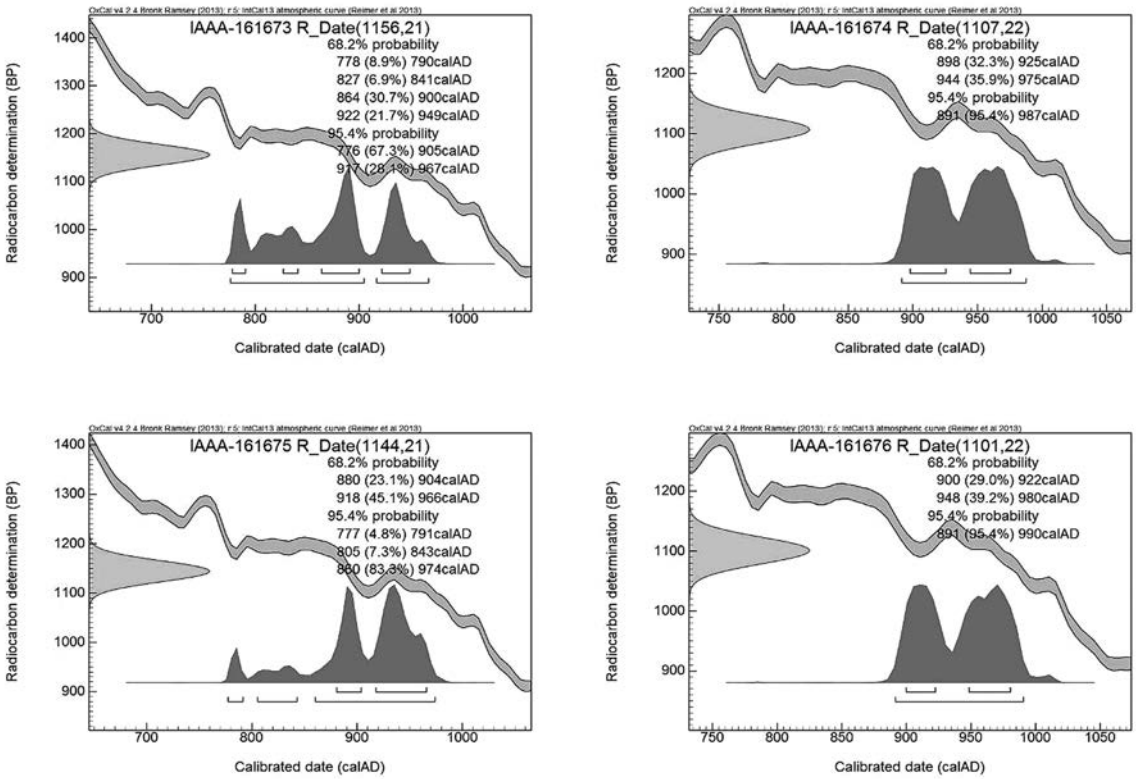


図20　暦年較正年代グラフ（１）

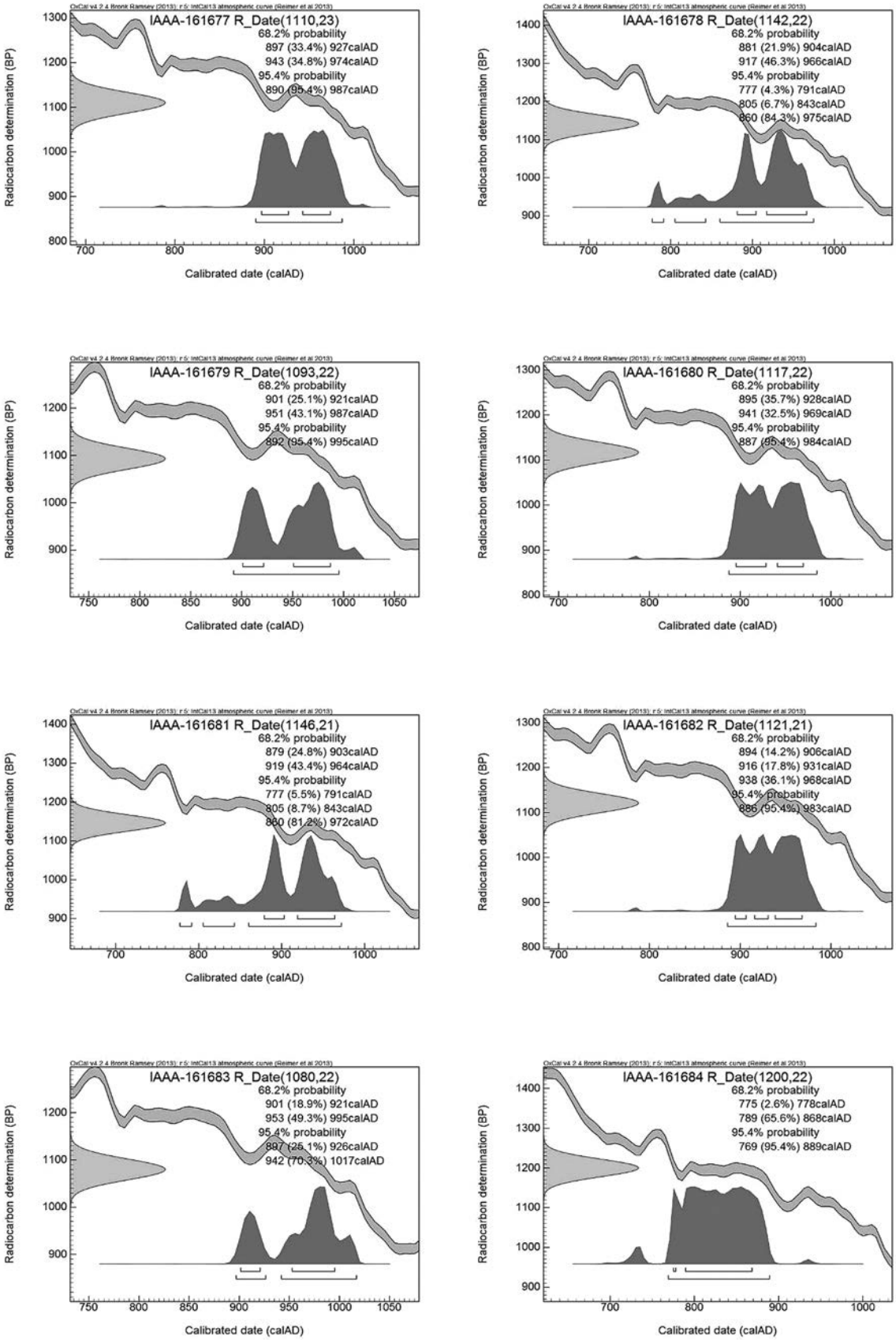


図21　暦年較正年代グラフ（２）

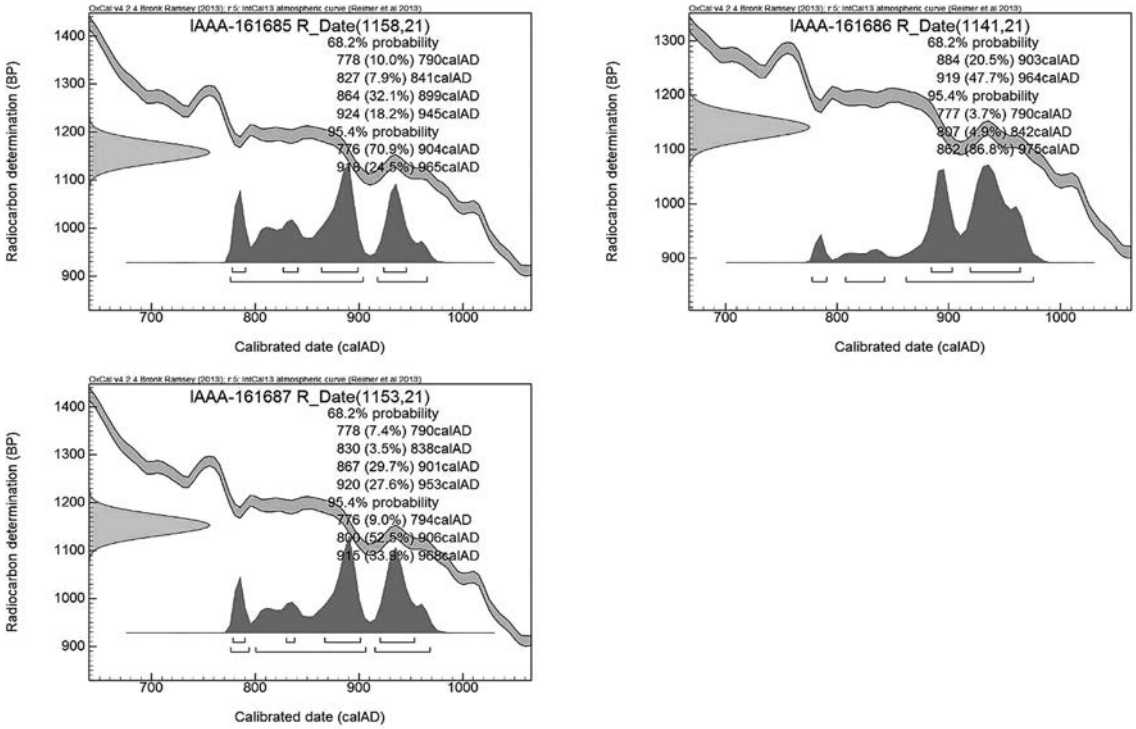


図22　暦年較正年代グラフ（３）

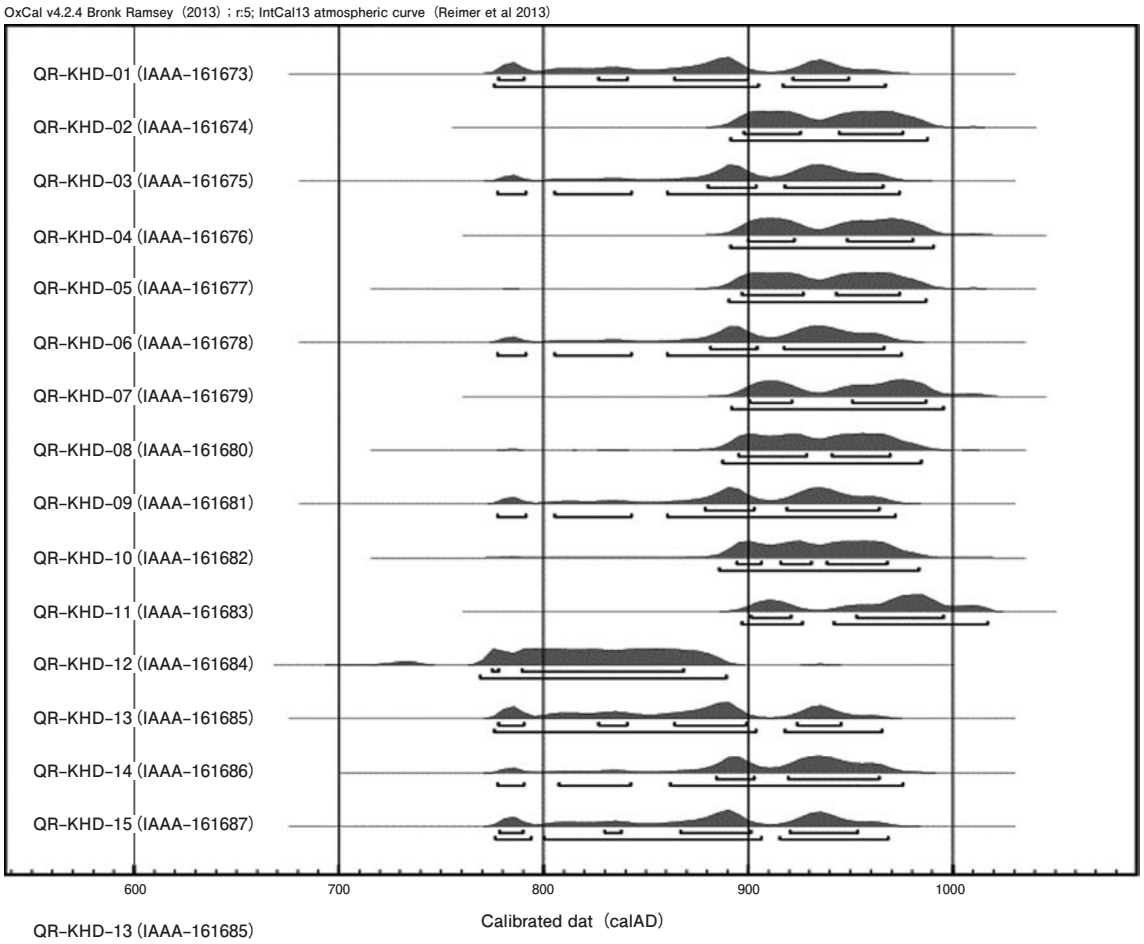


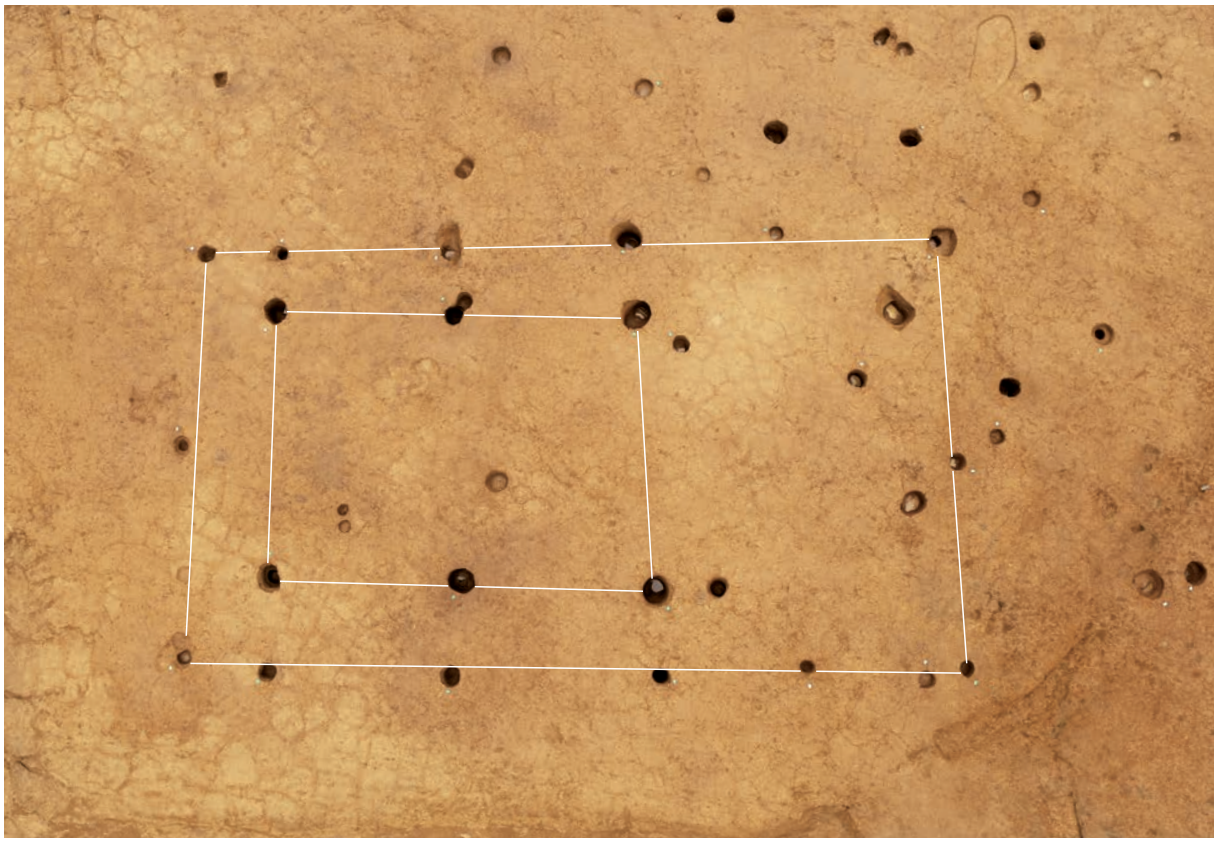
図23　マルチプロット図

写　真　図　版

第１編　沼ヶ入（ぬまがいり）遺跡（２次調査）

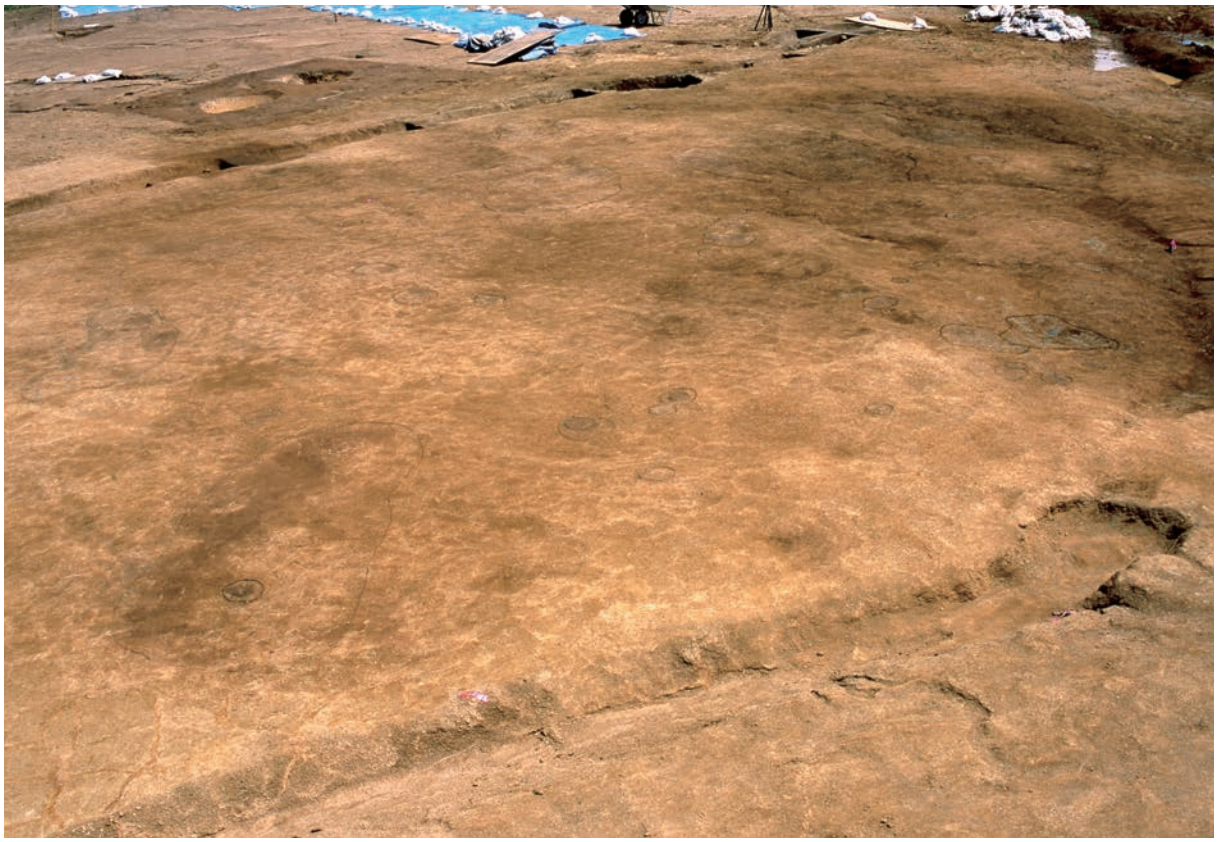
1　調査区遠景（西から）

2　調査区全景（上空西から）



３　３号建物跡全景（上空西から）

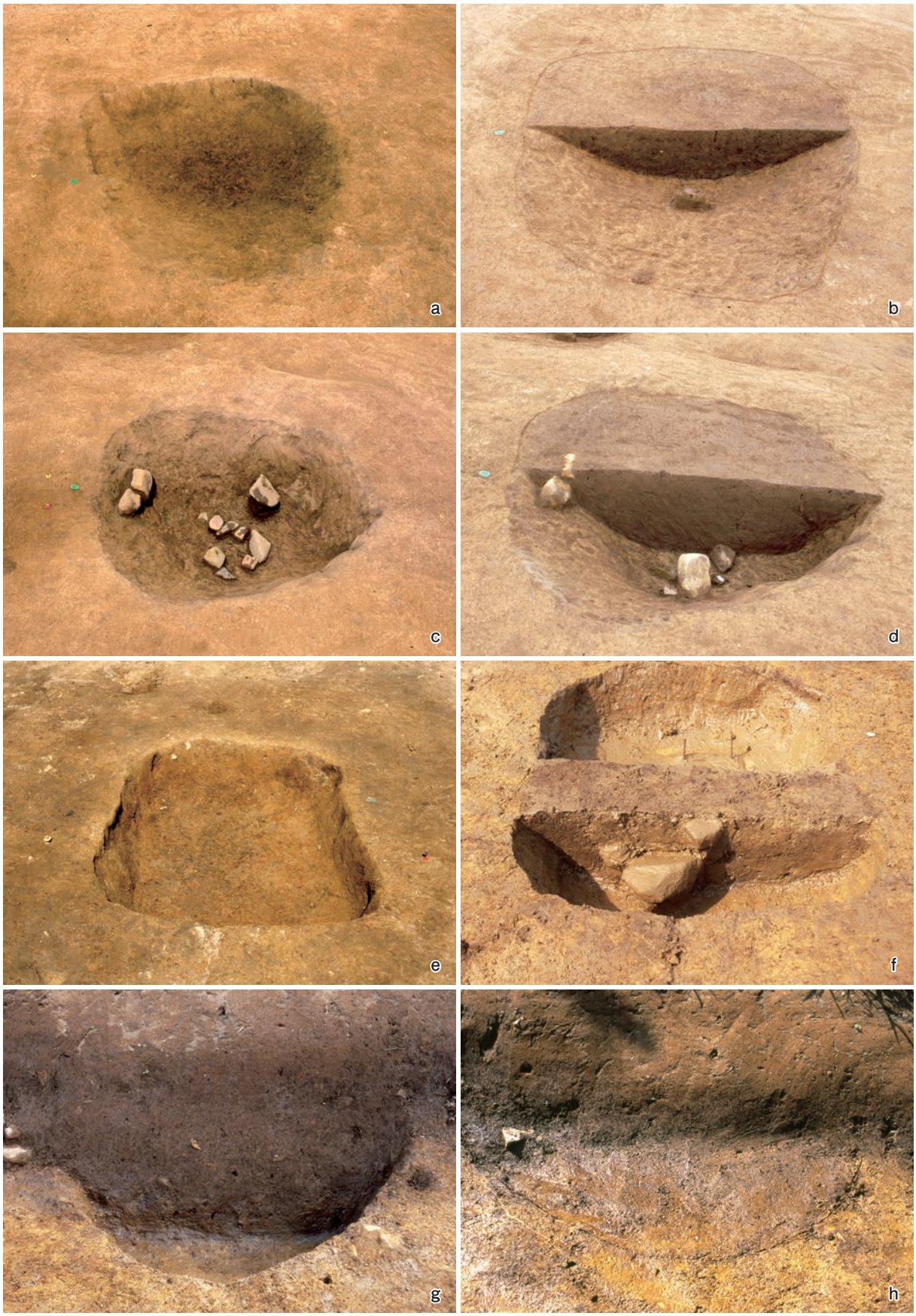
４　３号建物跡全景（南から）



5　３号建物跡検出（北西から）

6　３号建物跡

a　Ｐ４断面（南から）　**b**　Ｐ12断面（南から）
c　Ｐ18断面（南から）　**d**　作業風景（南から）



7　10～13号土坑

a　10号土坑全景（南から）
b　10号土坑断面（南から）
c　11号土坑全景（南から）
d　11号土坑断面（南から）
e　12号土坑全景（南から）
f　12号土坑断面（南から）
g　13号土坑全景・断面（北から）
h　13号土坑検出（北から）

8　14～17号土坑

a　14号土坑全景（南から）　**b**　14号土坑断面（南から）
c　15号土坑全景（南から）　**d**　15号土坑断面（南から）
e　16号土坑全景（南から）　**f**　16号土坑断面（南から）
g　17号土坑検出（西から）　**h**　17号土坑作業風景（南から）

9　17号土坑全景（西から）

10　17号土坑断面（西から）

11　17号土坑断面（南から）

12　１号溝跡全景（南から）

13　１号溝跡

a　１号溝跡南端（南から）　b　１号溝跡断面（南から）
c　１号溝跡Ｆ－Ｆ′断面（南東から）　d　１号溝跡Ｅ－Ｅ′断面（南東から）

14　基本土層、作業風景

a　基本土層Ｃ－Ｃ′断面（東から）　b　基本土層Ｂ－Ｂ′断面(西から）
c　作業風景（南から）　d　作業風景（南西から）

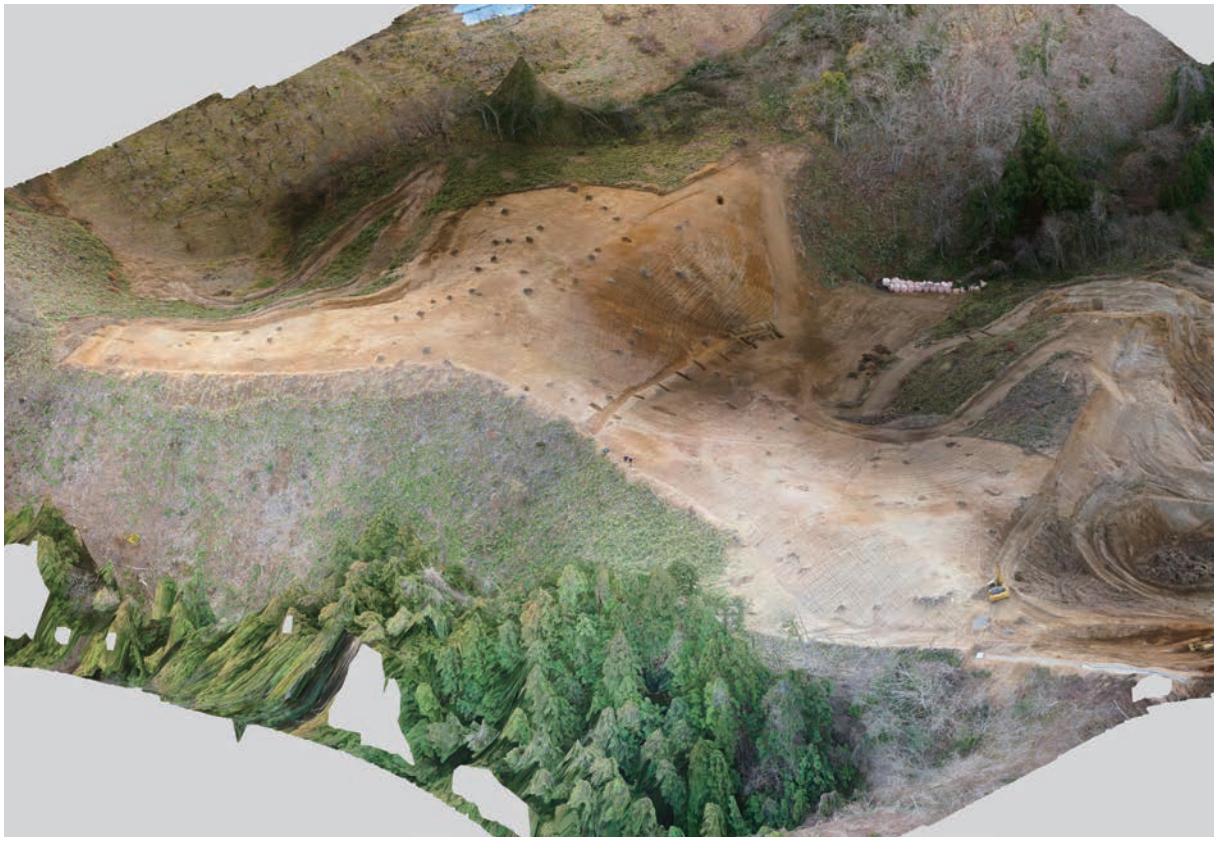
写　真　図　版

第２編　上ノ台館跡（かみのだいたてあと）（１次調査）

1　調査前状況（北から）

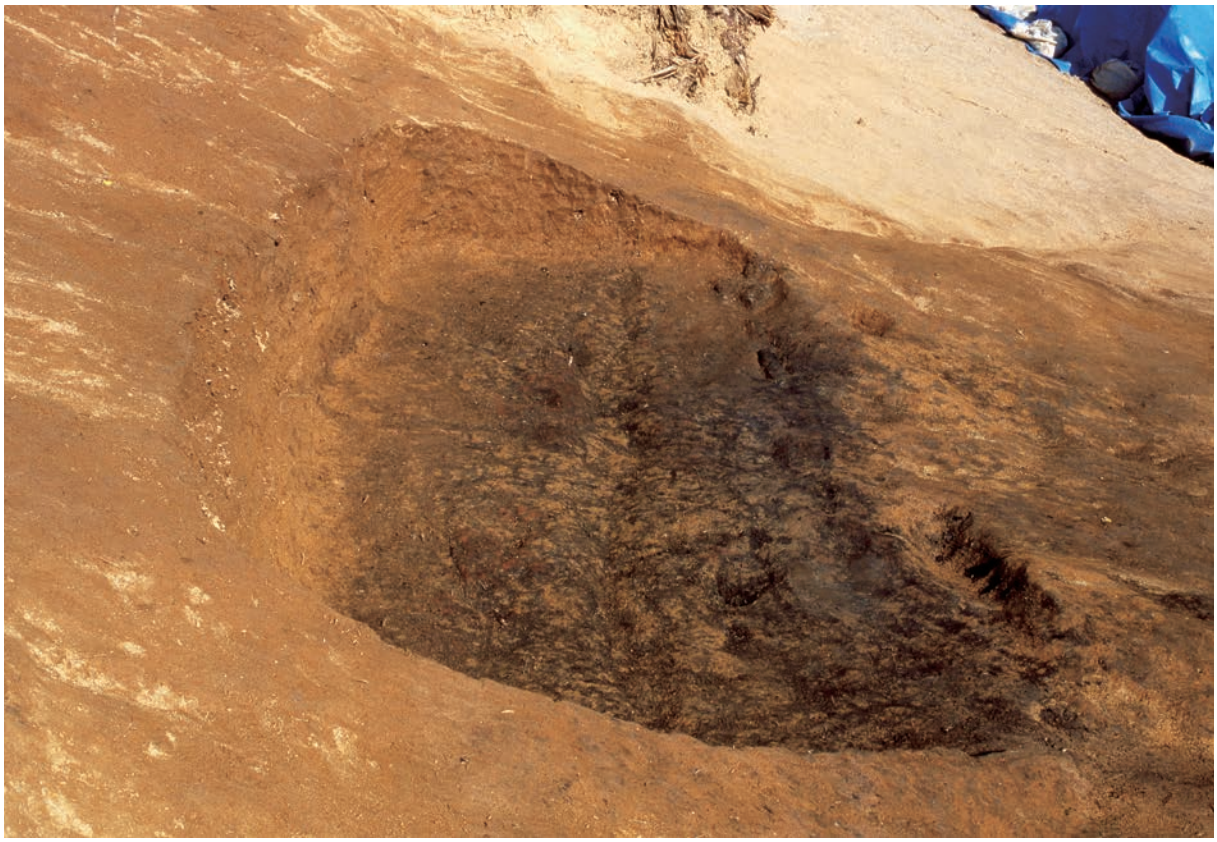
2　表土剥ぎ（北から）

３　調査区全景（上空南から）

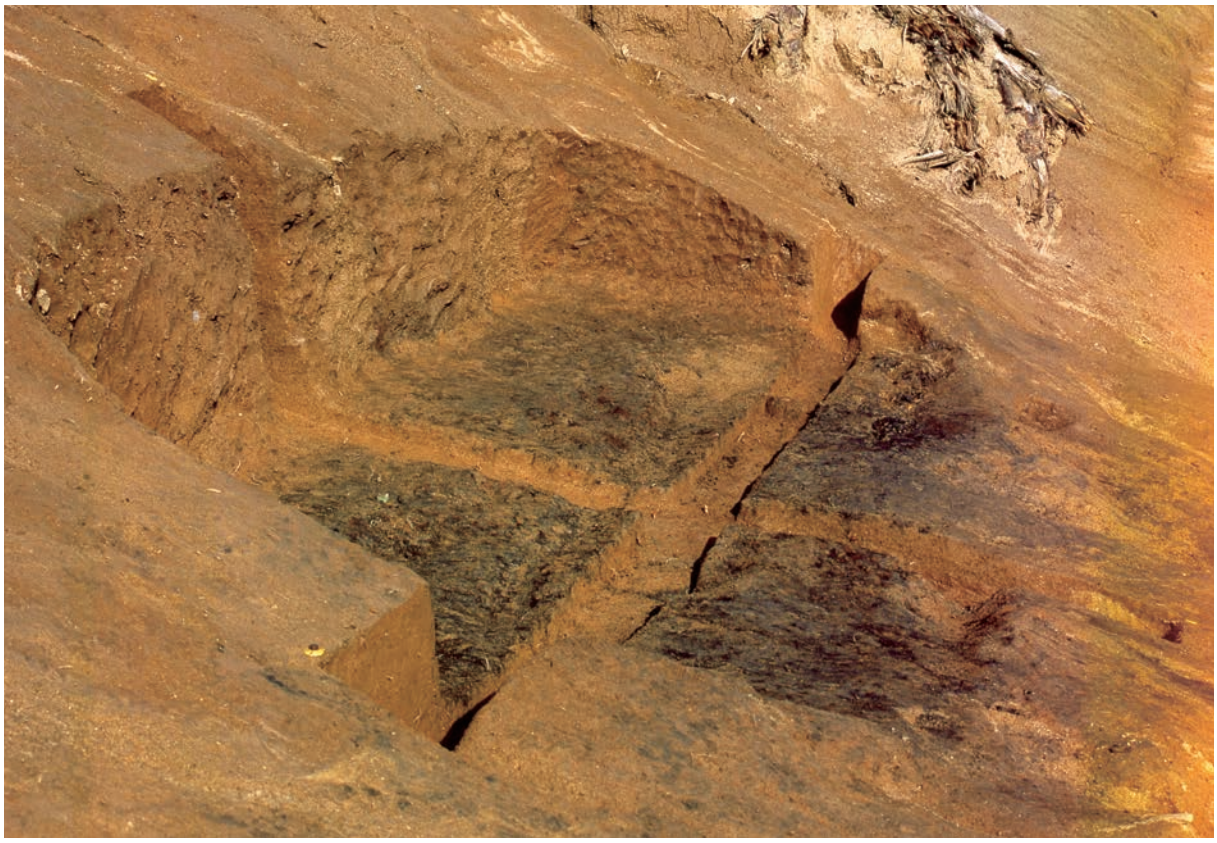


4　調査区遠景（東から）　※測量の合成写真

5　調査区遠景（上空西から）　※測量の合成写真



6　１号木炭窯跡全景（南から）

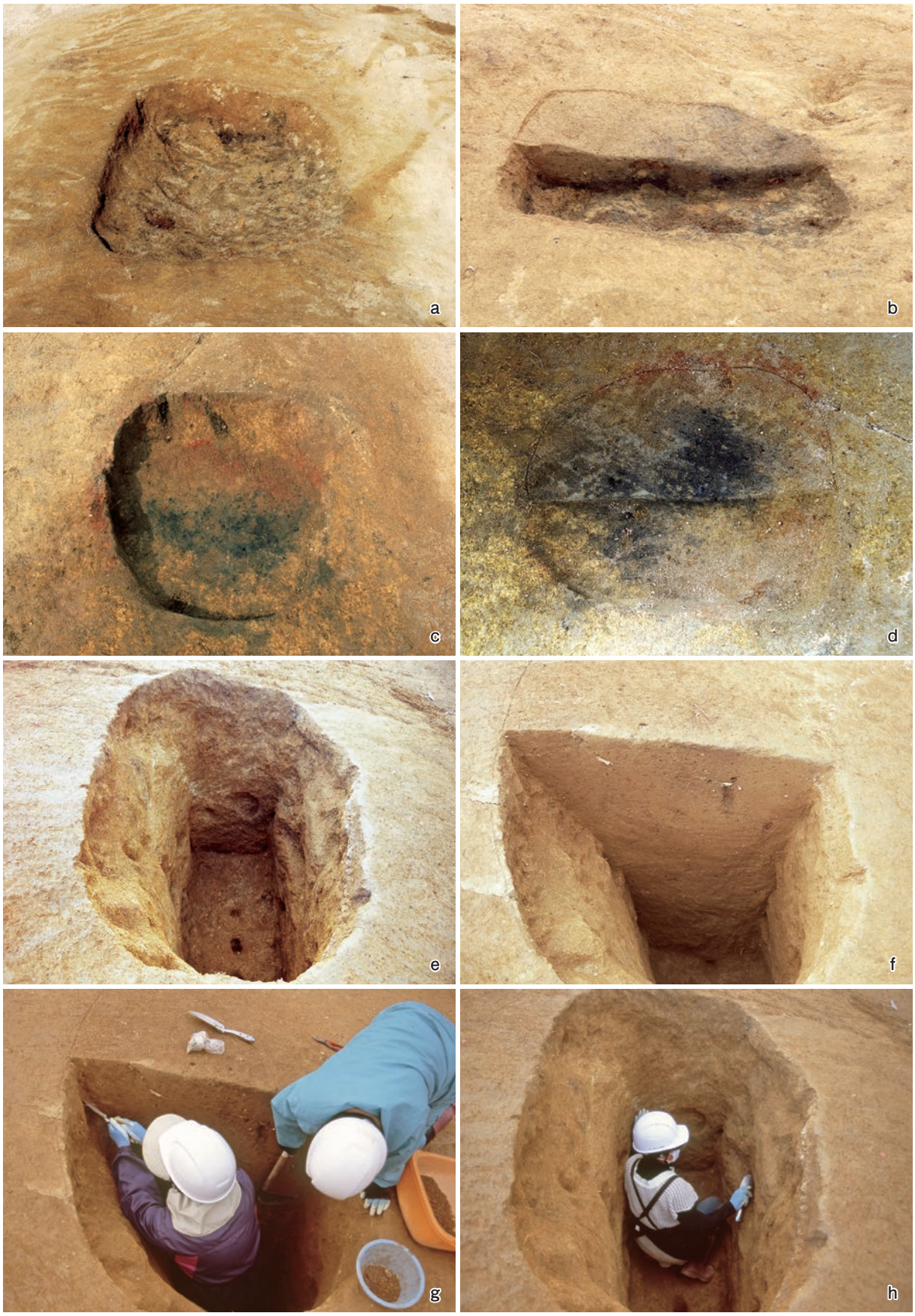


7　１号木炭窯跡断ち割り全景（南東から）

8　１号木炭窯跡検出状況（東から）

9　１号木炭窯跡

a　断面（東から）　b　断面（南から）
c　作業風景（南から）　d　作業風景（南東から）



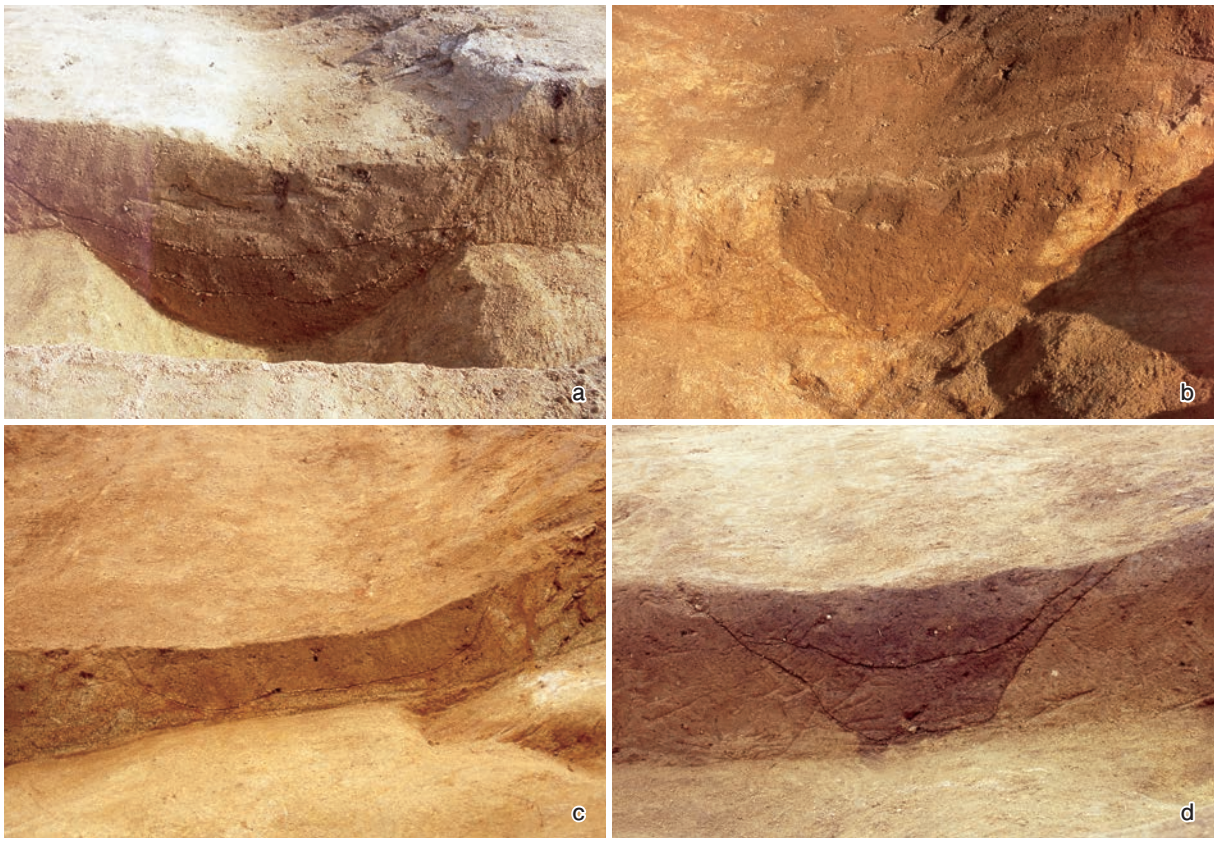
10　１～３号土坑

a　１号土坑全景（南から）
b　１号土坑断面（南から）
c　２号土坑全景（南から）
d　２号土坑断面（東から）
e　３号土坑全景（東から）
f　３号土坑断面（東から）
g　３号土坑作業風景（東から）
h　３号土坑作業風景（東から）

11　１号溝跡検出状況（北から）

12　１号溝跡全景（北から）

13　１号溝跡尾根頂部（東から）



14　１号溝跡

a　Ａ－Ａ′断面（西から）　**b**　Ｅ－Ｅ′断面（西から）
c　Ｆ－Ｆ′断面（西から）　**d**　Ｇ－Ｇ′断面（西から）

15　１号溝跡西部検出状況（東から）

16　１号溝跡西部（北東から）

17　１号溝跡作業風景

18　１号溝跡

a　作業風景（西から）　b　作業風景（北西から）
c　作業風景（北から）　d　作業風景（北西から）

19　２号溝跡全景（東から）

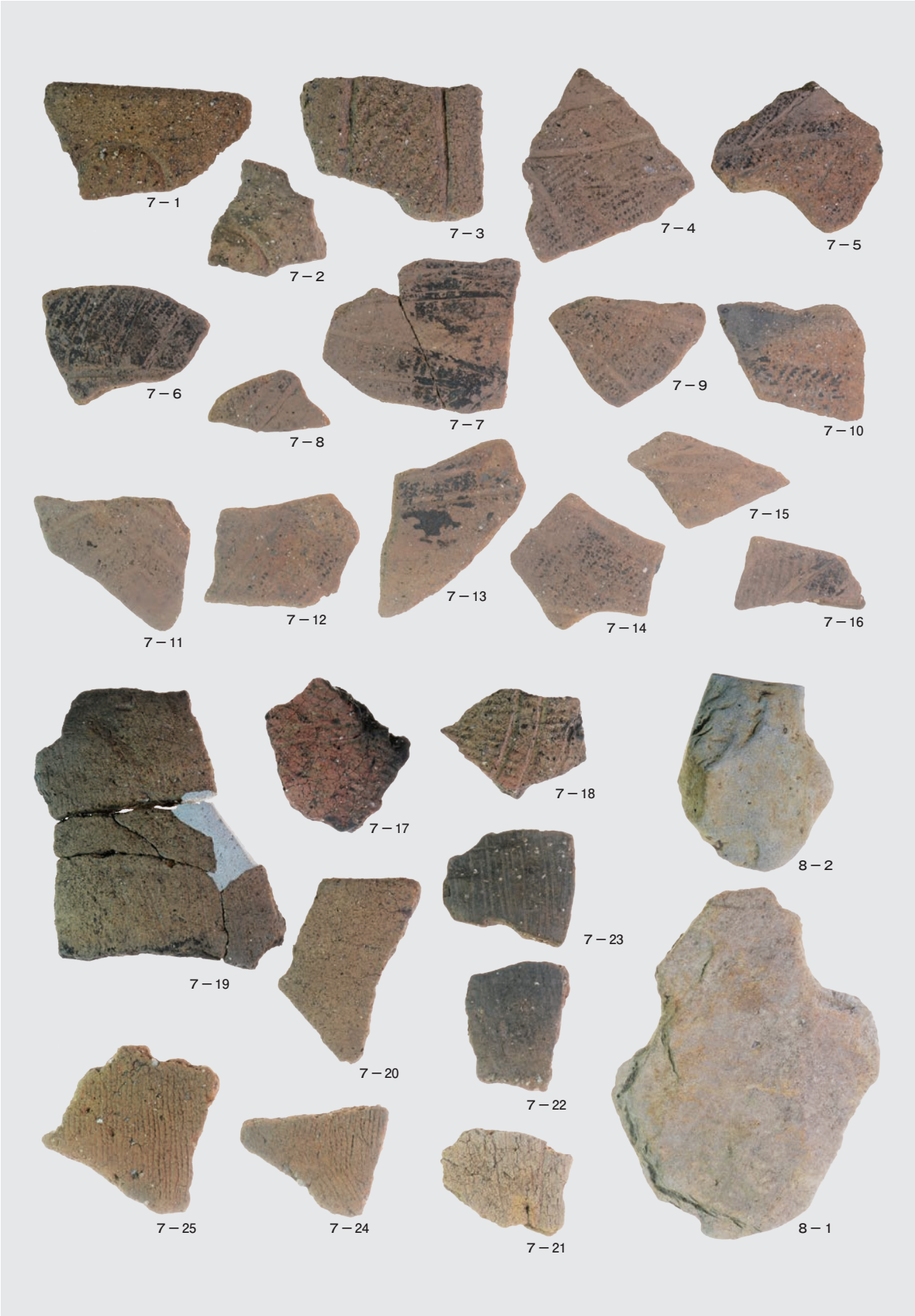
20　２号溝跡

a　断面（東から）　b　作業風景（東から）
c　作業風景（北から）　d　作業風景（北東から）

21　２号溝跡全景（北東から）

22　１号遺物包合層

a　全景（東から）　b　断面（北から）
c　作業風景（北から）　d　作業風景（北から）



23　1号遺物包含層出土遺物

写　真　図　版

第３編　川原田（かわはらだ）遺跡

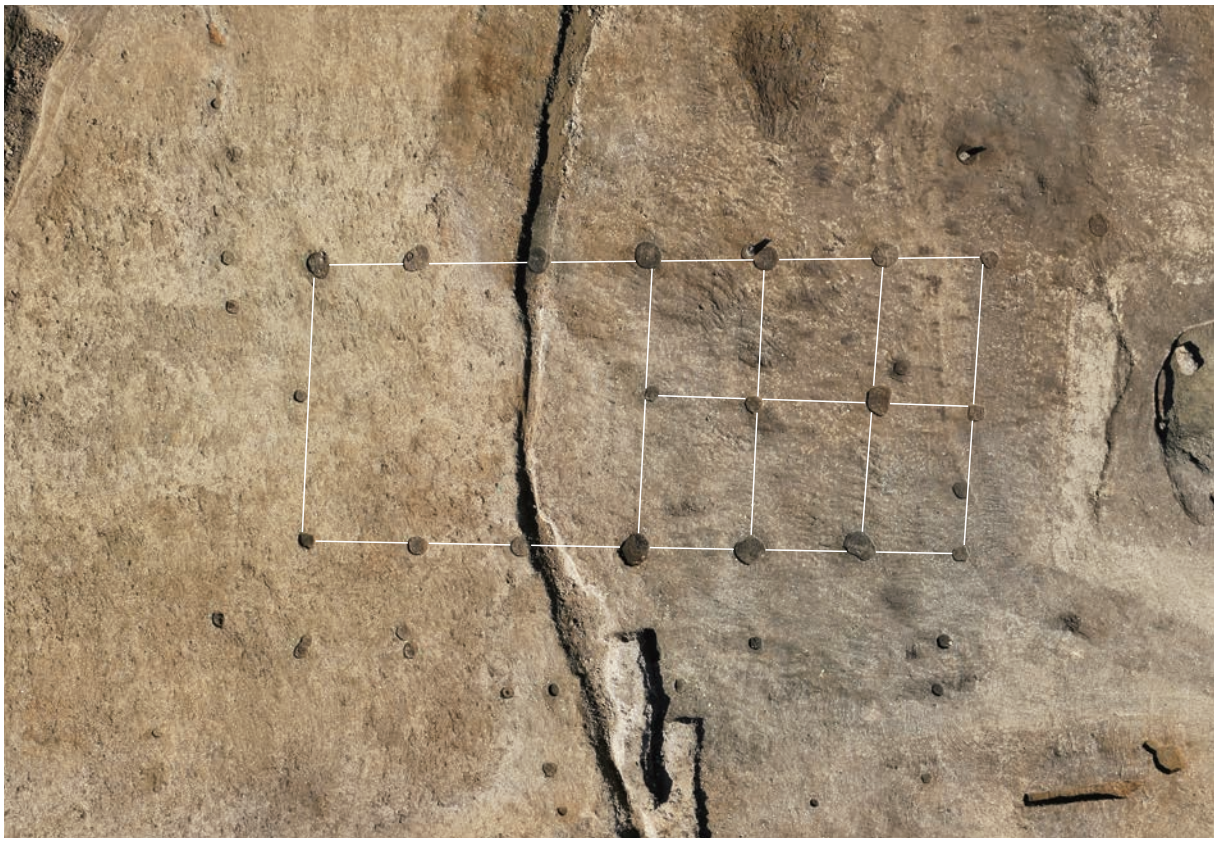
1　調査区遠景（東から）

2　調査区遠景（西から）

３　調査区全景（上空東から）

４　基本土層

a　ＡＡ′断面（南から）
b　ＢＢ′断面（南から）



5　１号建物跡検出（上空南から）

6　１号建物跡全景（南から）

7　１号建物跡　柱穴（１）

a　Ｐ１全景（南東から）　**b**　Ｐ２全景（南東から）
c　Ｐ３全景（南東から）　**d**　Ｐ４全景（南東から）
e　Ｐ５全景（南東から）　**f**　Ｐ６全景（南東から）
g　Ｐ７全景（南東から）　**h**　Ｐ９全景（南東から）

8　１号建物跡　柱穴（２）

a　Ｐ８断面（南から）　**b**　Ｐ８全景（南から）
c　Ｐ13断面（南から）　**d**　Ｐ13全景（南から）
e　Ｐ14断面（南から）　**f**　Ｐ14全景（南から）
g　Ｐ17断面（南から）　**h**　Ｐ17全景（南東から）

9　１号建物跡　柱穴（３）

a　Ｐ10全景（東から）　**b**　Ｐ11全景（南東から）
c　Ｐ12全景（南から）　**d**　Ｐ15全景（南から）
e　Ｐ16全景（南東から）　**f**　Ｐ18全景（南東から）
g　Ｐ19全景（南東から）　**h**　検出（南から）

10　２号建物跡検出（上空南から）

11　２号建物跡全景（南から）

12　２号建物跡　柱穴（１）

a　Ｐ１断面（南から）　**b**　Ｐ１全景（南から）
c　Ｐ３断面（南から）　**d**　Ｐ３全景（南から）
e　Ｐ５断面（南から）　**f**　Ｐ５全景（南から）
g　Ｐ６断面（南から）　**h**　Ｐ６全景（南から）

13　２号建物跡　柱穴（２）

a　Ｐ２全景（南から）　**b**　Ｐ４全景（南から）
c　Ｐ７全景（南から）　**d**　Ｐ８全景（南から）
e　Ｐ９全景（南から）　**f**　Ｐ10全景（南から）
g　Ｐ11全景（南から）　**h**　Ｐ12全景（南から）

14　１号柱列跡

a　検出（南から）
b　Ｐ１断面（南から）　**c**　Ｐ１全景（南から）
d　Ｐ２断面（南から）　**e**　Ｐ２全景（南から）
f　Ｐ３断面（南から）　**g**　Ｐ３全景（南から）

15　１号井戸跡全景（東から）

16　１号井戸跡全景（北西から）

17　１号井戸跡

a　検出（東から）
b　井戸枠（東から）
c　横桟木（東から）
d　横板（北西から）
e　ＡＡ′断面（南東から）
f　ＡＡ′断面（北東から）
g　ＢＢ′断面（北から）
h　掘形（北から）

18　１～５・７号土坑

a　１号土坑全景（南から）
b　２号土坑全景（南東から）
c　３号土坑全景（北から）
d　７号土坑全景（南から）
e　４号土坑断面（西から）
f　４号土坑全景（南から）
g　５号土坑断面（南西から）
h　５号土坑全景（西から）

19　６・８～11号土坑

a　６号土坑断面（西から）　**b**　６号土坑全景（南から）
c　８号土坑断面（南から）　**d**　８号土坑全景（北東から）
e　９号土坑全景（西から）　**f**　10号土坑全景（北から）
g　11号土坑断面（北から）　**h**　11号土坑全景（西から）

20　12～17号土坑

a　12号土坑断面（北から）
b　12号土坑全景（東から）
c　13号土坑全景（南東から）
d　15号土坑全景（南から）
e　14号土坑断面（南東から）
f　14号土坑全景（南東から）
g　16号土坑全景（南から）
h　17号土坑全景（東から）

21　２号溝跡（南から）

22　遺構外遺物出土状況

a　Ｉ６グリッド遺物出土状況（南から）　**b**　Ｉ６グリッド遺物出土状況（南西から）
c　Ｅ３グリッド遺物出土状況（北西から）　**d**　作業風景（南から）

23　１号性格不明遺構

a　全景（南から）
b　断面（南から）　**c**　断面（西から）
d　検出（南から）　**e**　作業風景（南から）

24　小穴群検出状況（上空東から）

25　小穴群全景（南東から）

26　遺構内出土遺物（1）

27　遺構内出土遺物（２）

11－1

11－1側面

11－2釘穴

11－2

28　1号井戸跡出土遺物（1）

11－３ほぞ穴

11－３ほぞ穴

11－３加工痕

11－３

12－３

12－３側面

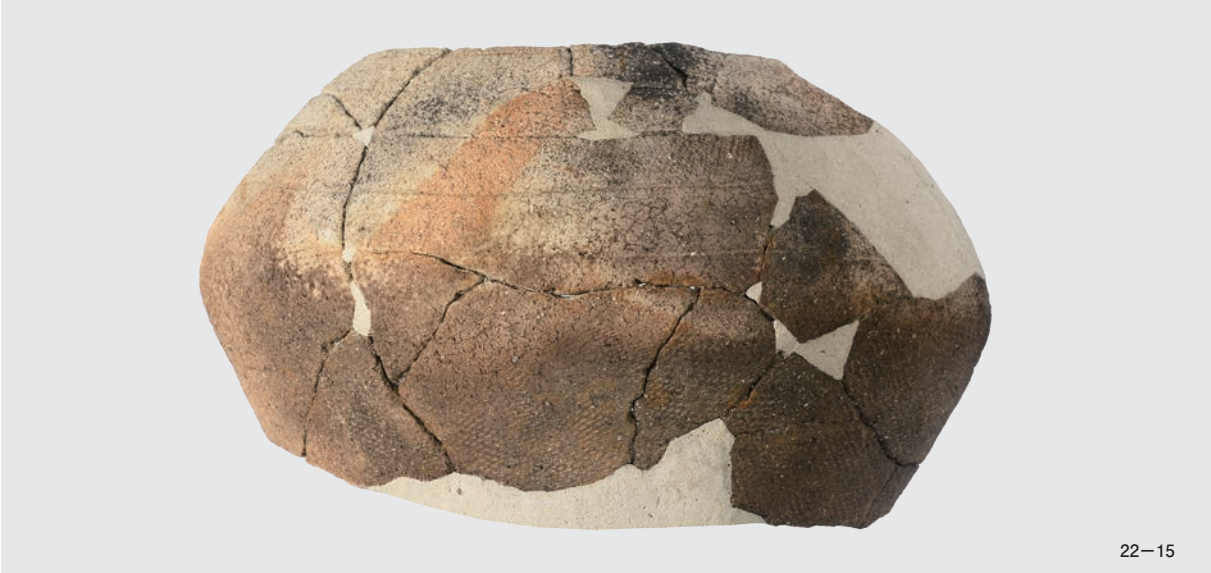
12－３ほぞ穴

12－３ほぞ穴

29　１号井戸跡出土遺物（２）

30　1号井戸跡出土遺物（3）

31　１号井戸跡出土遺物（４）



32　遺構外出土遺物（1）

23－１

23－２

23－３

23－４

23－７

23－８

33　遺構外出土遺物（２）

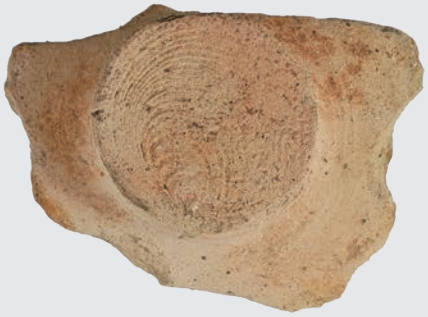
23－9

23－12

24－5

24－7

24－13



24－16

34　遺構外出土遺物（3）

24－22

24－23

25－１

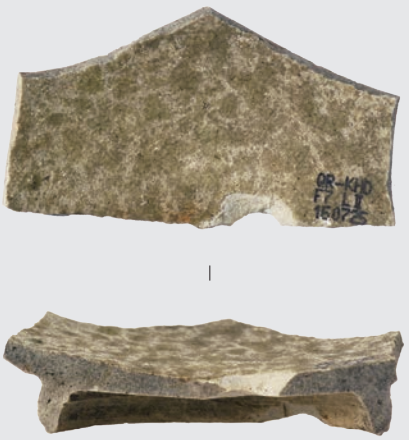
25－２

35　遺構外出土遺物（４）

26－9

26－9

26－10



26－15

26－17

36　遺構外出土遺物（５）

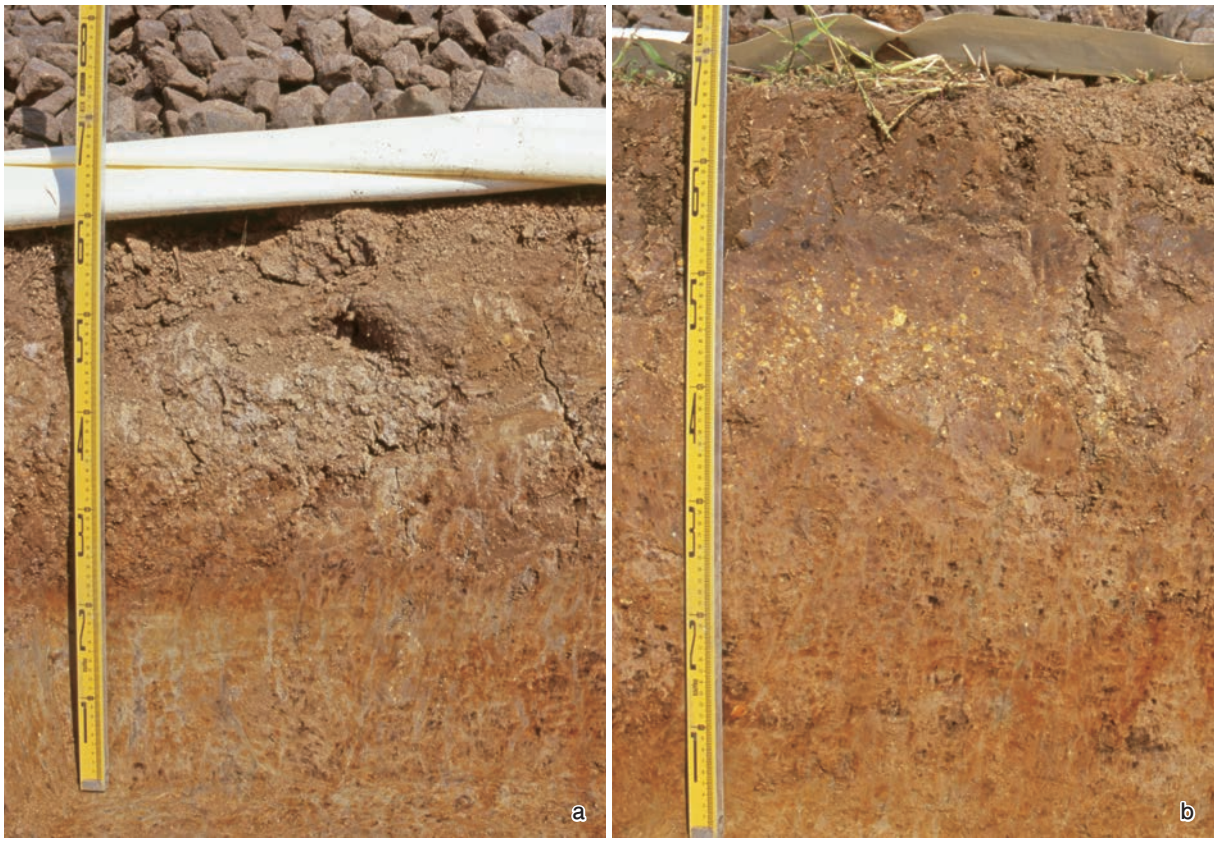
37　遺構外出土遺物（6）

写　真　図　版

第４編　馬（ば）場（ば）遺跡

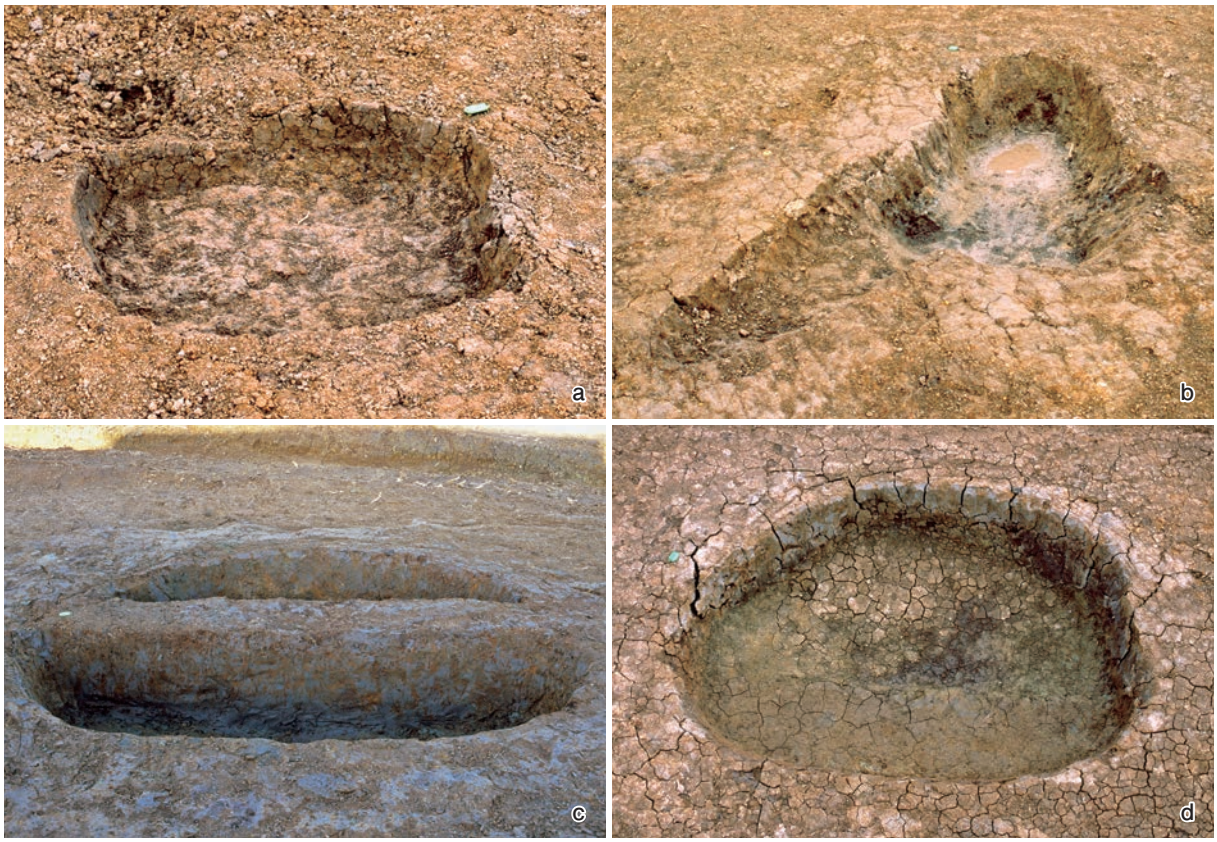
1　調査区全景（南西から）

2　調査区全景（南東から）



3　基本土層

a　ＡＡ′断面（南西から）
b　ＢＢ′断面（南西から）

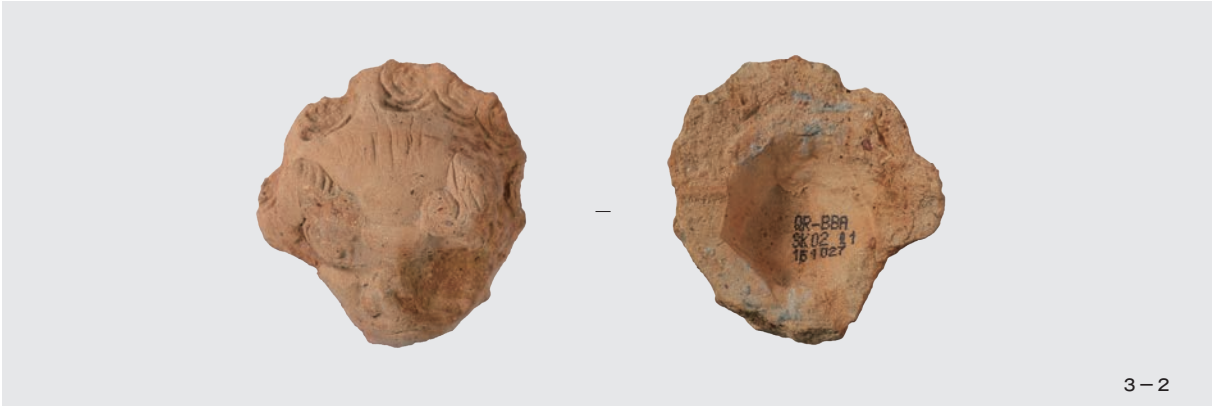


4　１～３号土坑

a　１号土坑全景（南から）　b　３号土坑全景（南から）
c　２号土坑断面（南から）　d　２号土坑全景（南から）

5　小穴群（北から）

6　調査前風景（西から）



３－２

７－３

７－４

７－５

７－６

７　出土遺物

写　真　図　版

第５編　新宿（しんじゅく）遺跡

1　調査区遠景（南東から）

2　調査区遠景（西から）

3　調査区遠景（南西から）

4　調査区遠景（北から）

5　調査区全景（上空東から）

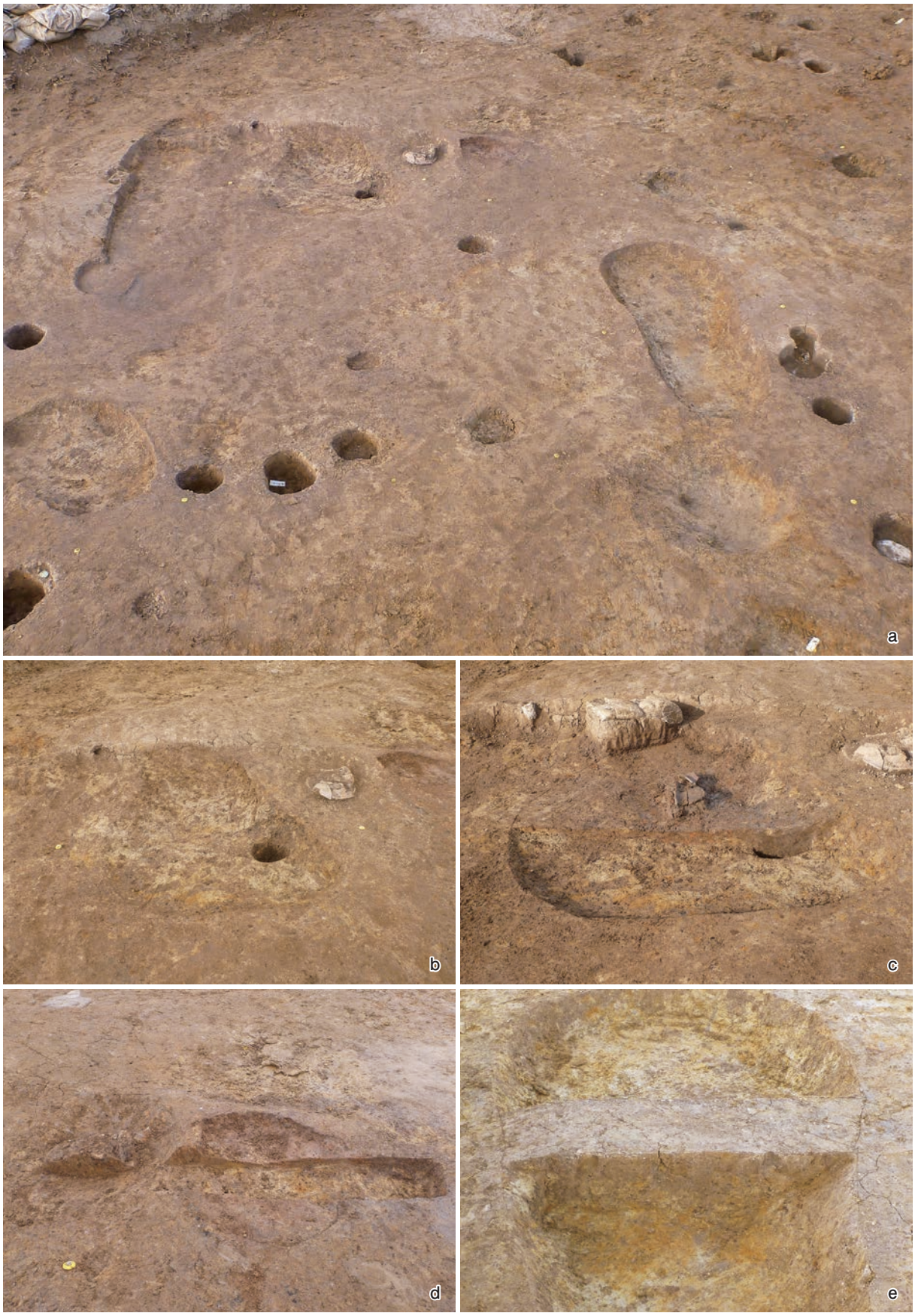
6　基本土層（南から）

7　１号住居跡

a　全景（南から）
b　断面（南から）
c　断面（東から）
d　カマド断面（南から）
e　カマド全景（南から）

8　２号住居跡（１）

a　全景（南から）
b　断面（南東から）
c　断面（北東から）
d　カマド検出（北東から）
e　カマド断面（北東から）



9　２号住居跡（２）

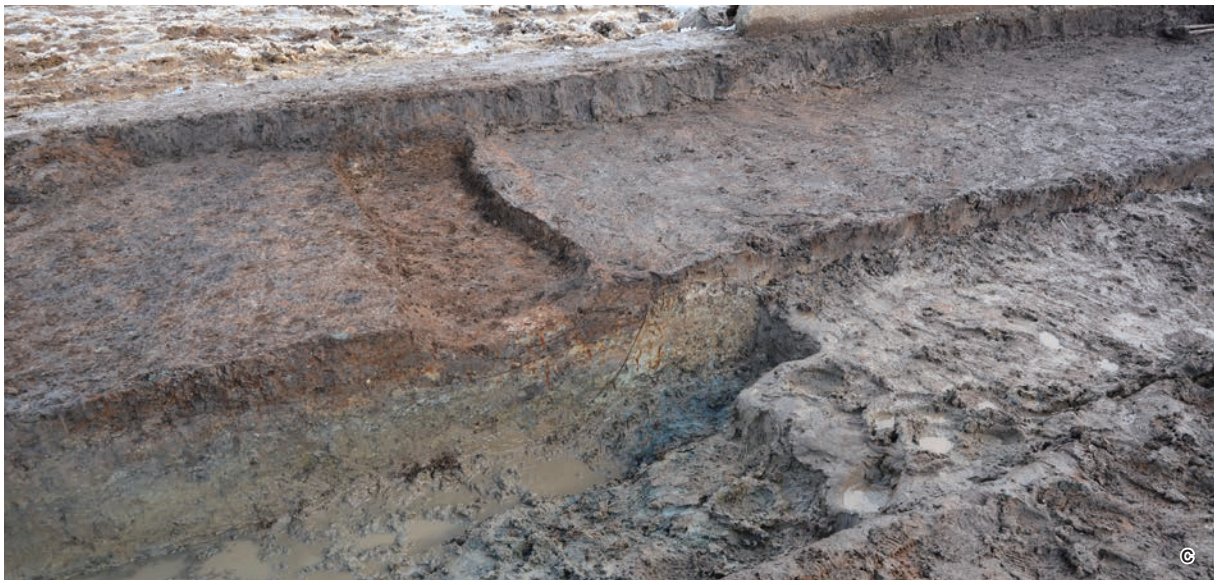
a　掘形（南から）
b　Ｐ１全景（南東から）
c　Ｐ１断面（東から）
d　カマド断ち割り（北東から）
e　Ｐ２断面（東から）

10　１～６号土坑

a　１号土坑全景（南から）　**b**　２号土坑全景（南西から）
c　３号土坑断面（西から）　**d**　３号土坑全景（南から）
e　４号土坑断面（西から）　**f**　４号土坑全景（北西から）
g　５号土坑全景（南から）　**h**　６号土坑全景（南東から）

11　１号道跡（１）

a　全景（南から）
b　側溝検出（南から）
c　作業風景（南西から）
d　ＢＢ′西側断面（南東から）
e　ＢＢ′東側断面（南東から）



12　１号道跡（２）

a　ＡＡ′断面（南から）
b　ＢＢ′断面（南から）
c　ＣＣ′断面（南西から）

13　２・３号道跡

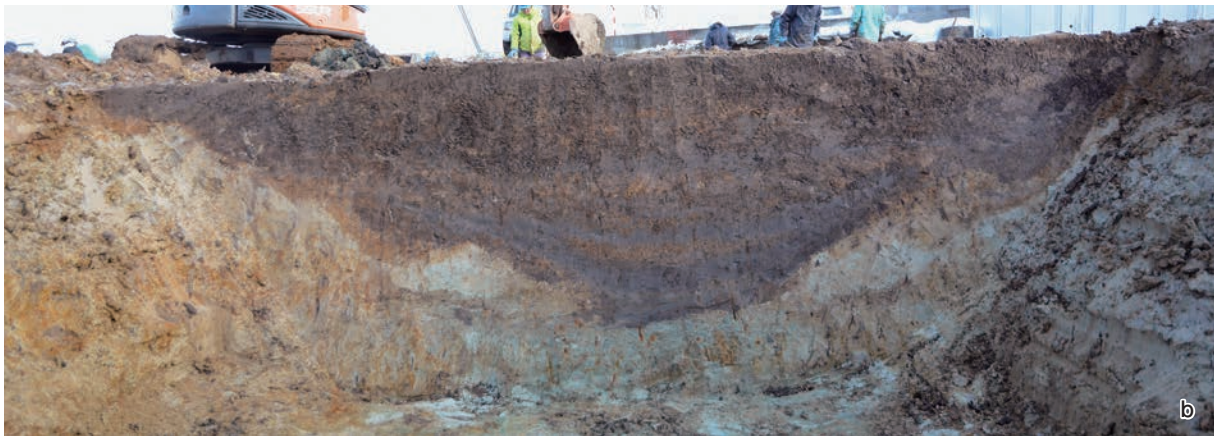
a　２号道跡西側断面（北東から）
b　２号道跡側溝断面（北東から）
d　３号道跡側溝断面（北東から）

14　１号堀跡（１）

a　路面全景（東から）
b　路面西側全景（東から）

15　１号堀跡（２）

a　路面西側溝検出（東から）
b　路面中央側溝検出（南西から）
c　路面中央側溝検出（西から）
d　路面西側断ち割り（西から）
e　路面中央断ち割り（東から）

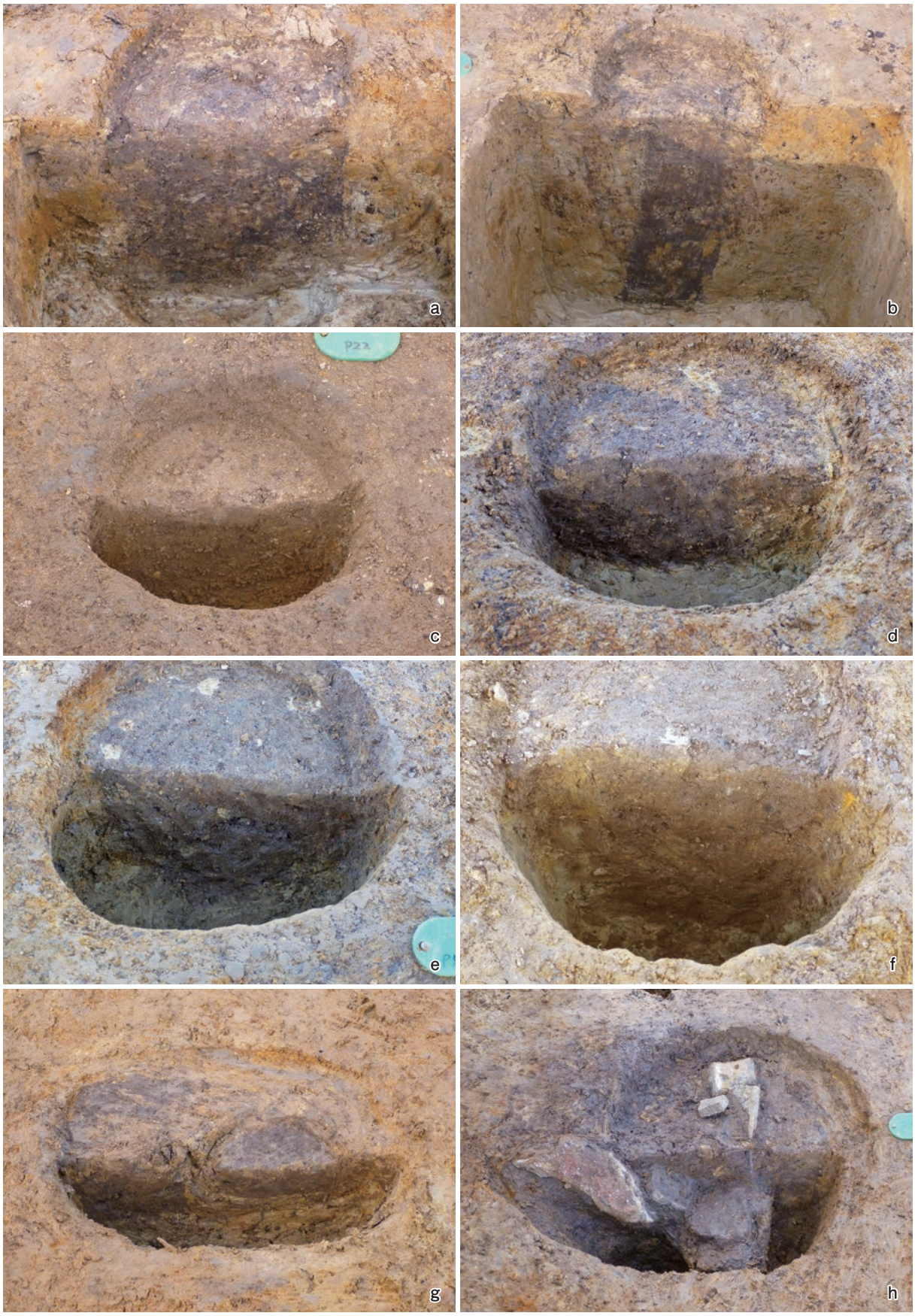


16　１号堀跡（３）

a　路面東側全景（東から）　**b**　ＢＢ′断面（西から）
c　ＣＣ′断面（南西から）　**d**　完掘全景（南西から）

17　２号溝跡

a　全景（東から）
b　ＡＡ′断面（東から）　**c**　ＢＢ′断面（東から）
d　ＣＣ′断面（東から）　**e**　ＤＤ′断面（東から）



18　小穴群（1）

a　P 4　全景（南から）
b　P 11　断面（南から）
c　P 22　断面（南から）
d　P 54　断面（南東から）
e　P 55　断面（南東から）
f　P 57　断面（南東から）
g　P 125断面（南から）
h　P 142断面（南東から）

19　小穴群（２）

a　Ｐ144断面（東から）
b　Ｐ165全景（東から）
c　Ｐ219断面（南から）
d　Ｐ243遺物出土状況（南東から）
e　Ｐ243全景（南東から）
f　Ｐ309全景（北から）
g　Ｐ123・333断面（東から）
h　Ｐ333・334・124断面（南から）

20　２号住居跡出土遺物

21　6号土坑・1号道跡出土遺物

17－1

17－1

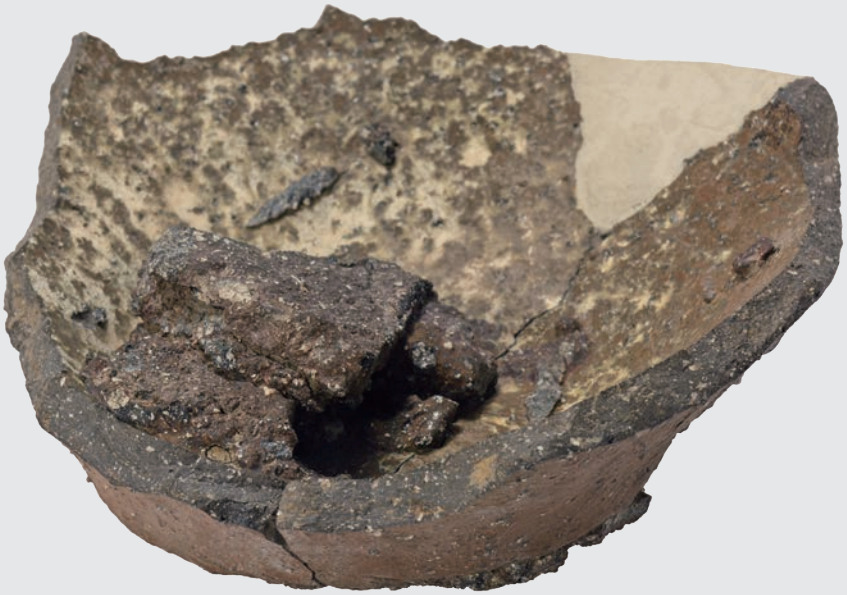
17－2

17－2

17－3

17－3

22　小穴群出土遺物（1）



17－2

17－2

23　小穴群出土遺物（２）

報　告　書　抄　録

ふ り が な	いっぱんこくどう115ごうそうまふくしまどうろいせきはっくつちょうさほうこく6
書　　名	一般国道115号相馬福島道路遺跡発掘調査報告6
シリーズ名	福島県文化財調査報告書
シリーズ番号	第523集
編 著 者 名	菅原祥夫　渡邉春喜　植松暁彦　廣川紀子　枝松雄一郎　由井文菜
編 集 機 関	公益財団法人福島県文化振興財団　遺跡調査部 〒960-8115　福島県福島市山下町1-25　TEL024-534-2733
発 行 機 関	福島県教育委員会 〒960-8688　福島県福島市杉妻町2-16　TEL024-521-1111
発行年月日	2018年2月28日

所収遺跡名	所　在　地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北　緯	東　経	調査期間	調査面積	調査原因
沼ヶ入（2次調査）	福島県伊達市霊山町下小国字沼ヶ入・御渡	07213	00656	37°45′57″	140°35′23″	20160627～20160909	4,000㎡	道路（一般国道115号相馬福島道路）建設に伴う記録保存調査
上ノ台館跡（1次調査）	福島県伊達市霊山町下小国字上ノ台	07213	00654	37°46′12″	140°35′14″	20160801～20161209	8,700㎡	
川原田	福島県伊達郡桑折町大字松原字川原田	07301	00103	37°49′46″	140°29′49″	20160516～20161027	3,700㎡	
馬場	福島県伊達郡桑折町大字成田字馬場・稲山	07301	00105	37°49′42″	140°30′28″	20161027～20161107	600㎡	
新宿	福島県伊達郡桑折町大字成田字新宿・稲山	07301	00104	37°49′39″	140°30′33″	20161017～20170127	1,850㎡	

所収遺跡名	種類	主な時代	主な遺構	主な遺物	特　記　事　項
沼ヶ入（2次調査）	屋敷跡	中世	掘立柱建物跡　1棟 土坑　8基	かわらけ	1次調査に続き、中世室町期の掘立柱建物跡などが発見され、屋敷地の全体像がほぼ判明した。
上ノ台館跡（1次調査）	城館跡 ほか	中世	木炭窯跡　1基 土坑　3基 溝跡（堀切）　2条 平場　1箇所	縄文土器 石器 土師器	中世城館跡に伴う遺構としては、尾根を分断する堀切と平場が発見された。他に縄文時代の捨て場、落し穴、平安時代の木炭焼成施設も確認された。
川原田	狩場 集落 遺物包含層	縄文時代 古代 縄文～古代	掘立柱建物跡　2棟 井戸跡　1基 土坑　17基	土師器 須恵器 井戸枠	縄文時代の狩場や平安時代の集落跡が確認された。平安時代の井戸跡は、井戸枠の一部が遺存していた。
馬場	居住域	中・近世	土坑　3基 溝跡　2条 小穴　36基	須恵器 中世陶器	溝跡、土坑、小穴群が検出され、中世から近世にかけての居住域が確認された。
新宿	狩場 集落 居住域 道	縄文時代 古代 中世 中・近世	竪穴住居跡　2軒 道跡　3条 堀跡　1条	須恵器 中世陶器 近世陶器	奈良時代の小規模集落と、中世の道跡や堀跡及び街道筋の居住域とみられる多数の小穴群が確認された。

要　約

沼ヶ入遺跡と上ノ台館跡は、中村街道を挟んで向かい合う位置関係にある。沼ヶ入遺跡は中世室町期の屋敷跡、上ノ台館跡は中世城館跡であり、密接な関連で存在したと考えられる。

伊達郡桑折町の川原田遺跡は平安時代中頃の集落跡、新宿遺跡は「奥の大道」とみられる中世の主要道路と当時の居住域である。また、新宿、馬場遺跡の周辺には古代の須恵器窯跡、近世の陶器窯跡が点在し、窯跡との関連資料が出土している。

※経緯度数値は世界測地系（平成14年4月1日から適用）による。

福島県文化財調査報告書第523集

一般国道115号相馬福島道路遺跡発掘調査報告６

沼ヶ入（ぬまがいり）遺跡（２次調査）
上ノ台館跡（かみのだいたてあと）（１次調査）
川原田（かわはらだ）遺跡
馬場（ばば）遺跡
新宿（しんじゅく）遺跡

平成30年２月28日発行

編　集　公益財団法人福島県文化振興財団　遺跡調査部（〒960-8115）福島県福島市山下町1-25
発　行　福島県教育委員会（〒960-8688）福島市杉妻町2-16
　　公益財団法人福島県文化振興財団（〒960-8116）福島市春日町5-54
　　国土交通省東北地方整備局福島河川国道事務所（〒960-8584）福島市黒岩字榎平36
印　刷　八幡印刷株式会社（〒970-8026）いわき市平字田町82-13